

池  
内  
遺  
跡  
2

松原市

池 内 遺 跡 2

都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇一二年六月

公益財団法人  
大阪府文化財センター

2012年6月

公益財団法人 大阪府文化財センター

松原市

# 池内遺跡 2

都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



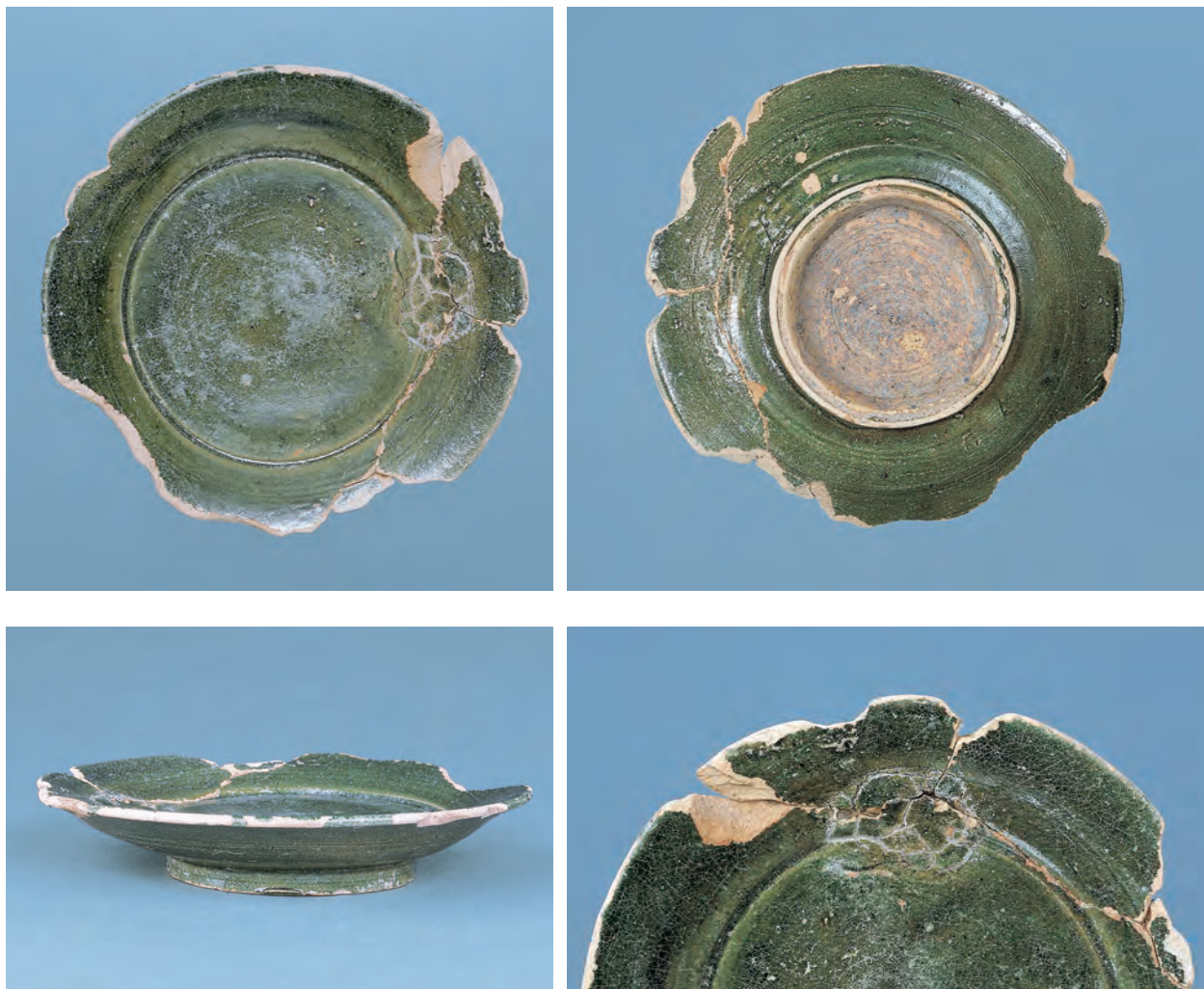


09 - 2 - 2 区掘立柱建物群 (北西から)



調査区遠景 (西から)





緑釉陶器 皿 (590 土坑出土)



土師器 甕・黒色土器 椀 (1009 土器)



# 序 文

池内遺跡は大阪平野の南東部、大和川の南岸に位置する遺跡です。大和川南岸には西から大和川今池遺跡、池内遺跡、三宅西遺跡と縄文時代から中世にかけての複合遺跡が東西方向に並び、古くから人々が生活していたことがうかがえます。

大阪府道高速大和川線建設工事に伴って、平成 17 年度から平成 20 年度にかけて当センターによって大規模な発掘調査が行われました。その結果、弥生時代前期の水田や竪穴建物、平安時代の屋敷地といえる集落群、中世の集落などの重要な発掘成果を挙げることができました。

今回の調査は、この大和川線にアクセスする南北の府道、大阪河内長野線の建設とさらに南でこの道路に交差する大堀堺線の拡幅に伴うものです。これまでの池内遺跡の調査と違い、南北に 300 m 超、さらにその南を東西方向 100 m 超の範囲でそれぞれ調査することとなりました。

その結果、池内遺跡が従来よりもさらに範囲が広がり、古代以降の様相も明らかとなりました。北側では底をもつ平安時代の大規模な建物群や溝群がみつき、古代の緑釉陶器の皿や黒色土器が検出されました。中央では古代以前、弥生時代まで遡る可能性をもつ大溝がみつき、弥生時代中期の打製石剣などが検出されました。また、池を挟んだ南北部では、鎌倉時代の条里坪境に相当する区画溝や坪境を踏襲する中世から近世、現代にいたる堤が発見されました。大堀堺線にあたる部分では中世以降条里区割に従って、耕作地や建物などが並んでいたこと、中世には条里制に基づいた区画割がなされていたことなど数々の調査成果を挙げることができました。

調査にあたっては、大阪府教育委員会、大阪府富田林土木事務所松原事業所、池内遺跡近隣自治会の方々のご指導、ご協力を得ました。記して感謝の意を表します。

平成 24 年 6 月

公益財団法人 大阪府文化財センター  
理 事 長 田 邊 征 夫





# 例 言

1. 本書は、大阪府松原市に所在する池内遺跡 09－2・09－3の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府富田林土木事務所の委託を受け大阪府教育委員会の指導のもと、財団法人 大阪府文化財センター（現：公益財団法人 大阪府文化財センター）が実施した。
3. 各調査の受託期間、工事期間、調査体制は以下の通りである。

〔池内遺跡 09－2〕

受託契約名：都市計画道路 大阪河内長野線 池内遺跡発掘調査委託

受託期間：平成 21 年 6 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

工事（調査）名：池内遺跡（府道その 1）発掘調査に伴う工事

工事（調査）期間：平成 21 年 6 月 18 日～平成 21 年 11 月 30 日

調査体制：調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 金光正裕

南部総括主査 森屋美佐子 副主査 川瀬貴子

整理期間：平成 21 年 12 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日

整理体制：調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 金光正裕

南部総括主査 森屋美佐子 副主査 林日佐子 副主査 市村慎太郎

〔池内遺跡 09－3〕

受託契約名：都市計画道路 大阪河内長野線 池内遺跡（その 2）発掘調査委託

受託期間：平成 21 年 11 月 2 日～平成 24 年 3 月 30 日

工事（調査）名：池内遺跡（府道その 2）発掘調査に伴う工事

工事（調査）期間：平成 21 年 10 月 29 日～平成 22 年 9 月 30 日

調査体制：＜平成 21 年度＞ 調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 金光正裕

南部総括主査 森屋美佐子 副主査 川瀬貴子

＜平成 22 年度＞ 調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 江浦 洋

調査グループ長 岡戸哲紀 南部総括主査 森屋美佐子

副主査 川瀬貴子

調査名：（事業者発注による上之池北堤・大堀堺線拡幅部・池内遺跡（その 1・その 2）未調査部・上之池南堤の調査）

調査期間：平成 22 年 10 月 21 日～平成 23 年 8 月 30 日

調査体制：＜平成 22 年度＞ 調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 江浦 洋

調査グループ長 岡戸哲紀 南部総括主査 森屋美佐子

副主査 川瀬貴子

<平成 23 年度> 調査課長 江浦 洋 調整グループ長 岡本茂史  
調査グループ長 岡戸哲紀 南部総括主査 西村 歩  
副主査 川瀬貴子

整理期間：平成 23 年 8 月 31 日～平成 24 年 3 月 30 日

整理体制：<平成 22 年度> 調査部長兼調査課長 福田英人 調整グループ長 江浦 洋  
調査グループ長 岡戸哲紀 南部総括主査 森屋美佐子  
副主査 川瀬貴子

<平成 23 年度> 調査課長 江浦 洋 調整グループ長 岡本茂史  
調査グループ長 岡戸哲紀 南部総括主査 西村 歩  
副主査 川瀬貴子

4. 調査にあたっては、下記の方々よりご指導、ご協力を得た。記して感謝を表したい(五十音順、敬称略)。  
大阪府富田林土木事務所松原事業所・大阪府教育委員会・松原市教育委員会
5. 本書の遺物撮影は南部調査事務所非常勤職員久禮孝志が行った。
6. 本書の執筆は第 3 章第 2 節を林・川瀬が、それ以外は川瀬が行った。編集は川瀬が行った。
7. 本調査に関わる写真・実測図・出土遺物等は公益財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く活用されることを希望する。

## 凡 例

1. 基準高は東京湾平均海水位 (T.P.) + 値を使用している。使用単位は m を基本とする。
2. 調査にあたっては、平面直角座標系 (使用測地系「世界測地系 2000」) 第 VI 座標系を基準とする。
3. 本書の遺構図に付与された方位は、すべて平面直角座標系に基づく座標北を示している。
4. 発掘調査および遺物整理は『財団法人 大阪府文化財センター遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』(2003)『財団法人 大阪府文化財センター遺跡調査基本マニュアル』(2010) の内容に準拠して行った。
5. 本書の土色は、小山正忠・竹原秀雄編 (農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修) の『新版 標準土色帖』2003 年版に従った。
6. 遺構番号は遺構種類に関わらず 1 からの連番を付与しており、遺構名は番号－遺構種類となる (例：1 土坑)。ただ、調査の際に府道その 1 (09－2)、府道その 2 (09－3) の調査毎に遺構番号を付与したので、本報告書中にそれぞれの調査で同一番号が存在する場合がある。区別する必要があるときには、前に 09－2－1 1 土坑といったように調査名をつけて表現する。
7. 遺構平面図の縮尺は、多種存在するため各挿図に縮尺を示してある。  
遺物実測図の縮尺は土器が 4 分の 1、瓦が 4 分の 1、石器が 3 分の 2、木製品が 4 分の 1 としている。また、遺物写真の縮尺は任意である。
8. 遺物番号は通し番号であり、写真図版に関しては遺物番号と同一の番号を付与している。
9. 平面図の黒矢印は断面を計測した位置を示す。また、遺構番号の後ろの丸囲み数字 (例：170 ①) は、断面図を複数とった際どの箇所かを示す。対応する断面図には同じ番号を付与している。

# 目次

巻頭図版

序文

例言

凡例

目次

## 第1章 調査にあたって

### 第1節 調査の経緯

- 第1項 調査にいたる経緯 1
- 第2項 調査経過 3

### 第2節 地理的・歴史的環境

- 第1項 地理的環境 6
- 第2項 歴史的環境 7

### 第3節 調査の方法

- 第1項 発掘調査 11
- 第2項 整理作業 13

## 第2章 基本層序

### 第1節 09－2・09－3調査の基本層序

- 第1項 09－2－1・2区、09－3－9区の基本層序 14
- 第2項 09－3－1～3・7・8区の基本層序 16
- 第3項 09－3－4～6・15区の基本層序 17
- 第4項 09－3－10～14区の基本層序 24

### 第2節 既調査区（05－1・2、08－1）との対応 25

## 第3章 府道その1（09－2－1・2区）用水路部（09－3－9区）の調査成果

### 第1節 遺構

- 第1項 調査の概要 29
- 第2項 遺構 30

### 第2節 遺物

- 第1項 遺構出土遺物 68
- 第2項 包含層出土遺物 79

## 第4章 府道その2上之池以北部（09－3－1～3・8区）・池北堤（09－3－7区）の調査成果

### 第1節 遺構

- 第1項 調査の概要 83
- 第2項 遺構 85

### 第2節 遺物

- 第1項 遺構出土遺物 101
- 第2項 包含層出土遺物 102

第3項 石器	105
第5章 府道その2上之池南堤（09－3－15区）・池以南部（09－3－4～6区）の調査成果	
第1節 遺構	
第1項 調査の概要	107
第2項 遺構	108
第2節 遺物	
第1項 遺構出土遺物	121
第2項 包含層出土遺物	123
第3項 石器	130
第6章 大堀堺線拡幅部（09－3－10～14区）の調査成果	
第1節 遺構	
第1項 調査の概要	131
第2項 遺構	133
第2節 遺物	
第1項 遺構出土遺物	144
第2項 包含層出土遺物	144
第3項 石器	147
第7章 総括	
第1節 池内遺跡の時期別変遷	149
第2節 古代の池内遺跡	152
第3節 池内遺跡の条里地割復原	156
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

# 挿 図 目 次

図1	遺跡位置図	1
図2	調査区位置図	3
図3	池内遺跡周辺の古代河川・溝	6
図4	周辺遺跡図	8
図5	池内・三宅西遺跡周辺の条里地割図	9
図6	調査区配置及び地区割図（1）	11
図7	調査区配置及び地区割図（2）	12
図8	基本層序模式図	15
図9	09-2-1区、09-3-1区 北壁断面図	18
図10	09-2-1～2区、09-3-1～3・7区 東壁断面図	19・20
図11	09-3-4～6・15区 東壁断面図・09-3-6区 南壁断面図	21・22
図12	09-3-10～14区 北壁断面図	23
図13	09-3-10区 西壁、09-3-14区 東壁断面図	24
図14	大和川線調査区の地質断面図	26
図15	09-2区第1面平面図	31・32
図16	北半（09-2-1）第1面平面図	33・34
図17	南半（09-2-2）第1面平面図	35・36
図18	09-2区 溝断面図（1）	37
図19	09-2区 45溝断面図	38
図20	09-2区 溝断面図（2）	40
図21	170溝・23溝 遺物出土状況図	42
図22	09-2区 溝断面図（3）	44
図23	09-2区 940溝・916溝・460溝・458溝断面図	45
図24	09-2区 溝断面図（4）	46
図25	掘立柱建物1 平・断面図	48
図26	掘立柱建物2 平・断面図	49
図27	掘立柱建物3 平・断面図	51
図28	09-2区 590・591土坑平・断面図	52
図29	09-2区 1009土器出土状況図	53
図30	09-2区 720井戸平・断面図	54
図31	09-2区 651柱穴・410井戸・405土坑 平・断面図	56
図32	09-2区 759柱穴・760土坑・800柱穴・821柱穴・833土坑 平・断面図	57
図33	09-2-1区 遺構断面図（1）	58
図34	09-2-1区 遺構断面図（2）	60
図35	09-2-2区 遺構断面図（1）	61
図36	09-2-2区 遺構断面図（2）	63

図 37	09-2-2区	遺構断面図(3)	64	
図 38	09-2-2区	遺構断面図(4)	65	
図 39	09-2-2区	遺構断面図(5)	67	
図 40	09-2区	遺構出土遺物実測図(1)	69	
図 41	09-2区	遺構出土遺物実測図(2)	72	
図 42	09-2区	遺構出土遺物実測図(3)	76	
図 43	09-2区	包含層出土遺物実測図	80	
図 44	09-3-1~3・7・8区	第1面平面図	84	
図 45	09-3-3・7区	第1面平面図	85	
図 46	09-3-7区	西壁断面図	86	
図 47	09-3-7区	東壁断面図	87	
図 48	09-3-3・7区	187溝断面図	89	
図 49	09-3-1~3・8区	第2面、09-3-7区	第3面平面図	90
図 50	09-3-1・8区	第2面平面図	91	
図 51	09-3-1区	1溝・2溝断面図	92	
図 52	09-3-1・8区	3溝断面図	93	
図 53	09-3-1区	4井戸平・断面図	94	
図 54	09-3-7区	第2面平面図	95	
図 55	09-3-7区	第3面平面図	96	
図 56	09-3-7区	195溝・201溝断面図	98	
図 57	09-3-7区	第2面・第3面遺構断面図	99	
図 58	09-3-7区	第1面・第2面遺構・包含層出土遺物実測図	103	
図 59	09-3-1~3・8区	遺構・包含層出土遺物実測図	104	
図 60	09-3-1~3・7区	出土石器実測図	106	
図 61	09-3-15区	池・堤平面図	108	
図 62	09-3-15区	西壁・東壁断面図	109	
図 63	09-3-4~6・15区	第1面平面図	110	
図 64	09-3-15・4区	第1面平面図	112	
図 65	09-3-4区	89水路断面図	113	
図 66	09-3-4~6・15区	第2面平面図	114	
図 67	09-3-15・4区	第2面平面図	116	
図 68	09-3-4・15区	第2面遺構断面図	117	
図 69	09-3-6区	第2面平面図	119	
図 70	09-3-6区	第2面遺構断面図	120	
図 71	09-3-4区	89水路出土遺物実測図	122	
図 72	09-3-6区	遺構・包含層出土遺物実測図	125	
図 73	09-3-4・5区	包含層出土遺物実測図	126	
図 74	09-3-4~6区	出土石器実測図	129	

図 75	09-3-10・11 区	第 1 面・第 3 面平面図	132
図 76	09-3-10・11 区	第 1 面遺構断面図	134
図 77	09-3-12・13 区	第 1 面～第 3 面平面図	136
図 78	09-3-14 区	第 1 面～第 3 面平面図	137
図 79	09-3-10～14 区	第 1 面・第 3 面平面図	139・140
図 80	09-3-10・11 区	第 3 面遺構断面図	141
図 81	09-3-12～14 区	第 2 面・第 3 面遺構断面図	143
図 82	09-3-10～14 区	遺構・包含層出土遺物実測図	145
図 83	09-3-10～14 区	出土石器実測図	148
図 84	平安時代の池内遺跡		153
図 85	09-2 区・09-3 区	坪境遺構復原図	157・158
図 86	松原市条里復原図		159

## 表 目 次

表 1	各調査区遺構面・層序対応表	28
-----	---------------	----

## 写 真 目 次

写真 1	調査区遠景	2
写真 2	現地公開風景	5
写真 3	現地公開風景	5

## 写 真 図 版 目 次

図版 1	09-2-1 区	1. 全景（南から） 2. 北西部溝群（北東から）
図版 2	09-2-1 区	1. 溝群（北から） 2. 170 溝 遺物出土状況（南から）
図版 3	09-2-1 区	1. 170 溝 遺物出土状況 1（南東から） 2. 170 溝 遺物出土状況 2（南から）
図版 4	09-2-1・2 区	1. 09-2-1 区 60 溝断面（南から） 2. 09-2-2 区 60 溝断面（南から） 3. 64 溝断面（南から） 4. 67 溝断面（南から） 5. 36 溝断面（南から） 6. 5 溝断面（東から） 7. 45 溝断面（東から） 8. 66 溝断面（南から）



- |       |         |  |
|-------|---------|--|
| 図版 5  | 09-2-2区 | 1. 掘立柱建物 1 検出状況 (東から)<br>2. 掘立柱建物 3 検出状況 (南東から)  |
| 図版 6  | 09-2-2区 | 1. 全景 (北から)<br>2. 掘立柱建物 1・2・3 全景 (北東から)  |
| 図版 7  | 09-2-2区 | 1. 590・591 土坑 (北から)<br>2. 掘立柱建物 1・2 (北東から)   |
| 図版 8  | 09-2-2区 | 1. 掘立柱建物 1 近景 (北東から)<br>2. 掘立柱建物 1 近景 (南東から)   |
| 図版 9  | 09-2-2区 | 1. 掘立柱建物 2 近景 (南東から)<br>2. 掘立柱建物 3 近景 (南東から)   |
| 図版 10 | 09-2-2区 | 1. 590 土坑 遺物出土状況 (北西から)<br>2. 800 土坑 瓦出土状況 (南東から)  |
| 図版 11 | 09-2-2区 | 1. 掘立柱建物 1 742 柱穴断面 (南から)<br>2. 掘立柱建物 1 743 柱穴断面 (南から)<br>3. 掘立柱建物 1 749 柱穴断面 (西から)<br>4. 掘立柱建物 2 944 柱穴断面 (西から)<br>5. 掘立柱建物 2 871 柱穴断面 (南から)<br>6. 掘立柱建物 2 872 柱穴断面 (南から)<br>7. 掘立柱建物 3 602 柱穴断面 (東から)<br>8. 掘立柱建物 3 603 柱穴断面 (東から) |
| 図版 12 | 09-2-2区 | 1. 460 溝断面 1 (西から)<br>2. 460 溝断面 2 (東から)<br>3. 589 土坑断面 (南から)<br>4. 955 土坑断面 (東から)<br>5. 591 土坑断面 (東から)<br>6. 405 土坑 遺物出土状況 (南西から)<br>7. 1009 土器出土状況 (南東から)<br>8. 1009 土器出土状況 (東から)  |
| 図版 13 | 09-3-9区 | 1. 全景 (南から)<br>2. 23 溝遺物出土状況 (西から)<br>3. 1045 柱穴 断面 (北西から)<br>4. 1039 溝 (北から)<br>5. 1044 落込 (東から)  |
| 図版 14 | 09-3-1区 | 1. 全景 (南から)<br>2. 2・3 溝、4 井戸 (南から)   |
| 図版 15 | 09-3-1区 | 1. 3 溝 (東南から)<br>2. 3 溝 (南東から)   |

- 図版 16 09-3-1区
1. 3溝断面（東から）
  2. 打製石剣出土状況（北から）
- 図版 17 09-3-2・3区
1. 09-3-2区全景（南から）
  2. 09-3-3区187溝（東から）
- 図版 18 09-3-7区
1. 第1面全景（東から）
  2. 第1面全景（北東から）
- 図版 19 09-3-7区
1. 第3面全景（西から）
  2. 第3面全景（東から）
- 図版 20 09-3-7・8区
1. 09-3-7区西壁（東から）
  2. 09-3-8区3溝検出状況（北東から）
- 図版 21 09-3-15区
1. 第2面全景（西から）
  2. 第2面全景（東から）
- 図版 22 09-3-4・5区
1. 09-3-4区全景（南から）
  2. 09-3-5区全景（南から）
- 図版 23 09-3-4区
1. 477落込検出状況（南東から）
  2. 89水路 漆器出土状況（南から）
  3. 89水路 断面（北から）
- 図版 24 09-3-6区
1. 全景（北から）
  2. 全景（北から）
- 図版 25 09-3-6区
1. 122溝（東から）
  2. 122溝（西から）
- 図版 26 09-3-10区
1. 第1面全景（西から）
  2. 第3面全景（西から）
- 図版 27 09-3-11区
1. 第1面全景（西から）
  2. 第1面全景（東から）
- 図版 28 09-3-11・12区
1. 09-3-11区第3面全景（西から）
  2. 09-3-12区第1面検出状況（東から）
- 図版 29 09-3-12・13区
1. 09-3-12区第3面全景（西から）
  2. 09-3-13区第3面全景（西から）
- 図版 30 09-3-14区
1. 第1面全景（南東から）
  2. 第3面全景（南東から）
- 図版 31 09-2・09-3-9区出土遺物（1）
- 図版 32 09-2・09-3-9区出土遺物（2）
- 図版 33 09-2・09-3-9区出土遺物（3）
- 図版 34 09-2・09-3-9区出土遺物（4）
- 図版 35 09-2・09-3-9区出土遺物（5）
- 図版 36 09-2・09-3-9区出土遺物（6）
- 図版 37 09-3-1・7区出土遺物

- 図版 38 09-3-1~3・7・8区出土石器
- 図版 39 09-3-4~6区出土遺物(1)
- 図版 40 09-3-4~6区出土遺物(2)
- 図版 41 09-3-4~6区出土遺物(3)
- 図版 42 09-3-4~6区出土石器・石製品
- 図版 43 09-3-10~14区出土遺物
- 図版 44 09-3-10~14区出土石器・石製品・金属製品

# 第1章 調査にあたって

## 第1節 調査の経緯

### 第1項 調査にいたる経緯

都市計画道路大阪河内長野線は、河内長野から大阪市内南部へいたる南北の幹線道路として、大阪府都市整備部富田林土木事務所が建設を進めている。

そのうち、まもなく供用開始される堺松原線及び大阪府高速道路及び都市計画道路大和川線へのアクセス道路として、北端の松原市天美東二丁目（都市計画道路堺松原線）から南端は天美東一丁目（一般府道大堀堺線）にいたるまでの、幅約35m、南北長約450m区間の事業が行われることとなった（図1）。平成17年度から事業説明や用地境界確定、平成18年度から20年度にかけて用地買収や文化財の試掘調査を行った。平成22年度から建設事業に着手し、平成24年度末には暫定供用させる予定で、文化財調査は平成21年度から着手し平成23年度までに本体工事と併行して行うこととなった。

建設事業に先立って、大阪府教育委員会が遺跡の確認・試掘調査を行った。その結果、北側では古代から中世の集落・生産遺構が検出され、中央部では遺構の存在や遺物が包含することが判明し、南側では中世の生産遺構が検出されるなど、工事区全域に遺跡範囲が広がることが確認された。

調査面積が1万㎡以上に及ぶため、富田林土木事務所と大阪府教育委員会の協議の結果、財団法人大阪府文化財センター（平成23年度より公益財団法人）が発掘調査を行うこととなった。実施にあたっては、

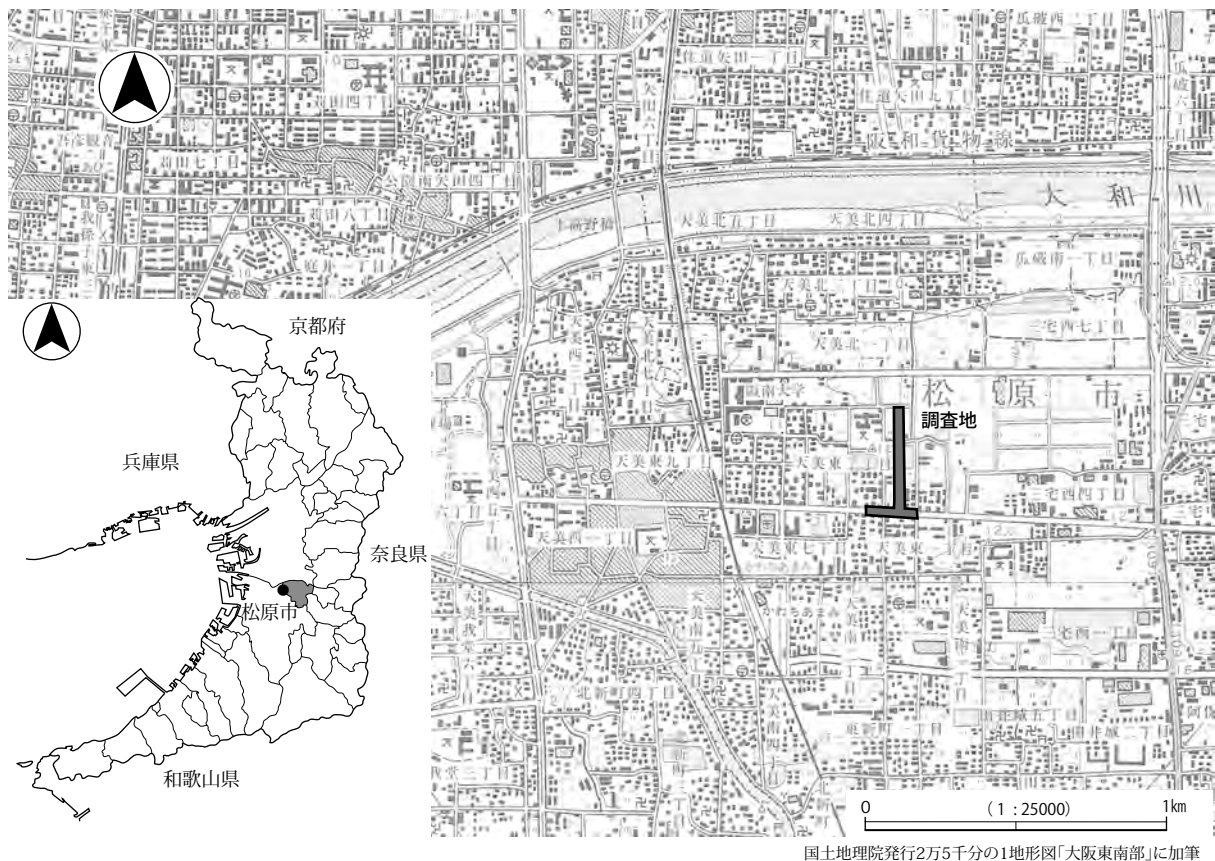


図1 遺跡位置図

平成 21 年 5 月 15 日に大阪府都市整備部・大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センターによる調査に関する覚書を締結した。これにより大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センターが発掘調査を実施することとなり、文化財保護法 99 条第 1 項の規定により、大阪府教育委員会は平成 21 年 10 月 13 日付教委文第 2296 号として埋蔵文化財発掘調査の通知を行った。

調査は平成 21・22 年度に池の南堤部分を除いて完了するものとし、センター発注工事として池内遺跡(府道その 1)・(府道その 2)の調査を行った。平成 22 年度途中からは本体の建設事業と併行して用水路の両脇部分などの未調査区の調査を行った。最後に残された池の南堤部分は本体工事の進捗状況をみながら、平成 23 年の 7 月から 8 月に行った。

また、一般府道大堀堺線に関しても河内長野線の今回の工事区域に交差するように、市道天美東 22 号線から天美東 23 号線間、天美東 22 号線の東 100 m 強の東西約 400 m にわたって歩道の拡幅工事が行われることとなった。こちらも大阪府教育委員会の試掘調査の結果、遺構・遺物を確認したため、池内遺跡としての遺跡範囲がさらに南に拡張された。遺跡に含まれる区域は、平成 22 年度から平成 23 年度に事業者発注の本体工事が行われる中で、あわせて発掘調査を行い、埋め戻した上から歩道拡幅工事をを行うこととなった。調査は、平成 23 年 3 月から 6 月にかけて行った。

大堀堺線に関する発掘調査・遺物整理事業も河内長野線の契約に含めて実施することとなり、発掘調査終了後は、調査成果を府道その 1・府道その 2 であわせて 1 冊の報告書として編集・刊行したのが本書である。



写真 1 調査区遠景(東から)

## 第2項 調査経過

一般府道大阪河内長野線に関する調査は、大きくは2回の契約にわけて実施された。

初めは、平成21年6月1日から平成22年3月31日の契約期間で、都市計画道路大和川線に接する箇所から東西市道にいたるまでの南北約106m、東西幅35mのうち、調査対象面積約3112㎡の区域を、都市計画道路大阪河内長野線池内遺跡発掘調査委託として、発掘調査並びに遺物整理作業を行った(図2・7)。この府道その1発掘調査(調査名:池内09-2)は平成21年7月半ばから調査を始め、11月30日をもって終了した。

まず、用地買収時に設置された周囲のフェンスを撤去し現況測量を行って調査区域を確定した。東辺には万能塀を、西辺にはバリケードの仮囲いを設置した。北半約3分の1は駐車場として使用されていたため、現地表にアスファルトが残っており、これを重機にて撤去し、場外処理場に処分した。調査区内は二分して調査を行うものとし(09-2-1区、09-2-2区)、普通機械掘削、機械掘削、人力掘削の順で行った。機械掘削・人力掘削の掘削土は場内のもう一方の調査区に仮置きし、終了した時点で埋め戻しを行った。

掘削の際、調査区を南北に貫通する農業用水路や井戸がある箇所については、近隣住民が使用しているため本体工事で用水路が付け替えられるまでは保護しておくことが、調査着手前から富田林土木事務所松原事業所と大阪府教育委員会、当センターとの協議の結果決定していた。そこで、当調査では調査対象外とし、以降の調査に先送りされることとなった。(最終的には、最北部の南北7m、30㎡強の区域については、農業用井戸など府道その2の本体工事期間でも撤去できないものがあり、事業者、大阪府教育委員会と協議し未調査のまましておくこととなった。)

人力掘削時の調査では測量委託による基準点設置に基づいて平面図や断面図などの測量を行った。また、各区最終遺構面で1回、計2回のヘリコプターによる航空測量や8段写真足場からの撮影を実施

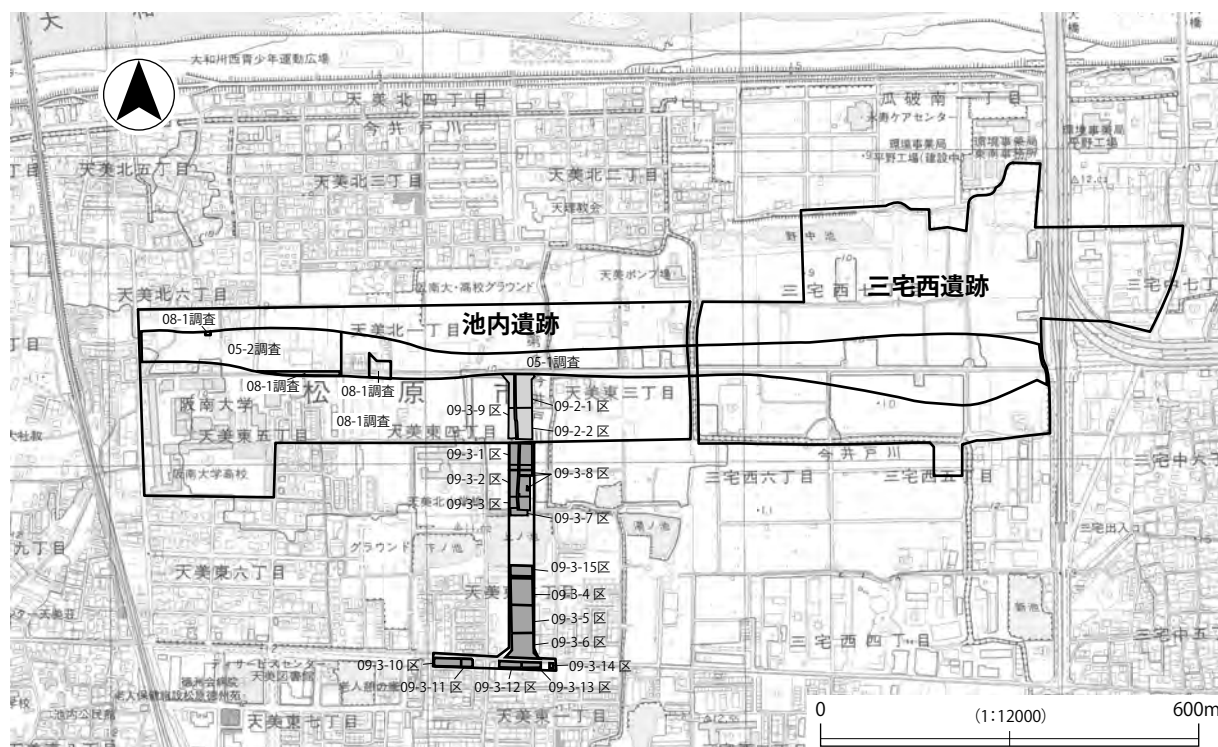


図2 調査区位置図

した。人力掘削出来高測量後、仮囲い撤去、フェンス現状復旧を順次行い調査終了した。

この契約期間の残り、平成21年12月1日から平成22年3月31日までは、南部調査事務所で報告書作成のための遺物実測、遺構・遺物トレース、写真撮影・焼付、原稿作成等の整理作業を行った。印刷刊行に関しては、府道その2調査とあわせて1冊の報告書とするためそれを待つこととなった。

府道その1の発掘調査が終了した時点で、都市計画道路大阪河内長野線池内遺跡（その2）発掘調査委託として、平成21年11月2日から平成24年3月30日を契約期間とし発掘調査・遺物整理作業を行った（調査名：池内09-3）。調査地は府道その1調査区から東西方向の市道を挟んでその南側にあたり、市道から大堀堺線までの南北約210m、東西幅35mのうち調査対象面積約6482㎡の区域である（図2・7）。このセンター発注による調査は調査区が上之池を挟んで大きくは二つに分かれる。北側調査区（09-3-1～3区）と南側調査区（09-3-4～6区）で、09-3-1区を起点に北から南の順に6つの区に分けて調査を行った（図2・7）。

府道その1と同じ理由で調査区内に存在する水路や電柱は存置したまま、調査区の周囲のフェンスを撤去し調査範囲の位置に万能塀などの仮囲いを設置した。その後、調査区ごとに現況測量を行い、地表面にアスファルトやコンクリート舗装が残る部分については、重機を使用して撤去した。09-3-3・6区では、地表面だけでなく地中からも建物の地中梁と思われる有筋コンクリートが発見されたためこれも撤去した。撤去したコンクリート等は定められた処分地に搬出し、処分した。

その後、普通機械掘削、同出来形測量、機械掘削、同出来形測量、人力掘削、同出来形測量、埋め戻し、現状復旧の順で行った。09-3-5区・6区にかけては、事業者の要望により地元への対応として、入口から一部に砕石を敷いて新たに大型車両の進入路を設けた。埋め戻し後は仮囲いを撤去し、フェンスを再設置し現状復旧した。平成21年12月22日から現況測量を行い、平成22年9月15日フェンス復旧を終え完了した。人力掘削では各区最終遺構面で1回、計6回のヘリコプターによる航空測量や8段写真足場撮影を行った。平成22年9月30日でセンター発注の発掘調査は終了した。

その後、地元住民の生活への配慮や構造物保護のために未調査となっていた箇所については、本体工事にあわせ断続的に着手した。まず、上之池の北堤部とそれに隣接するスロープ部分（09-3-7区）、約194㎡を、渇水期を待って平成22年10月21日から11月19日に発掘調査を行った。盛土を機械にて掘削し、その下を人力で掘削した。この調査区についてはその2調査区と一連のものとなるため、今まで同様に基準点測量とヘリコプターによる航空測量を行った。

用水路脇などの未調査部分は、その1・その2調査区内を南北に縦断する用水路の両脇幅東西1.0m、南北約200mの部分などが未調査だったため、本体工事の進捗にあわせ5回に分け調査を行った（09-3-8・9区）。まず、府道その2調査区域内のうち未調査だった南北用水路の両脇部分（09-3-8区）約100m長を、平成22年11月29日から12月15日の間に行った。その後、府道その1調査区域内の未調査部、用水路両脇部分（09-3-9区）約100m長に関しては、平成22年12月16日から平成23年1月26日の間に行った。府道その2調査区中の東西用水路両脇部分（09-3-8区）は平成23年2月4日から2月9日に、同元駐車場部（09-3-8区）は平成23年5月10日から5月11日に行った。09-3-8・9区の面積総計は374㎡になる。これらの調査に関しては調査区が狭小でかつ調査時期が不定なことから航空測量は実施せず、既設の基準点や街区基準点から座標値を割り出し測量を行った。用水路の底部については、掘削深度以下まで達しているか、砕石によって攪乱されていたため、コンクリートトラフを除去せず調査を終えた。09-3-1区で検出した溝の

延長など、深い遺構にかかる箇所についてのみコンクリートトラフを除去し確認した。

大堀堺線に伴う調査については、東西 200 m、幅 5 ～ 10 m の道路拡幅部分は間に南北の市道や調査できない区域を挟むため、5 分割して発掘調査・確認調査を行う必要があった(09-3-10～14区)。総面積 866 m<sup>2</sup>である。調査は平成 23 年 3 月 2 日から平成 23 年 6 月 3 日に断続的に行った。

四方をバリケードや万能塀で囲い、普通機械掘削、機械掘削、人力掘削を行った。調査区が南北の市道で分断されているため掘削土の搬出が困難であり、1 区画の調査区を 2 つに分け、終了して埋め戻した区に反転して次の掘削土を置く方法をとった。また、当初予定されていた調査区のうち X = -156,170 ～ -156,195 の間は構造物のコンクリート基礎が地中に残り攪乱を受けていたため、調査不要と大阪府教育委員会の確認・判断を受けた。調査住宅地に近接していることもあり、ここでも航空測量は行わずに、府道その 2 調査で設置した基準杭をもとに座標杭を設置し、測量実測を行った。また、各調査区で 1 ～ 2 回、計 6 回の 5 段撮影足場からの写真撮影を行った。

最後に、上之池の南堤部 (09-3-15 区)、約 530 m<sup>2</sup>を平成 23 年 7 月 6 日から 8 月 30 日に行った。池の濁水期を待たず調査するため、用水路がある南を除いた三方に鋼矢板を打設して止水した後、機械掘削、人力掘削を行った。本体工事の進行で基準点が亡失していることもあり、新たな基準点測量並びにヘリコプターによる航空測量を 1 回行った。

それぞれの調査区で、大阪府教育委員会による立会を受けた。平成 23 年 8 月末で府道その 2 調査計 8446 m<sup>2</sup>、府道その 1 調査との総計 11558 m<sup>2</sup>の調査を終了した。

府道その 2 の調査終了後、平成 23 年度末まで南部調査事務所にて報告書作成にむけての整理作業を行った。出土遺物は府道その 1 ・その 2 あわせてコンテナ 38 箱にのぼる。すべての発掘調査終了後に遺物実測、遺構・遺物図面のトレースや、遺物写真撮影・焼付などを行い、府道その 1 報告書整理の挿図・写真・原稿などもあわせての編集作業を行った。平成 24 年 6 月 29 日本書の刊行をもってすべての作業を終了した。

また、平成 22 年 2 月 6 日に、近隣住民の方を対象とした現地公開を実施した。古代以前の溝などが検出された 09-3-1 区の遺構を間近でみてもらい、遺跡・遺構の説明を行った。その他、09-2 調査で出土した古代から中世の緑釉陶器や黒色土器などの遺物や遺構写真・図パネルの展示も行い、当遺跡に対する理解を深めていただいた。新聞報道されたこともあり、寒風吹きすさぶ日にも関わらず 193 名の参加を得た (写真 2 ・ 3)。



写真 2 現地公開風景



写真 3 現地公開風景



## 第2節 地理的・歴史的環境

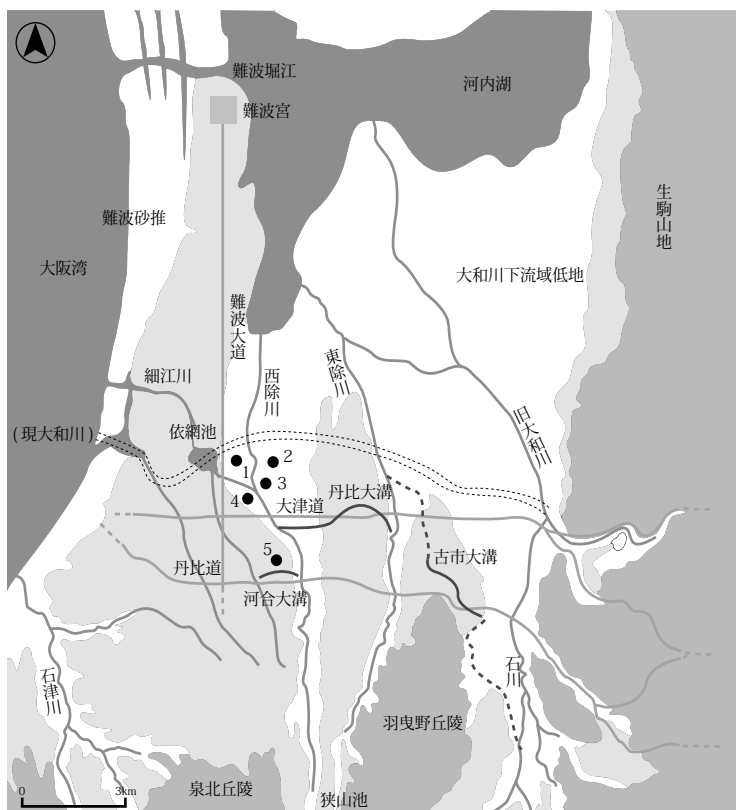
### 第1項 地理的環境

池内遺跡は松原市天美北一丁目、天美東一・二・四丁目に位置する。弥生時代から近世にかけての複合遺跡である。遺跡の範囲は大和川に沿って東西は 860 m、南北は 570 m である。平成 21 年度の大堀堺線の試掘調査により最南部も東西 200 m に広がり、上辺が長く下辺が短い「エ」の字形をなす。

池内遺跡が所在する松原市は大阪府のほぼ中央部、河内平野の南に位置し、現在の行政区分では北側は大阪市平野区・東住吉区、西と南は堺市北区・美原区、東は八尾市、藤井寺市、羽曳野市と接する。

松原市は標高 T.P.10.0 m から T.P.40.0 m の間に位置する大きな起伏がほとんどない地形で、その中で南南東に高く北北西に緩やかに低くなる。これは松原市を含む羽曳野丘陵が南部の狭山池付近に頂点をもち、扇形に円弧を描きながら緩やかに傾斜する扇状地であることに起因する。最低部は市の北西端の大和川沿いであり、池内遺跡はこの最低部にあたる地域に位置する。

扇状地を形成するのは河川である。市の北側には大和川が東西に流れ、それと交わるように南北方向に東には東除川、西には西除川が流れる。西除川は大和川の 1 km ほど南で西に直線的に折れ大和川に合流する。しかし、18 世紀初めに付け替えられ現在の流路になるまで、大和川は石川との合流地点より北に延びていた。また、西除川は狭山池から北流し平野川、天満川と合流し大阪湾に流れていた(図 3)。もとをたどると河内長野の山中を水源とする古天野川が狭山池からは分岐し、西除川と東除川となったのである。古天野川によって形成された扇状地は、この河川に侵食され谷を形成、谷より一段高い平坦面が段丘化していく。さらに時代が進むと、地球の温暖化により海水面が上昇して河内平野



1 大和川今池遺跡 2 池内遺跡 3 堀遺跡 4 高木遺跡 5 河合遺跡

図3 池内遺跡周辺の古代河川・溝

(狭山池博物館 2010 『古代西除川沿いの集落景観』より抜粋)

に海水が侵入する、いわゆる縄文海進がおきる。すると、海岸に近い松原市域では中位段丘の間にできた西除川の谷を埋めるように沖積段丘や自然堤防が形成されるようになる。池内遺跡はこの西除川の東岸、氾濫原に立地する。

また、松原市域には溜池が多く存在するが、これもこの地形や河川の特徴に起因するのである。つまり、河川が短く河川からの取水がほとんど得られないとか、谷中を流れていくため取水が難しいことから溜池が密集して作られた。池内遺跡周辺にも上之池、下之池を始め、弁天池などの池が密集している。また、池内の旧名「池ノ内」もこの地形を反映したものと推測でき、周りに比べると標高の低い地域だったことがうかがえる。

このような環境のもと、池内遺跡は立地している。

## 第2項 歴史的環境

松原市は古代には河内国丹比郡、のちに丹北郡に属していた。

大和川の南岸には西から大和川今池遺跡、当池内遺跡、三宅西遺跡が並び、西には城蓮寺遺跡、城蓮寺東遺跡、南に天美南遺跡、天美東1丁目遺跡、三宅西4丁目遺跡などが位置する(図4)。ただし、数年前まではこれらの遺跡の大規模な調査は、大和川今池遺跡を除いては行われておらず、詳細が不明だった。

大和川南岸の遺跡(大和川今池遺跡、池内遺跡、三宅西遺跡)については、大阪府道高速大和川線並びに都市計画道路堺松原線建設に先立って、平成17年度から数年にわたって当センターが発掘調査を実施し、様々な調査成果を挙げた。それらの概略を述べる。

大和川今池遺跡は古くから知られる遺跡である。大規模な発掘調査は1990年代に入ってから高規格堤防や下水処理場建設、大和川線建設などによって行われることとなり、これらによってようやく遺跡の性格が解明されるようになってきた。遺構では、古墳時代中期の埋没古墳や、古墳時代の掘立柱建物や平安時代から中世の建物などの集落を検出している。遺物では旧石器時代のナイフ形石器や、縄文時代の石器、古墳時代の韓式系土器や須恵器、埋没古墳に伴う家形埴輪や円筒埴輪などがみつまっている(センター2000・2001・2002・2009b)。

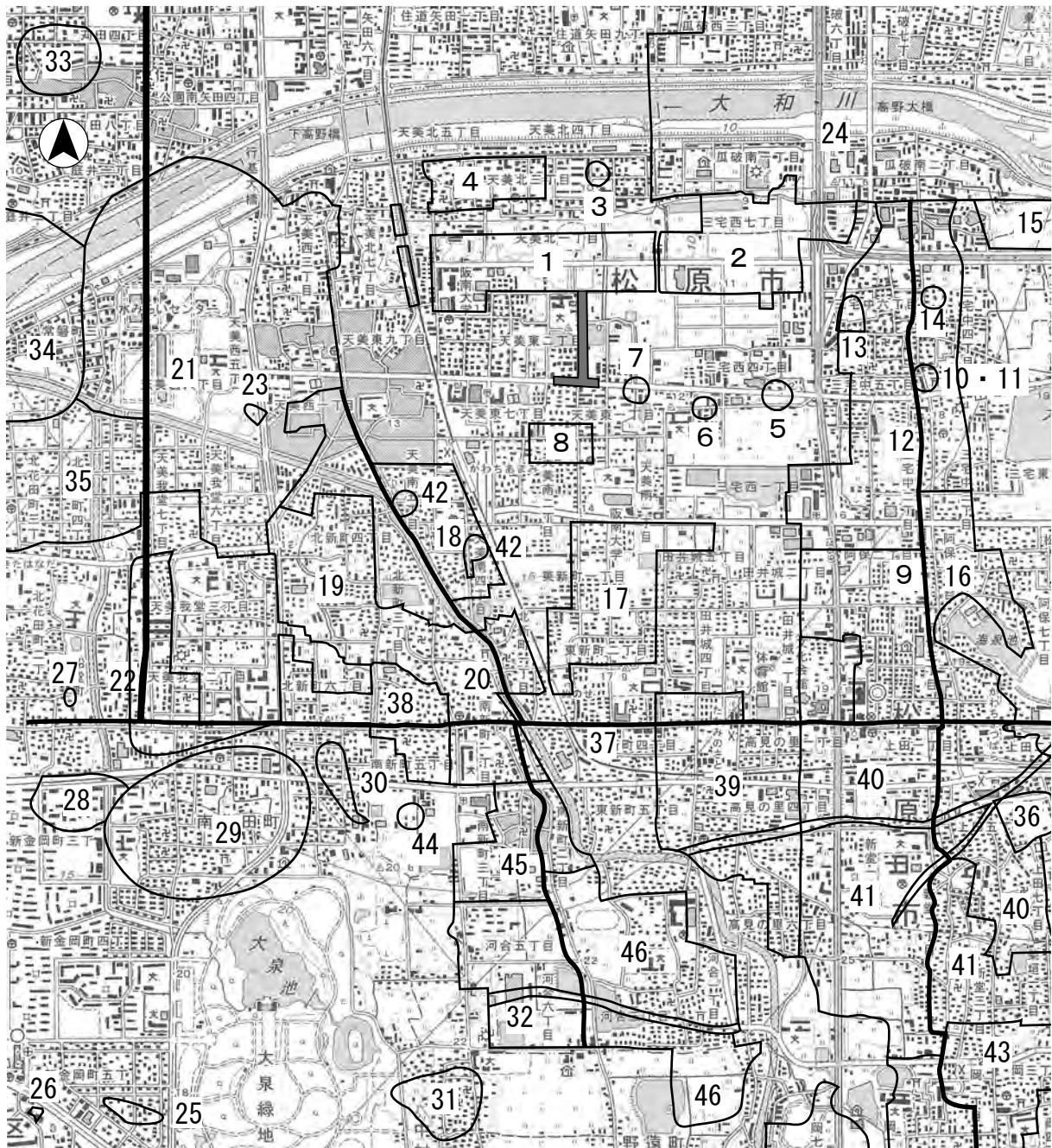
また、平成19年度の調査では古代の官道、難波大道があらためて確認された(センター2009a)。難波大道は日本書紀にも記述があり、難波宮から南に延び、河内や大和を結ぶ大津道・丹比道につながり、横大路をへて藤原京や平城京に至る道として、推古天皇21(613)年に造られたとされる。昭和55(1980)年の調査により幅18m間隔で平行する溝がみつき、難波宮と中軸が同一であることから難波大道とされていた(調査会1980)。平成19年度の調査では南北46mにわたる道路状遺構を検出し、位置関係から難波大道と断定され、造成時期・廃絶時期についても新たな知見を得た。

当報告書掲載の池内遺跡については、遺跡の北端を東西方向に調査し様々な成果を挙げた(センター2010)。中央より西寄りの調査区では弥生時代前期中葉の小区画水田や流路・土坑・溝等の生産域を検出した。東側の調査区では、平地建物ないし竪穴住居、掘立柱建物等からなる居住域を広く検出した。この居住域は2条1対の溝が周囲に巡らされ、環濠集落と呼んでも遜色ない。河内平野においても広範囲な弥生時代前期の水田検出例は東大阪市・八尾市の池島・福万寺遺跡などわずかしかないが、本遺跡内で水田遺構と居住域がセットでみつかったことは注目に値する。

平安時代中期から後期(9世紀後半～11世紀中葉)になると、総数60棟以上の掘立柱建物からなる居住域がみられる。それらは東、西、中央の大きく3つに分類できる。特に西側では、東西南辺に4分の3町四方の区画溝を持ち、区画溝内の建物は9世紀後半から10世紀のもので、庇付の大形建物に3棟前後の建物が付属する構成をとる。大形建物とそれに付随する小形建物、総柱建物32棟が計画的に配置されており、屋敷地と呼ぶにふさわしい。その他、井戸や土坑墓も検出されている。区画溝外の建物はやや新しく、10世紀となる。東建物群は9世紀後半から11世紀にかけてのもので幾つかに細分することができる。中央建物群はさらに新しく、11世紀後半から12世紀のものと考えられる。

遺物は土師器・黒色土器・須恵器などの日常器が完形で多数みつまっている他、越州窯青磁、白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、鈔帯などの希少な遺物がみつまっている。これらのことから、報告者は在地領主層の集落と性格づけている。

後述するが、当遺跡周辺は条里地割がよく残っており、文献資料からも確認できる場所として知ら



国土地理院発行2万5千分の1地形図「大阪東南部」古市(2007)に加筆  
 ■ 今回の調査対象地

0 (1:25000) 1000m

- |            |           |            |              |                 |          |
|------------|-----------|------------|--------------|-----------------|----------|
| 1 池内遺跡     | 2 三宅西遺跡   | 3 城連寺東遺跡   | 4 城連寺遺跡      | 5 三宅西4丁目遺跡      | 6 田池下遺跡  |
| 7 天美東1丁目遺跡 | 8 天美南遺跡   | 9 中高野街道    | 10 屯倉神社      | 11 三宅城(三宅砦)跡推定地 |          |
| 12 三宅遺跡    | 13 権現山古墳跡 | 14 三宅古墳跡   | 15 三宅東遺跡     | 16 阿保遺跡         | 17 東新町遺跡 |
| 18 堀遺跡     | 19 高木遺跡   | 20 下高野街道   | 21 大和川今池遺跡   | 22 難波大道跡        | 23 狐塚古墳跡 |
| 24 瓜破遺跡    | 25 金田遺跡   | 26 金岡幸田池遺跡 | 27 船堂町遺跡     | 28 新金岡3丁目遺跡     | 29 南花田遺跡 |
| 30 東花田遺跡   | 31 中村町遺跡  | 32 丹比大溝    | 33 苜田4丁目所在遺跡 | 34 依羅池跡         | 35 北花田遺跡 |
| 36 山ノ内古墳跡  | 37 長尾街道   | 38 清水遺跡    | 39 高見の里遺跡    | 40 上田町遺跡        | 41 新堂遺跡  |
| 42 堀遺跡     | 43 岡遺跡    | 44 鍵田遺跡    | 45 南新町遺跡     | 46 河合遺跡         |          |

図4 周辺遺跡図

れる。それによると、池内遺跡は丹比郡条里北三条にあたる。延久4（1072）年の『太政官牒』から、岩清水八幡宮護国寺宮寺領有荘園丹北郡矢田庄北参条楯原中里及び中里里外と推測される。東建物群下層で坪境に一致する南北溝が見つかり、条里制施行時期が8世紀後半に遡ると示唆される。

三宅西遺跡は大和川線の発掘調査によって大きな成果を挙げた。最下層の自然流路からみつかった縄文時代後期中葉の土器は良好な一括遺物であり、その後の放射性炭素年代測定によってB.C.1600年という年代が与えられたことは縄文時代研究に一定の進展をもたらした。また、弥生時代前期から中期前葉の竪穴建物がまとまって見つかり、集落をなしていたことが土器などの遺物と共に判明した。古墳時代の流路からは韓国の百濟土器が見つかり、これも国内でほとんど例をみない貴重な成果である（センター 2009）。

高木遺跡は当遺跡の南西部に位置する。難波大道から東へ1里の里境が見つまっている。複数時期に溝がみられるが、初めて現れるのは奈良時代に遡り、難波大道を基準とする条里地割が奈良時代まで遡ることを示唆する。水田区画や大形掘立柱建物配置から、条里地割に基づいた整然とした配置がなされていたと考えられる。建物の検出や海獣葡萄鏡、陶硯などの出土から官衙的集落と考えられる。ところが、奈良時代から平安時代に下るに従い、条里制が失われていく。集落は形成されるが、これまで道であったところなどに建物や井戸が存在するようになる。

堀遺跡は池内遺跡の南、高木遺跡の東に位置する。奈良時代後期の水田が検出されたが、条里地割の様相を示さず、微高地に形成される。その後、8世紀後半から9世紀前半にかけての、2条2里9坪から8坪にあたる条里地割に基づいた水田が出現する。

河合遺跡は松原市の南西部、西除川の左岸に位置する。飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物群や大溝が知られており、大溝は7世紀の開削と考えられる。同遺跡では、平成21年度の調査で奈良時代の掘立柱建物群が見つかった。大形建物3棟から4棟がコの字形に配置され、他に総柱建物を含む7棟の掘



図5 池内・三宅西遺跡周辺の条里地割図 (足利 1985 をもとに作成)

立柱建物がみつかったことや、大溝も3箇所を確認され、硯・墨書土器なども出土した。これらの出土遺物の性格や、建物の規模や配置から官衛遺跡と考えられる。

なお、河合遺跡と同規模の溝は、上田町遺跡でも丹比大溝とされる遺構がみついている。7世紀後半の開削で、4kmに及ぶ人口運河である。

三宅西遺跡から池内遺跡にかけての地域は、条里地割がよく遺存する地域として知られ、古くから研究が進んでいる。岸俊男氏や足利健亮氏、金田章裕氏などの研究者によって、現在の地割や坪名から復原した地理学や古代史の見地からの研究が進められており、その成果は報告書等でも発表されている(市史1985、調査会1980)。

足利健亮氏は難波大道と長尾街道を基準に丹北郡条里を復原した。また、長尾街道を境に南北で施行時期が異なることが指摘される。この研究に従って、復原された条里地割に今回の池内遺跡調査区を当てはめると、長尾街道より北条で、図5のCY里、C4Y1からC4Y4の箇所に対応する。調査区の東西幅は大堀堺線調査区などを除くとほとんどが35mで、1町の区画の内に存在する。また、南北幅は450mほどある。つまり、里境には相当しないが、東西の坪境を4条含むこととなる。

最近になって難波大道の存在が考古学的にあらためて立証された(センター2009a)ことで、より詳細な条里制の導入時期などの考察が迫られている。

#### <参考文献>

足利健亮 1985「第2章3 条里制」『松原市史』第1巻 松原市教育委員会

松原市教育委員会 1985『松原市史』第1巻

松原市教育委員会 1978『松原市史』第3巻

(財)大阪府文化財センター 2006『池内遺跡の発掘調査—平成17年度都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線(一般府道住吉八尾線)建設に伴う発掘調査 現地説明会資料1』

(財)大阪府文化財センター 2007『池内遺跡の発掘調査II—平成17年度都市計画道路大和川線及び都市計画道路堺松原線(一般府道住吉八尾線)建設に伴う発掘調査 現地説明会資料II』

(財)大阪府文化財センター 2010『池内遺跡』

(財)大阪府文化財センター 2009『三宅西遺跡』

(財)大阪府文化財センター 2010『三宅西遺跡II』

大和川・今池遺跡調査会 1980『大和川・今池遺跡II 第3・4・5地区 発掘調査報告書』

(財)大阪府文化財調査研究センター 2000『大和川今池遺跡(その1・その2)』

(財)大阪府文化財センター 2001『大和川今池遺跡(その3・その4)』

(財)大阪府文化財センター 2002『大和川今池遺跡(その5・その6・その7)』

(財)大阪府文化財センター 2009a『大和川今池遺跡I—難波大道の調査—』

(財)大阪府文化財センター 2009b『大和川今池遺跡II』

(財)大阪府文化財センター 2010『大和川今池遺跡III』

大阪府教育委員会 2010『大阪府埋蔵文化財調査報告2010-1 大和川今池遺跡』

大阪府教育委員会 2010『大阪府埋蔵文化財調査報告2010-3 高木遺跡』

大阪府立狭山池博物館 2010『H22年度秋季企画展 古代西除川沿いの集落景観』

日下雅義 1980『歴史時代の地形環境』古今書院

### 第3節 調査の方法

#### 第1項 発掘調査

調査範囲は計画路線内すべてが調査対象地となる。が、調査地内に農業用水路や井戸、電柱等がある場合は近隣住民の利便を考慮してその区域の調査時期をずらし、付け替え等が終了後に調査を行って調査に空白が生じないように努めた。

調査にあたっては、敷地境界を確認し既設のフェンス等を撤去して近隣への埃等飛散防止や安全管理のため調査地内を万能扉やバリケードで囲った。現況測量を実施して、現地表や地中に構造物のコンクリート梁やアスファルトが残っている箇所は撤去工を実施した。その後、盛土がある部分については普通機械掘削並びに普通機械掘削出来高測量を行った。次に、耕土や床土を重機で掘削し、機械掘削出来高測量を行った。

ついで人力掘削を行い、遺構や遺物の検出を行った。最終遺構面で航空写真撮影・測量と足場からの写真撮影を行い、それ以外にも適宜、写真撮影、平板実測、断面実測などの実測作業を行った。調査終了にあたっては、大阪府教育委員会による立会、確認を受けた後、埋め戻しと仮囲い撤去を行い、フェンスを現状復旧して調査を完了した。また、追加工事として場内への進入路建設なども行った。

さらに、現場作業の合間に、洗浄、注記、台帳作成、図面・写真整理といった出土遺構・遺物の基礎整理を随時実施した。

発掘調査の実施にあたっては当センターで定めた『遺跡調査基本マニュアル【暫定版】』2003 及び『遺跡調査基本マニュアル』2010 に従った。

調査区区割は世界測地系に基づく平面直角座標系に準拠している。大阪府が位置する第VI座標系を第

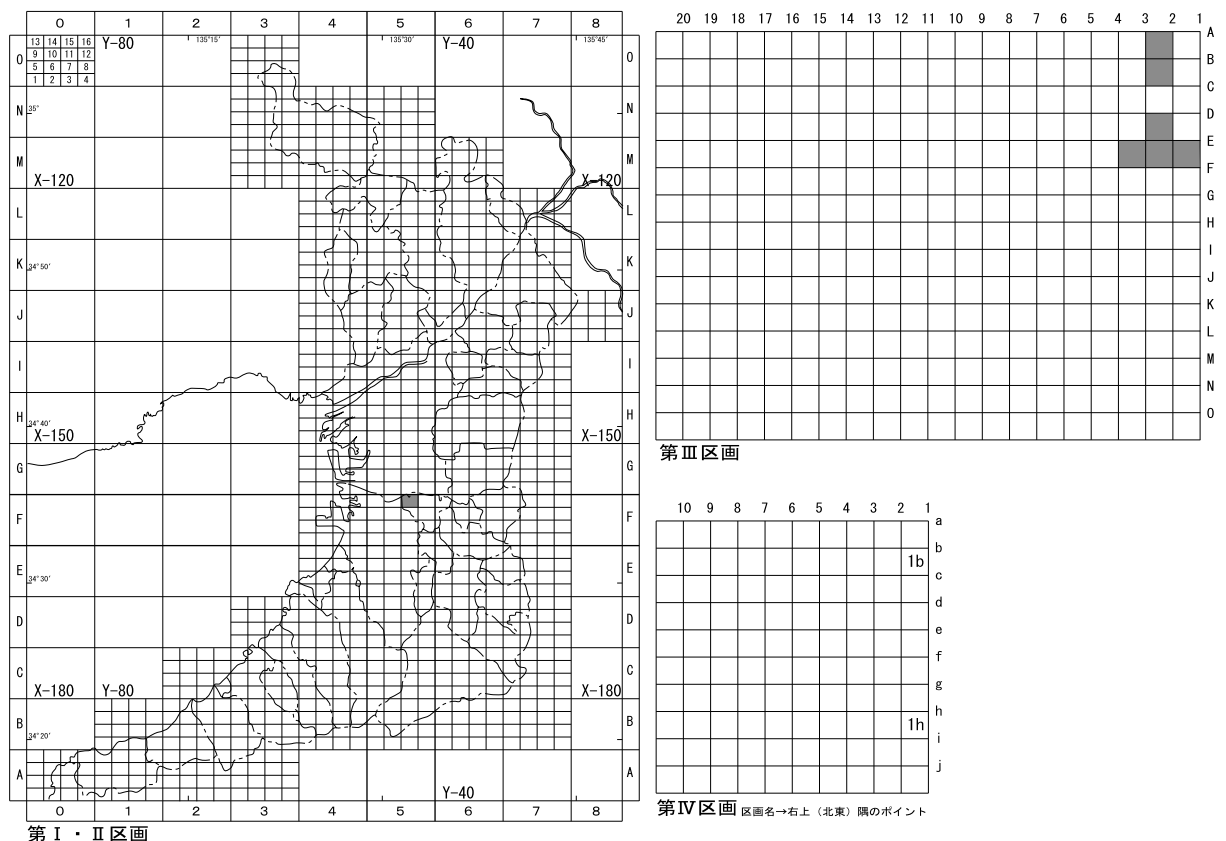


図6 調査区配置及び地区割図(1)

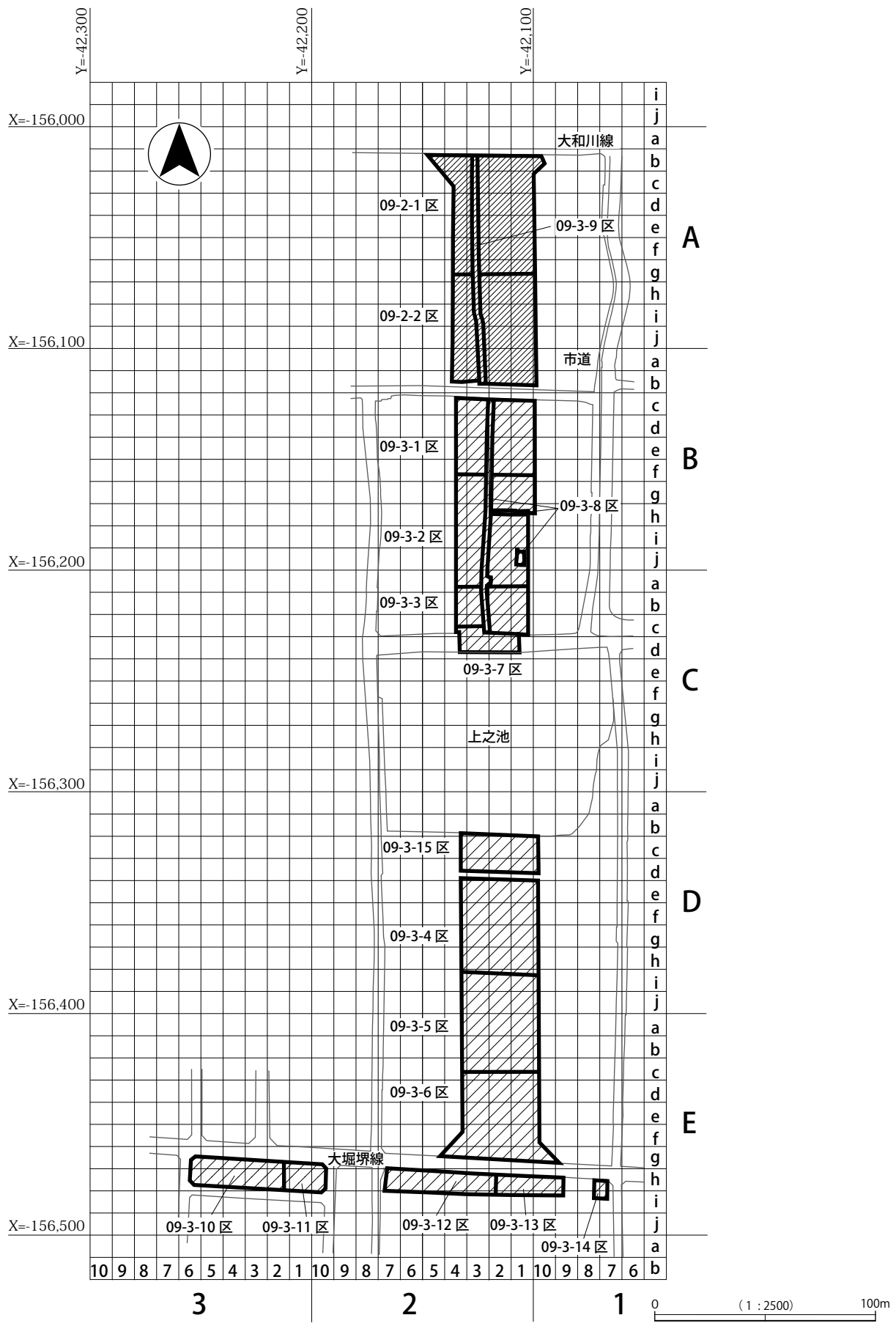


図7 調査区配置及び地区割図 (2)

I～IV区画に区分し（図6）、遺物の取り上げなどで必要な際はこれをさらに5m毎の区画に分割して使用した。今回報告する区域は大きくは南北に延びる河内長野線とその南に接する東西の大堀堺線に分かれ、河内長野線はさらに上之池を挟んで南北約100m超ずつの、大きくは3つの箇所に分かれる（図7）。河内長野線北半が第I・II・III区画が主にF5-15-2A・2B、南半がF5-15-2D・2E、大堀堺線がF5-15-1E・2E・3Eとなる。

調査区名については図7の通りである。府道その1で調査区を2つに分けて反転調査したため、北から09-2-1・2区と呼称する。府道その2調査区はまず、上之池を挟んで南北に分かれ、それぞれを3つに分けて調査したため合計6つの調査区が存在した。これを北から09-3-1～6区と呼称する。次に事業者発注で、河内長野線内の未調査区の調査にあたった。上之池北堤部分を09-3-7区、府道その2調査区内の用水路他部分が09-3-8区、府道その1調査区の用水路調査区部分が09-3-9区とする。その後、大堀堺線の調査に着手したが、調査の順に従って西から09-3-10～14区とする。最後に河内長野線の上之池南堤部分の調査を行い09-3-15区とした。府道その1・その2それぞれで3級基準点、4級基準点測量を委託しこれに基づいて地区割を行った。水準は東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。

航空写真測量は府道その1調査で2回、府道その2調査で8回の計10回実施した。

遺構面の実測は基本的に100分の1縮尺の平板測量を行い、最終遺構面についてはヘリコプターによる航空測量を行い、50分の1平面図を作成した。航空測量の際は8段足場を設営し、高所写真撮影も行った。その他、遺構平面図や土層壁面断面図は10分の1や20分の1縮尺を適宜使用して行った。

## 第2項 整理作業

今回の調査で出土した遺物はコンテナ38箱にのぼる。遺物の洗浄・注記や登録、写真整理、遺構図面整理などの基礎整理作業は発掘調査と並行して行った。

府道その1調査（09-2、第3章）に関しては、発掘調査終了後の平成21年12月1日から平成22年3月31日の間で遺構写真図版作成、遺物写真撮影、遺物写真図版作成、遺物実測、挿図レイアウト、デジタルトレース、原稿作成などの報告書作成にむけた整理作業を行った。

府道その1の未調査区、府道その2調査並びに大堀堺線、池堤部分に関する調査（09-3、第4～6章）では、発掘調査が他の調査区に移る際に間隔があくときがあり、その際に、遺構図面の整理や空測図と平面図の整合作業、遺物の台帳作成、ピックアップ作業などを行った。

すべての発掘調査が終了した段階で、南部調査事務所にて遺物実測や遺構図のデジタルトレースに着手した。挿図作業に関しては、PhotoshopCS2を用いて図面の合成作業を行い、IllustratorCS2でトレース作業を行った。

写真図版作成は遺構写真については紙焼きを写真室に依頼し、貼りこみレイアウトを完成した。遺物に関しても、接合・復原後、写真撮影を行い、遺構同様に紙焼きを行って写真図版を完成した。

原稿や図表を個々に完成した後、編集ソフト、InDesignを用いて報告書の編集作業を行った。報告書の入稿後校正を経て報告書を完成させ、平成24年6月、本書の刊行をもって報告書作成作業を完了した。



## 第2章 基本層序

### 第1節 09－2・09－3調査の基本層序

全体を通じての基本的な層序は図8にまとめた。現地表から盛土、耕土、床土（1層）、主に古代から近世の遺物を包含し、時には遺構面を形成する層（2層）、氾濫堆積砂層（3層）、全域を通して遺構面と認識される地山層（4層）が主だった層序である。図8ではこれらの層について、統一したトーンで表現し図示した。ただし、河内長野線調査区の北半の09－2－1・2区、09－3－1～3・7・8区と南半の09－3－4～6・15区、東西方向の大堀堺線の09－3－10～14区では基本層序の土質や土色が変化し、詳細も異なるため、以下の4項に分けて記述する。

また、池内遺跡の北部、都市計画道路大阪府道高速大和川線建設に伴う調査（以下、大和川線と略）の地層堆積状況との対照については、第2節で述べる。

#### 第1項 09－2－1・2区、09－3－9区の基本層序（図8上段、図9上段、図10上段）

調査地の現況の標高は、09－2－1区の約2分の1にあたる北東部は駐車場であったため、盛土が1.0m強積まれて舗装されT.P.10.6m前後である。また、南端中央に0.4m程度盛土があるが、それ以外の現地表は耕土層が露出しており、現標高は北東端でT.P.9.4m、南西端でT.P.9.6mをはかる。

盛土のある箇所は重機により0.4～1.0m強掘削した。盛土を除去した直下層は耕土層であり、北東部から南西にいくに従い高くなる地形をとる。

重機により耕土層とその下層の床土を除去した。耕土層は0.1～0.2mの厚さで灰色～オリーブ褐色の粗砂～礫混シルト層である。この下層の床土（1層）はにぶい黄色シルト～粘土層である。1層は南側では残りが悪く厚さ0.05mとわずかしかみられないが、北にいくと最も厚い部分では0.2mある。耕土層上面からは農業用水用の井戸などが掘り込まれているが、これらはすべて近現代のものである。

この下層からは堆積状況が部分的に分かれる。

古代から中世の遺物を包含する2層は、暗灰黄～灰褐色のシルト～粘土を呈し、0.1～0.2m堆積する。2層はX＝－156,090周辺以北から堆積が始まる。それより南は耕土層直下が地山面（4層、第1面）である。堆積の厚いところでは、2層はマンガンの沈着が著しく暗灰黄色～黄灰色を呈する上層（2－1層）と、マンガンの沈着が少ないためやや淡い色調に見える下層（2－2層）に分層できる。2－1層の標高はT.P.9.1～9.2mである。2層の堆積状況はやはり旧地形の影響を受け、南で最も高く、北東に行くほど低くなる。

09－2－1区の北半では、2－1層上面で1層の土を埋土とする東西方向あるいは南北方向の浅い鋤溝群がみられたが、この遺構は近世以降のものと考えられる。主に北半では2－2層上面で、中央部では2－1層上面で掘立柱建物の柱穴やピットなどの遺構を検出した（第1面）。2層で包含する遺物はいずれも細片で、中世の陶器などもわずかに含まれるが10世紀～11世紀のものが多くを占める。4層上面でみられる遺構の時期は9世紀後葉～10世紀前半にほぼ限定される。

2層の下層では部分的であるが、灰オリーブ色シルト～細砂の砂層の堆積が認められた（3層）。厚さ0.1m程度である。

2層の堆積が見受けられないところは地山面である4層がみられる。4層は灰褐色あるいは明黄褐色

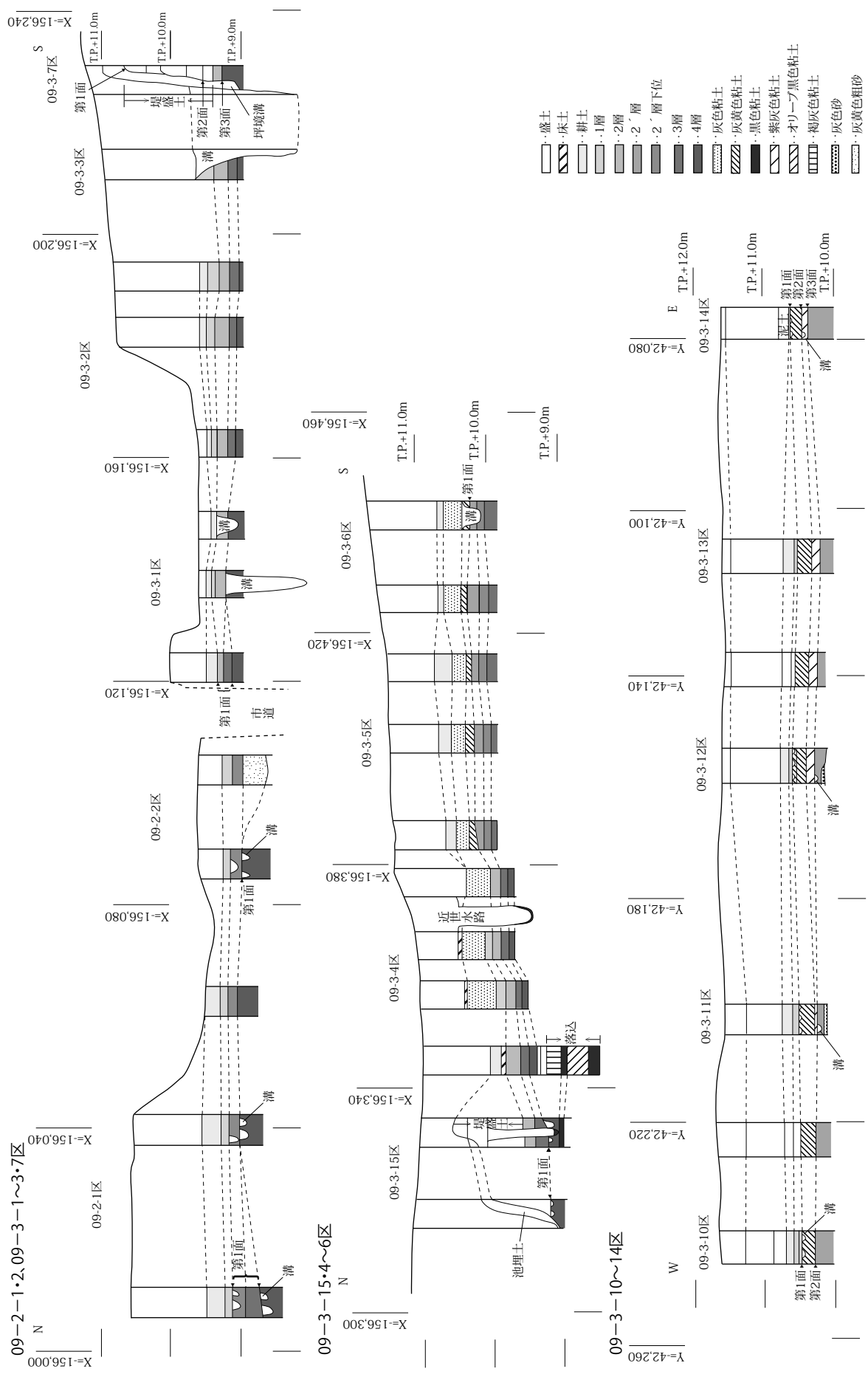


图8 基本层序模式图

シルト～粘質土で、北東部の最も低いところで T.P.8.9 m、中央部で T.P.9.0～9.1 m、南側で T.P.9.3 m 前後をはかる。2層が堆積しないところでは、この4層上面で溝、柱穴、井戸、土坑などの遺構を多数検出した（第1面）。

X = - 156,090 以南では、南西あるいは南東にむかって下降する砂層の堆積が認められ、土質が変化する。南東部の砂層はオリーブ褐色の細砂から粗砂を呈する（4'層）。調査区東端の中央から南でも部分的ににぶい褐色の粗砂～礫が認められる。

4層以下は側溝などで部分的に確認したのみであるが、黒褐色のシルト混じり粗砂である（5層）。遺物は包含しない。

## 第2項 09-3-1～3・7・8区の基本層序（図8上段、図9下段、図10下段）

09-3-1～3・8区の現況はほとんど畑であった。南北用水路より東部分のうち、X = - 156,180 以南は盛土が1.0 m強積まれた上に舗装され建物や駐車場が存在したため、標高は T.P.11.0 m 前後であった。北東端で T.P.10.0 m、南西端で T.P.9.6～9.7 mをはかる。

盛土のある箇所は、普通機械掘削として重機により0.1～1.0 m強を除去した。盛土を除去した下層は耕土層であり、北東部から南西にいくに従い若干高くなる。さらに重機により耕土層とその下層の床土を除去した。

耕土層は0.1～0.2 mの厚さで灰色～オリーブ褐色の粗砂～礫混シルト層である。この下層の床土（1層）はにぶい黄色シルト～粘土層でかたく締まる。南西部では耕土と床土が約5 cm厚さで繰り返し互層となっている部分が認められ、耕作が短い期間で頻繁に行われていた可能性がある。

これより下層の層序は基本的には09-2-1・2区と同一である。

古代から中世の遺物を包含する2層は、暗灰黄～灰褐色のシルト～粘土で、0.1～0.2 m堆積する。それより南は耕土層直下が地山面（遺構面）で2層は存在しない。堆積の厚いところでは、2層はマンガンの沈着が著しく暗灰黄色～黄灰色を呈する上層（2-1層）と、マンガンの沈着が少ないためやや淡い色調に見える下層（2-2層）に分層できる。2層上面の標高は T.P.9.4～9.5 mである。2層で包含する遺物はいずれも細片で、弥生時代から古墳時代、平安時代末から鎌倉時代初めのものが多くを占める。

2層の下には灰褐色細砂～礫混じり粗砂層（3層）が部分的に堆積する。中央の09-3-2区付近では、東端の中央から南で部分的ににぶい褐色の粗砂～礫の3層が認められる。ここでは最も堆積が厚く、0.3 m前後ある。X = - 156,090 以南では、南西あるいは南東にむかって下降する砂層の堆積が認められ、土質が変化する。南東部の砂層はオリーブ褐色の細砂から粗砂を呈する。3層には須恵器片などをわずかに含む。

09-3-3区の西半では、機械掘削直後の2層上面で1層の土を埋土とする南北方向の鋤溝群がみられた。09-3-1区では2層上面で、1条の溝や井戸、土坑などの遺構を検出した。2層を除去した地山面（4層上面）でも大きな溝を検出した。溝は古代以前、弥生時代に遡る可能性があり、最も大きな溝の埋土は茶褐色から黒褐色の粘土を呈する。

4層は明黄褐色シルト～粘質土をベースとし、暗灰黄色～黒褐色シルト～粘質土が混じる。北東部の最も低いところで T.P.9.3 m、中央部で T.P.9.3～9.4 m、南側で T.P.9.4 m 前後をはかる。

4層以下は側溝などで部分的に確認したのみであるが、黒褐色のシルト混じり粗砂である。既往の近隣の調査成果（池内05-1など）から弥生時代前期以前、縄文時代晩期に相当する地層と考えられる。

09-3-7区は現代でも池の堤と通行路としての機能を有していたため、09-3-3区から急激に盛り上がり、現標高 T.P.11.6 mの高さがあった。表土や、耕土を盛り上げた土を除去すると、T.P. 10.0～11.4 mの高さで近世以前の堤が存在する。この堤は2層をベースとし、黄灰色～灰黄褐色の粘質土にブロック土が混じり、版築のように幾層にも盛り固めてあった。

この盛土を除去すると2層相当上面や4層上面で溝、土坑などの遺構を多く検出した。T.P.9.2～9.3 m前後で4層を検出した。

また、最下層では南北の自然流路を検出したが、流路内は灰色～青灰色の粘土が堆積し、底面は T.P.8.0 m近くまで下がる。

盛土、耕土、床土（1層）、遺物包含層（遺構面ベース、2層）、砂層（わずかに遺物を含む、3層）、地山層（遺構面ベース、4層）、灰褐色から黒色の砂層から粘土層以下（5層）が基本的な層序となる。09-2調査でみられた地層の延長であり、大きく変わることはない。また、地山面の標高も北から南に高くなる傾向は同じだが、T.P.9.3～9.4 mとその標高差は10 cmほどしかなく緩やかである。09-2区では T.P.8.9～9.3 mと上昇傾向にあったのが、南に進むに従い緩やかになりほぼ平坦な地形になると考えられる。

### 第3項 09-3-4～6・15区の基本層序（図8中段、図11）

上之池に最も近い09-3-15区は池南堤にあたる。09-3-7区同様現況は道路や駐車場であり、現標高は T.P.約 11.3 mをはかる。現地盤から約 1.0 mは盛土で覆われる。これを除去したところ、北から10 m、X=-156,330 辺りまでは現上之池よりさらに南に池が広がっていたことが判明した。池を造成した際に削平を受けているため、調査区のほとんどは T.P.約 9.3 m前後で地山に達しており、一部で4層が確認できた。

池の削平を受けていないのは X=-156,330 より南へ5、6 m部分のみであるが、ここも近世の水路や近現代の溝等による攪乱を受け、残存状況が悪い。残存部は近世以降に堤が構築された場所であり、堤の盛土が遺構面を保護していた。耕土層、1～3層の堆積がほとんど認められず、4層は東半ではやや砂混じりの茶褐色を呈する。西半では4層上部がやや土壌化し、西南にむけて緩やかに落ちる谷地形をとり、谷底では5層に相当する黒色粘土層が露出する。

09-3-4区から6区、南北150 m弱のこの区域では、4区の北西部のみが調査区の西から続く畑の続きであり、盛土が0.6 mの厚さで堆積する。それ以外は0.8～1.0 mの厚さで盛土が堆積する。09-3-5・6区は全体に0.8～1.0 mの厚さで盛土が堆積する。これを除去したところ、耕土および床土（1層）、近世の遺物を含む灰色粘土層が4区では0.4～0.8 m堆積していた。

さらにその下には、主に古墳時代から中世の遺物を包含する紫灰色～灰黄色粘土層（2層）が0.1～0.2 m存在するため、この層以下を人力にて掘削した。2層は09-3-5区の途中、X=-156,380 辺りでオリーブ黄色粘土層（2'層）に変わる。このオリーブ黄色粘土層（2'層）上面で遺構を認めたため、これを遺構面として航空測量、写真撮影、図化を行った。2'層の下層も確認調査を行ったが、従来の3層に相当する砂層、4層に相当する層を確認したが、2'層以下は無遺物層となる。包含層に含まれる遺物も古墳時代のものが少量と12、13世紀以降のものが多くを占め、上之池北半よりさらに新しくなる。

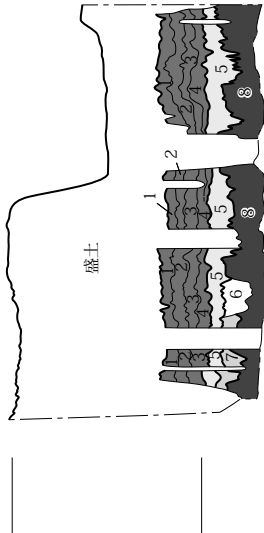
この区域は、X=-156,380 辺りまでは北側の層序と同一であるが、これより南で土質や色が変容する。標高 T.P.9.3～9.8 mと急激に上昇するが、それより南は2'層は T.P.10.1～10.3 mと、北半よ

図9 09-2-1区、09-3-1区北壁断面図

09-2-1区

W

Y=42.140  
Y=42.130  
Y=42.120  
Y=42.110  
E



- 1 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト(1層)
- 2 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト やや礫含む(1層)
- 3 浅黄 2.5Y7/3 シルト(1層)
- 4 浅黄 2.5Y7/4 シルト(1層)
- 5 灰オリーブ 5Y5/3 シルト～粘土あるいは にぶい黄 2.5Y6/4 シルト～粘土 径5mm程度の礫含む(2層)
- 6 褐灰 10YR6/1 中砂～微砂

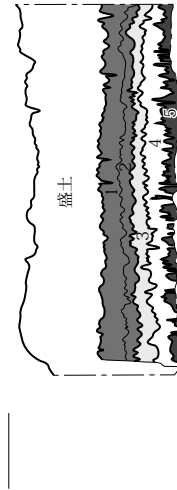
- 7 灰オリーブ 5Y5/2 シルト～粘土(3層)
- 8 にぶい黄褐 10YR5/4 粘土(4層)
- 9 暗灰黄 2.5Y4/2 粘土
- 10 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト～粘土礫含む(粘土)
- 11 オリーブ褐 2.5Y5/3 粘土 マンガン沈着 径5mm程度の礫含む、黄色味おびる(3.2層)

- 12 オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト(粘土)
- 13 黄褐 2.5Y5/4 粗砂～礫に粘土ブロック含む
- 14 灰オリーブ 2.5Y4/1 シルト～粘土(粘土)
- 15 暗灰黄 2.5Y5/2 微砂混粘土(166薄埋土)
- 16 黄褐 2.5Y5/6 シルト～粘土 径5mm程度の礫含む(3層)

09-3-1区

W

Y=43.130  
Y=43.120  
Y=43.110  
E



- 1 明黄褐 10YR6/6 シルトあるいは にぶい黄褐 10YR6/4 シルト(床土・1層)
- 2 明黄褐 10YR6/6 シルト 1層よりやや青くマンガン沈着 あるいは にぶい黄 2.5Y6/4 シルト マンガン沈着(1.2層)
- 3 黄褐 2.5Y5/3 微砂混シルト マンガン沈着(2層)
- 4 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト～粘質土(1薄埋土)
- 5 黄褐 10YR5/6 シルト～粘質土(4層)

- 6 にぶい黄褐 10YR4/3 微細砂混シルト(3層)
- 7 暗灰黄 2.5Y6/2 微砂混シルト
- 8 にぶい黄褐 2.5Y5/2 シルト
- 9 にぶい黄褐 10YR5/3 微砂混シルト
- 10 黄褐 2.5Y5/3 微砂混シルト
- 11 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト混微砂～細砂

2m (1:40)

15m (1:300)

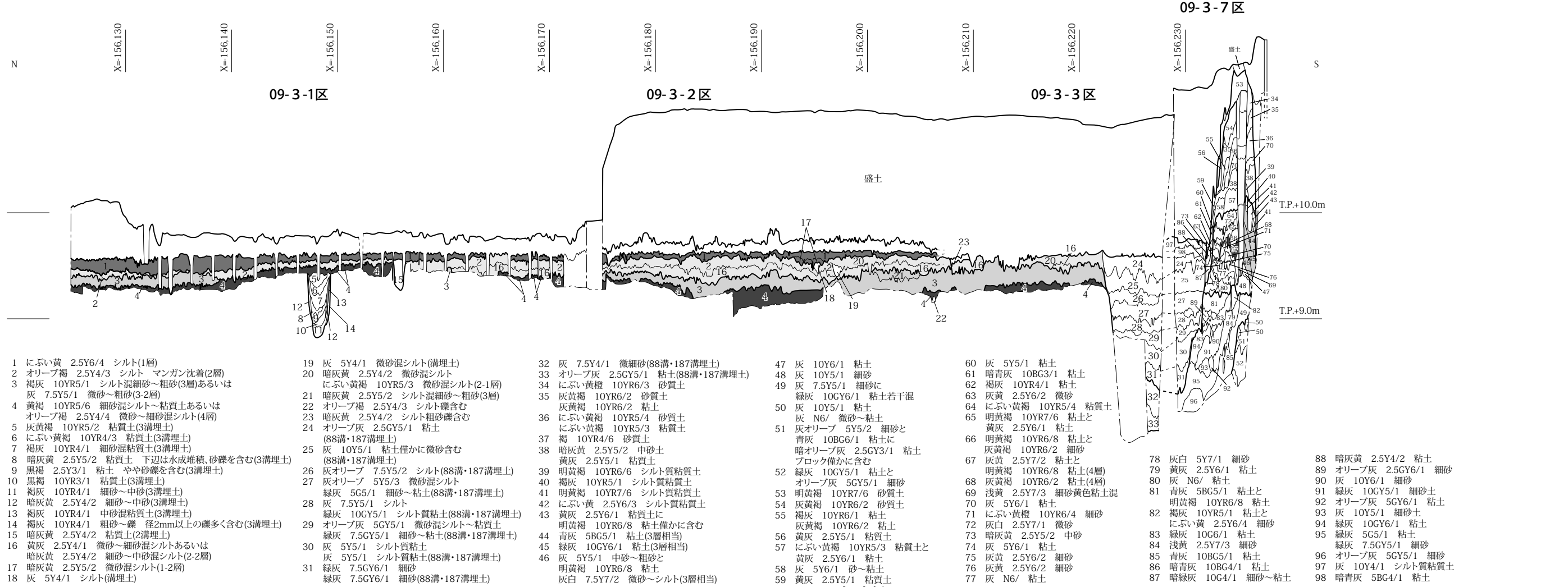
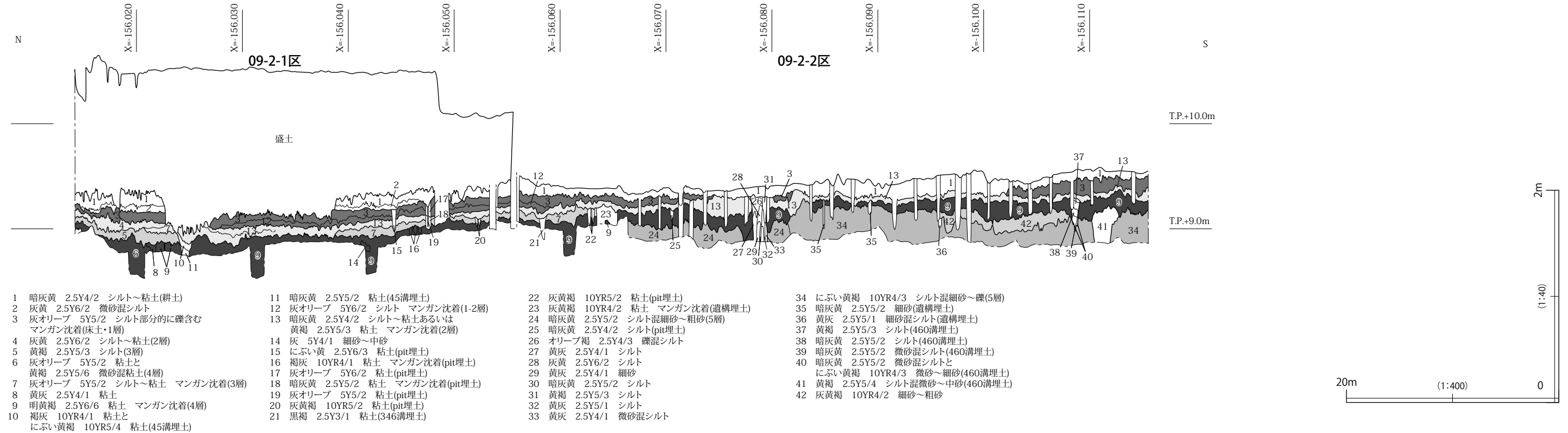


図 10 09-2-1~2区、09-3-1~3・7区 東壁断面図

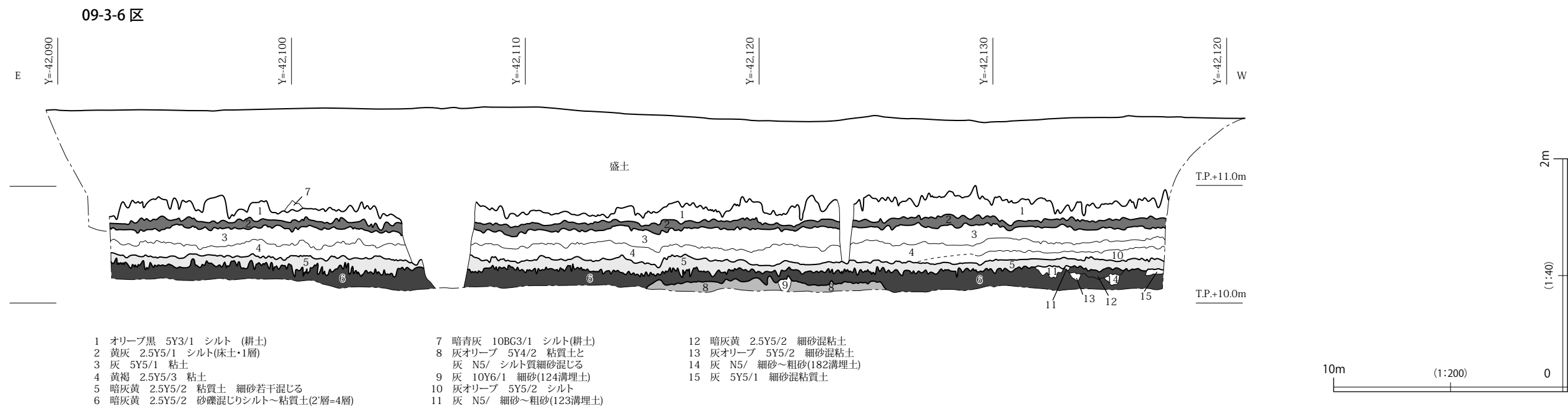
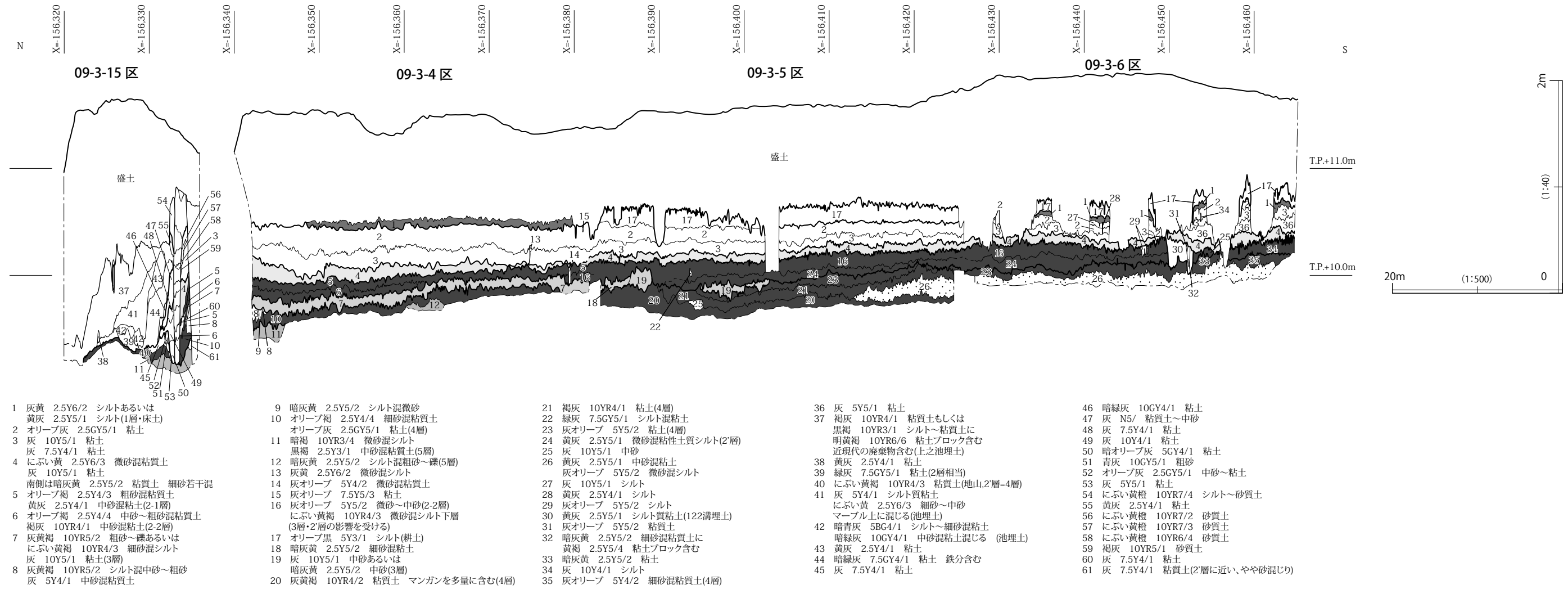


図 11 09-3-4~6・15区 東壁断面図、09-3-6区 南壁断面図

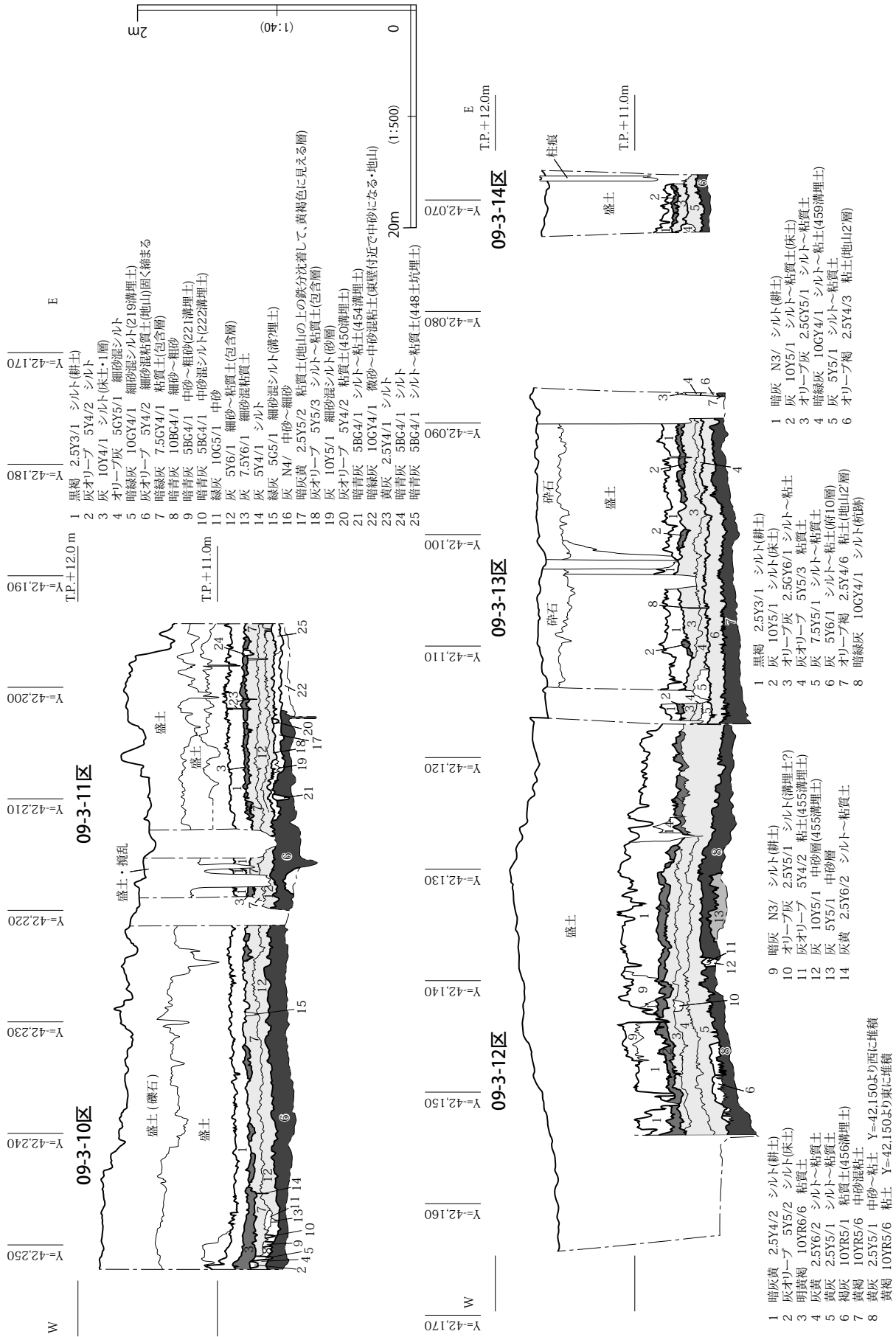


図 12 09-3-10～14区北壁断面図



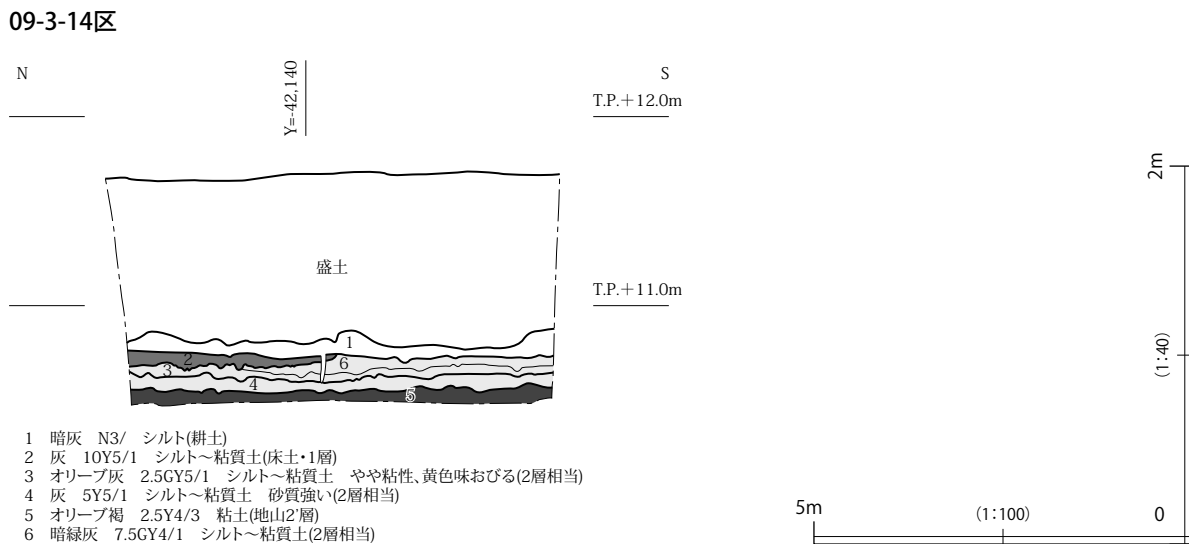
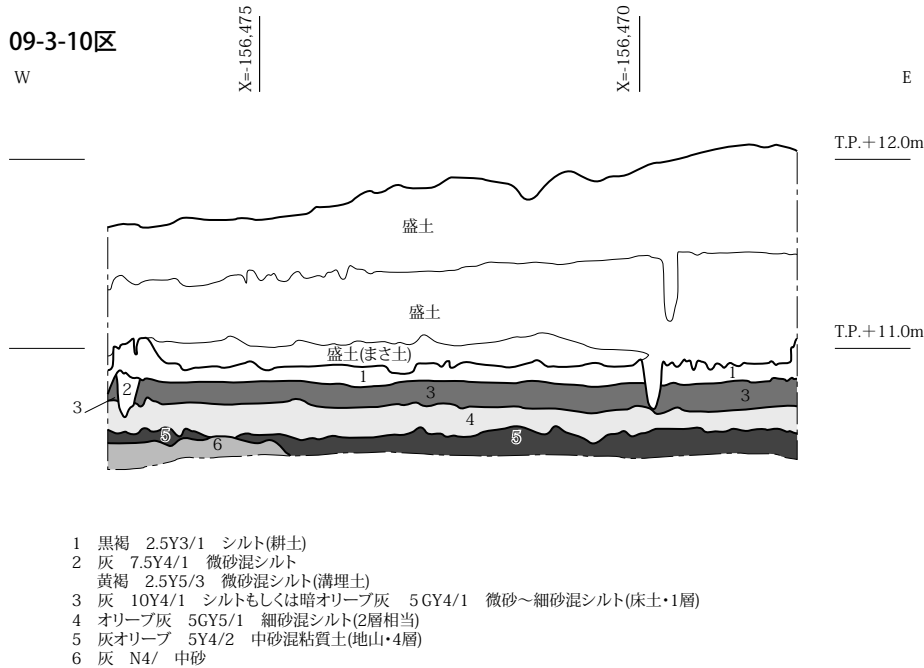


図13 09-3-10区 西壁、09-3-14区 東壁断面図

り高いが平坦な地形となる。また、09-3-15区から続く谷状の落ち込みは09-3-4区の北西部でもみられたが、ここで下層確認を行ったところ、4層以下に灰褐色粘土や黒色粘土、オリーブ黒色粘土、黒色粘土が堆積していた。

#### 第4項 09-3-10～14区の基本層序(図8下段、図12・13)

河内長野線と中央よりやや東寄りで交差する、東西200mの調査区である。地山面の状況としては、西の標高が高く中央部の09-3-12・13区が最も低く、東にいくと再び上昇する傾向にある。現地表はほぼ水平であり、そのため、中央部の遺物包含層が厚い傾向になる。

現標高はT.P.11.8～12.0mで、盛土は厚さ0.3～0.4mである。道路や住宅が存在していたため、舗道を除去した後の碎石などが残り、それらを除去した後さらに盛土が1.0mほど堆積していた。西ほど残存状況が良く、東にいくにつれ建物の基礎などが多く層序が乱されていた。T.P.10.8～11.0mに耕土、床土(1層)がT.P.10.8～10.6mで0.1m堆積しており、ここまでを機械で掘削した。

その下層に黄灰色シルト～粘土、紫灰色～灰黄色シルト～粘土層がそれぞれ 0.1～0.3 m 堆積していた。T.P.10.3～10.6 mをはかる。遺物を包含し、南北調査区（09-2・09-3-1～9区）の2層に対応する層と考える。2層ないし3層に分層可能で、上層（2-1層）は灰黄色シルト～粘土、下層（2-2層）はやや紫味を帯びた灰色シルト～粘質土である。2層上面で東西、南北方向の鋤溝を多数検出したため、第1面とした。09-3-10・11区ではこの層界が明確でなかったため、大きく1層と捉えて2-1層上面を第1面、4層上面を第2面として調査した。それより東では2-2層上面を第2面、4層上面を第3面とした。

紫灰色粘土層（2-2層）上面では顕著な遺構は検出できなかったが、09-3-4～6区で人力掘削を開始した層に相当するので、第2面とした。T.P.10.4～10.5 mをはかる。この両層が遺物を包含するが、時期は13世紀～近世と09-3-4～6区よりさらに新しくなる。3層は当該区ではほとんどみられなかった。

この下層が明黄褐色あるいはオリーブ褐色粘質土の2'層（南北調査区の4層に対応）地山面となる。2'層も土壌化の状況により、西側では上層、下層と分層可能である。2'層上面がT.P.10.3～10.5 mであり、中央の09-3-12区付近ではやや砂質を帯びる。西から中央、Y=-42,130付近に向かい徐々に低くなり、そこから東に再び高くなる地形をとる。若干の溝などの遺構や牛馬と思われる足跡など検出した。

## 第2節 既調査区（05-1・2、08-1）との対応

池内遺跡の大和川線の調査（05-1・2、08-1）においては、調査区ごとに基本層序が検討され、それらを総合的にまとめて火山灰分析や粒度分析等を加えた自然科学分析が実施されている。（センター2010）。それによると、池内遺跡全体の基本層序は、以下のように整理、統一されている。

池内0層：現代、盛土層

池内1層：近代～現代、作土層

池内2層：近世、作土層、灰オリーブ～にぶい黄シルト混細砂

池内3層：中世（～近世）、河川氾濫堆積砂層、灰オリーブ～灰黄褐色中砂混シルト

池内4 a層：平安時代（後半）、作土層、褐色～暗灰黄色中砂混シルト

池内4 b層：弥生時代中期～平安時代（前半）、灰褐色シルト混り砂

池内5層：弥生時代前期、黒褐色シルト～シルト質砂

池内6層：弥生時代前期、河川氾濫堆積層、褐色～黄灰色粘土～シルト

池内7層：弥生時代前期、古土壌、河川氾濫堆積層、作土層、黒褐色砂混粘質シルト

池内7'層：弥生時代前期、作土層、暗灰色砂混りシルト

池内8層：弥生時代前期、河川氾濫堆積層、褐灰色粘土質シルト～砂礫

池内9層：縄文時代後期、古土壌、河川氾濫堆積層、黒褐色砂礫混粘質シルト

池内11 a層：縄文時代中期、古土壌、河川氾濫堆積層、黒灰色粘土質シルトの暗色帯構成層

池内11 b層：縄文時代中期、河川氾濫堆積層、緑灰色シルト～粘土

池内11 c層：縄文時代早期（後半）～中期、古土壌、沼沢湿地堆積層、黒褐色砂質シルト、火山灰層

池内11 d層：（縄文時代草創期～早期）、河川氾濫堆積層、灰色・緑灰色シルト～粘土

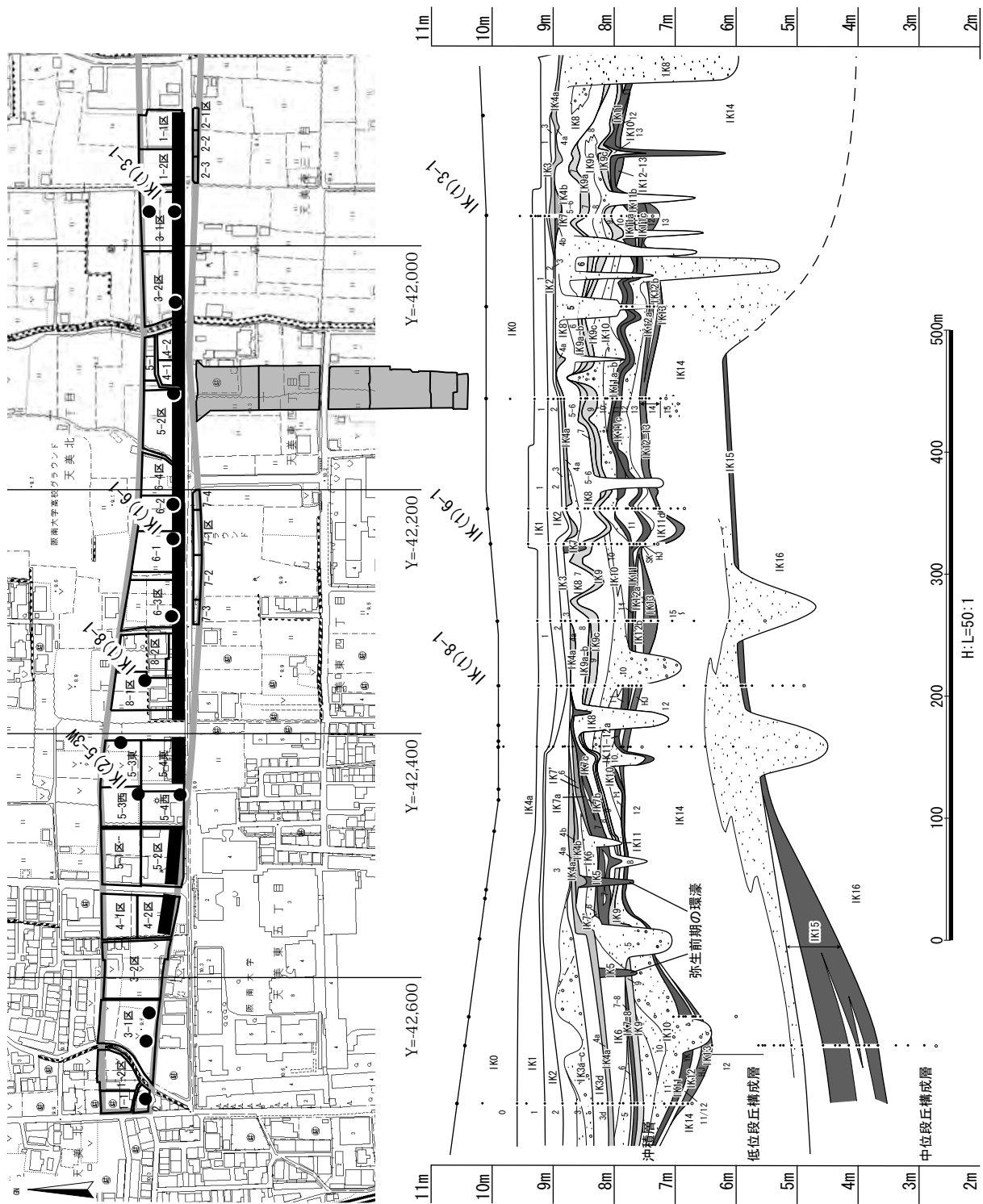


図 14 大和川線調査区の地質断面図 (『池内遺跡』図 545 をもとに改変)

池内 12 層：後期旧石器時代後半～縄文時代草創期、晩氷期、暗灰色粘土質シルト

それによって、東西長 1 km に及ぶ調査範囲を基本層序図として図示、層と各区遺構面の対応を表にまとめてある（センター 2010 図 545、表 13）。

その図をもとに、今回 09 - 2 調査区、Y 座標値を書き加えた（図 14）。位置的に今回の調査区に最も近いのは、4 - 1・4 - 2 区、5 - 1・5 - 2 区となる。また、今回の 09 - 2・09 - 3 調査では、確認調査結果に基づいて、調査深度は主に T.P.9.2 m～12.0 m 間で行われた。

第 1 節で述べた本報告書でを使用した基本層序と、この池内 05 - 1 - 4・5 区の基本層序を土質や土色、堆積関係から対応させると以下のようなになる。

池内第 1 層：現代耕作土、上に盛土が被る。＝耕土層（本報告 0 層）

池内第 2 層：灰オリーブ色～にぶい黄色シルト混細砂、層厚 0.15～0.21 m＝床土層（本報告 1 層）

池内第 3 層：灰オリーブ色～灰黄褐色中砂混シルト、層厚 0.01～0.10 m、第 1 面、鋤溝群

池内第 4 a 層：褐色シルト～暗灰黄色中砂混シルト、層厚 0.02～0.10 m、第 2 面、鋤溝群＝本報告 2 層

池内第 4 b 層：褐色シルト、にぶい黄橙色砂質シルト、層厚 0.01～0.08 m、第 3 面、南北溝、西側建物群（掘立柱建物 6 棟、塀 2 条、土坑）＝本報告 2 層

池内第 5 層：黒褐色細砂混シルト・褐色粘土・灰オリーブ色シルト混中砂～細砂、第 4 面、掘立柱建物、溝、土坑＝本報告 3 層か

池内第 6 層：黄灰色粘質シルト、暗灰黄色砂礫、灰黄色シルト、オリーブ黒色粘土、明褐色粘土、第 5・6 層合わせて層厚 0.23～0.80 m＝本報告 4 層

池内第 7 層：黒褐色シルト質粘土、層厚 0.05～0.30 m＝5 層か

池内第 8 層：灰褐色粘質シルト～粘土、層厚 0.05 m

池内第 9 層：褐灰色砂礫混粘質シルト、層厚 0.10 m

池内第 10 層：暗灰黄色砂礫～粗砂、灰褐色シルト、暗灰黄色シルト～粘土、層厚 0.30～0.80 m、第 5 面

池内第 11 層：黒褐色シルト質粘土、暗オリーブ褐色細砂混シルト、暗色帯、層厚 0.15～0.30 m＝本報告の落込みなどで見られた暗色帯

池内 05 - 1・2、08 - 1 調査区と池内 09 - 2、09 - 3 調査区の層序、遺構面との対応関係を表 1 に示した。

表 1 各調査区遺構面・層序対応表 (『池内遺跡』2010 表 13 をもとに作成)

遺構面 / 層名	地層の性格	05-1調査								05-2調査				08-1調査				09-2調査				09-3調査			
		8区	6・7区	4・5区	3区	1・2区	3区	4区	5区	1・2区	3区	1区	2区	3区	1・2区	9区	1・2・3・6区	7区	15区	4・5・6区	10・11区	12・13・14区			
池内第0層	現代盛土層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	第0層	0層	0層	0層	0層	0層	0層	0層	0層			
池内第1層	現代耕作土層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	第1層	0層	0層	0層	0層	0層	0層	0層	0層			
池内第2層		第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	第2層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層	1層			
池内第1面		第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第3a層	中世～近世作土層			第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	第3a層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第3b層				第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	第3b層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第3c層	中世水成層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	第3層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第2面				第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	第1面	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第3d層	中世作土層			第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	第3d層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第3面		第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	第2面	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第4a層	平安～中世耕土・土壌層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	第4a層	2層	2層	2層	2層	2層	2層	2層	2層			
池内第4面		—	—	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	第3面	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第4b層	弥生中期～平安土壌層	—	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	第4b層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第4c層	弥生前期溝内水成層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第5面		第3面	第3面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	第4面	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第5層	弥生前期水成層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	第5層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第6面		第4面	第4面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第6層	弥生前期作土層	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第7面		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第7a層	縄文or弥生前期土壌層																								
池内第7b層	縄文or弥生前期水成層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	第7層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第7c層	縄文or弥生前期土壌層																								
池内第8面		第5面	第5面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第8層	縄文後期～水成層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	第8層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第9面		—	第4面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第9a層	縄文後期～土壌層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第10面		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第9b層	縄文後期～水成層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第9c層	縄文後期土壌層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	第9層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第10層	水成層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	第10層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第11面		—	第5面	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第11a層	縄文中期土壌層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第12面		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
池内第11b層	縄文中期水成層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	第11層	—	—	—	—	—	—	—	—			

# 第3章 府道その1 (09-2-1・2区)・用水路部 (09-3-9区)の調査成果

## 第1節 遺構

### 第1項 調査の概要

都市計画道路大和川線（以下、大和川線）に接続する区域、今回報告する最北部にあたる。南北は  $X = -156,015 \sim -156,115$  の約 100 m の長さ、東西は約 35 m の幅であり、大和川線に取り付く部分のみラップ状に広がり約 50 m 幅となる。中心より西寄り 3 分の 1 程度の所に農業用水路が南北に通る、途中でやや屈曲しながらも調査区を貫通する（図 15）。この用水路は調査時にも使用されていたため、これを保護するため、当初は用水路の両脇を 1 m から 2.4 m ほど残して調査を行い（09-2-1・2区、3112 m<sup>2</sup>）、用水路が機能しなくなってから本体工事にあわせてこの部分の追加調査を行った（09-3-9区、170 m<sup>2</sup>）。

用水路より西の区域は最近まで畑として利用されていたため耕土・床土を除去するとすぐに遺構面であったが、用水路より東の区域は、北から約 1/3 は駐車場として利用されていたため 1 m ほど盛土されていた。舗装及び盛土を除去したところ大きな攪乱を受けていた。また、南端部分でも接する市道に高さをあわせた盛土がなされ、これを除去するとコンクリートの建物基礎柱や水道管などの埋設物による攪乱を受けていた。

現地表面は北部の盛土された箇所は T.P.10.6 m で、北部東側で 1.2 m、南中央部で 0.4 m ある盛土の掘削を行った。盛土を除去した耕土層上面は逆に北が低くなり T.P.9.4 ~ 9.5 m 前後で、南に進むに従い約 0.1 ~ 0.2 m 高くなり、T.P.9.6 ~ 9.7 m である。その後全体に約 0.2 m の厚さで機械掘削を行い、耕土（0層）・床土（1層）を除去した（第2章参照）。T.P.9.1 ~ 9.3 m で北東から南西にかけて緩やかに高くなる地形をとる。

以降の人力掘削調査は、まず、床土下層のマンガンや細かい遺物を含む褐灰色シルト（2層）の上面を精査して遺構を検出、調査した。2層は一定量の古代～中世の遺物を包含していた。さらにこの層を除去し地山面（4層）で遺構を検出、調査した。2層は堆積の厚いところでは、シルト質から粘質土の上層と、砂質がやや強くなる下層との二つの層に分層が可能である。つまり、2層は北から中央にかけて堆積し、 $X = -156,040 \sim -156,080$  では堆積が厚く二つに分層可能であるが、 $X = -156,080$  から南にいくと2層そのものが堆積しなくなる。府道その2調査区で存在する2層と4層の間に堆積する砂層（3層）はこの区域ではほとんどみられなかった。 $X = -156,100$  周辺から南は4層の地山面が存在しなくなり、灰褐色砂質土に変わる。谷状に落ち込んでいく急激な地形の変化があると考えられる。

遺構面は機械掘削途中で1層の床土上面でも幅 10 cm 程度の鋤溝状のものがみられた。包含する遺物から近世と考えられる。調査対象では、前述のように2層上面と4層上面に遺構が認められた。遺構は近世、10～11世紀のもの、9世紀後半から10世紀のもの、と大きくは3時期に分けられる。しかし、2層上面で検出した遺構が必ず新しい時期を示すと限らず、2層上面でも複数時期の遺構が混在する。つまり、2層の堆積が薄く、あるいはない箇所では4層上面に1面で現れる遺構面が、2層の存在す

る箇所では2面で現れるといえる。調査も厳密に層の分別ができず行ったところもあり、航空測量も最終遺構面で1回のみ行った。よって、この報告書でも1面の遺構面として記述し、各遺構の記述で時期を判明する範囲内で述べる。また、遺構の変遷については第8章第2節の総括で分類し、整理を行う。

## 第2項 遺構

### 第1面(図15～39、図版1～12)

すべて1面の遺構面と捉えた。09-2-1・2区と09-3-9区を合わせた平面図を図15に、北半の09-2-1区とそれに続く09-3-9区を図16に、南半の09-2-2区とそれに続く09-3-9区を図17に示した。

区域内は遺構が密に存在するが、その分布には偏りがある。北側の用水路より東の区域は45溝などの溝を除いては、遺構は希薄である。ただし、ここは大きく攪乱されており遺構面も削平されている可能性が高い。従って、元来はもっと遺構があったと思われる。北西部には東西方向の溝が密集する。それより南側、斜行する45溝以南では、南北方向の長い溝が数条と柱穴、土坑が多数みられる。調査区のちょうど中央、X=-156,065付近から南では南北の規模の大きな溝の上を東西溝が切る。また、掘方の規模が大きい掘立柱建物3棟の他、多数の柱穴や土坑がみられる。この区域の遺構密度が最も高い。さらに南下すると、大規模な460溝以外は顕著な遺構はなくなり、遺構数も急激に減少する。これは、このあたりから谷状に地形が落ち込んでいくことと関連するだろう。

第1面には複数時期の遺構が混在するが各遺構の記述で時期を検討したうえで、後の第7章で総括、整理することとする。

・溝 溝は大きくは、調査区の北西部にかたまってみられる東西方向の溝群とそれと切り合い関係をもちながら中央から南に走る南北方向の溝群、北・中央・南にそれぞれみられるやや大形の東西あるいは斜めの溝とに分けられる。北西部の溝からみていく。

#### 121・117・115・113・112・1・2・3・38・125・10溝(図18、図版1)

調査区北西部には長さ15～20m、幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2m程度の溝が密集してみられる。

溝は東西方向に延び、西端は調査区外に延びていく。東端はY=-42,120付近まで延びるようだが大きな攪乱に遮られて定かでない。現座標の東西に沿う真方位のものもあれば、西南から東北にやや斜行気味のものもある。溝と溝との間隔も約0.3mとほぼ一定である。東西溝群は統一した規模・方向性をもち規格的といえる。

この東西溝のなかでも2層上面と4層上面から検出されるものがあり、溝同士が切り合い関係をもつ。ただし、切り合い関係は真方位の溝とやや斜めになる溝でも明確には分けられない。また、南北方向の長い75溝、36溝がこれらの溝群と交差するが、東西溝に切られることから東西溝群の方が新しいものといえるが、そうでないものがみられる。

断面形は皿形もしくは逆台形をなし、埋土は単層もしくは2層で、上層にあたる1層の褐灰色もしくは黄灰色粘質土が堆積する。この溝群の性格は、鋤溝や畝溝とするには深さや幅もあり、形状がしっかりしている。しかし、建物の柱穴・井戸などは付近から検出されず、集落の区画溝等ではなくやはり何らかの耕作に伴う溝と考えられる。

遺物は細片の土器を含むか何もないものがほとんどであり、決定しがたい。切り合い関係の溝の時期差も不明である。ただ、この溝のうちの一つ、23溝から9世紀後半から10世紀の土師器が出土していることから、この溝群の時期の一端を示すものと考えられる。

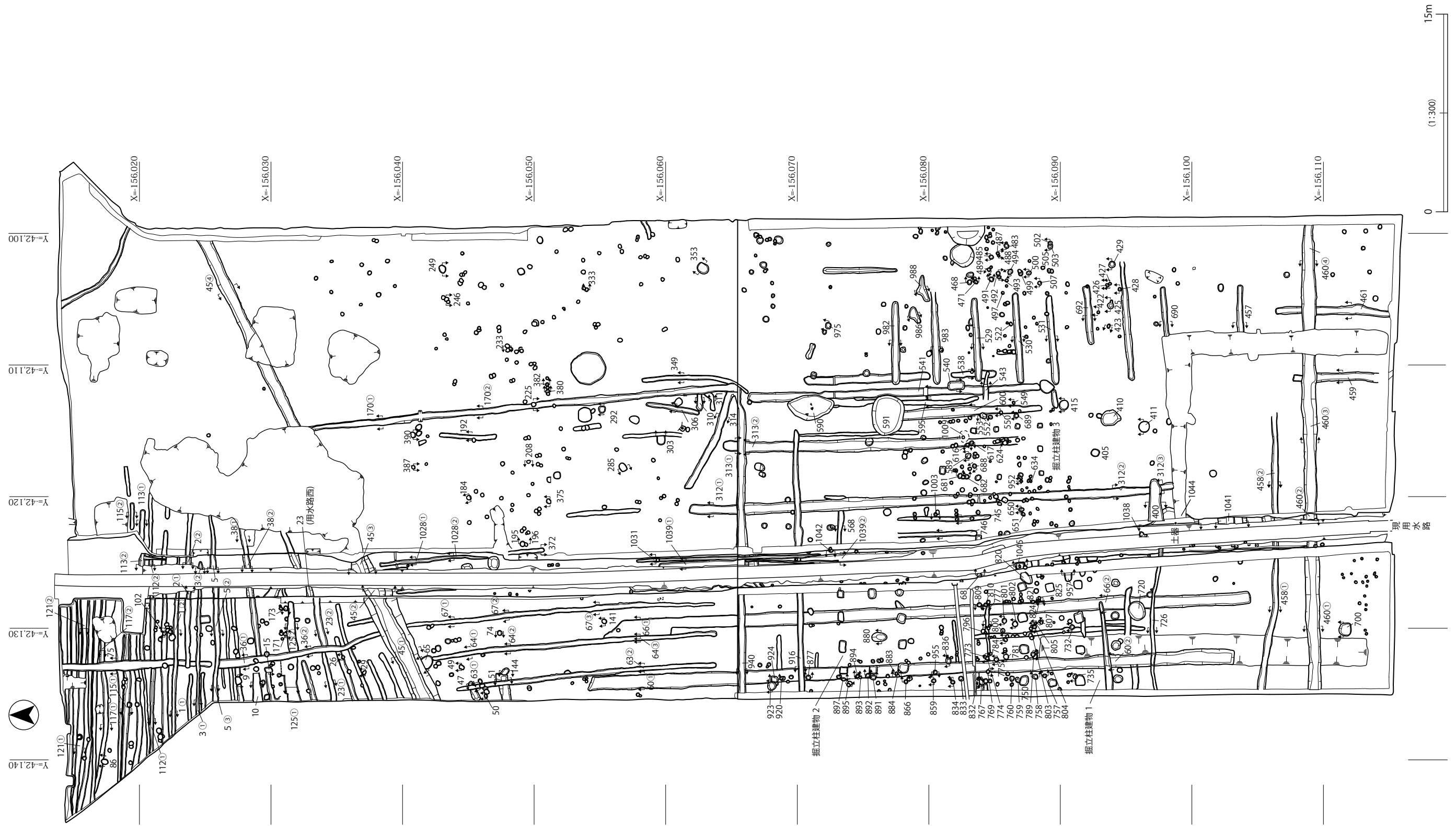


图15 09-2区第1面平面图





图16 北半 (09-2-1区) 第1面平面图

Y=42.140

Y=42.130

Y=42.120

Y=42.110

Y=42.100

X=156.070

X=156.080

X=156.090

X=156.100

X=156.110



图17 南半 (09-2-2区) 第1面平面图

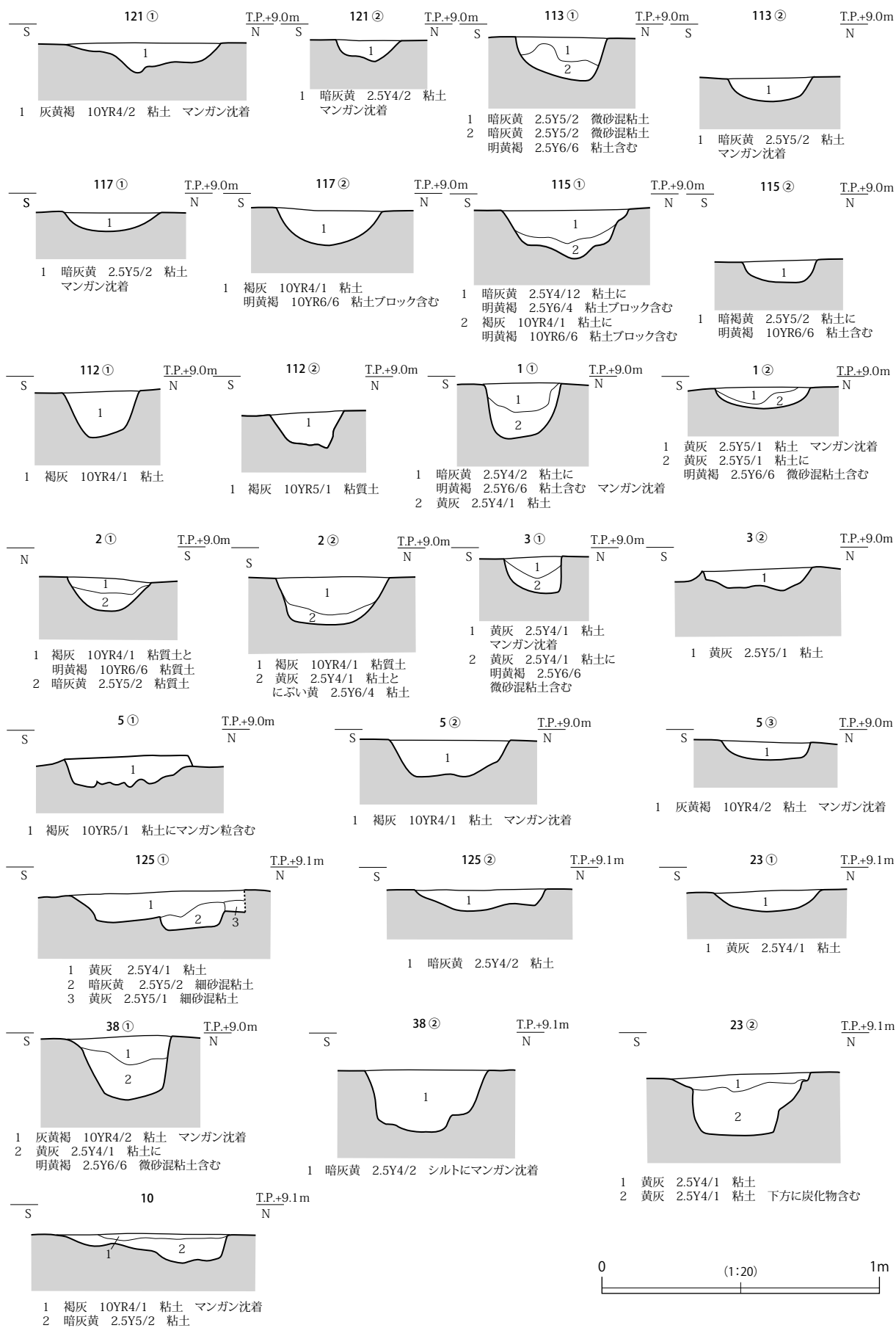
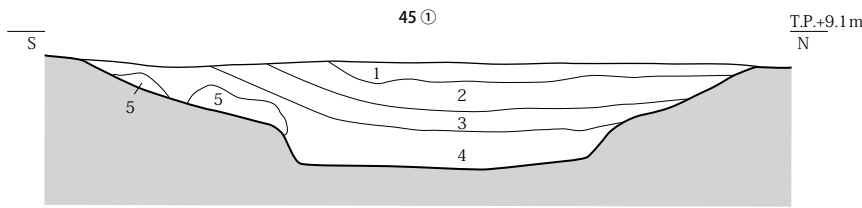
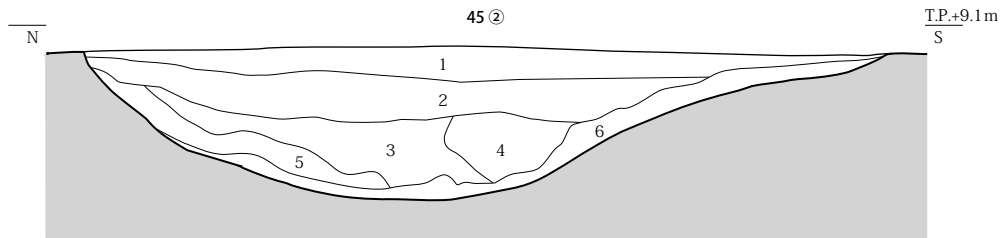


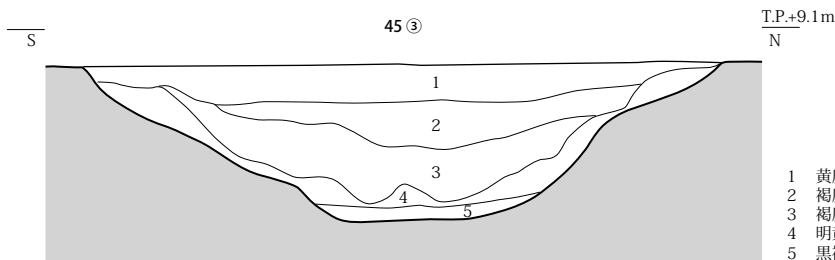
図 18 09 - 2 区 溝断面図 (1)



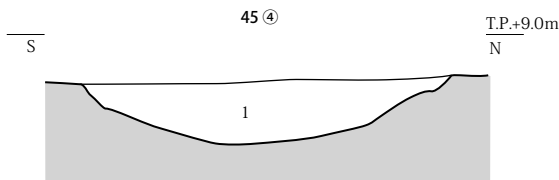
- 1 黄灰 2.5Y5/1 粘土
- 2 暗灰黄 2.5Y5/2 粘土 マンガン沈着 植物根幹をわずかに含む
- 3 暗灰黄 2.5Y4/2 粘土 マンガン沈着 炭化物・植物根幹をわずかに含む
- 4 暗灰黄 2.5Y4/2 粘土 細砂～粗砂 植物根幹含む
- 5 暗灰黄 2.5Y4/1 粘土に明黄褐 10YR6/6 粘土ブロック含む



- 1 黄灰 2.5Y6/1 粘土 マンガンわずかに含む
- 2 褐灰 10YR4/1 粘土 マンガン含む
- 3 褐灰 10YR5/1 粘土 暗青灰 5BG4/1 粘土ブロック含む
- 4 にぶい黄褐 10YR5/3 粘質土と明黄褐 2.5Y6/6 粘土
- 5 灰黄褐 10YR5/2 粘質土 マンガンわずかに含む
- 6 上層部 にぶい黄 2.5Y6/4 粘土 マンガン含む 下層部 灰黄褐 10YR4/2 粘土



- 1 黄灰 2.5Y5/1 粘質土 マンガン含む
- 2 褐灰 10YR4/1 粘土 マンガン含む
- 3 褐灰 10YR5/1 粘土 粘質土 マンガンわずかに含む
- 4 明黄褐 10YR6/6 粘土
- 5 黒褐 10YR3/1 粗砂混粘土



- 1 黄灰 2.5Y5/1 粘土 マンガン沈着

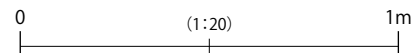


図 19 09 - 2 区 45 溝断面図

### 5 溝 (図 18、図版 4 - 6)

上記の溝群の一つで、ラッパ状に開いた調査区の開口部がすばまって長方形になる変化点周辺に位置する溝である。調査区西端から  $Y = -42,120$  までほぼ水平に延びる。幅 0.3 ~ 0.45 m、深さ 0.1 m をはかる。断面は皿形か逆台形を呈する。

### 23 溝 (図 18・21、図版 13 - 1・2)

北西部の溝群の一つであり、溝群の中では最南部の  $X = -156,035$  周辺、溝が疎らになる箇所で検出した。西から東に、真東西よりやや北にふりながら東へ延びる溝である。67 溝に切られる。2 層上面の暗灰黄色シルト層で検出した。

規模は長さ 13 m、幅 0.4 ~ 0.5 m、底部幅 0.3 m、深さ 0.3 m をはかる。断面形は逆台形に掘りすぼめ、2 層から 3 層の埋土が堆積する。

用水路の西際で、この溝の中層から完形の土師器杯が出土した (図 21、図版 13 - 1・2)。土師器杯は内面が上向きの状態で、やや南に傾いた状態で検出した。この他に遺物はみつかっていない。この

土師器は9世紀後半から10世紀の杯Aと考えられ、この溝の時期もここに一端を求められる。23溝から時期を決定しうる遺物が出土したことで、北西部の溝群もおおよそ9世紀後半から10世紀の遺構であること、67溝はそれより新しくなることが判明した。

#### 45溝 (図19、図版4-7)

調査区西端のX=-156,040付近から斜め45°の角度で西南から東北へと、調査区東端X=-156,025付近へと延びていく大形の溝である。東西端とも調査区外にさらに続くと予想される。

調査区内の検出全長は39mである。最大幅2.0m、最大深さ0.4m、最小幅1.0m、最小深さ0.2mをはかる。断面形は碗形もしくは逆台形をなし、ほぼ水平に4層から5層が堆積する。堆積状況から長期間存続し、比較的緩やかに堆積したことがうかがえる。2層上面から検出される遺構であり、埋土も2層のマンガンを含んだ黄灰色や褐灰色粘質土である。

調査区の用水路より西側で南北溝36・67を切る。また、調査区の用水路より東側で170溝と交わるが、170溝との切り合いは攪乱により不明である。出土遺物からの判断によると、45溝のほうがやや古い可能性がある。

土師器、須恵器、瓦などの遺物が比較的まとまって出土した(図40)。ただし、完形になるような遺物は認められず、埋積状況と同じく一挙に遺物を放棄して埋めたのではないことが遺物出土状況からもうかがえそうである。これらの遺物から45溝は9世紀後葉から10世紀初頭の遺構と考えられる。

規模的に匹敵する溝は460溝など他にもある。しかし、45溝のみが他の東西溝と方向が異なり、真方位に対して約45度となる。09-2区で長軸方向がこれほど真方位に対して直線的に傾く遺構は他にないことから、45溝は人為的遺構ではない可能性も考えた。しかし、自然流路とするには余りにも直線的で、断面形からも掘削状況を示すと感じられるため開削溝と判断した。

他の大形溝(940溝、916溝、458溝、460溝)などとは用途を異にしたのか。ただ、他の大形溝とも時期的に大きなずれはなく、規模も大きいことから機能的には区画溝と考える。

#### 75・36溝 (図20、図版4-5)、67溝 (図20、図版4-4)

09-2-1調査区の用水路より西側を、北から南に走る南北の大溝である。75溝と36溝は途切れているが、本来は1本の溝であったと考えて差し支えないだろう。また、67溝も45溝を挟むため別の遺構番号を与えたが、36溝と同一の溝の可能性が高い。

75溝は幅0.6m、深さ0.1mを、36溝も幅0.6m、深さ0.1mをはかる。67溝は幅0.3~0.4m、深さ0.05~0.1mとやや小さく浅くなる。いずれも断面形は浅い皿形もしくは逆台形を呈する。

北西部の東西溝群の多くを切る形で走るが、5溝や3溝など一部の東西溝が75溝を切る。また、やや規模が大きく斜行する45溝には切られる。機能的には規模や形状の類似からは北西部の溝群と同じ耕作溝とも考えられる。67溝には63溝や64溝が併行して走る。しかし、一方で170溝とも併行関係にあり、これらの溝は940溝、916溝などの東西溝と相関して区画的な溝と考えられる。

出土遺物はないが、45溝や23溝との切り合い関係から、23溝よりは新しく45溝より古い先後関係がみられる。つまり、10世紀初め頃の遺構となり、切り合いをもつ遺構間にも大きな時期差はないことになる。

#### 63・64溝 (図20、図版4-3)

上記の67溝より西に位置し、約2m間隔で並行して走る南北溝である。

63溝は幅0.3m、深さ0.05mとやや小さく、64溝は幅0.4m、深さ0.1~0.15mをはかり、67

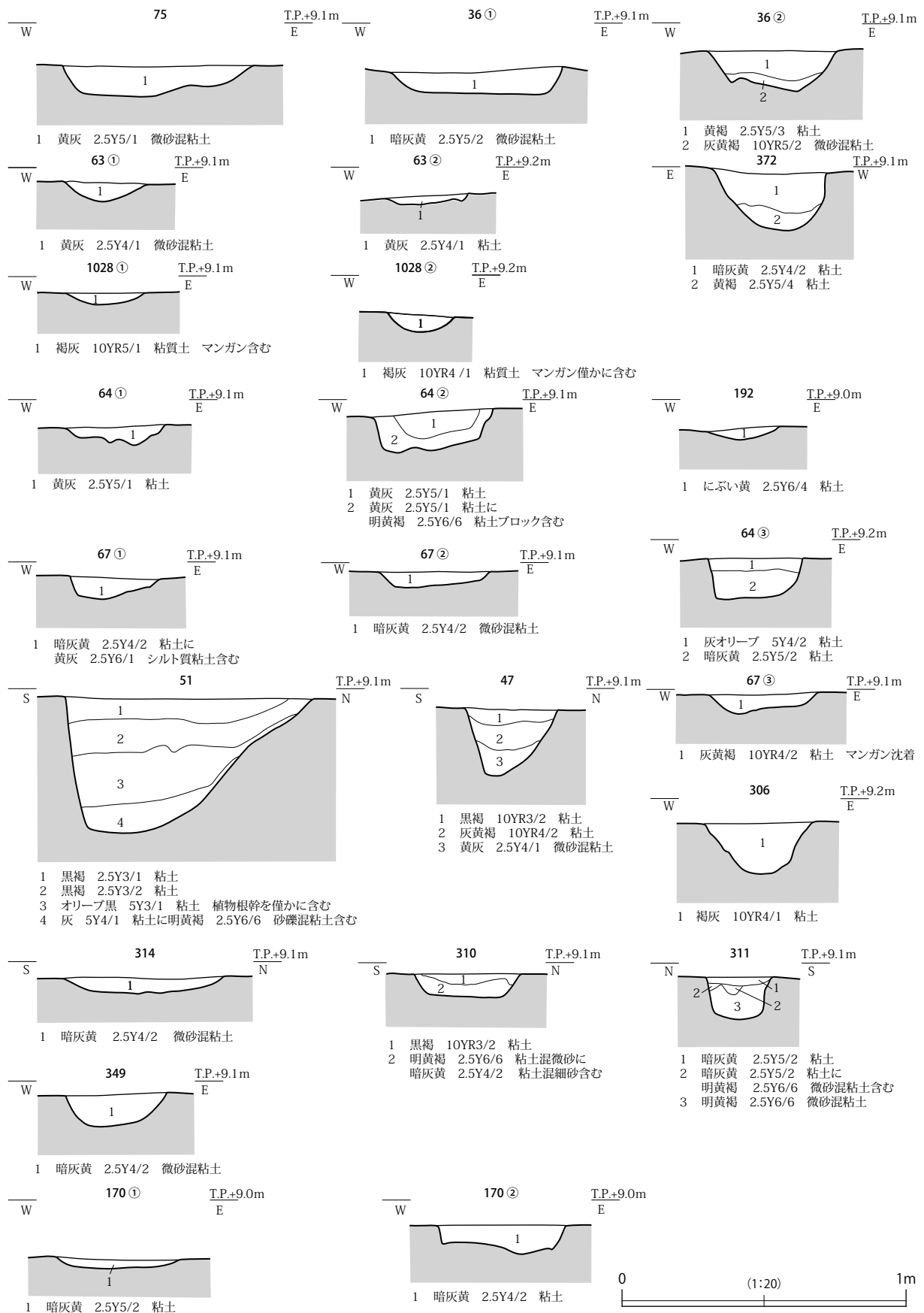


図 20 09 - 2 区 溝断面図 (2)

溝と規模をほぼ同じくする。63 溝・64 溝は南端 10 m ほどを、これも規模や形状が互いによく似た方形の大規模な溝、66 溝・60 溝と接する。64 溝の東端が 66 溝の西端と、63 溝の西端が 60 溝の東端と接する。また、両溝が途切れてから約 1、2 m 南下すると南北溝 940 溝が現れる。溝の用途は 75・36・67 溝同様不明である。

64 溝からは 9 世紀の須恵器が出土する。63 溝も同時期の可能性がある。

#### **372・1028 溝** (図 20)・**1039 溝** (図 22、図版 13 - 4)

いずれも幅 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.1 m 程度の南北溝である。調査区の用水路より東にみられ、長いものは 20 m を超える。

372 溝と 1028 溝は検出時期が異なったため違う遺構番号を与えた。また、途切れているが、位置からは同一の溝となる可能性がある。1039 溝は 372 溝よりやや西に位置する溝である。

372 溝は幅 0.4 m、深さ 0.2 m をはかる。1028 溝は幅 0.2 m、深さ 0.05 m をはかる。1039 溝は幅 0.4 ~ 0.6 m、深さ 0.1 m をはかる。いずれも断面形は皿形を呈する。

溝と溝の間隔が約 2 m と一定であり、これは 67 溝・63 溝・64 溝の間隔と同一である。また、67 溝・63 溝・64 溝とも併行であるので、これらよりやや南下した地点から始まった溝で、機能としては同様の溝と考えられる。

#### **192・51・47・306・314・310・311・349 溝** (図 20)

09 - 2 - 1 区の中央部、170 溝の付近及び調査区西端で検出した溝である。

192 溝は 170 溝の西脇で検出した。長さ 5.0 m、幅 0.2 m、深さ 0.05 m をはかる。本来はもっと長い溝だった可能性がある。断面形は浅い皿形を呈する。

306 溝は 170 溝の西脇に位置し、192 溝より 10 m ほど南下した地点で検出した。長さ 0.4 m、幅 0.4 m、深さ 0.2 m をはかる。192 溝同様、本来はもっと長い溝だった可能性がある。断面形は U 字形を呈する。

314 溝は 170 溝から支線のように西に伸びる溝である。幅 0.6 m、深さ 0.05 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。

310 溝は 170 溝南端から支線のように西北に伸びる溝である。170 溝と 314 溝の間に位置する。幅 0.4 m、深さ 0.1 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。

311 溝は 170 溝と 310 溝の間を真西に伸びる短い溝である。幅 0.2 m、深さ 0.15 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。

349 溝は 170 溝から支線のように北北東から伸びる溝である。幅 0.35 m、深さ 0.1 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

以上の 170 溝付近の小溝数条は、170 溝との切り合い関係を示すものがあるため、いずれも同時期存在だったとはいえない。

51 溝は調査区の西端に位置し、63 溝によって切られる。溝としたが大形土坑ともいえる。幅 0.9 m、深さ 0.5 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。オリーブ黒色から黒褐色粘土が 4 層にわたって水平堆積する。

47 溝は調査区の西端に位置し、51 溝の北で検出した。幅 0.3 m、深さ 0.25 m をはかる。断面形は U 字形を呈する。

#### **170 溝** (図 20・21、図版 2・3)

170 溝は Y = - 42,115 周辺に位置し、ほぼまっすぐに伸びる南北長約 33 m の長い溝である。溝の

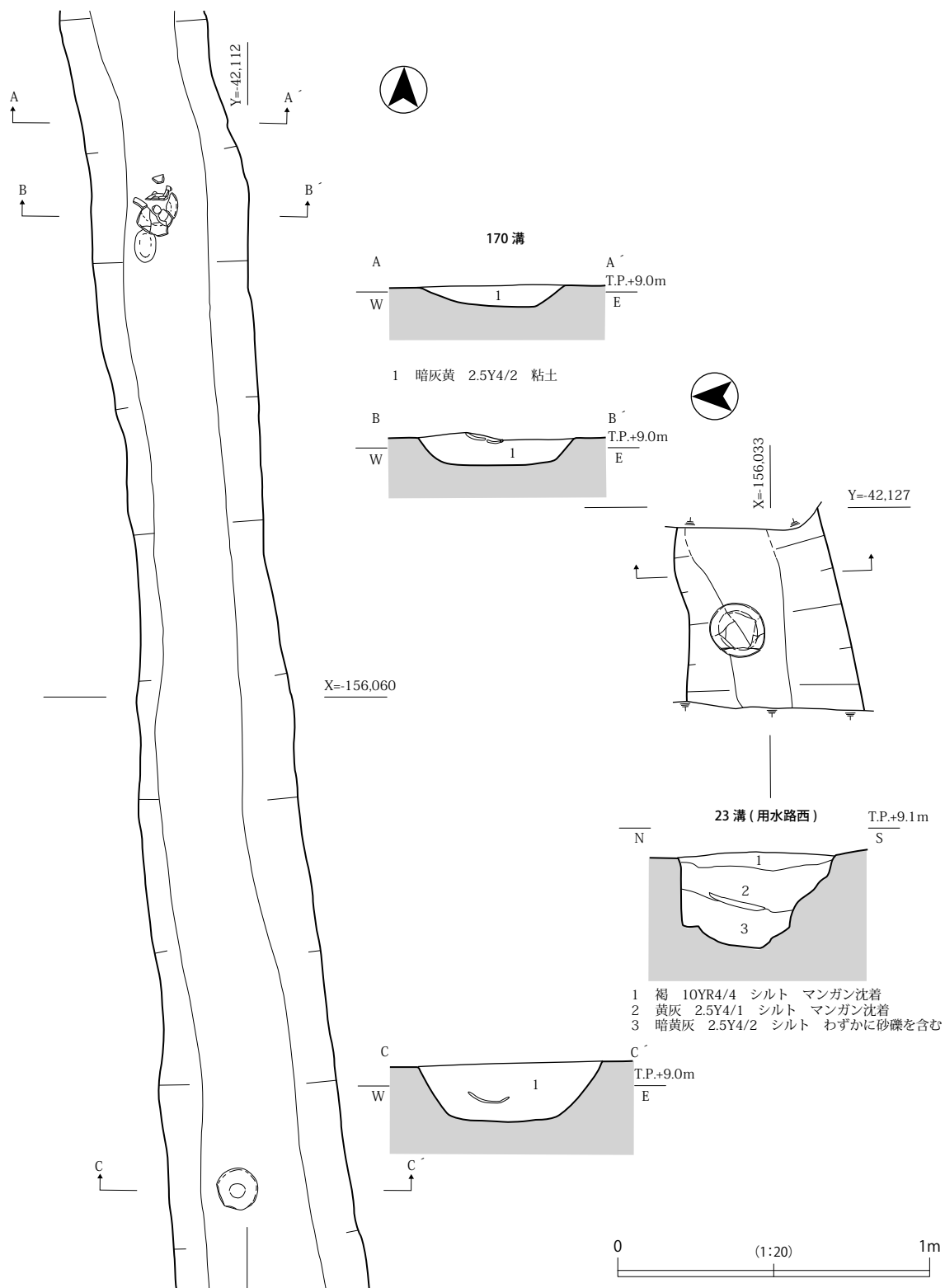


図 21 170 溝・23 溝 遺物出土状況図

北の始まりは 45 溝に接する。調査区の中央付近で消滅もしくは西に屈曲する。170 溝の南端からわずかに離れて 541 溝が存在する。170 溝は 09-2-1 区で、541 溝は 09-2-2 区と異なる調査時期に検出し遺構番号を与えたからで、同一の溝となる可能性も高いが、連続していることが確実ではないので、別番号のままとした。

1028 溝・1039 溝から 10~12 m 離れているが、間にある短い溝、192 溝、745 溝、746 溝など



も削平を受けていなければ同様な長さの溝だったとも考えられる。63 溝、64 溝、1028 溝、1039 溝等は 2 m 間隔で並行するが、間に上記の溝が並ぶとすると、規模を同じくすることや併行関係から、170 溝とも何らかの関係性をもつ同時期の遺構と考えられる。

170 溝の断面形は皿形で、幅 0.5 ～ 0.6 m、深さ約 0.1 ～ 0.2 m を呈する。埋土は単一で暗灰黄色粘土である。

溝の中ほど、X = - 156,059 及び X = - 156,061 付近で、土師器杯 A や磨石とみられる石製品が埋土の上層もしくは中層から出土した（図 21、図版 2、3）。土師器の形態から 170 溝は 9 世紀後葉から 10 世紀初頭の遺構と考える。

#### **60 溝**（図 22、図版 4-1、2）

09-2-1 区の中ほどから南半の 09-2-2 区で検出した南北の溝である。

長さ 49 m、幅 0.9 ～ 1.1 m、深さは浅いところで 0.1 m、深いところで 0.3 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。溝の両端が直線的で、長方形の形状をなし、溝よりは溝状の土坑と呼んだほうが正確かもしれない。調査区の西端で検出したが、3 m 東には同規模、同形状の 66 溝が併行して走り、2 つの溝は相関関係があると言える。

掘立柱建物 1、掘立柱建物 2、940 溝などの多くの遺構に切られることから、これらより古い 9 世紀の遺構と考えられる。

#### **66 溝**（図 22、図版 4-8）

60 溝の東に位置する南北溝である。長さ 50 m、幅 1.0 ～ 1.1 m、深さは浅いところで 0.1 m、深いところで 0.2 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は 2 ～ 4 層が水平に堆積する。

60 溝と対になる溝であり、時期的にも同一の 9 世紀と考える。

#### **312・313 溝**（図 22）

調査区の中央から南にかけて走る南北溝である。312 溝は長さ 37 m、幅 0.5 ～ 0.7 m、深さは浅いところで 0.15 m、深いところで 0.35 m をはかる。断面形は逆台形もしくは U 字形を呈する。313 溝は長さ 23 m、幅 0.8 ～ 0.9 m、深さは 0.1 m ～ 0.2 m をはかる。断面形は皿形を呈する。

312 溝と 313 溝は、313 溝がやや短いものの規模・形状が似、約 4 m 間隔で併行であることから相関性のある溝と考えられる。東の 541 溝との間隔は 3 m で、規模も 541 溝がやや小さい。また、西の 66 溝と 312 溝の間隔は 8 m で、規模は 312 溝が若干小さくなる。312 溝と 66 溝の間は現用水路にあたるためその位置の遺構は確認できないが、ほぼ 4 m 間隔で南北溝が走っていた可能性が高い。

312 溝・313 溝の時期は遺物によって決定できないが、60 溝・66 溝との関連性から考えると、9 世紀代であろうか。

#### **940・916 溝**（図 23）

調査区の中央にみられる東西溝である。南北の 60 溝・66 溝・312 溝・313 溝より上層にある。

940 溝は長さ 23 m、幅 0.5 m、深さ 0.1 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。940 溝は東に延びてゆき、170 溝と交差して消滅する。

916 溝は長さ 20 m、幅 0.4 m、深さ 0.1 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。両溝の間隔は 4 m で、ほぼ併行である。平安時代前半の平瓦が出土している。

出土遺物から 940 溝は 9 世紀後葉から 10 世紀前半、916 溝は平安時代前期と考えられる。

調査区中央にかたまってみられる柱穴群、その中でも中心となる大形の掘立柱建物 1・2 の北に位置

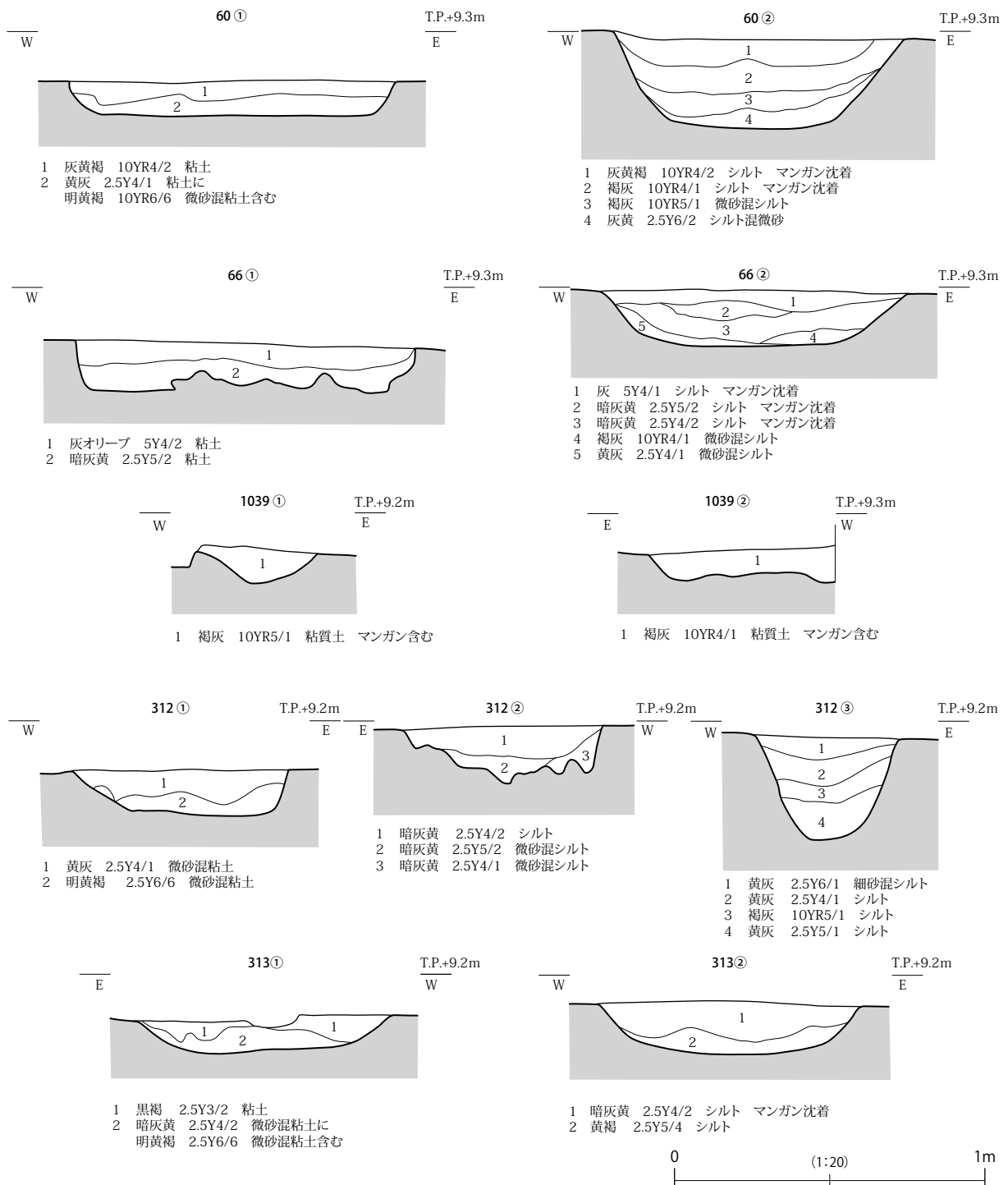


図 22 09 - 2 区 溝断面図 (3)

し、建物の東西柱列と平行に延びる。また、時期的にも合致することから建物群の北限を決定する、区画溝の役割を果たすと考えられる。

**458 溝 (図 23)**

458 溝は調査区の南、掘立柱建物 1 より 10 m 強南下したところに位置する東西溝である。そのさらに南には 460 溝がある。

長さ 20 m、幅 0.4 ~ 0.5 m、深さ 0.2 m をはかる。西から東にやや斜めに走ってきてから、Y = -42,130 地点で曲がり、そこからは東にまっすぐに伸びる。東端は途中で消滅する。断面形は逆台形も

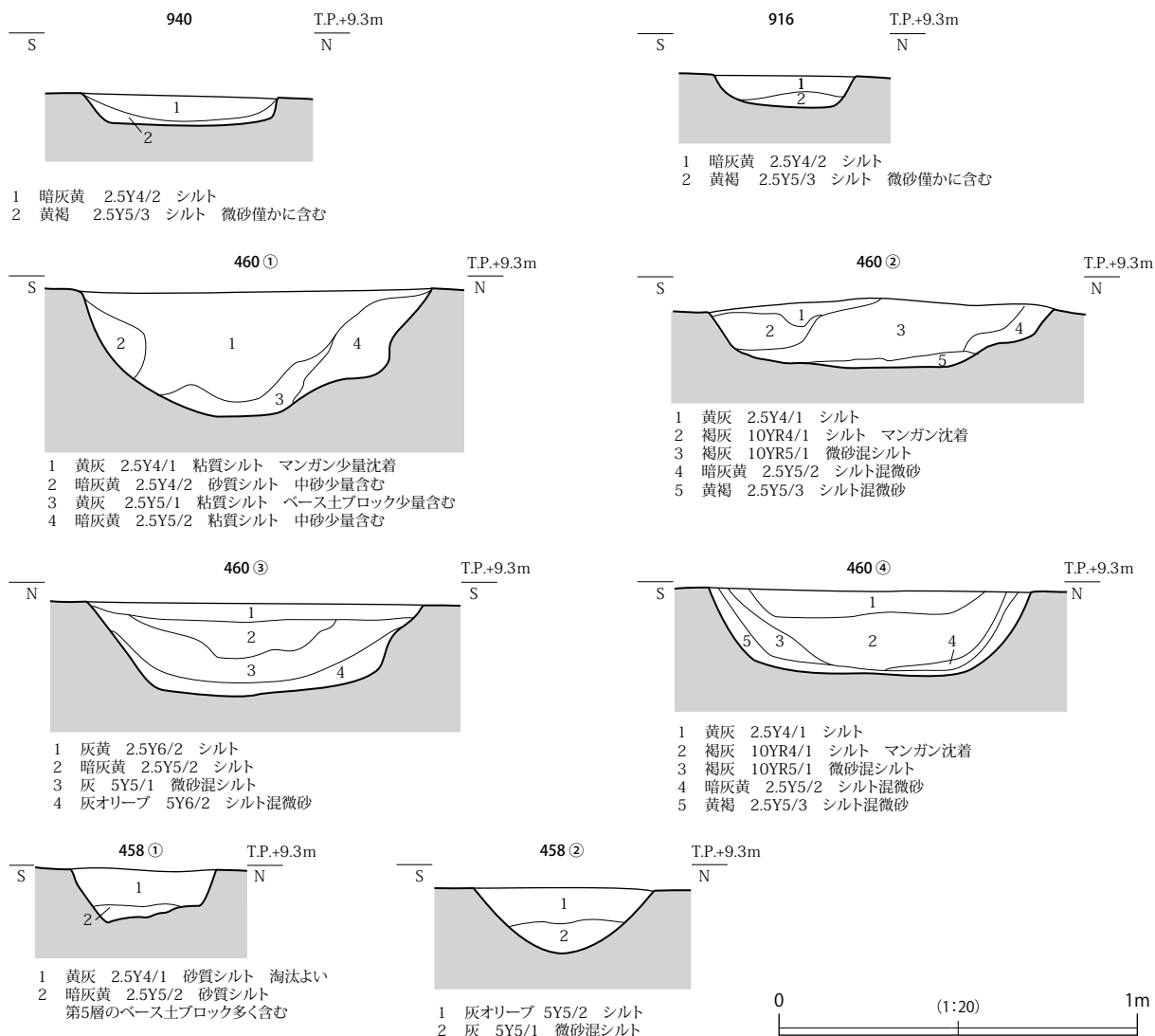


図 23 09 - 2 区 940 溝・916 溝・460 溝・458 溝断面図

しくは浅い皿形を呈する。

直線的ではないものの、916 溝や 940 溝と規模・形状が似ることから、建物群の南限を決定する区画溝と考える。

#### 460 溝 (図 23、図版 12 - 1、2)

460 溝は調査区の最南端に位置する東西溝である。西端、東端とも調査区外よりさらに延長し、ほぼ真方位に延びる。

長さは 35 m 以上で、幅 0.9 ~ 1.0 m、深さ 0.3 m をはかる。断面形は深い碗形もしくは逆台形を呈する。底部が平らなところが多く、人為的な溝であるのが明瞭である。東側の埋土断面はほぼ水平に堆積するが、西側の埋土断面からは、南から北に溝幅がやや拡大したことがうかがえる。

出土遺物から 460 溝は 9 世紀後葉から 10 世紀前半と考えられる。460 溝より南からは人為的な遺構・遺物がほとんどみられなくなることから、458 溝と同様に一連の建物群の南限を規定する溝と考える。458 溝よりも大規模で、長期的に機能した溝と推測する。

#### その他の溝 (図 24)

832 溝と 777 溝は掘立柱建物 1 と掘立柱建物 2 の間を走る規模の小さな東西溝である。832 溝は幅

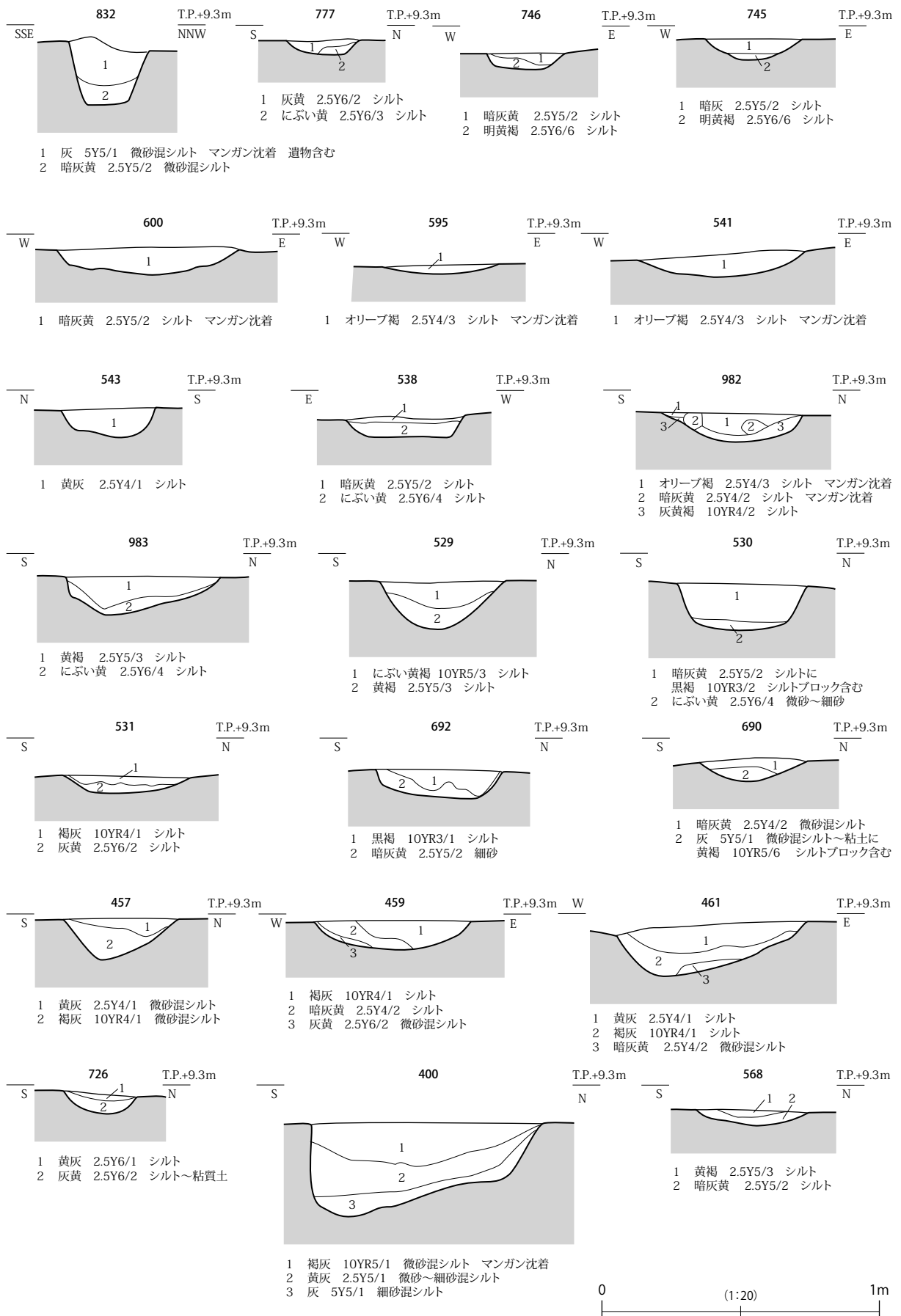


図 24 09-2区 溝断面図(4)

0.25 m、深さ 0.25 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。777 溝は幅 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

746 溝と 745 溝は 312 溝の西に位置する南北溝である。746 溝は幅 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。745 溝は幅 0.35 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

600 溝・595 溝・541 溝・538 溝は 313 溝の東にあり、併行して走る南北溝である。600 溝は幅 0.65 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

595 溝は幅 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

541 溝は幅 0.6 m、深さ 0.1 mで、断面形は浅い皿形を呈する。541 溝は出土遺物から 10 世紀前半の可能性が高い。

538 溝は幅 0.4 m、深さ 0.1 mで、断面形は逆台形を呈する。

543 溝は 541 溝・538 溝を切る短い東西溝である。幅 0.35 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

982 溝・983 溝・529 溝・530 溝・531 溝・692 溝・690 溝・457 溝は 09-2-2 区の東部で検出した東西溝である。いずれも長さは約 6、7 mで両端ともすぼまり途切れるが、実際にはもっと伸びていたと思われる。幅 0.4～0.55 m、深さ 0.15 mをはかる浅い溝が多い。断面形は浅い皿形、U字形、逆台形を呈する。上層からの溝と考える。北の 982 溝から南の 457 溝までが約 2.0～2.5 mのほぼ等間隔で並び、形状もおおむね等間隔で均一であることなどから、耕作溝と推測する。

459 溝と 461 溝は 09-2-2 区の南東端で検出した。460 溝に切られることから、それより古い南北溝である。459 溝は幅 0.55 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。461 溝は幅 0.7 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形は皿形を呈する。

726 溝は 09-2-2 区の西南部、掘立柱建物 1 の南に位置する東西溝である。西端から延びてきて、用水路で途切れて消失する。幅 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。458 溝や 460 溝と併行に延びることからこれらの溝と何らかの関係があると推測する。

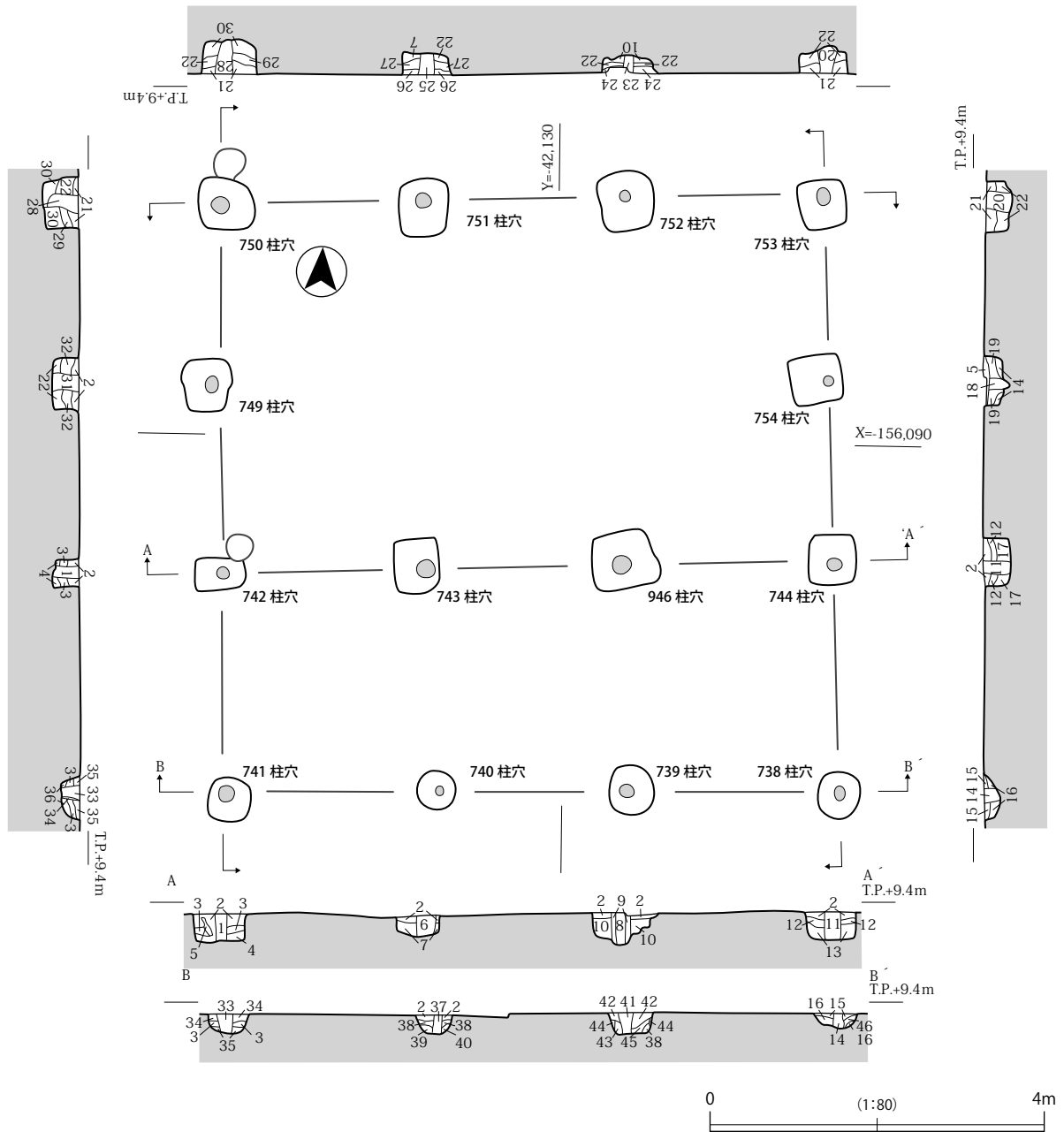
400 溝は幅 0.8 m、深さ 0.35 mをはかる。周辺はややたわんだ地形をとり、1044 落込も検出しているので、溝より土坑とした方が良いかもしれない。断面形は逆台形を呈する。出土遺物から 9 世紀後葉から 10 世紀初頭の溝と考える。

568 溝は 09-2-2 区の用水路より東で検出した。916 溝の南に位置し、これに併行して走る東西溝である。幅 0.4 m、深さ 0.05 mをはかる。

以上、調査区の北半の 09-2-1 区では東西方向だが、東でやや北にふる溝が多い。それが南下すると、中央部では南北方向の溝が出現し、さらに南の 09-2-2 区ではそれを切る東西方向のやや規模の大きな東西溝が出現する。中央の溝と南端の溝に囲まれた範囲に掘立柱建物や多数の柱穴群、井戸、土坑などが存在する。また、掘立柱建物 1・2 の主軸も東西方向であり溝に併行することから、前述のように、これらの東西溝 (940・916・458・460) は建物群の区画的機能を果たす溝と考える。

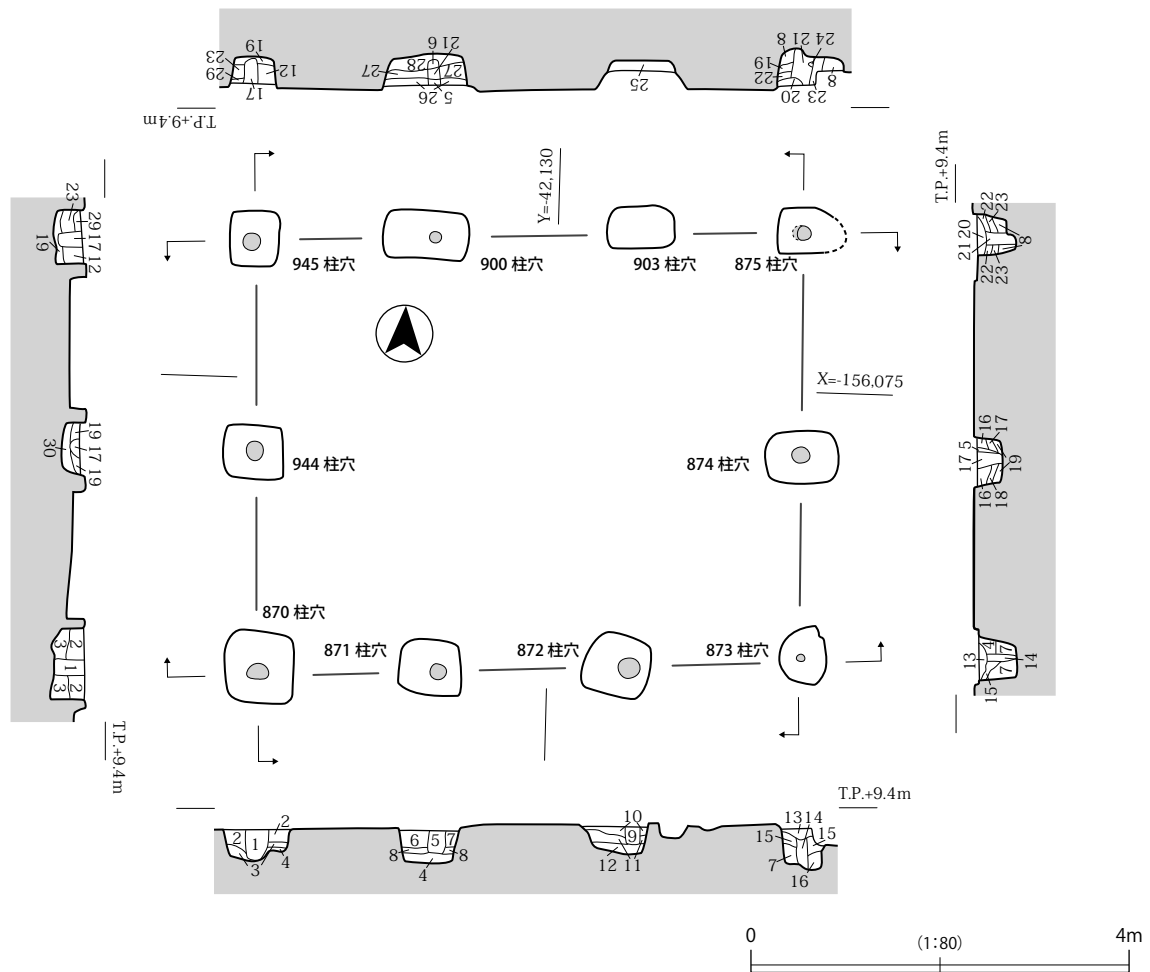
北から中央部にみられる南北溝 (75・36・67・66・63・67・1028・170) は軸線を北でやや西にふることや規格の統一があることから同時期に掘削されたものとする。その機能は不明である。

中央から南にかけての南北溝 (60・66・1039・312・313 他) は上記の溝に沿うような形でやはり等間隔に並ぶが、それらの溝に比べると幅・深さとも大規模である。掘立柱建物やそれに併行する東西大溝 (460 溝など) に切られることから東西溝より一時期前の遺構と考えられる。



- |  |  |
|--|--|
| 1 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト                              | 24 黄灰 2.5Y6/1 シルト マンガン沈着                       |
| 2 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト マンガン沈着                       | 25 暗灰黄 2.5Y5/2 微砂混シルト マンガン沈着                   |
| 3 黄灰 2.5Y5/1 シルト                               | 26 黄灰 2.5Y5/1 微砂混シルト マンガン沈着                    |
| 4 黄灰 2.5Y6/1 シルト混微砂                            | 27 灰 5Y6/1 シルト マンガン沈着                          |
| 5 黄灰 2.5Y5/1 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む         | 28 暗灰黄 2.5Y5/2 微砂混シルト                          |
| 6 灰 5Y5/1 シルト マンガン沈着                           | 29 褐灰 10YR4/1 シルト マンガン沈着 明黄褐 10YR6/6 シルトブロック含む |
| 7 黄 2.5Y4/1 シルト マンガン沈着                         | 30 褐灰 10YR5/1 シルト マンガン沈着                       |
| 8 黄灰 2.5Y5/1 シルト~粘土                            | 31 灰黄 2.5Y6/2 シルト 下方は砂質が強くなる                   |
| 9 灰 5Y5/1 シルト                                  | 32 灰 5Y5/1 シルト マンガン沈着                          |
| 10 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト マンガン沈着                      | 33 灰 5Y4/1 微砂混シルト                              |
| 11 褐灰 10YR5/1 シルト マンガン沈着                       | 34 灰黄 2.5Y6/2 シルト                              |
| 12 黄灰 2.5Y5/1 シルト マンガン沈着 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む | 35 にぶい黄 2.5Y6/3 シルト                            |
| 13 褐灰 10YR5/1 シルト                              | 36 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト質粘土                          |
| 14 黄灰 2.5Y5/1 微砂混シルト                           | 37 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト マンガン沈着 炭化物含む                |
| 15 灰オリーブ 5Y4/2 シルト マンガン沈着                      | 38 暗灰黄 2.5Y4/2 微砂~シルト                          |
| 16 褐灰 10YR4/1 微砂                               | 39 灰オリーブ 5Y4/2 微砂                              |
| 17 褐灰 10YR5/1 シルト                              | 40 灰 5Y4/1 微砂                                  |
| 18 黄灰 2.5Y6/1 シルト                              | 41 黄灰 2.5Y4/1 シルト マンガン沈着 遺物細片含む                |
| 19 黄灰 2.5Y6/1 シルト                              | 42 暗灰黄 2.5Y5/2 微砂混シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルト~粘土ブロック含む |
| 20 黄灰 2.5Y4/1 シルト                              | 43 黄灰 2.5Y6/2 微砂                               |
| 21 灰黄 2.5Y6/2 シルト マンガン沈着                       | 44 黄褐 2.5Y5/3 微砂                               |
| 22 黄灰 2.5Y5/1 シルト マンガン沈着                       | 45 黄灰 2.5Y5/1 シルト混微砂                           |
| 23 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト マンガン沈着                      | 46 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト                             |

図 25 掘立柱建物 1 平・断面図



- |  |   |
|--|---|
| 1 黄灰 2.5Y5/1 シルト 植物根幹含む                        | 17 黄灰 2.5Y4/1 シルト                           |
| 2 灰黄褐 10YR4/2 シルトマンガン沈着                        | 18 灰 5Y4/1 シルト                              |
| 3 褐灰 10YR4/1 シルト 微砂僅かに含む 黄褐 2.5Y5/6 シルトブロック含む  | 19 黄灰 2.5Y5/1 シルト                           |
| 4 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト                              | 20 褐灰 10YR4/1 微砂混シルト                        |
| 5 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト                              | 21 黄灰 2.5Y5/1 シルト                           |
| 6 灰黄 2.5Y6/2 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む         | 22 灰 5Y5/1 微砂混シルト                           |
| 7 褐灰 10YR4/1 微砂～細砂混シルト                         | 23 黄灰 2.5Y5/1 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む     |
| 8 褐灰 10YR5/1 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む         | 24 明黄褐 2.5Y6/6 シルト                          |
| 9 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む        | 25 黄灰 2.5Y4/1 シルト 浅黄 2.5Y7/4 シルト～粘質土のブロック含む |
| 10 黄灰 2.5Y4/1 シルト マンガン沈着 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む | 26 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト マンガン沈着                   |
| 11 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト マンガン沈着                      | 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む                       |
| 12 褐灰 10YR4/1 シルト                              | 27 黄灰 2.5Y5/1 シルト マンガン沈着                    |
| 13 暗灰黄 2.5Y4/2 微砂混シルト                          | 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む                       |
| 14 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト 微砂僅かに含む                     | 28 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルトブロック含む    |
| 15 黄灰 2.5Y5/1 シルト 明黄褐 2.5Y6/6 シルト～粘質土のブロック含む   | 29 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト 微砂含む                     |
| 16 褐灰 10YR4/1 シルト マンガン沈着                       | 30 灰黄褐 10YR4/2 シルト                          |

図 26 掘立柱建物 2 平・断面図

・建物 掘立柱建物を全部で3棟検出した。

**掘立柱建物 1** (図 25、巻頭図版 1、図版 5-1、6-2、7-2、8、11-1~3)

09-2-2 区の西側中央、X = -156,085 ~ -156,095 間、Y = -42,130 付近で検出した。

東西方向を長軸とし、桁行 3 間、梁行 2 間の建物の南面に庇が付いた側柱建物である。建物柱の間隔は梁行 2.2 m、桁行 2.4 m の等間隔である。建物と底面との距離はやや長く約 2.7 m である。

建物の柱穴は平面形一辺約 0.7 m の隅丸方形である。深さ 0.6 m をはかり、断面形は逆台形もしくは方形である。柱痕跡は最大直径約 0.2 m をはかる。底部分の柱掘方はやや小さく直径 0.5 ~ 0.6 m のおおむね円形で、中心に最大直径約 0.2 m の柱痕跡をもつ。750 柱穴や 742 柱穴の脇には床柱の支柱になるか、直径 0.2 m 程度の円形柱穴（ピット）が認められた。ただし、柱の抜き取りや柱穴の重複はなく、建物の建て替えは確認できない。

柱穴には2層から3層の埋土が存在する。柱穴の埋土から遺物はほとんど認められなかった。ただ、建物の形態や他の遺構との切り合いから古代の建物の要素が強く、9世紀後葉から10世紀初頭の遺構と考えられる。

また、このような庇をもつやや大形の建物というのは一般の集落建物には余りみられず、官衙的性格を考える方が一般的である。当調査区北側の和川線の池内遺跡の調査（センター2010）でみつかった30数棟の西側建物群と時期的にも合致し、この建物群との関連も予想される。ただし、確実に復原できた同期の掘立柱建物は2棟のみであり、整然と明示する区画の要素をもつ柵列なども明確にできなかった。官の大規模集落を構成していたと唱えるには難しい要素がある。ともあれ、掘立柱建物1は掘立柱建物2と対で、この09-2区内の建物の中で、初現的かつ中心的機能を備えていた建物と考えられる。

また、09-2調査区に遅れて、用水路脇の09-3-9区を調査時に掘立柱建物1の北東角753柱穴近くで、建物の柱穴と同規模・形状の1045柱穴を検出した。ただ、これ以外に同様な柱穴は検出されず、軸線もずれることから掘立柱建物1には含まれないと判断した。

#### **掘立柱建物2**（図26、図版6-2、7-2、9-1、11-4～6）

09-2-2区の西側、中央よりやや南に位置する。掘立柱建物1の北になる、 $X = -156,075$ 、 $Y = -42,130$ 付近で検出した。

東西方向を長軸とした桁行3間、梁行2間の側柱建物である。柱の間隔は梁行2.2m、桁行2.0～2.1mで梁行の方がやや長い。建物の柱掘方は1辺約0.8mの隅丸方形もしくは長方形で、深さ0.4mをはかる。断面形は逆台形もしくは方形である。柱根痕は最大直径約0.2mをはかる。柱掘方内には2層から3層の埋土が存在する。庇をもたない以外は、掘立柱建物1に近似した建物であるが、軸線がごくわずかに北東に上がっている。掘立柱建物1・2の間隔は約9mである。

遺物はほとんど出土していないが、掘立柱建物1と同様、柱穴の形状や建物の規模から9世紀後半から10世紀初頭の遺構と考えられる。

掘立柱建物2は掘立柱建物1と主軸方向がおおむね一致することなどからも、同時期に構築された建物とするのが妥当だろう。ただ、掘立柱建物1に比べると柱間隔がやや狭く、建物の規模が小さいことや庇をもたないことから掘立柱建物1を母屋とし、これに従属する建物であったと考えられる。

また、掘立柱建物1・2の周辺には建物は復原しえなかったが、中心に柱根痕をもち深さも0.5m以上に及ぶ深い柱穴を多数検出した。ただし、平面規模は掘立柱建物1・2に比べて小規模である。掘立柱建物の西側など、南北に柱穴が等間隔で並ぶものもあり、他にも建物や柱列が存在したと推測できる。時期的にも後述の蓮華文軒丸瓦がみつかった800柱穴や720井戸など、9世紀初頭から10世紀初頭までの比較的古い遺構がこの用水路より西の中央部にかたまわって検出されている。

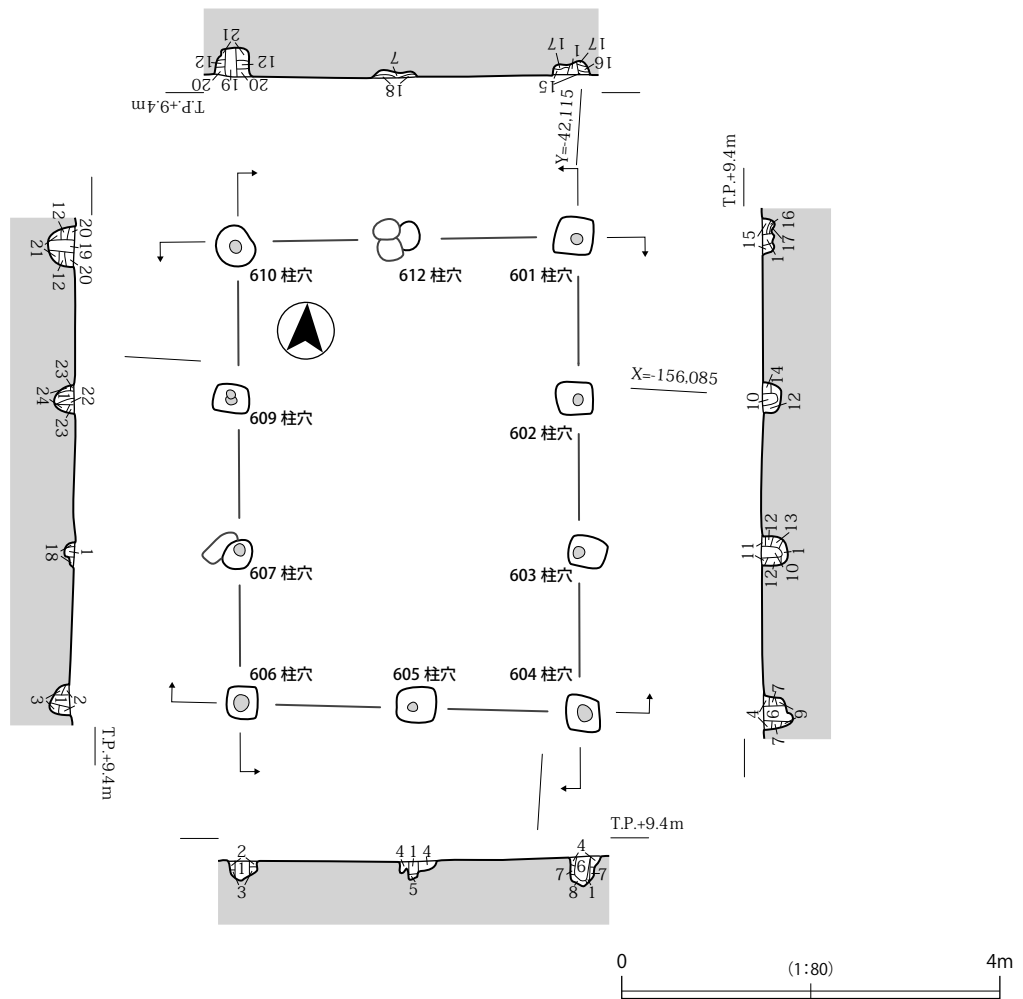
用水路より東で検出される柱穴群は、西より新しい10世紀後半以降の様相を示す。よって、古い時期の建物群はこの掘立柱建物1・2から調査区のより西に広がっていたと推測できる。

#### **掘立柱建物3**（図27、図版5-2、6-2、9-2、11-7・8）

09-2-2区の用水路より東側の区域、 $X = -156,080 \sim -156,090$ 間、 $Y = -42,115$ 付近で検出した。

南北方向を長軸とした桁行3間、梁行2間の側柱建物である。柱の間隔は梁行1.8m、桁行1.7mをはかり、梁行がやや長い。建物の柱掘方は1辺が約0.3mの方形が主で、深さ0.3mをはかる。612柱





- |                                |                                |
|--------------------------------|--------------------------------|
| 1 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト              | 13 黄褐 2.5Y5/6 シルト              |
| 2 暗灰黄 2.5Y4/2 微砂混シルト           | 14 明黄褐 2.5Y6/8 シルト マンガン沈着      |
| 3 黄灰 2.5Y4/1 シルト やや粘質強い        | 15 オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト マンガン沈着    |
| 4 オリーブ褐 2.5Y4/3 微砂混シルト         | 16 明黄褐 2.5Y6/6 シルト             |
| 5 灰黄 2.5Y6/2 シルト~粘質土           | 17 オリーブ褐 2.5Y4/4 シルト           |
| 6 黄灰 2.5Y5/1 シルト               | 18 オリーブ褐 2.5Y4/3 シルト           |
| 7 黄褐 2.5Y5/3 シルト               | 19 オリーブ褐 2.5Y4/3 細砂混シルト マンガン沈着 |
| 8 灰黄 2.5Y6/2 シルト混微砂            | 20 黄褐 2.5Y5/4 シルト マンガン沈着       |
| 9 灰黄 2.5Y6/2 シルト               | 21 暗灰黄 2.5Y5/2 微砂混シルト          |
| 10 黄灰 2.5Y5/1 シルト マンガン沈着       | 22 暗褐 10YR3/4 シルト マンガン沈着       |
| 11 オリーブ褐 2.5Y4/3 微砂混シルト マンガン沈着 | 23 にぶい黄褐 10YR5/3 シルト マンガン沈着    |
| 12 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト マンガン沈着      | 24 灰黄褐 10YR4/2 シルト             |

図 27 掘立柱建物 3 平・断面図

穴や 607 柱穴では柱穴が重複する。断面形は逆台形もしくは方形である。柱根痕は最大直径約 0.2 m をはかる。柱穴内には 2 層から 3 層の埋土が存在する。

周辺からは同様の規模・形態の柱穴を多数検出したが、これ 1 棟のみしか掘立柱建物を復原できなかった。東側や北側に、等間隔に列状に並ぶ柱穴群は認められることから、他にもほぼ同じ位置に建物は複数存在した可能性が高い。

この建物を構成する柱穴からは遺物は認められなかったが、付近のピット中の遺物などから類推して 10 世紀半ばから後半の建物と考える。

掘立柱建物 1・2 とは建物の軸方向や規模が違っている。また、柱穴の大きさ・形などの建物の構成要素が、古代よりはむしろ中世前半期に近い様相をもつことや、付近で出土した遺物の時期にも隔たりがあることから、掘立柱建物 3 は掘立柱建物 1・2 より新しい建物と判断した。後出の建物群の 1 棟と考えるべきであろう。次に述べる 590・591 土坑など用水路より東で見られる遺構はおおむね 10 世紀

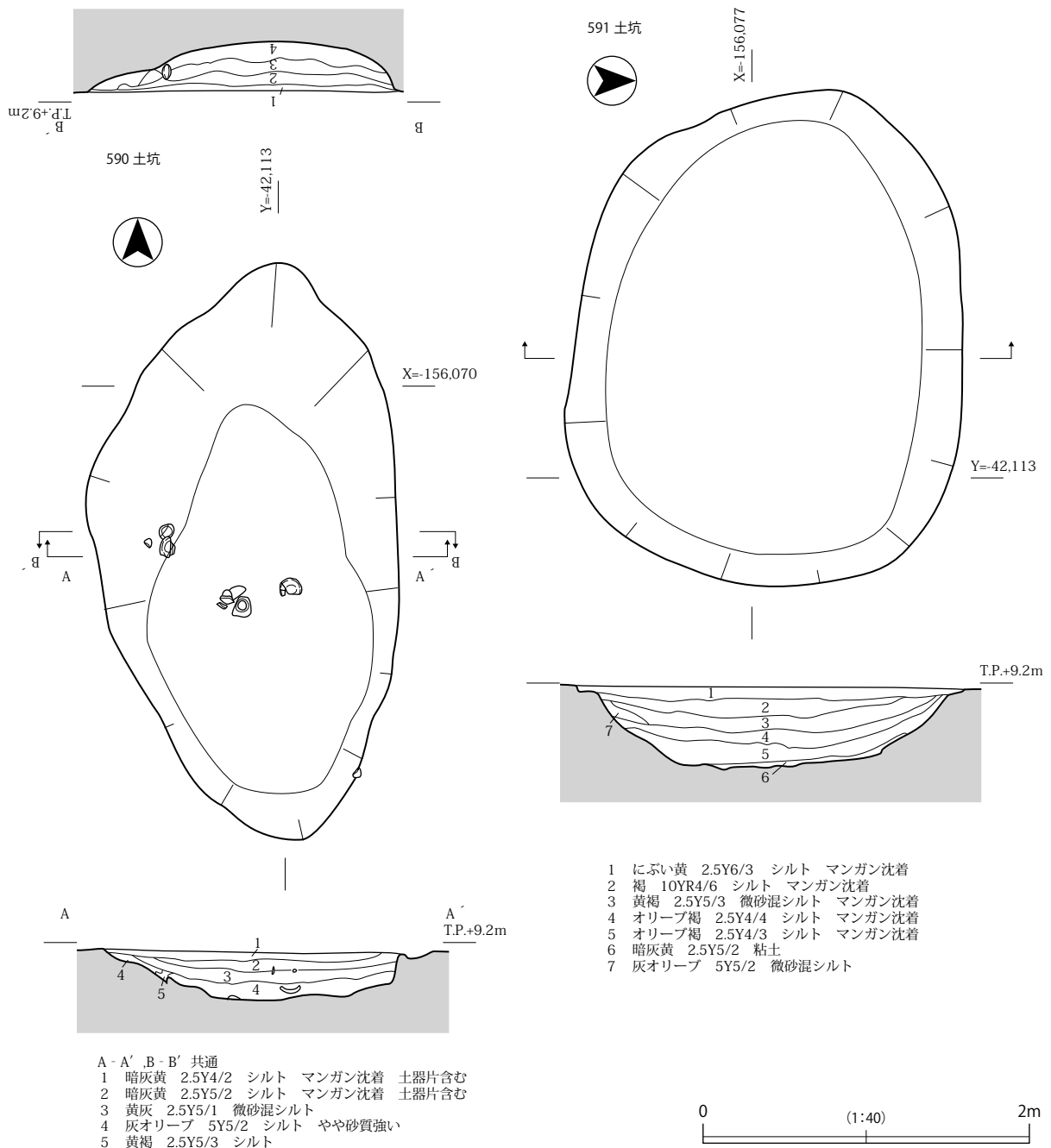


図 28 09 - 2 区 590・591 土坑 平・断面図

をくだらないことから、掘立柱建物 1・2 を中心とする建物群とそれに付属する遺構を第 1 期とし、掘立柱建物 3 を中心とする遺構を第 2 期として遺跡の中心がやや東に移動したと考えられる。

掘立柱建物 1・2・3 で構成される建物群の範囲だが、この建物群を区画する要素として建物に併行するように走るいくつかの溝がある。これをもとに東西南北の範囲を考える。

北限は掘立柱建物 2 の北側の 940 溝・916 溝と考える。東限は掘立柱建物 3 まで、あるいは調査区の東端位まで広がると予想される。西端は調査区よりさらに西に広がり、古い時代の建物はむしろ調査区より西に中心が存在すると仮定される。南限は、458 溝・460 溝が規模や時期的な一致からその機能を果たすと考えられる。この問題については、区画要素の度合いを含めて第 7 章総括において再説したい。

・土坑・柱穴・井戸

**590 土坑** (図 28、図版 7-1、10-1)

09-2-2 区の用水路より東側の区域、 $X = -156,070$ 、 $Y = -42,113$  地点付近で検出した。591 土坑の北にあたり、541 溝を切る。南北の長軸線がほぼ正方位に位置する、おおむね楕円形の土坑である。やや不整形な形状で、長径（南北径）3.5 m、短径（東西径）1.8 m、深さ 0.3 mをはかる。底面形は長径 2.5 m、短径 1.4 mをはかる。北側の壁はゆるやかに、南側の壁は垂直に落ちるよう掘られている。断面形は皿形を呈する。

埋土は 4 層に分かれ、各層に遺物の細片を含んでおり、0.05 ~ 0.1 m 厚さで水平に自然堆積する。

590 土坑の中央にあたる箇所、中層から下層にかけて若干の遺物が出土した。

緑釉陶器皿、黒色土器碗 A、土師器碗 A、土師器杯 B、土師器皿等である (図 41、図版 32)。遺物は緑釉陶器皿を除いては破片で出土し、完全な形をとどめていない。また、これらの遺物はまとまってではなく、散乱した状況で出土している (図版 7-1、10-1)。皿と皿、碗と碗同士が正置してあったり、重ねたりしているというような状況でなかった。

緑釉陶器皿はやや粗雑な作りであるが、胎土や釉薬から近江産とみなされる。当時の河内地域では希少なものであり、単に廃棄するために土坑に投げ入れたとは考えにくく、意図的に埋められたとも解釈できる。

緑釉陶器を埋納する以外に、土坑の形状や、大きさがちょうど大人の身長と同じくらいであることから、590 土坑は土坑墓の可能性も考えられる。ただ、上面を削平されたとしても深さが 0.3 m と土坑墓として使用するには浅い。また、土坑内からは骨や木棺等の残存物、掘方痕跡など墓であることを示す確証は発見できなかった。また、緑釉陶器以外の遺物は日常的に使用されるものであり、墓とする根拠には決め手を欠く。従って、ここではその可能性を示唆するにとどめる。

遺物の時期は最も古い緑釉陶器が 10 世紀前半から中頃であるが、それ以外は 10 世紀中頃から後半のものである。よって、590 土坑は 10 世紀後半の遺構と考える。掘立柱建物 3 と時期を同一にする遺構と捉えられる。

**591 土坑** (図 28、図版 7-1、12-5)

09-2-2 区の用水路より東側区域、 $X = -156,077$ 、 $Y = -42,113$  地点付近で検出した。掘立柱建物 3 の北にあたり、591 土坑の北には 590 土坑があり、

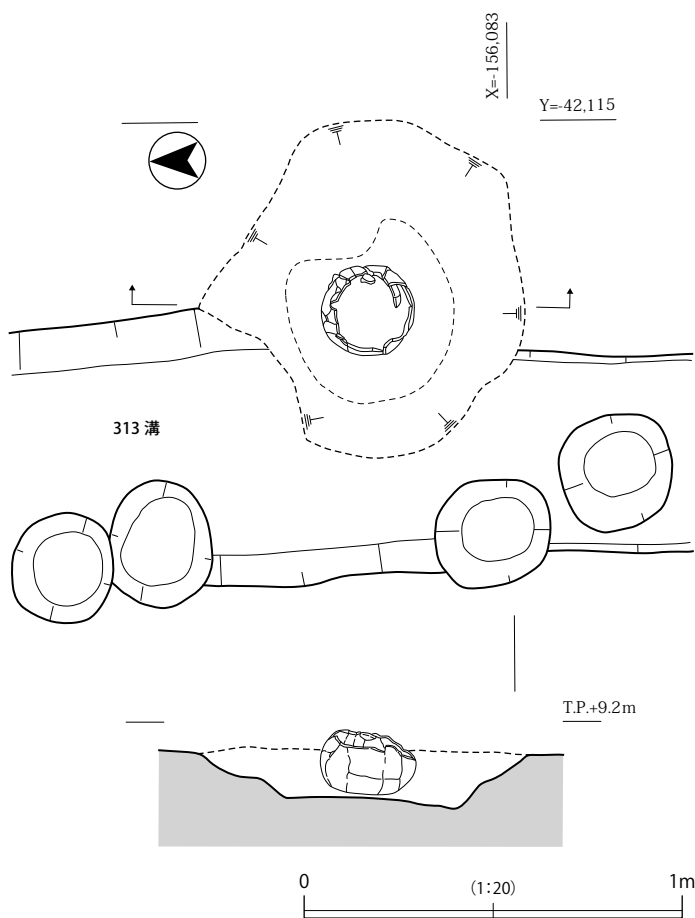
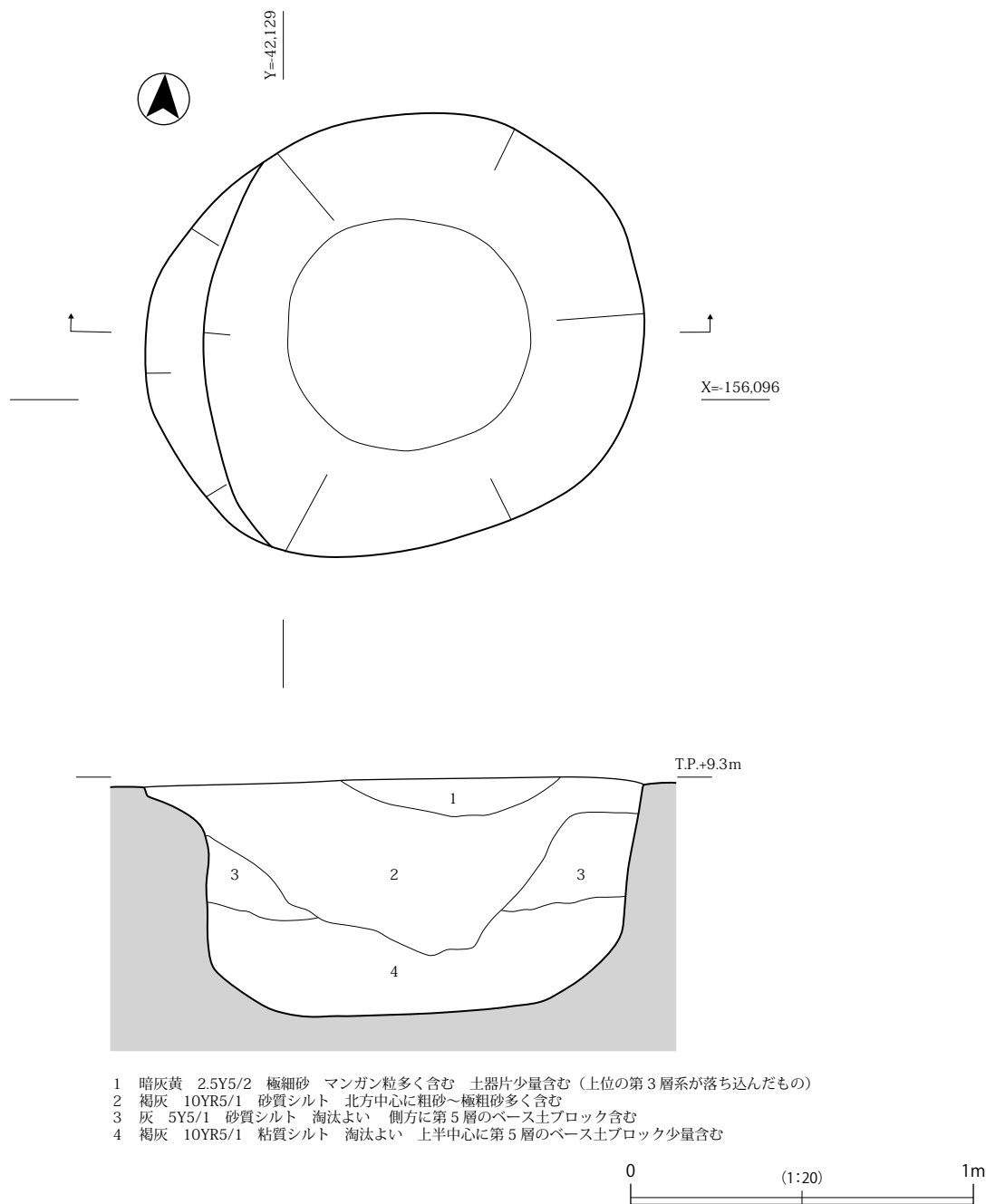


図 29 09-2 区 1009 土器出土状況図



- 1 暗灰黄 2.5Y5/2 極細砂 マンガン粒多く含む 土器片少量含む (上位の第3層系が落ち込んだもの)
- 2 褐灰 10YR5/1 砂質シルト 北方中心に粗砂～極粗砂多く含む
- 3 灰 5Y5/1 砂質シルト 淘汰よい 側方に第5層のベース土ブロック含む
- 4 褐灰 10YR5/1 粘質シルト 淘汰よい 上半中心に第5層のベース土ブロック少量含む

図30 09-2区 720井戸 平・断面図

その距離は約3mである。

東西方向に長い長円形の土坑である。590土坑と比較すると円形に近く、長径（東西径）は3.0m、短径（南北径）は2.4mをはかる。底面は長径2.6m、短径1.8mで、深さ0.5mをはかる。断面形は碗形を呈する。埋土は上層から落ち込んだように6つの層が自然堆積する。

590土坑と位置関係や規模・形状などから関連性がある遺構と考える。591土坑も大きさや形状から土坑墓の可能性をもつが、590土坑同様に埋土から骨や木棺の痕跡などは検出できていない。出土遺物もわずかである。

出土遺物は土師器杯（図41、図版33）で、これより10世紀後半の遺構と考える。591土坑も、590土坑と同様に掘立柱建物3に関わる一群の遺構と捉えられる。

### 1009 土器 (図 29、図版 12-7、8)

09-2-2 区の中央で検出した。591 土坑の南西部で、313 溝の肩部付近の地山面で検出した、土師器の甕と黒色土器 A 類椀のセットである。土坑の掘方は検出できなかったので、くぼんでいた地山面に直接置かれていたか掘方がごく浅かったと推測できる。そのため土器に遺構番号をふった。

土師器甕は頸部から上を意図的に打ち欠き、正置の状態で置かれていた。検出時には判明しなかったが甕内部の充填埋土から黒色土器 A 類椀がほぼ完形の状態出土した。蓋として甕に伏せて置き、覆いかぶさっていた椀が、経年により土圧や甕内部に落ち込んだのではないかと推測する。1009 土器は何らかの埋納容器として使用されていたのは明白である。590 土坑・591 土坑との関連から子供を葬った土器棺や火葬墓骨蔵器とも考えられるが、人骨、灰炭などが出土していないため、これも推測の域を出ない。

土師器甕、黒色土器の時期から 10 世紀中葉から後半の時期が与えられる。

### 720 井戸 (図 30)

掘立柱建物 1 のすぐ南で近接して検出した大形の土坑である。形状や、深く湧水層に達していることから素掘りの井戸と判断した。

平面形はほぼ円形で壁は直線的に落ちる。直径 1.5 m、深さ 0.7 m をはかる。断面形は U 字形を呈する。埋土は上層がたわんだようにみえることから中層まで自然に堆積した後、人為的埋め戻しがあったとも推測される。

遺物はわずかだが土師器杯が出土しており、9 世紀後葉から 10 世紀初頭の遺構と判断される。掘立柱建物 1・2 に付随する施設と考えられる。

### 651 柱穴 (図 31)

651 柱穴は 09-2-2 区の用水路より東側の区域、312 溝の西で検出した。直径 0.3 m のややいびつな円形を呈し、深さ 0.15 m をはかる。中心に直径約 0.1 m の柱根痕が残り、その底部には根石となる 20cm 程度の平たい自然石が置かれていた。建物柱穴と考えられる。遺物が出土していないため時期は不明である。

### 410 井戸 (図 31)

09-2-2 区の中央よりやや東で検出した。ほぼ正方位で南北に長径をもつ不整円形の井戸である。長径 1.5 m、短径 1.1 m、深さ 0.55 m をはかる。断面形は深い鉢形を呈する。

井戸枠はみつからなかったが、平面の掘方が外周より 0.1~0.2 m 入ったところでもう一段落ちたようになり、底部は約 0.4 m 四方の方形を呈する。また、断面の埋土状況を観察すると、上部では幅 0.7 m、下部では幅 0.4 m の範囲において埋土の違いが把握できる。それらは平面的には方形に観察できた。これらの一部は井戸枠痕跡を示していると判断してよく、何らかの井筒(井戸枠)があったと判別できる。

遺物は出土していないが、他の遺構との位置関係から、10 世紀後葉の遺構と推測する。

### 405 土坑 (図 31、図版 12-6)

405 土坑は 410 井戸の西北近くに位置する。一辺約 0.6 m の隅丸方形の土坑である。深さ 0.1 m をはかる。断面形は皿形を呈する。埋土の上層と下層の境界から土師器杯が正置の状態出土した。

遺物から、10 世紀後葉から 11 世紀前葉の遺構と考えられる。

### 759 柱穴・821 柱穴 (図 32)

759 柱穴は 09-2-2 区の中央部西端で検出した。掘立柱建物 1 の北西隅柱穴にあたる 750 柱穴

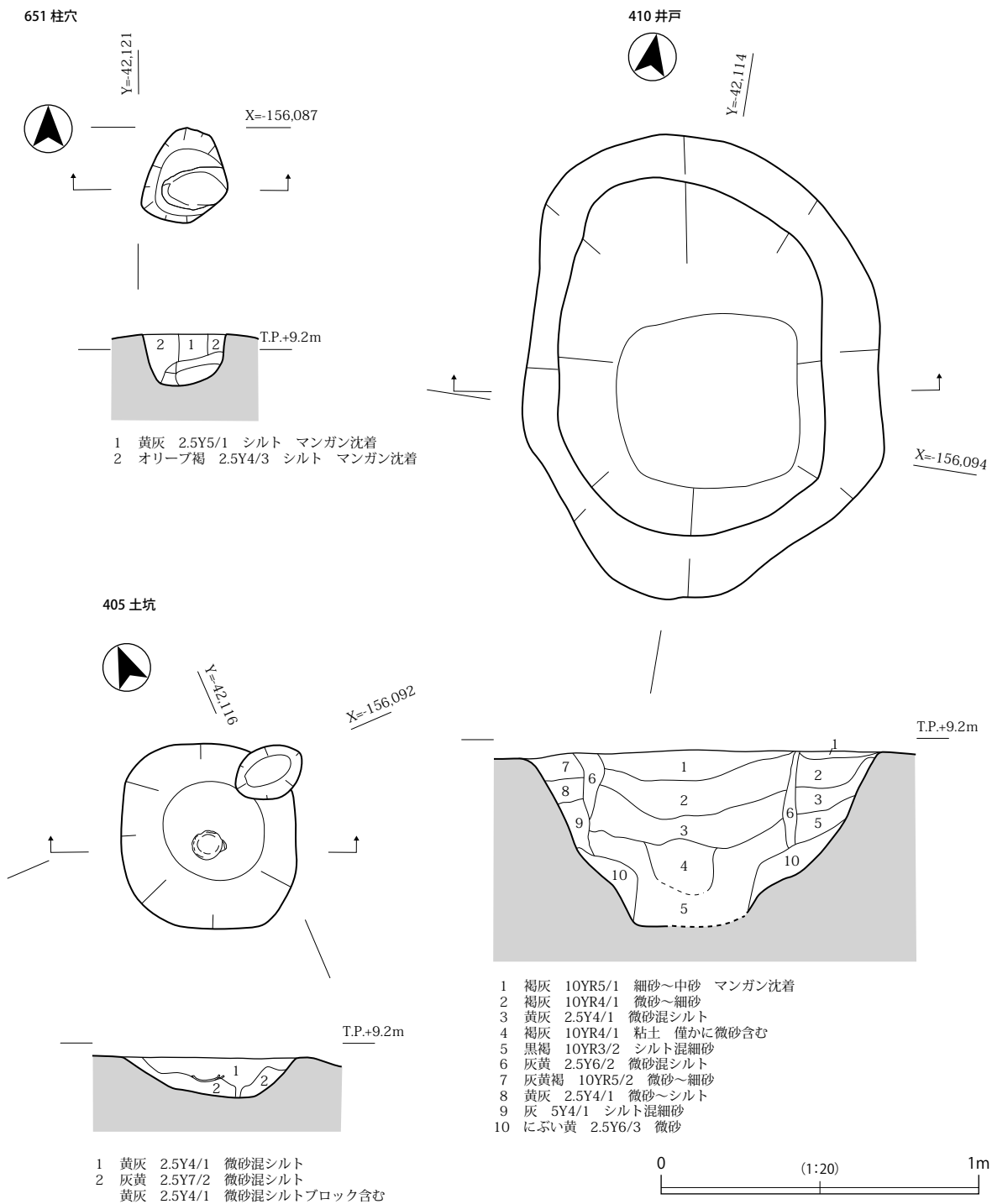


図 31 09 - 2 区 651 柱穴・410 井戸・405 土坑 平・断面図

に切られる。

円形の柱穴である。直径 0.4 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形はV字形を呈し、掘方上面に長方形の根石となると思われる自然石が認められたため、柱穴とした。実際にはこの上層から続く柱穴だったので削平を受けたと考えられる。750 柱穴との切り合いから 9 世紀末以前と考える。

821 柱穴は 09 - 2 - 2 区の中央部西端で検出した。掘立柱建物 1 の北東隅柱穴にあたる 753 柱穴の南に位置する。

長円形の柱穴である。長径 0.3 m、短径 0.2 m、深さ 0.25 mをはかる。断面形はU字形を呈する。中心に直径 0.1 mの柱根痕が残る。上層から 2 個体の土器器羽釜片が出土した。これより 10 世紀後半

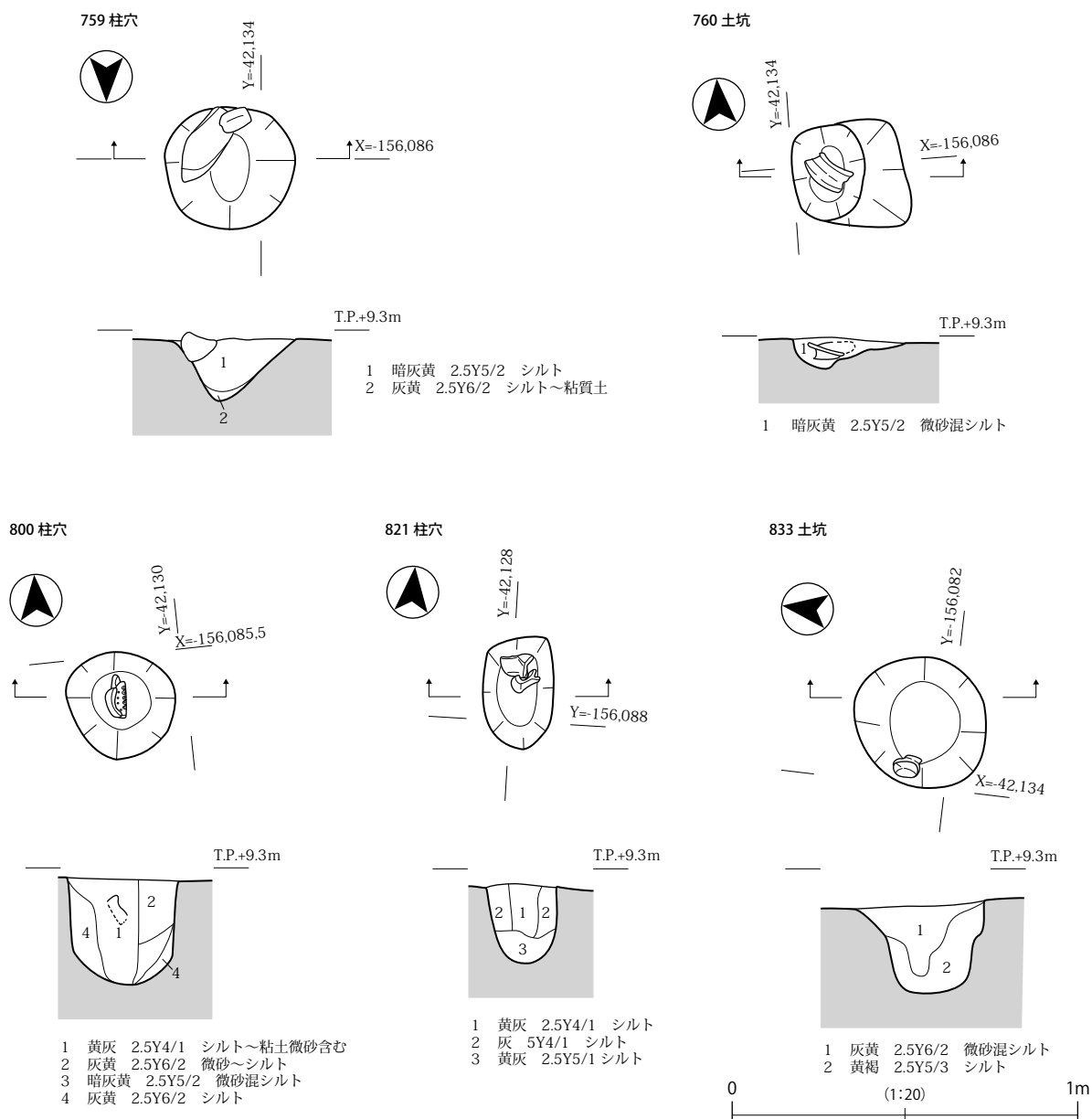


図 32 09 - 2 区 759 柱穴・760 土坑・800 柱穴・821 柱穴・833 土坑 平・断面図の遺構と考える。

### 800 柱穴 (図 32、図版 10 - 2)

800 柱穴は 09 - 2 - 2 区の中央部西端で検出した。掘立柱建物 1 の北にあたる。

直径 0.3 m の円形の柱穴である。深さ 0.3 m をはかり、断面形は U 字形を呈する。中心に直径 0.15 m の柱根痕が残り、この中から蓮華文軒丸瓦の瓦当部 (図 42) が出土した。

蓮華文軒丸瓦から 8 世紀前半から中葉の時期が与えられる。これは、転用伝世を考えなければ、当調査区内では最古の様相を示す遺構である。

### 760 土坑・833 土坑 (図 32)

760 土坑は 09 - 2 - 2 区の中央部西端で検出した。掘立柱建物 1 の北西隅柱穴にあたる 750 柱穴とそれに切られる 759 柱穴のさらに北にある。一辺 0.3 m の隅丸方形の土坑である。深さ 0.1 m をはかる。浅いため土坑としたが、掘方が西に重なってみられるのを柱根痕とすると柱穴だった可能性もあ

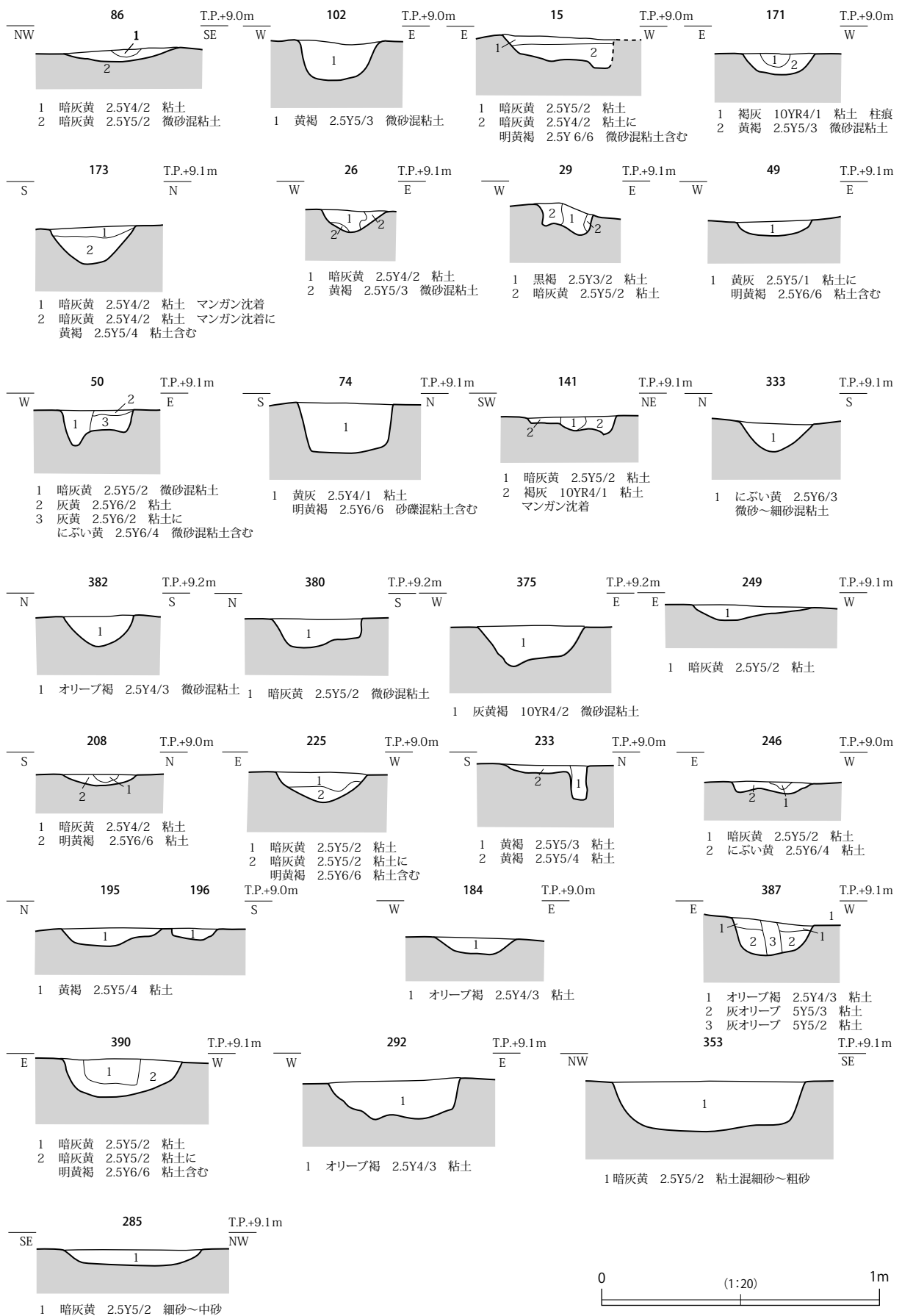


図 33 09-2-1 区 遺構断面図 (1)



る。土師器羽釜口縁部から体部片（図 42 - 76）が底部から出土した。

833 土坑は 09 - 2 - 2 区の中央部西端、760 柱穴のさらに北で検出した。

直径 0.4 m、深さ 0.25 m の円形の土坑である。断面形は U 字形を呈し、小形の土師器鉢（図 42 - 68）が出土した。出土遺物から 10 世紀前半の遺構と考える。

**86 土坑・102 土坑・15 土坑・171 土坑・173 土坑・26 土坑・29 柱穴・49 土坑・50 柱穴・74 土坑・141 柱穴・333 土坑・382 土坑・380 土坑・375 土坑・249 土坑・208 土坑・225 土坑・233 柱穴・246 土坑・195 土坑・196 土坑・184 土坑・387 柱穴・390 土坑・292 土坑・353 土坑・285 土坑**（図 33）

09 - 2 - 1 区での北西部や中央部等で検出した柱穴・土坑である。

09 - 2 - 1 区は遺構面の検出位置が低かったため、かなり削平された状態で遺構を確認することとなった。上記の遺構中、柱根痕が明瞭に残ることから、29・50・141・233・387 は柱穴と判断した。が、それ以外にも柱穴があった可能性は大きく、09 - 2 - 2 区と同様に掘立柱建物が存在していた可能性も高いが、復原し得なかった。

29 柱穴は北西部の東西溝群の南端で検出した。直径 0.2 m、深さ 0.1 m をはかり、中心に径 0.1 m の柱根痕が残る。断面形は逆台形を呈する。

50 柱穴は 63 溝の西脇で検出した。直径 0.25 m、深さ 0.1 m をはかり、西寄りに径 0.1 m の柱根痕が残る。断面形は逆台形を呈する。

141 柱穴は 64 溝と 67 溝の間で検出した。直径 0.3 m、深さ 0.05 m をはかる。中心に径 0.1 m の柱根痕が残る。断面形は逆台形を呈する。

233 柱穴は 170 溝の東側で検出した。円形の柱穴である。直径 0.3 m、深さ 0.05 m をはかり、北寄りに径 0.05 m の柱根痕が残る。断面形は浅い皿形を呈する。

387 柱穴は 170 溝の西脇、390 土坑の西で検出した。直径 0.3 m、深さ 0.1 m をはかり、中心に径 0.05 m の柱根痕が残る。断面形は浅い皿形を呈する。

375 土坑は調査区の中央で検出した。円形の土坑である。直径 0.4 m、深さ 0.15 m をはかり、断面形は皿形を呈する。

292 土坑は 170 溝の西脇で検出した。円形の土坑である。直径 0.5 m、深さ 0.15 m をはかり、断面形は皿形を呈する。

390 土坑は 170 溝の西脇、192 溝の北で検出した。円形の土坑である。直径 0.4 m、深さ 0.15 m をはかり、断面形は逆台形を呈する。

102 土坑は北西部の東西溝を切る形で検出した。円形の土坑である。直径 0.3 m、深さ 0.1 m をはかり、断面形は皿形を呈する。

353 土坑は調査区の東端で検出した。円形の土坑である。直径 0.7 m、深さ 0.2 m をはかり、断面形は皿形を呈する。

**303 土坑・65 土坑・1031 柱穴・144 土坑・9 土坑**（図 34）

303 土坑は 09 - 2 - 1 区の 170 溝の西側で検出した。浅い土坑で、直径 0.6 m、深さ 0.05 m をはかる。

65 土坑は 09 - 2 - 1 区の西側で検出した。45 溝に切られる。長円形の土坑で、直径 0.9 m、深さ 0.05 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

1031 柱穴は後から調査した用水路の東肩で検出した。1039 溝と重複する。直径 0.35 m、深さ 0.2

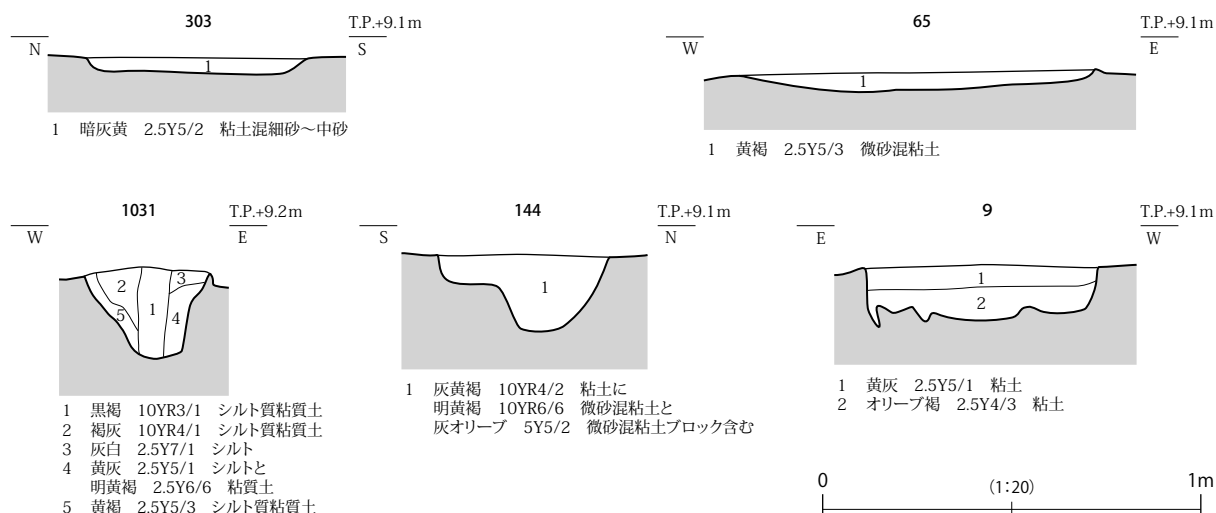


図 34 09-2-1 区 遺構断面図 (2)

mをはかり、中心に柱根痕が残る。断面形はU字形を呈する。

144 土坑は 09-2-1 区の東端で検出した。長円形の土坑で、51 土坑に切られる。直径 0.45 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形はU字形を呈する。

9 土坑は 09-2-1 区 36 溝の西脇で検出した。不整円形の土坑で直径 0.6 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。

#### 923 柱穴・924 柱穴 (図 35)

923 柱穴は 09-2-2 区中央部の西端、916 溝の北で検出した大形の柱穴である。直径 0.6 m、深さ 0.3 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は 2 層に分かれる。924 柱穴と切り合い関係をもつ。923 柱穴の柱根痕は確認できなかったが、切り合い関係をもつ 924 柱穴に柱根痕が認められることから、2つの柱穴は建替・抜取を示すとも考えられる。規模から掘立柱建物 1 のような大型建物の一部だった可能性をもつ。土師器皿や甕が出土した。遺物から、10 世紀後葉から 11 世紀前葉の遺構と思われる、掘立柱建物 1・2 より新しくなる。

924 柱穴は 923 柱穴に切られる柱穴である。直径 0.4 m、深さ 0.2 mをはかる。平面形は方形、断面形は楕形を呈する。中心に径 0.1 mの柱根痕をもつ。遺物は出土していないが、切り合い関係から 923 柱穴よりやや古い時期の遺構と考える。

#### 880 土坑 (図 35)

880 土坑は掘立柱建物 2 の中心に位置する長円形の土坑である。直径 0.65 m、深さ 0.3 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。

埋土の中層から下層には中心に柱根痕状のものが残るので、これも 923・924 柱穴同様に大形の建物柱穴だった可能性が高い。初めはこの土坑を含めて掘立柱建物 2 が総柱建物になると想定したが、東にもう 1つの柱穴が見当たらず位置もややずれること、倉庫などに多い総柱建物より側柱建物になる方が妥当であるとの判断から、掘立柱建物 2 とは別の柱穴と判断した。

#### 957 土坑 (図 35)

957 土坑は掘立柱建物 1 の南東隅、738 柱穴に近接して検出した。用水路によって東半分は切られる。直径 0.7 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形を呈する。これも柱穴だった可能性がある。

#### 700 土坑 (図 35)

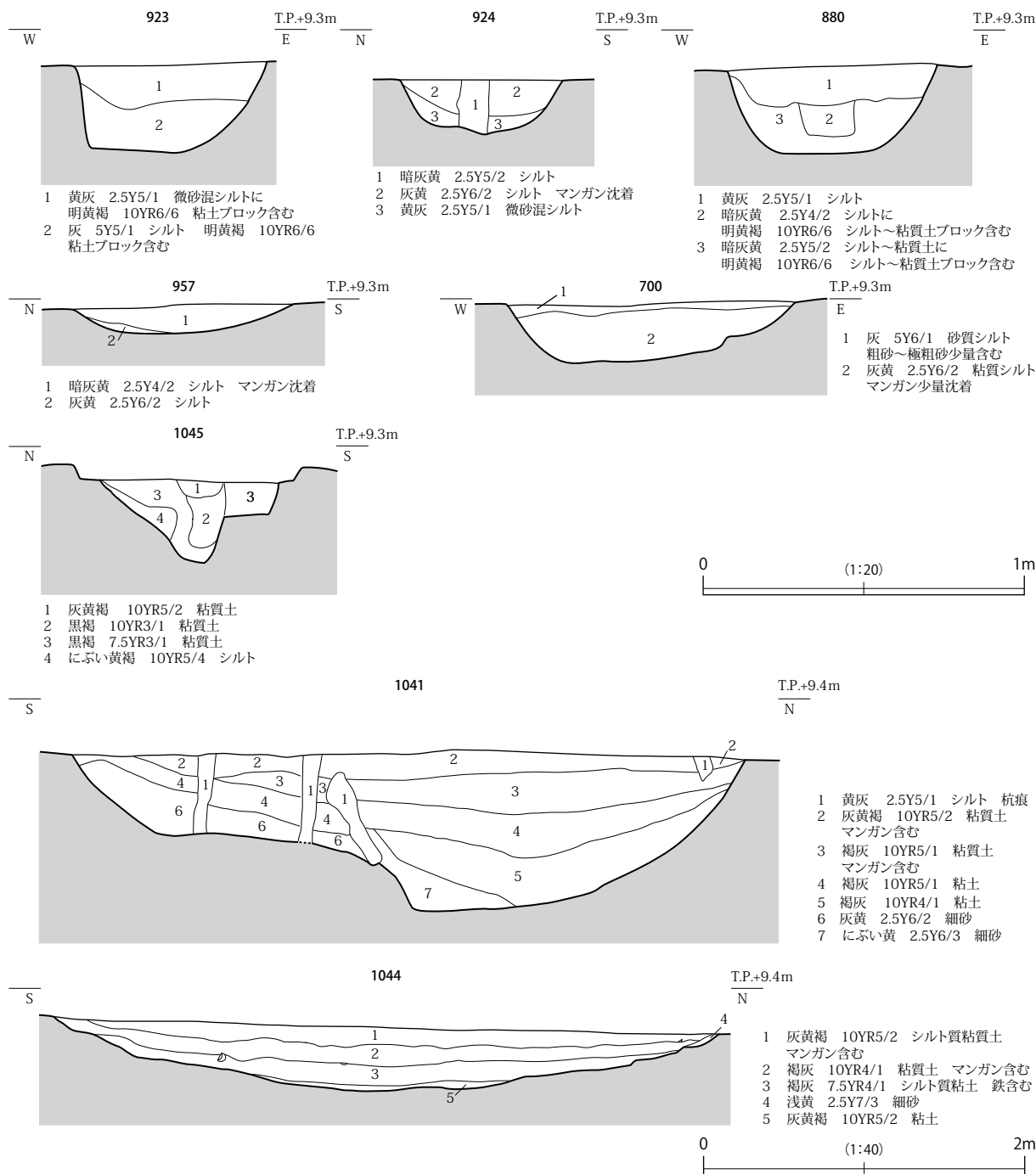


図 35 09-2-2 区 遺構断面図 (1)

700 土坑は 09-2-2 区の最南端、460 溝の南で検出した。大形の円形土坑である。直径 0.9 m、深さ 0.2 m をはかり、断面形は皿形を呈する。

**1045 柱穴・1041 土坑 (図 35)**

1045 柱穴・1041 土坑・1044 落込は用水路の両脇部分で検出した。09-3-9 区として追加調査した区域である。

1045 柱穴は用水路西側、掘立柱建物 1 の北東隅にあたる 753 柱穴や 820 土坑に近接して検出した。一辺 0.7 m の隅丸方形の土坑で深さ 0.3 m をはかる。断面形は V 字形を呈する。中心に柱根痕部をもつので、建物の柱穴と判断した。掘立柱建物 1 の桁行が東に延長してこの柱穴を含むことも想定したが、

他にこれに匹敵する柱穴を検出し得なかったり、軸線がずれるため掘立柱建物1とは関連しないと判断した。遺物は出土しない。

1041 土坑は用水路東脇で検出した大形の土坑である。用水路によって切られる。南北幅が4.2 m、東西残存幅が1.5 m、深さ1.0 mをはかる。断面形は鉢形を呈する。溝状とも落込みともとれるが、用水路を挟んだ西側や既調査区でこの続きを確認しなかったため、土坑とした。土師器杯が出土した。

#### 1044 落込 (図35、図版13-5)

1044 落込は用水路東脇で1041土坑に並んで検出した。用水路に西側は切られる。400溝と重複し、同様に地形のたわみともとれる。

南北長4.0 m、東西残存幅1.5 m、深さ0.4 mをはかる。断面形は皿形を呈する。基本層序の2層に相当するマンガンを含むシルト層が3、4層水平堆積する。この落込みからは土師器甕や椀・杯・皿などが多数出土した。9世紀後半から10世紀初めの遺構と考える。

#### 809 柱穴・810 柱穴・801 柱穴・802 柱穴 (図36)

09-2-2区の掘立柱建物1の柱穴北側で検出した柱穴である。いずれも平面形は円形で、断面形は逆台形もしくはU字形をなす。直径0.3~0.4 m、深さ0.25~0.4 mをはかる。809柱穴は根石と思われる石が出土する。810柱穴は中心に柱根痕が明瞭に残る。

#### 784 柱穴・796 柱穴 (図36)

09-2-2区の掘立柱建物1の柱穴北側で検出した柱穴である。いずれも平面形は円形で、断面形は逆台形もしくはU字形を呈する。784柱穴は直径0.3 m、深さ0.2 mを、796柱穴は直径0.3 m、深さ0.3 mをはかる。

#### 834 柱穴・836 柱穴・955 柱穴 (図版12-4)・859 柱穴・883 柱穴・884 柱穴・866 柱穴・891 柱穴・893 柱穴・894 柱穴 (図36)

09-2-2区の掘立柱建物2の西柱列、60溝周辺で検出したやや小形の柱穴である。

いずれも平面形は円形で、断面形は逆台形もしくはU字形を呈する。直径0.25~0.45 m、深さ0.15~0.3 mをはかる。834柱穴・836柱穴・955柱穴・893柱穴は中心に径0.1~0.2 m程度の柱根痕が残る。

#### 897 柱穴・895 柱穴・892 柱穴・877 柱穴 (図36)

09-2-2区の掘立柱建物2の西側で検出した。897柱穴・895柱穴・892柱穴・891柱穴・884柱穴・886柱穴などは、掘立柱建物2の西辺に併行に等間隔で並ぶものもみられることから、建物に付属する柵列などになる可能性がある。

895柱穴・892柱穴・877柱穴は中心に径0.1 m程度の柱根痕が明瞭に残る。直径0.3~0.35 m、深さ0.25~0.45 mをはかる。断面形が逆台形の、掘方がしっかりした柱穴である。

#### 68 柱穴・1042 柱穴 (図36)

掘立柱建物1・2の東側、用水路近くで検出した柱穴である。68柱穴・1042柱穴とも直径0.3 m、深さ0.25~0.45 mをはかる。

#### 975 柱穴 (図37)

09-2-2区の中央部、590土坑より東で検出した柱穴である。直径0.4 m、深さ0.2 mをはかる。断面形がU字形で、中心に径0.1 mの柱根痕が残る。

#### 616 柱穴・617 柱穴・589 柱穴・688 柱穴・681 柱穴・682 柱穴・1003 柱穴 (図37)

09-2-2区の中央部、掘立柱建物3の北側で検出した柱穴である。

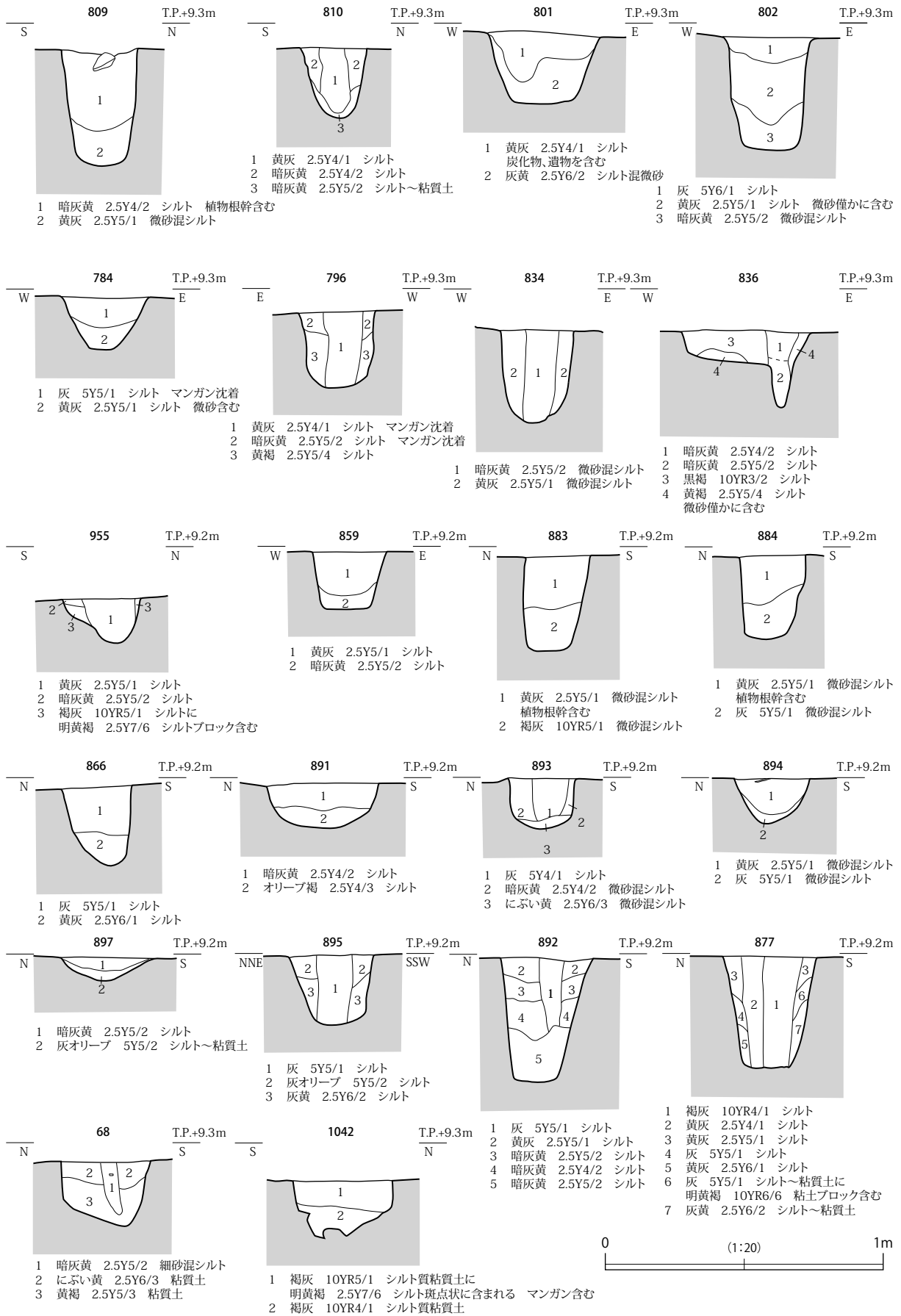


図36 09-2-2区 遺構断面図(2)

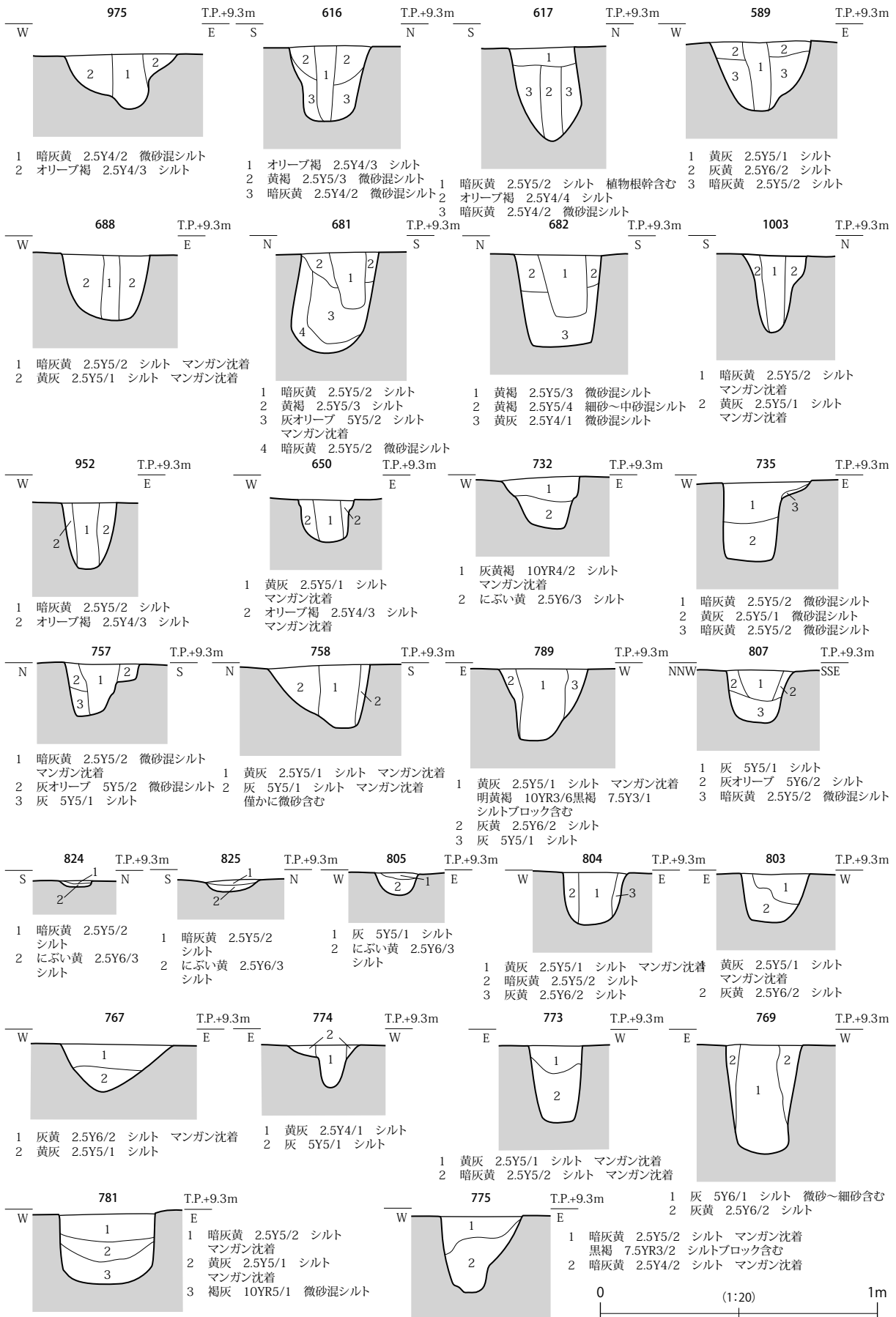


図 37 09-2-2区 遺構断面図 (3)

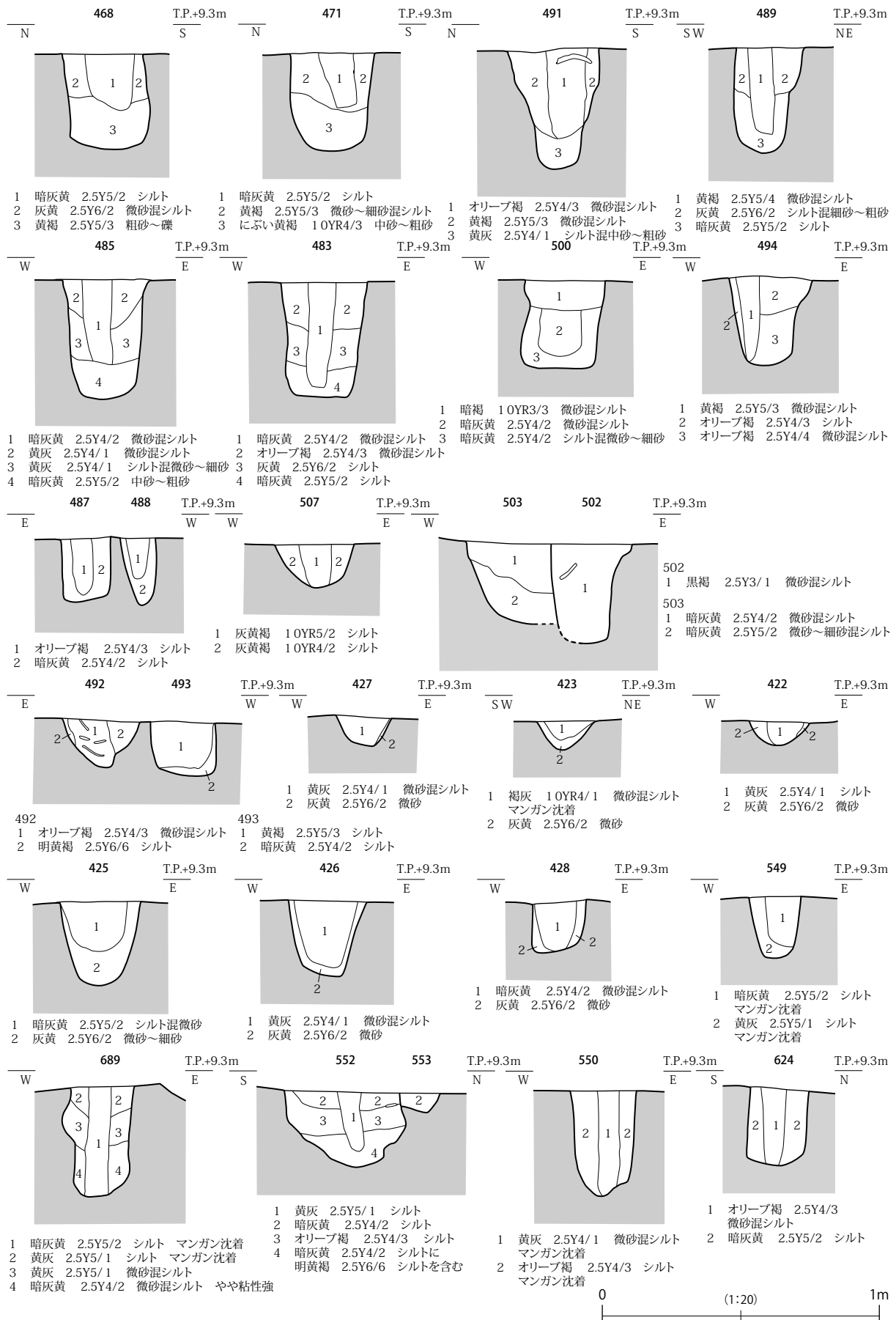


図 38 09-2-2区 遺構断面図 (4)

いずれも平面形は円形で、断面形は逆台形もしくはU字形を呈する。直径 0.2 ～ 0.35 m、深さ 0.25 ～ 0.35 mをはかる。どの柱穴も中心に径 0.1 m程度の柱根痕が残る。

西側の掘立柱建物 1・2 やその周辺で検出された柱穴より径はやや小さいが、深く掘り込まれ、柱根痕も明瞭に残る柱穴群である。復原できなかつたが、掘立柱建物 3 と重複する、あるいは時期が前後する掘立柱建物が他にも存在したことを示す。

#### **952 柱穴・650 柱穴 (図 37)**

09-2-2 区の中央部、掘立柱建物 3 周辺で検出した柱穴である。いずれも直径 0.2 m、深さ 0.15 ～ 0.25 mをはかる。断面は逆台形もしくはU字形を呈する。

#### **732 柱穴・735 柱穴・757 柱穴・758 柱穴・789 柱穴・807 柱穴・804 柱穴・803 柱穴・767 柱穴・769 柱穴・774 柱穴・773 柱穴・781 柱穴・775 柱穴 (図 37)**

09-2-2 区の掘立柱建物 1 周辺で検出した柱穴である。いずれも直径 0.25 ～ 0.4 m、深さ 0.2 ～ 0.4 mをはかる。断面形は逆台形を呈するものが多い。757 柱穴・758 柱穴・789 柱穴・807 柱穴・804 柱穴・774 柱穴・769 柱穴は中心に直径 0.1 ～ 0.2 mの柱根痕が残る。時期的には柱穴の規模などから、掘立柱建物 1 より新しくなるか。

#### **824 土坑・825 土坑・805 土坑 (図 37)**

09-2-2 区の掘立柱建物 1 の北側、66 溝と交わるところで検出した土坑である。直径 0.1 ～ 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

#### **468 柱穴・471 柱穴・491 柱穴・489 柱穴・485 柱穴・483 柱穴・500 柱穴・494 柱穴・487 柱穴・488 柱穴・503 柱穴・502 柱穴・507 柱穴・492 柱穴・493 柱穴・428 柱穴 (図 38)**

09-2-2 区の東端で検出した柱穴である。いずれも、平面形は円形で、直径 0.1 ～ 0.3 m、深さ 0.3 ～ 0.4 mをはかる。断面形は逆台形もしくはU字形を呈する。中心に直径 0.1 ～ 0.2 mの柱根痕が認められ、埋土は 2 層から 3 層に分かれ水平に堆積する。深さがあり整った掘方でなので、掘立柱建物などの柱穴だろう。

491 柱穴は上層から遺物が出土した。487 柱穴と 488 柱穴はほぼ並列し、同じ柱穴の建て替えと考えられる。503 柱穴と 502 柱穴は切り合いをもつ。503 柱穴から 9 世紀後葉から 10 世紀前半の土師器が出土している。492 柱穴の柱掘形内にも遺物が含まれていた。

468 柱穴・471 柱穴と 491 柱穴、494 柱穴などは南北に列に並び、建物の柱列をなすようにも思われるが、掘立柱建物を復原できなかつた。しかし、平面形が隅丸方形でなく円形であり、規模的にも掘立柱建物 1・2 ほどは大きくないなど、柱穴の規模や形状に類似点があることから、掘立柱建物 3 と匹敵する規模の建物の柱穴だった可能性が高い。時期的にも同時期の遺構群ではないかと考える。

#### **549 柱穴・689 柱穴・552 柱穴・553 柱穴・550 柱穴・624 柱穴 (図 38)**

09-2-2 区の掘立柱建物 3 及び 600 溝周辺で検出した柱穴である。

いずれも直径約 0.2 m、深さ 0.25 ～ 0.4 mをはかり、中心には直径 0.1 mの柱根痕が認められる。断面形はU字形を呈する。552 柱穴と 553 柱穴は切り合いをもつ。552 柱穴は直径 0.4 m、深さ 0.3 mをはかる。柱掘形が南に傾き、柱の抜き取りが行われたと推測できる。

平面や断面形状・規模などからこれらの柱穴群も掘立柱建物 3 と重複する建物の柱穴の可能性もある。

#### **427 土坑・423 土坑・422 土坑・425 土坑・426 土坑 (図 38)**

09-2-2 区の東端、692 溝の南で検出した土坑である。427 土坑・423 土坑・422 土坑は直径 0.2



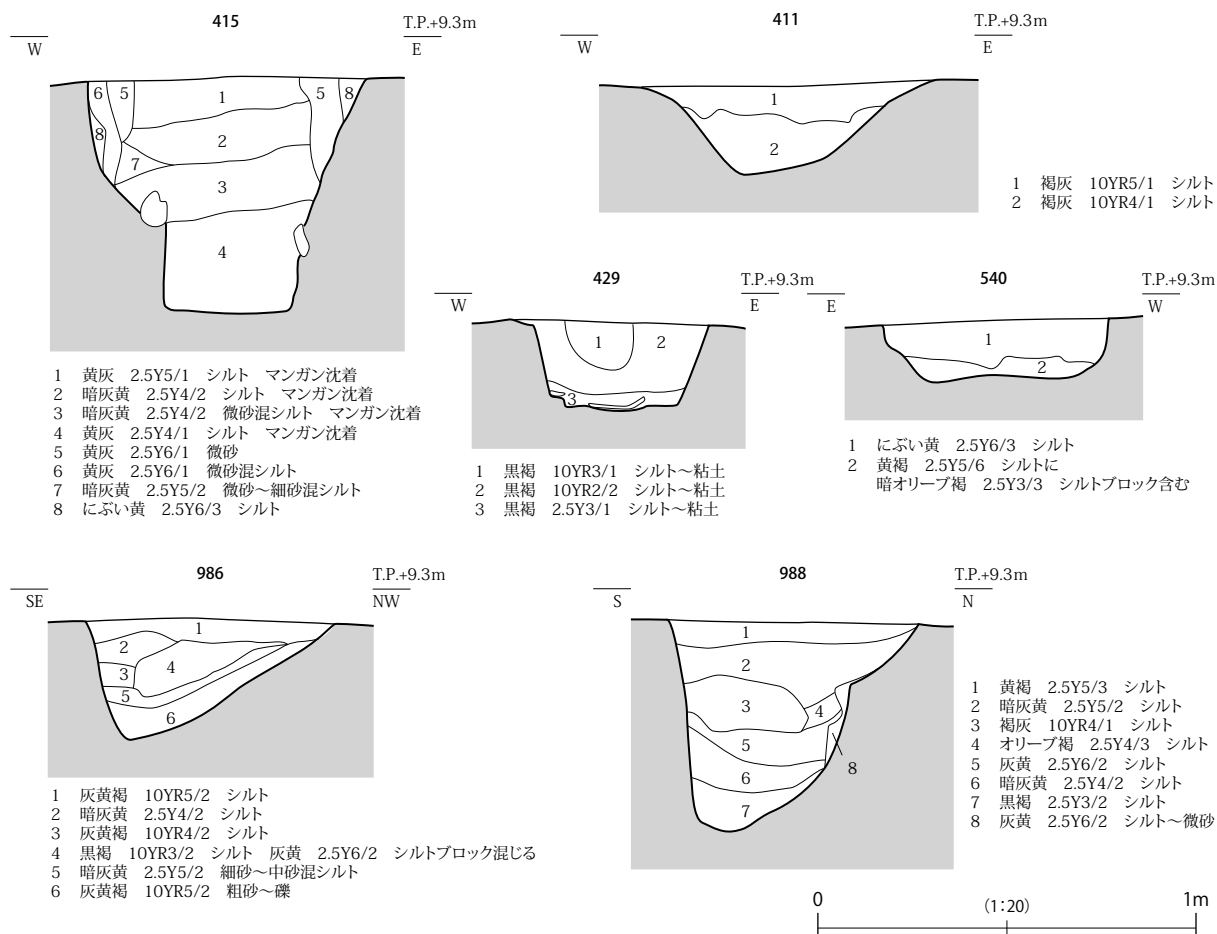


図 39 09-2-2区 遺構断面図 (5)

m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。425 土坑・426 土坑は直径 0.3 m、深さ 0.3 mをはかる。断面形はU字形を呈する。柱穴だった可能性が高い。

#### 415 土坑 (図 39)

415 土坑は 09-2-2 区の掘立柱建物 3 の東南隅よりさらに東南で検出した。

円形の土坑であるが、底面は方形となる。直径 0.75 m、底径 0.3 m、深さ 0.6 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は水平に 4 層が堆積する。

上層のみ側面が膨らみ中心部と違う土が 2～3 層、土が詰められている。その内は直径 0.3～0.4 m の円柱をなすことから、何らかの井戸枠を備えた井戸だった可能性がある。時期は不明である。

#### 411 土坑 (図 39)

411 土坑は 410 井戸のさらに南南西で検出した。円形の土坑である。直径 0.8 m、深さ 0.25 mをはかる。断面形は碗形を呈する。

#### 429 土坑 (図 39)

429 土坑は 09-2-2 区の東端、692 溝の南で検出した。425 柱穴や 426 柱穴より東に位置する。円形の土坑である。直径 0.5 m、深さ 0.25 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。上層にみられる直径 0.2 m、深さ 0.1 m 程度の埋土の堆積を柱の抜き取り痕とすると、柱穴だった可能性もある。底部からは土器片が出土した。

#### 540 土坑 (図 39)

540 土坑は 09-2-2 区の用水路より東に位置する。591 土坑より南下し、541 溝を切る。長円形

の土坑である。長径 1.4 m、短径 0.6 m、深さ 0.15 mをはかる。断面形は皿形を呈する。

#### 986 土坑 (図 39)

986 土坑は 09 - 2 - 2 区の北東部、982 溝と 983 溝の間に位置する。東には同形状の 988 土坑が存在する。アメーバ状の不定形の土坑である。短辺が 0.65 m、深さ 0.3 mをはかる。断面形は西南に寄った V 字形を呈する。

#### 988 土坑 (図 39)

988 土坑は 09 - 2 - 2 区の用水路より東に位置する。982 溝と 983 溝の間で、西には 986 土坑が位置する。不定形の土坑である。短辺が 0.65 m、深さ 0.55 mをはかる。断面形は V 字形を呈する。

以上、09 - 2 区、09 - 3 - 9 区では溝、土坑、柱穴、井戸などの 1000 以上にも及ぶ多数の遺構を検出した。それらは 2 つに大別できる。

一つは掘立柱建物 1・2 を中心とする。東西を長軸として構成される建物、柱穴群や 720 井戸、これらを区画する溝などで、調査区の中央よりやや西にかたまってみられ、さらに西に続くと予想される。時期的には 9 世紀末から 10 世紀初めと平安時代前半の様相を示す。

もう一つは掘立柱建物 3 を中心とする。南北を長軸として構成される建物や 590 土坑、591 土坑などによって構成される一群である。調査区の中央から東にかけてみられ、時期的には 10 世紀後半から 11 世紀とやや後出である。

この各群の中でも、柱穴同士、柱穴と溝など複数の切り合い関係が認められる。つまり、断絶することなくこの土地が住居空間としての利用が続いたことを示している。遺構のより詳細な変遷過程や北側の大和川線調査で検出した平安時代の建物群との関係などは総括の章に委ねる。しかし、北側建物群ほどの密集度や希少遺物の出土はないものの、掘立柱建物 1・2 はやや規模も大きく、590 土坑から緑釉陶器が出土したことも、この建物群の住民が単なる農民層ではないことを示唆するものだろう。

また、調査区の中央東端などでは 11 世紀以降、近世の井戸などもわずかだが確認した。遺物包含層が 0.3 m 程度と堆積が浅いこともあり、古代から近世までの数百年の時間経過がこの 2 層から地山面までの間に凝縮されている。

## 第 2 節 遺物

### 第 1 項 遺構出土遺物

#### 45 溝 (図 40、図版 33・36)

45 溝からは比較的まとまった量の遺物が出土し、そのうち、土師器杯 A・椀 A・皿・甕、須恵器杯 B 蓋・鉢・壺、平瓦の 12 点を図示した。

なお、土師器の器種のうち、杯 A と椀 A の区別の基準は以下の通りである。杯 A は、底部が平らで大きく、体部は外上方に比較的まっすぐに開く、器高が低く浅い器形のもの、椀 A は、底部が丸みを帯びて小さく、体部は外上方に内湾しながらのび、器高が高く深い器形のものとした。

1 は土師器椀 A で、口径 13.5 cm、器高 3.3 cmをはかる。体部はやや内湾して口縁部にのび、端部は外反して薄くおさまる。底部は平らである。外面にはユビオサエおよびナデが認められる。2 は土師器杯で、口径 14.4 cm、器高 2.5 cm、底面は平らであるが、若干、外湾する。口縁端部は外反気味に丸く

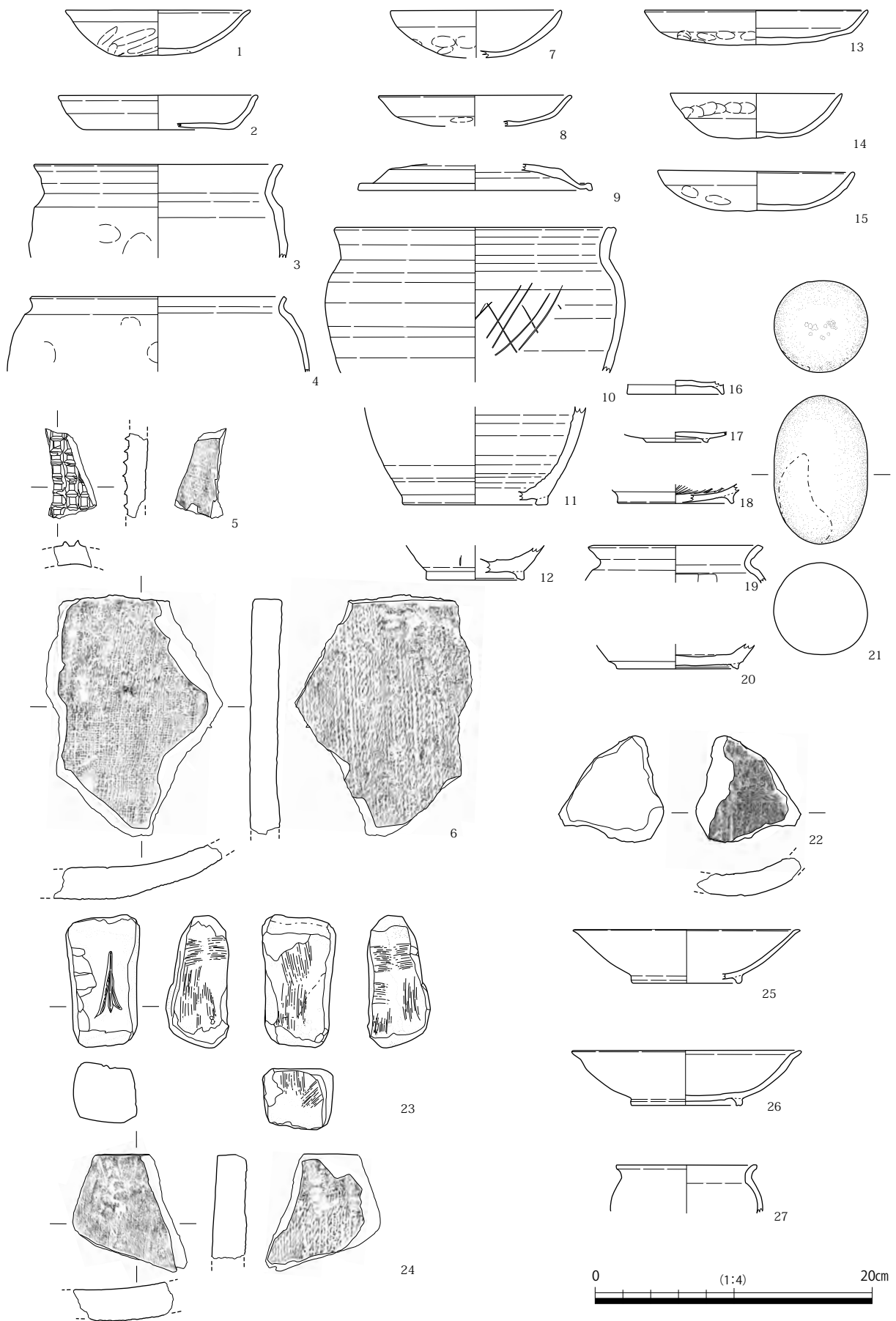


图 40 09-2区 遺構出土遺物実測図(1)

おさまる。

7は土師器椀Aで、口径12.4 cm、器高3.4 cmをはかる。体部はやや内湾し、端部は薄くおさまる。底部は平らである。内外面には磨滅するがユビオサエおよびナデが認められる。8は土師器皿で、口径13.9 cm、器高2.2 cmをはかる。口縁部は強いユビオサエにより外反し端部は丸くおさまる。

3・4は土師器甕である。3は口径17.9 cmで、口頸部は立ち気味に外上方に開く。口縁端部は小さく面をなす。口頸部外面は強いヨコナデで平滑に調整し、肩部には稜線が巡る。体部はユビオサエによる凹凸を残す。4は口径19.2 cmで、口頸部はごく短く、やや外上方に立ち上がる。外面にはユビオサエの痕跡が残る。9は須恵器杯B蓋で、口径は16.8 cmをはかる。口縁部は段をなして屈曲する。10は口径20.4 cmの須恵器鉢(D)で、ゆるやかに内湾する体部と外反気味に立ち上がる口頸部からなる。口縁端部は面をなす。体部内面には、右下方から左上方へのびる斜線の上から、これと交差する右上方への斜線からなるヘラ記号がみられる。11・12は須恵器壺で、ともに底端部に高台を貼り付けている。11は高台径10.3 cm、12は高台径6.8 cmをはかる。

5・6は平瓦である。5は凸面に正格子文様が施され、6は甲板に巻き付けた縄目痕がみられ、端部を部分的にナデ消している。ともに凹面に布目が残るが、5は11本/1 cmと特に細かい。6の端面はヘラケズリで調整している。

土師器杯・椀・皿の器壁は薄く、口縁端部に外反がみられる。また、土師器甕の口頸部は短く、杯・椀・皿と同じく、体部外面にユビオサエの痕跡が残る。これらの特徴に須恵器の型式編年を加えると、45溝出土遺物は平安京Ⅱ期中<sup>1)</sup>、平安時代Ⅱ期中段階<sup>2)</sup>に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

### 23 溝 (図40-13、図版31)

13は土師器皿、口径16.2 cm、器高2.5 cmをはかる。ほぼ完形である。底部は厚く、口縁部は外反気味にたちあがる。底部にヘラ状の工具痕とユビオサエの痕が強く残る。内面は剥離が著しいが、内外面ともナデと思われる。

### 170 溝 (図40-14・15・21)

14(図版31)は土師器椀Aで、口径12.4 cm、器高3.3 cmをはかり、体部は内湾して口縁部にいたる。15(図版31)は土師器杯Aで、口径14.3 cm、器高3.0 cmをはかり、底部は平らである。外面にユビオサエをおこなうが、14は指をずらしながら押さえていく状況が明瞭に残る。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

21(図版34)は砂岩製の磨石とみられる。長径10.7 cm、短径6.7 cmをはかる。敲打痕がみられ、一部、叩石として用いたが、石器の表面が全面に平滑になっていることから、主に磨石として使用したと考える。上層となる2層相当層からは弥生土器が出土しており、この石器も弥生時代に属する可能性があるが、明確に時期を確定することはできない。

### 541 溝 (図40-16～19)

16・17は土師器杯Bで、16は高台径7.0 cm、17は4.5 cmと小形で形骸化した高台を貼り付けており、器壁は薄い。18は黒色土器A類椀で、高台径8.4 cm・高さ0.7 cmをはかる。内面は比較的ていねいなヘラミガキを施す。19は土師器甕で、口径12.6 cmをはかる。口頸部は外上方に屈曲し、口縁端部は面をなす。体部内面は板ナデで調整している。平安京Ⅱ期、平安時代Ⅱ期に併行する時期とみられ、10世紀前半頃の可能性が高い。

#### 64 溝 (図 40 - 20)

20 は須恵器杯 B の身で、底端部に断面三角形の小型の高台を貼り付ける。高台径 8.8 cm をはかる。9 世紀と考えられる。

#### 1028 溝 (図 40 - 22)

22 は丸瓦の一部である。碎片のため長さ、幅は不明である。厚さ 1.5 cm をはかる。外面には縄目痕、内面には布目痕が認められるが、外面は剥離が激しい。

#### 759 土坑 (図 40 - 23)

23 (図版 34) は砥石で砂岩製とみられる。最大長 9.6 cm、幅 5.3 cm、厚 4.1 cm をはかる。擦過痕は 5 面で確認できる。うち面積の広い 1 面には、縦方向に細長く深い擦過痕も残る。裏面には火を受けた痕跡が残る。周辺遺構の時期から平安時代頃と考えられる。

#### 916 溝 (図 40 - 24)

24 (図版 36) は平瓦である。凸面には叩板に巻き付けた縄目痕がみられ、端部は一部ナデ消している。凹面には布目が残る。端面はヘラケズリで調整している。平安時代前半期とみられる。

#### 940 溝 (図 40 - 25 ~ 27)

25 (図版 31)・26 (図版 34) は土師器杯 B で、25 は口径 16.4 cm、器高 3.9 cm、26 は口径 16.3 cm、器高 4.0 cm をはかる。体部は外上方にのび、口縁端部は外反して薄くおさまる。25 の器壁は特に薄い。表面が摩滅しているため、ともに調整は不明である。27 (図版 34) は土師器甕で、口径 10.2 cm をはかる。内湾する体部から外湾する口頸部が立ち上がる。口縁端部は丸くおさまる。表面は磨滅のため調整は不明瞭で、内面にはススが付着する。これらの土器は、平安京Ⅱ期中～新、平安時代Ⅱ期中～新段階に併行する時期とみられ、9 世紀後葉～10 世紀前半頃と考えられる。

#### 590 土坑 (図 41 - 28 ~ 33)

墓の可能性もみられる 590 土坑からは、ややまとまりをもった遺物が出土した。そのうち、緑釉陶器皿、黒色土器 A 類椀、土師器椀 A・杯 B・小皿の 6 点を図示した。

32 (図版 32) は土師器椀 A で、口径 11.0 cm、器高 3.1 cm をはかる。小さい底部はやや内湾し、体部も内湾して外上方にのび、口縁端部は丸くおさまる。外面は中央部をユビオサエ、口縁部をヨコナデで調整する。内面と外面一部にススが付着する。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期古段階に併行する時期とみられ、10 世紀後半と考えられる。

33 は土師器杯 B で、高台径 6.8 cm をはかる。底部には小形の高台を貼り付ける。器壁は比較的薄いといえる。器面は摩滅している。

29 (図版 32) は土師器小皿で、口径 10.6 cm、器高 1.6 cm をはかる。平らな底部から内湾して立ち上がり、体部は浅い。口縁部は外反した後、上方に肥厚させる。「て」の字状口縁皿に含まれるものである。器面は摩滅しているため不明瞭だが、ナデ調整とみられる。色調は、他の多くの土師器が赤褐色系であるのに対して、灰白色 (10YR8/2 灰白) を呈し、胎土は特に密である。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10 世紀後葉～11 世紀前葉頃と考えられる。

28 (巻頭図版 2、図版 32) は緑釉陶器皿である。口径 12.7 cm、器高 2.5 cm をはかる。やや内側に湾曲する底部から、体部が外反しながら外上方にのび、口縁端部もそのまま外反して丸くおさまる。底部端に高さ 0.7 cm の、高台底面がわずかに段をなす有段輪高台を貼り付ける。高台径は 6.4 cm となる。底部内面中央は不明だが、その他は全面に回転ナデを施す。底部外面には糸切り痕が残り、高台の貼り

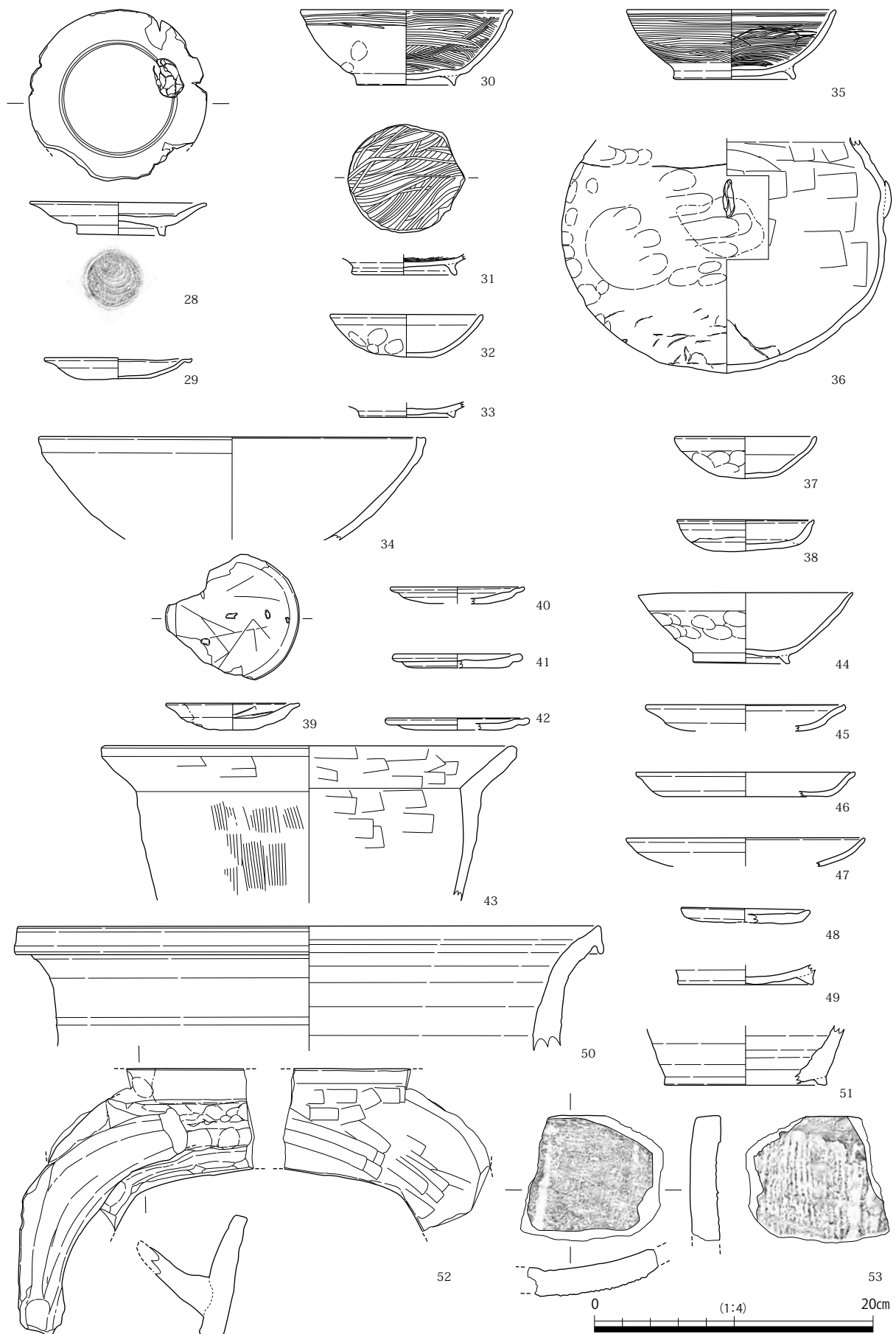


图 41 09-2区 遺構出土遺物実測図 (2)

付け後の調整は特に粗雑である。底部外面を除く全面に濃緑色の釉がかかる。高台内側には一部釉が付着している。色調は断面部で 7.5YR7/4 にぶい橙、露胎部で 7.5YR7/6 橙を呈する。内面の底部から体部への屈曲部に圈線が巡る。この屈曲部に成形の補修とみられる楕円形 (3.0 × 1.8 cm) の粘土を薄く重ねた痕跡が残る。焼成によるヒビ割れ、釉の盛り上がりなども認められる。また、全体に釉の塗り方は均等でなく、釉の厚みに差がみられる。胎土や高台ならびに底部外面の特徴から近江産の緑釉陶器と考えられる。およそ高橋編年Ⅳ期に併行するものとみられ、生産された時期としては 10 世紀前半～中頃と考えるのが妥当であろう。

30 (図版 32)・31 は黒色土器 A 類椀である。30 は口径 15.1 cm、器高 5.4 cm、高台径 7.0 cm をはかる。平らな底部と内湾しながら外上方に開く体部からなる。口縁部はわずかに外反して丸くおさまる。底部にはほぼ垂直に高台を貼り付ける。調整は内面全面にヘラミガキ、外面口縁部はヨコナデの後にヘラミガキ、体部はユビオサエの後にナデを施したとみられる。31 は高台径 7.6 cm をはかる。平らな底部にやや外下方に開く高台を貼りつける。内面はヘラミガキで調整する。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅱ期新～Ⅲ期古段階に併行するとみられ、10 世紀中葉～後半頃と考えられる。

これらの出土遺物の中では緑釉陶器皿の年代がやや遡るが、伝世の可能性も含むといえる。590 土坑への埋納時期としては 10 世紀後半の可能性が高いといえる。

#### 591 土坑 (図 41・図版 33—34)

34 は土師器鉢で、口径 27.8 cm をはかる。体部は外上方に大きく開き、口縁部でやや内湾して、端部は面をなす。器壁は厚い。体部内面は板ナデとみられるが、外面は剥離等のため調整が不明である。内面の体部上方から外面全面にかけてススが付着している。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅱ～Ⅲ期古段階に併行する時期とみられ、10 世紀後半頃の可能性がある。

#### 1009 土器 (図 41—35・36)

35 (巻頭図版 2、図版 32—35) は黒色土器 A 類椀で、口径 15.1 cm、器高 5.0 cm、高台径 8.8 cm をはかる。わずかに内湾する平らな底部から、外上方に内湾する体部がのびる。口縁端部はわずかに外反して丸くおさまる。底部には外下方に開く高台を貼り付ける。調整は口縁部内外面をヨコナデで整えた後、内外面全面にていねいなヘラミガキを施す。

36 (巻頭図版 2、図版 32—36) は土師器甕で、頸部径 19.1 cm、体部最大径 23.3 cm、体部器高 16.7 cm をはかる。体部はほぼ球形をなす。口頸部は欠損しているが、口径は 20 cm 程度の立ち気味に開く短い口頸部が接続していたとみられる。肩部には、長 2.7 cm、幅 0.9 cm、高 0.4 cm の形骸化した把手とみられる粘土塊を貼り付けている。肩部は一部欠損しているが、把手を左右対称とすると、片側のみであった可能性が高い。外面は全面にユビオサエを施すため、器面は凹凸を呈する。また、肩部から体部上半部にかけては掌を押し付けた痕跡が残る。体部下半部から底部にかけての調整は、粘土接合痕が残り、特に粗雑である。底部上方には置き台と考えられる口縁部のあたり痕が残る。一方、内面は体部全面にていねいな板ナデを施し、平滑な器面に仕上げている。底部には一部粘土接合痕が残る。

以上の特徴から、2 点の土器が埋められたのは平安京Ⅲ期、平安時代Ⅱ期新～Ⅲ期古段階に併行するとみられ、10 世紀中葉～後半頃と考えられる。

#### 405 土坑 (図 41・図版 31—37・38)

37 は土師器椀 A で、口径 10.4 cm、器高 3.0 cm をはかる。体部は内湾しながら口縁部にのび、端部は丸くおさまる。外面にはユビオサエ痕がみられる。38 は土師器小皿で、口径 9.9 cm、器高 2.3 cm をはかる。

底面は平らで、体部は内湾しながら外上方にのび、口縁端部は外反後、つまみ上げて薄く仕上げる。体部内外面と底部内面はヨコナデで比較的ていねいに調整する。色調は白色を帯びた灰黄色を呈する。平安京Ⅲ中～新、平安時代Ⅲ期古段階に併行する時期とみられ、10世紀後葉～11世紀前葉と考えられる。

#### 920 ピット (図 41 - 39・40)

39 (図版 32)・40 は土師器小皿で、39 は口径 9.4 cm、器高 2.0 cm、40 は口径 9.6 cm、器高 1.2 cm をはかる。底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部で外反して、端部が比較的薄くおさまる浅い皿である。39 は器壁が特に厚く、底部内面は板ナデを施すが、外面は不調整で、成形も粗雑である。内底面には土器製作時に付いたとみられる粗殻状の圧痕が残る。40 は底部外面にユビオサエの痕跡が残る。平安京Ⅲ期新、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10世紀後葉～11世紀前葉頃と考えられる。

#### 923 土坑 (図 41 - 41～43)

41・42 は土師器小皿で、41 は口径 9.0 cm、器高 1.0 cm、42 は口径 10.0 cm、器高 0.9 cm をはかる。底部からゆるやかに立ち上がり、口縁部で外反して、端部は丸くおさまる。器壁は厚い。円盤状のコースタ形皿の範疇に含まれる浅い皿といえる。底部内外面に 41 はユビオサエ、42 は板ナデの痕跡がみられる。平安京Ⅲ期新、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10世紀後葉～11世紀前葉頃と考えられる。

43 (図版 33) は土師器甕で、口径 29.8 cm をはかる。体部から口頸部が外上方に屈曲して大きく開き、口縁部は丸くおさまる。器壁は厚い。内面は全面に横方向の板ナデ、外面は口頸部に板ナデ、体部に 6 本 / 1 cm 程度の縦方向のハケで調整する。内外面には部分的にススが付着する。平安京Ⅰ期、平安時代Ⅰ期併行の 8 世紀に遡る可能性もあるが、41・42 と同時期とみる方が自然だろう。

923 土坑の廃絶時期は土師器小皿の年代と考えられる。

#### 460 溝 (図 41 - 44～53)

460 溝からは比較的まとまった量の遺物が出土し、そのうち、土師器杯 B・皿・小皿・黒色土器 A 類椀、須恵器甕・壺、移動式竈、平瓦の 10 点を図示した。

44 (図版 31) は土師器杯 B で、口径 15.4 cm、器高 5.1 cm をはかる。体部は外上方に開いて口縁部にのび、端部は薄くおさまる。外面体部・底部はユビオサエによる凹凸面を呈するが、体部上方はヨコナデで仕上げているため、ユビオサエとの境目に稜線が巡る。器壁は全体に薄い。45～48 は土師器皿で、45 は口径 14.4 cm、器高 1.9 cm、46 は口径 15.8 cm、器高 1.8 cm、47 は口径 17.2 cm、器高 2.1 cm をはかる。ともに底部は平らとみられる。45 の体部は内湾して立ち上がり、外面のヨコナデによって外湾し、端部は丸くおさまる。46 の口縁端部はやや外反して丸くおさまる。47 は体部が内湾して外上方にのび、口縁端部は薄くとまる。器壁も薄く仕上げている。48 (図版 31) は土師器小皿で、口径 9.3 cm、器高 1.2 cm と浅い。器厚 0.7 cm と厚く、平らな面をなす底部から、外上方に短く立ち上がる。49 は黒色土器 A 類椀で、高台径 9.6 cm をはかる。高さが 1.0 cm となる比較的大形の高台を貼り付けており、器壁も厚みをもつ。

50 (図版 34) は大形の須恵器甕で、口径は 41.9 cm をはかる。51 は須恵器壺で、底端部に形骸化した小型の高台を貼り付ける。高台径は 11.7 cm となる。内面には粗雑な回転ナデを施している。52 (図版 34) は移動式竈である。両側面から中央部にかけて下辺から逆 U 字形をなす焚口を設ける。焚口の上面は庇で覆っている。庇は斜め上方を向いており、指で押さえながらていねいに貼り付けている。庇の突出幅は中央部で 6 cm 程度とみられ、先端部を尖らせている。上面の釜口部は直径 28.6 cm をはかる。



外面・底外面ともにユビオサエ、上面と内面上端部はヨコナデを施している。内面は比較的ていねいな板ナデ調整を行う。53（図版36）は平瓦である。凸面には甲板に巻き付けた縄目痕がみられ、端部は一部ナデ消している。凹面には布目が残る。端面はヘラケズリで調整している。

460 溝は平安京Ⅱ期中～新、平安時代Ⅱ期中～新段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀前半頃と考えられる。

#### 400 溝（図42—54・55）

54は土師器椀Aで、口径15.0cmをはかる。体部は内湾して口縁部にのび、端部は丸くおさまる。外面にはユビオサエの痕跡が残る。55（図版31）は黒色土器A類椀で、口径17.0cm、器高4.2cmをはかる。体部は内湾して外上方にのび、口縁端部は外湾して薄くとまる。小形の高台を貼り付けている。器壁は全体に薄い。調整は外面にユビオサエの後、ナナメ方向ナデ、内面にヘラミガキを施すが、内外面とも表面が摩滅しているため不明瞭である。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 492 土坑（図42—56）

56（図版31）は土師器皿で、口径14.6cm、器高2.3cmをはかる。底面は平らであるが、強いユビオサエのため凹凸面をなす。体部は外上方に外反気味に開き、口縁端部は丸くおさまる。体部内外面にはヨコナデを施す。口径は大きいものの、器高は低く、ユビオサエが明瞭であることから、平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、およそ9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 494 土坑（図42—57）

57（図版31）は土師器椀Aで、口径14.9cmをはかる。体部は内湾して立ち上がり、上方はやや外反する。口縁端部は丸くおさまる。外面の体部中央部はユビオサエ、上方部はヨコナデで調整する。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 497 ピット（図42—58）

58は土師器杯Bで、口径15.4cm、器高3.8cmをはかる。体部は外上方に大きく開き、口縁端部は薄くおさまる。底部にはやや不整形な高台を貼り付ける。体部外面はユビオサエ、上方はヨコナデを施す。全体に器壁が薄く、器面はユビオサエによる凹凸が明瞭に残る。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10世紀後半の可能性が高いといえる。

#### 491 土坑（図42—59）

59（図版35）は土師器甕で、口径17.8cmをはかる。球形に近いとみられる体部と、外上方に屈曲する口頸部からなる。口縁部はやや外反し、端部は面をなす。口頸部内外面にはヨコナデ、体部外面はユビオサエによる凹凸を残す。平安京Ⅱ期、平安時代Ⅱ期に併行する時期とみられ、10世紀前半頃と考えられる。

#### 720 井戸（図42—60）

60は土師器杯Aで、口径14.2cmをはかる。器高は3.2cm程度とみられる。体部は内湾して外上方にのび、口縁端部は外反して薄くおさまる。外面は中央部をユビオサエ、口縁部をヨコナデで調整する。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 499 土坑（図42—61）

61（図版31）は土師器椀Aで、口径13.9cm、器高3.0cmをはかる。体部は内湾して外上方にのび、口縁端部は外反して薄くおさまる。器壁は全体に薄い。外面は中央部をユビオサエ、口縁部をヨコナデ

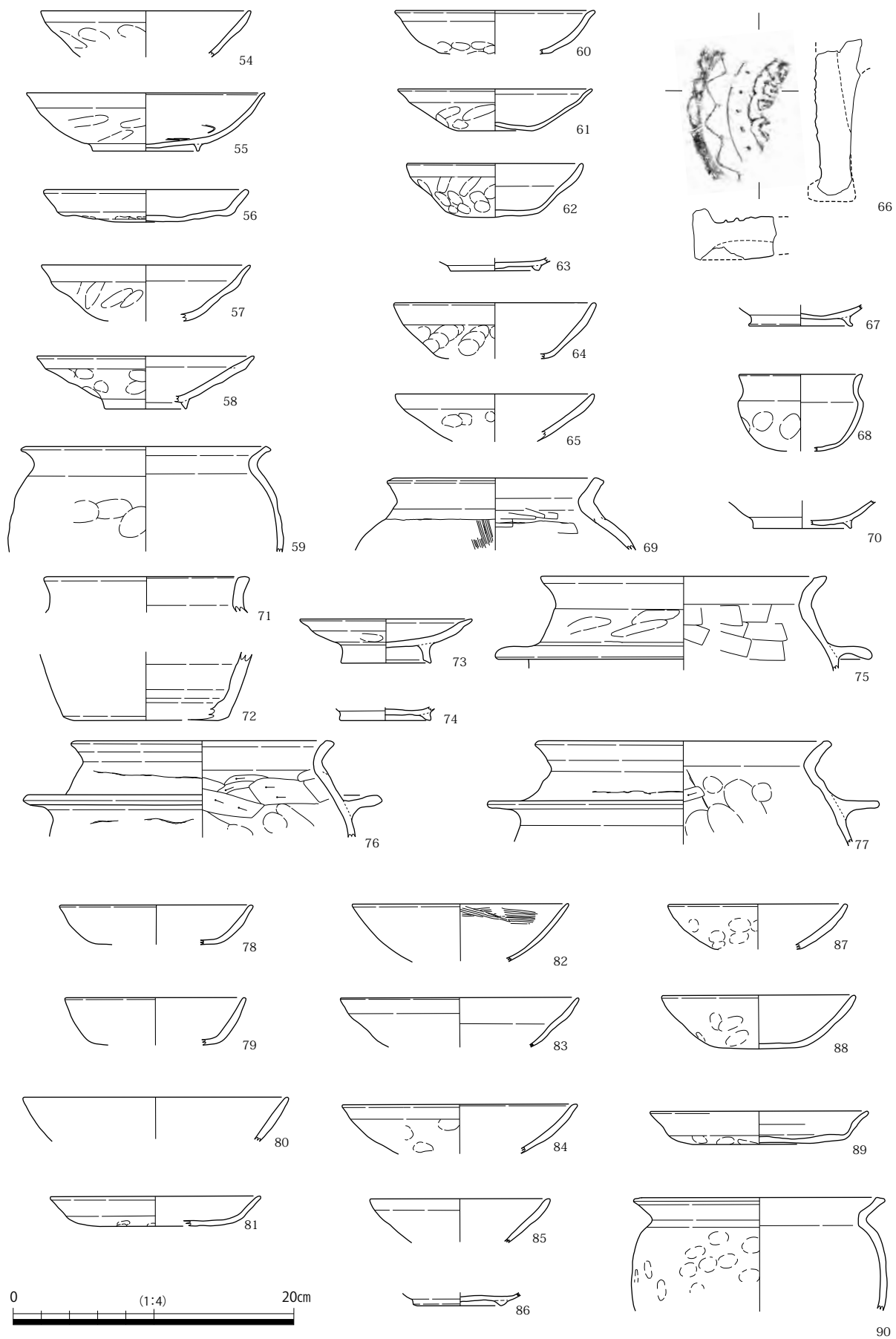


图 42 09-2区 遺構出土遺物実測図 (3)

で調整する。口径は大きいものの、器壁がさらに薄くなっており、新しい要素を含んでいる。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、およそ9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 503 ピット (図42-62・63)

62 (図版31) は土師器椀Aで、口径12.6 cm、器高3.9 cmをはかる。体部は内湾して立ち上がる。外面中央部はユビオサエのため凹凸面をなす。口縁部でさらに内湾を強め、端部は丸くおさまる。63は土師器杯Bで、高台径6.4 cmをはかる。底部に不整形な小型の高台を貼り付ける。器壁は比較的薄い。小形化した椀や顕著なユビオサエの痕跡から、平安京Ⅱ期中～新、平安時代Ⅱ期中～新段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀前半頃と考えられる。

#### 505 ピット (図42-64)

64は土師器椀Aで、口径14.4 cmをはかる。器高は4.0 cm程度とみられる。体部は内湾して口縁部にのび、端部は丸くおさまる。体部外面はユビオサエを施すが、指をずらしながら押さえた痕跡が明瞭に残る。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、およそ9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 522 ピット (図42-65)

65は土師器杯Aで、口径14.2 cmをはかる。体部は外上方に大きく開き、口縁端部は丸くおさまる。体部外面はユビオサエを施す。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

#### 800 柱穴 (図42-66)

66 (図版34) は複弁蓮華文軒丸瓦である。瓦当面の復原径は16.0 cmである。内区に8葉とみられる複弁、外区内縁に連珠文、外縁に鋸歯文を配している。弁区復原径8.4 cm、外縁高0.9 cm、瓦当厚2.9 cmをはかる。胎土は0.2 cm以下の長石等を含むが、全体に密である。色調は5Y3/1 オリーブ黒で、焼成は良好である。蓮華文は間弁が連続するB系統で、8世紀前半～中葉のものと考えられる。

#### 820 土坑 (図42-67)

67は土師器杯Bで、高台径は7.4 cmをはかる。高台は高さ0.7 cm、断面形は細く不整形で、端部は外反して薄くとまる。高台貼り付け後の調整は粗雑である。器壁は全体に薄い。底部外面にはユビオサエの痕跡が残る。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10世紀後半の可能性が高いといえる。

#### 833 土坑 (図42-68)

68 (図版32) は土師器鉢で、口径8.8 cm、器高5.5 cmをはかる。内湾する体部から屈曲して外湾する口頸部が立ち上がる。口縁部は外反して丸くおさまる。口頸部内外面にヨコナデ、体部外面にはユビオサエを施す。内面は板ナデとみられる。平安京Ⅱ期、平安時代Ⅱ期に併行する時期とみられ、10世紀前半頃と考えられる。

#### 689 柱穴 (図42-69・70)

69 (図版35) は土師器甕で、口径15.5 cmをはかる。球形に近いとみられる体部と外上方に短く屈曲する口頸部からなる。口縁端部は面をなす。全体に器壁が厚いという特徴がある。体部外面には、他地域からの影響とみられるハケ目がわずかに残り、内面は板ナデを施す。口頸部はヨコナデで調整する。体部上方の内外面に粘土接合痕がみられる。内外面には部分的にススが付着する。平安京Ⅲ期中～新、平安時代Ⅲ期古段階に併行する時期とみられ、10世紀後葉～11世紀前葉頃と考えられる。

70は土師器杯Bで、高台径7.0cmをはかる。底部にやや不整形な小形の高台を貼り付ける。全体に器壁は薄い。外面の色調は、出土した他の土師器より赤味の強い赤褐色(2.5YR5/4にぶい赤褐)を呈する。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられ、10世紀後半の可能性が高いといえる。

#### 634 土坑 (図42-71)

71は土師器甕で、ゆがみのため不明確だが、口径は14.6cm程度とみられる。口頸部は外湾気味に短く立ち上がり、器壁は厚い。内外面は板ナデの後、ヨコナデで調整している。平安京Ⅲ期中～新、平安時代Ⅲ期古段階に併行する時期とみられ、10世紀後葉～11世紀前葉頃と考えられる。

#### 807 ピット (図42-72)

72は須恵器壺で、底径11.8cmをはかる。平らな底部から外上方にまっすぐにのびる。器壁は厚い。内外面は回転ナデで調整する。焼成はやや不良である。平安時代前半、9世紀頃とみられる。

#### 821 土坑 (図42-73～75・77)

73(図版31)は土師器皿で、口径12.2cm、器高3.2cmをはかる。平らな底部から内湾して立ち上がり、外上方に大きく開く。口縁端部はわずかに外湾して、薄くおさまる。底部には高さ1.3cmの安定した高い高台を貼り付ける。高台端面は外傾する。器面が摩滅しているため不明瞭であるが、内面はヘラミガキによるていねいな調整、外面はユビオサエの後、ナデ調整とみられる。色調は白色系で、薄い橙色(7.5YR7/3にぶい橙)を呈する。胎土は特に密である。74は土師器杯Bで、高台径は6.6cmをはかる。底部には不整形なやや大形の高台を付ける。高台貼り付け後の調整は粗雑である。内底面はユビオサエの後、ナデを施す。

75・77(図版35)は土師器羽釜で、75は口径20.2cm、罅部径26.9cm、77は口径21.2cm、罅部径28.0cmをはかる。内上方にのびる体部と、外上方に外湾する口頸部からなる。口縁端部は75が明瞭な面を、77はゆるやかな面をなす。肩部には体部を全周する罅を貼り付ける。罅の形状は75が下方に湾曲し、77はほぼ水平である。ともに口縁部内外面はヨコナデ、75は体部外面にナデ、内面に板ナデで調整し、77は体部内面にユビオサエの痕跡が残るとともに、一部ヘラケズリで調整している。75は内面に、77は内外面にススが付着する。外面には粘土紐接合痕がみられる。

75・77の羽釜の時期は平安時代Ⅲ期古段階、土師器皿および土師器杯Bの時期は平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行する時期とみられる。よって、821土坑の時期は10世紀後半と考えることができる。

#### 760 土坑 (図42-76)

76(図版35)は土師器羽釜で、口径18.8cm、罅部径25.6cmをはかる。内上方にのびる体部と、外上方に外湾する口頸部からなる。肩部には体部を全周する罅を貼り付ける。口縁端部はゆるやかな面をなす。口縁部内外面はヨコナデ、体部内面上部はヘラケズリ、下部はユビオサエの痕跡が残る。内面から口縁部外面にかけて部分的にススが付着する。外面には粘土紐接合痕がみられる。胎土に角閃石を含み、生駒山西麓産とみられる。およそ平安時代Ⅲ期古段階に併行するとみられ、ほぼ10世紀後半頃と考えられる。

#### 1038 土坑 (図42-78・79)

78は土師器杯Aである。口径13.6cm、器高2.8cmをはかる。口縁部はやや外反気味である。79は土師器杯Aである。口径12.3cm、器高3.3cmをはかる。78に比べると深さがあり、器壁も厚く口縁部はすばまり気味である。

#### 1041 土坑 (図42-80・81)

80は土師器鉢または杯Aである。口径18.7cm、器高3.2cmをはかる。体部下半は欠損する。81は土師器皿である。口径15.0cm、器高2.2cmをはかる。底部は平らで口縁部は緩やかに外反する。

#### 1044 落込 (図42-82~90)

82(図版33)は黒色土器A類椀である。口径15.4cm、器高4.1cmをはかる。口縁部内面に密に暗文がみられるがそれより下は磨滅し、不明である。

83は土師器椀Aである。口径16.8cm、器高3.5cmをはかる。口縁部直線的に大きく開く。84は土師器椀Aである。口径16.8cm、器高3.5cmをはかる。体部は内湾気味に立ち上がる。体部外面にユビオサエ痕が残る。85は土師器椀Aである。口径12.8cm、器高3.2cmをはかる。86は土師器椀B底部である。底径6.4cmをはかる。87は土師器椀Aで、口径12.6cm、器高3.2cmをはかる。口縁部は内湾して立ち上がる。88は土師器椀Aである。口径13.6cm、器高3.8cmをはかる。底部は平らで、口縁部は体部から直線的に立ちあがる。

89(図版33)は土師器皿である。口径15.4cm、器高2.4cmをはかる。底部はユビオサエの痕残り、凹凸が著しい。口縁部はヨコナデで緩やかに外反する。

90(図版33)は土師器甕で体部下半を失う。口径17.9cm、残存高8.0cmである。器壁の厚さは0.5cm程度で薄く、均一である。内外面ナデで仕上げられるが、体部外面にユビオサエの痕が残る。口縁端部は平らである。南河内型の9世紀後半の甕である。

### 第2項 包含層出土遺物

#### 1層 (図43-91~93、96)、1・2層 (図43-94・107)、側溝 (図43-97・100・120)

91・92は染付磁器碗で、91は底部である。底径5.0cmをはかる。内面見込みには圏線と草花文が、外面も高台に圏線、体部に花文が描かれる。92は口径9.8cm、器高3.7cmをはかる。口縁部は直線的に立ち上がる。内面は口縁部に圏線が、外面には二重線で格子文が描かれる。

93は陶器壺で、口縁部から頸部のみ残存する。口径14.0cm、残存高5.1cmをはかる。頸部は短く直線的に立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。胎土には白色長石粒を含む。

96・97(図版34)は白磁碗で、口径はともに18.0cmをはかる。体部は外上方にのび、口縁部で玉縁をつくる。玉縁の断面形状は96が外方に張り出し、97は下方に垂れ下がる三角形を呈する。97の器壁は薄い。11世紀後半~12世紀前半頃と考えられる。94(図版34)は龍泉窯系の青磁蓮弁文碗である。復原口径は20cm程度とみられる。口縁端部から1.2cm下げて蓮弁を描いている。14世紀代と考えられる。100は弥生土器壺で、底径9.0cmをはかる。平らな底部から体部が外上方に立ち上がる。器壁は厚い。表面が磨滅しているため調整は不明である。弥生時代中期とみられる。120(図版36)は平瓦である。凸面は叩板に巻き付けた縄目痕がみられる。凹面には布目が残る。側面はヘラ切り、ヘラケズリで調整している。平安時代前半期とみられる。

#### 2層 (図43-95・98・99・101~116・121)

98は青磁碗である。口縁部は端反で、口径13.6cm、器高2.5cmをはかる。器壁は薄い。99は青磁碗である。筒状に開く体部をもつ。口径10.2cm、器高3.9cmをはかる。101は土師器鉢である。口径22.9cm、残存高5.6cm、器壁の厚さが0.6~1.0cmをはかる。口縁端部をつまみあげる。内面の口縁部から5cmほど下までは煤が付着することから、鉢ではなく煮炊具やその補助具(火鉢、火舎)等の用途も考えられる。95は須恵器こね鉢である。東播系のものと思われる。

102~104(104は図版35)は土師器甕で、口径は102が20.0cm、103が21.2cm、104が21.6

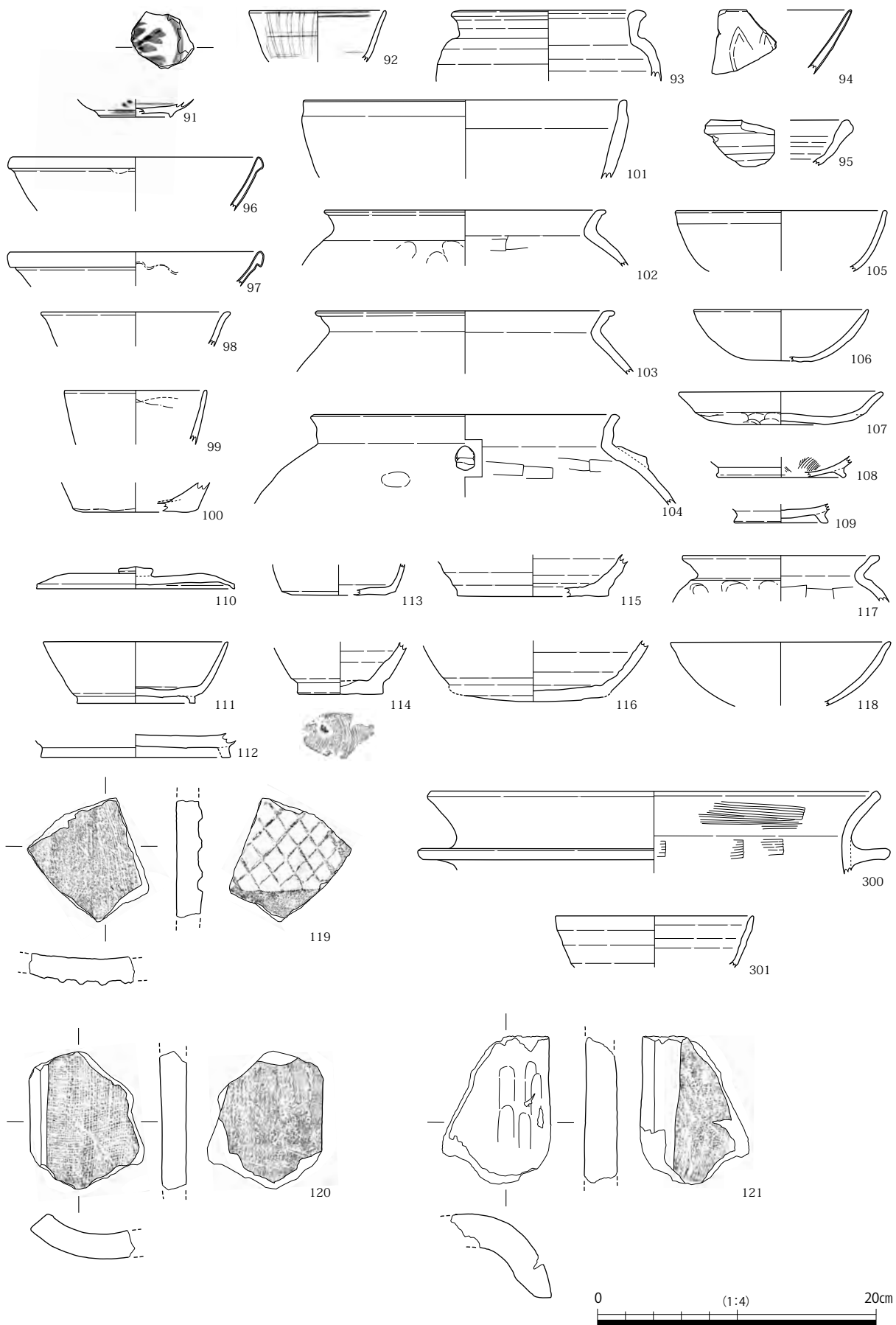


图 43 09 - 2 区 包含层出土遗物实测图

cmをはかる。体部は球形に近いとみられる。102・103は口頸部が外上方に大きく屈曲し、口縁部は外反して端部に面をなす。104は口頸部が立ち気味に外上方に屈曲し、口縁部は外反し、端部はゆるやかな面をつくる。102・103は口頸部内外面にはヨコナデ、102・104は体部内面に板ナデ、外面はユビオサエによる凹凸を残す。104は体部上方に把手の形骸化したものとみられる長さ2.8cm、最大幅1.4cm、断面山形の粘土塊を貼り付ける。これらの甕は、平安京Ⅱ～Ⅲ期、平安時代Ⅱ期～Ⅲ期古段階に併行するとみられ、10世紀頃と考えられる。

105・106は土師器碗Aとみられる。105は口径15.0cmをはかる。体部は内湾して口縁部にのび、端部は丸くおさまる。器壁は薄く、表面は摩滅のため調整は不明である。鉢になるかもしれない。口径の大きさや体部の内湾を勘案すれば、平安京Ⅰ期、平安時代Ⅰ期に含まれ、9世紀前後の可能性はある。106(図版32)は口径12.4cm、器高3.7cmをはかる。比較的小形の底部から、内湾しながら口縁部にいたる。口縁端部は薄くとまる。平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

107は土師器皿で、口径14.4cm、器高2.4cmをはかる。底部は平らで、体部は外湾してのび、口縁端部は外反気味に丸くおさまる。器壁は比較的厚い。底部外面にはユビオサエの圧痕や粘土接合痕が残る。口径は大きいものの、器高は低く、ユビオサエが明瞭であることから、平安京Ⅱ期中、平安時代Ⅱ期中段階に併行する時期とみられ、およそ9世紀後葉～10世紀初頭頃と考えられる。

108は黒色土器B類碗で、高台径は9.3cmをはかる。内湾する底部から外上方に体部がのびる。外下方に開く低い高台を貼り付ける。内外面をヘラミガキで調整する。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行するとみられ、10世紀後半～11世紀前半頃と考えられる。

109は土師器碗底部である。底径6.6cmをはかる。

110～116は須恵器である。110(図版32)は杯B蓋で、口径14.1cm、器高1.6cmをはかる。平らに近い天井部の中央につまみを付ける。口縁部はほぼ垂直に屈曲し、端部は薄くおさまる。内外面は回転ナデを施し、内面中央部はさらにナデで調整する。田辺編年MT 21型式に併行するとみられ、8世紀前半頃と考えられる。111(図版32)は杯Bの身で、口径13.3cm、器高4.4cmをはかる。平らな底部から、外上方に体部がのび、口縁端部は薄くとまる。底部端に高台を貼り付ける。体部内外面には回転ナデの後、底部内面に一定方向ナデを加える。田辺編年MT 21型式～TK 7型式に併行するとみられ、8世紀頃と考えられる。113は杯Aとみられる。底径は6.7cmをはかる。平らな底部からや上方に体部がのびる。器壁は薄い。体部内外面に回転ナデ、底部内面にはナデを施す。奈良時代～平安時代前半、8世紀～9世紀と考えられる。

112は壺の底部とみられる。平らな底部の端部には、高台径は13.6cmとなる高台を貼り付けている。器壁は厚い。底部外面はナデ、内面は周辺部に回転ナデ、中央部に不定方向ナデを施す。平安時代前半、8世紀～9世紀頃と考えられる。114・115は壺の底部とみられる。114は底径6.0cm、115は底径10.8cmをはかる。ともに平ら底部からほぼ垂直に立ち上がった後、外上方に体部が広がる。体部内外面には回転ナデを施す。114の底部外面には糸切り痕がみられる。平安時代前半、9世紀頃と考えられる。

116(図版32)は鉢もしくは壺の底部とみられ、底径10.5cmをはかる。底部外面は外側に突出する。底端部は剥離しているが、高台を貼り付けていた可能性もある。体部は外上方にのびる。底部外面は回転ヘラ切りの後、円周するように点々とヘラの圧痕が残る。その上に一部ナデを施す。体部内外面は回転ナデ、底部内面は不定方向ナデで調整する。平安時代前半、9世紀頃と考えられる。

121(図版36)は丸瓦である。凸面には縦方向のヘラナデ、凹面には布目がみられる。側面はヘラ切り、ヘラケズリで調整している。平安時代前半期とみられる。

#### 第1面精査(図43-117~119)

117は土師器甕で、口径14.0cmをはかる。口頸部は外上方に大きく屈曲し、口縁端部は面をなす。体部の調整は外面にユビオサエ、内面に板ナデが施されている。口頸部内外面にはヨコナデ、体部内面に板ナデ、外面はユビオサエによる凹凸を残す。平安京Ⅱ~Ⅲ期、平安時代Ⅱ期~Ⅲ期古段階に併行するとみられ、10世紀頃と考えられる。118は黒色土器B類碗で、口径15.6cmをはかる。体部は外上方に内湾してのび、口縁端部はわずかに外反して丸くおさまる。磨滅のため調整は不明である。平安京Ⅲ期、平安時代Ⅲ期に併行するとみられ、10世紀後半~11世紀前半頃と考えられる。

119(図版6)は平瓦である。凸面には叩板に刻んだ斜格子文様が施されている。凹面には布目が残る。平安時代前半期とみられる。

#### 第4層直上(図43-300・301)

300(図版35)は土師器羽釜で、口径32.0cm、鏝部径34.0cmをはかる。上方にのび上がる体部から、口頸部がゆるやかに外反して広がる。口縁端部はわずかに面をなす。肩部には体部を全周する短めの鏝を貼り付ける。口頸部外面に板ナデの後、外面にヨコナデを施す。口頸部から体部内面には6本/1cm程度の横方向のハケで調整する。胎土に角閃石を含み、生駒山西麓産とみられる。平安時代Ⅰ期に併行する時期とみられ、8世紀後葉~9世紀前葉頃と考えられる。あるいはもう少し古い時期の可能性もあるのか。301は須恵器杯身で口径14.0cmをはかる。体部は外上方に開き、口縁端部は薄くとまる。内外面は回転ナデを施す。平安時代前半、8世紀末~9世紀頃とみられる。

<注>

・第2節は1028溝、1038・1041土坑、1044落込出土遺物以外は林が執筆を担当した。

1) 古代の土器研究会 1992『古代の土器1 都城の土器集成』

古代の土器研究会 1993『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』

古代の土器研究会 1994『古代の土器3 都城の土器集成Ⅲ』

古代の土器研究会 1996『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』

2) 佐藤隆 1992「平安時代における長原遺跡の動向」『長原遺跡発掘調査報告Ⅴ』(財)大阪市文化財協会  
<上記以外の土器類に関する参考文献(以下同じ)>

奈良国立文化財研究所 1974『平城宮発掘調査報告Ⅵ』

奈良国立文化財研究所 1976『平城宮発掘調査報告Ⅶ』

奈良国立文化財研究所 1991『平城宮発掘調査報告ⅩⅢ』

田辺昭三 1981『須恵器大成』角川書店

菅原正明 1989「西日本における瓦器生産の展開」『国立歴史民俗博物館研究報告』第19集

中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

高橋照彦 1995「緑釉陶器」『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究—日本律令的土器様式の成立と展開 7世紀~19世紀—』(有)京都編集工房



# 第4章 府道その2 上之池以北部（09－3－1～3・8区）・池北堤（09－3－7区）の調査成果

## 第1節 遺構

### 第1項 調査の概要

府道その1 調査区（09－2区）とは東西方向の市道を挟んだ南にあたる。上之池につきあたるまでの南北長114 m、東西幅35 mの区域内であるが、池の北堤部（09－3－7区）は現在も道として使用されており、池の渇水期を待ってこの部分とそれに付随するスロープ部を調査することとなった。まずは、南北100 m強の区域を3つに分け、北から順に調査を行うこととなった。調査区名称は北から09－3－1、2、3区とする（図44、2106 m<sup>2</sup>）。調査は平成21年の12月から平成22年の3月に行われた。

09－3－1区～3区はX＝－156,175以南、東西用水路より南で、南北用水路より東の区域のみが厚く盛土され、建物等が造成されていた。そこで、この部分のみ撤去工と約1.0～1.2 m厚さの盛土の普通機械掘削をした。それ以外は0.1～0.2 m厚さで耕土が広がっていたため、耕土・床土を機械掘削した。人力掘削は0.1～0.3 mの厚さで2層・3層を掘削した。そのうち調査区中心付近、X＝－156,170～－156,180付近を最高として3層の砂層の堆積が厚くなっていた。

遺構は2層上面と4層（地山）上面で検出した。現地表は盛土がある部分でT.P.11.0 m、ない部分でT.P.9.8 mで、人力掘削開始高T.P.9.4～9.5 mである。

09－3－1区から3区の中には、西端と東端の2箇所、大阪府教育委員会が行った試掘トレンチ痕跡が幅2 mで南北に細長く入って続いている。

09－3－1～3区の調査終了後、調査は上之池より南に移り（09－3－4～6区）、平成22年9月まで行われた。その後、平成22年10月から11月にかけて、池北堤部の調査が行われた（09－3－7区、194 m<sup>2</sup>）。

09－3－7区では、上之池の水を強制的に排水して水位を下げながら、東西辺には鋼矢板を打設し池からの流水を防いだ。池の堤と通路の役目を果たしていたため、現地標高はT.P.11.5 mと高く、ここから機械で掘削して古い池の堤を検出した地点で機械掘削を終了した。その後人力にて掘り下げ、堤の下層からも東西方向の溝などを複数時期にわたって検出した。従って、現地表と最終遺構面（地山面）との標高差は約2 m強にも及び、最終遺構面はT.P.9.3 mの高さとなった。

09－2－1・2区から連続して調査区の中央よりやや西よりに用水路が貫通しており、用水路を保護するためにこの両脇は後から調査した。また、南北用水路から支線として東にある東西用水路や、駐車場、既設電柱の周囲も移設後に調査することとなり、これらは09－3－8区（204 m<sup>2</sup>）として本体工事にあわせて調査を行った。南北の用水路や09－3－3区と09－3－7区間に存在する東西用水路のボックスカルバート底部分も調査対象である。しかし、掘削を進めたところ底部が調査掘削深度より下位に達していたため、09－3－1区の2溝・3溝など地山より下層に下がっている箇所のみ用水路のボックスカルバートを撤去して調査を行った。

09－2－1・2区から比較すると、北から南へと地表高は次第に上昇する。09－3－1区北端ではT.P.9.2 mであったのが、09－3－7区南端ではT.P.9.3 mと約0.1 mわずかに上昇する。

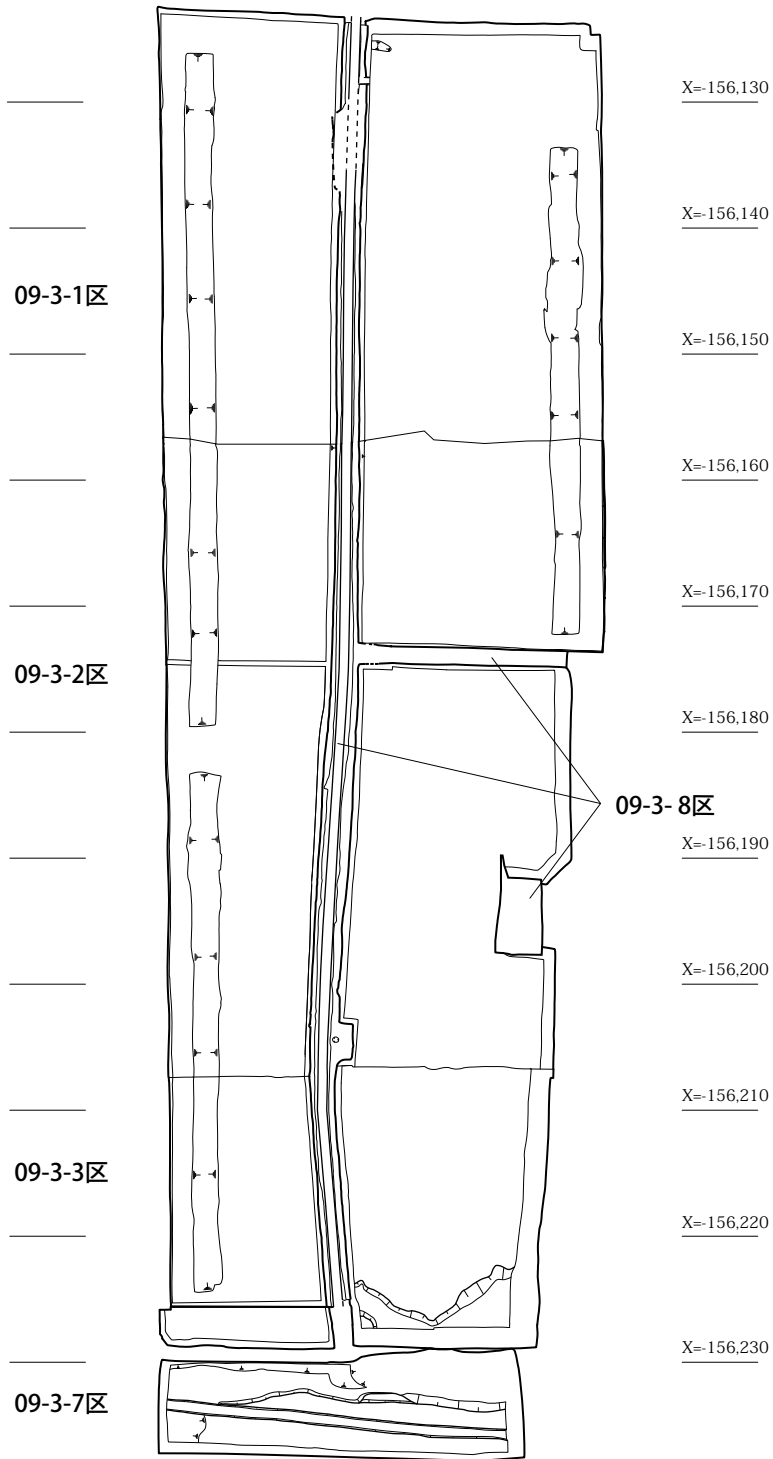


Y=42,130

Y=42,120

Y=42,110

Y=42,100



0 (1:600) 30m

图 44 09-3-1~3·7·8区 第1面平面图

## 第2項 遺構

### 第1面 (図44～57、図版17・18・20)

#### 09-3-3・7区の遺構

09-3-7区は現在も上之池の北堤及び歩道として機能している部分である。周囲に比べると厚く盛土がなされ、現地表高は T.P.11.5 m と 09-3-3区よりさらに高くなっていた。そのためか、遺構面が保護されており、残存状態が良く複数遺構面を確認できた。

表土を剥ぐと、上之池に接した部分は近現代になって造営されたコンクリートの擁壁とそれを入れる際の攪乱で乱されていた。それ以外は、現在の堤の芯となるような、近世以前の堤が存在することが明らかとなった (図46・47)。また、09-3-3区調査時に、南東隅で深く下がる池状遺構を検出し、88池と呼称したが09-3-7区で検出した187溝の続きであると、位置や断面観察による連続性から判断した。

183堤・187溝は相関性をもつ近世の構造物ではあるが、当該地における古代・中世以降の土地利用を考えるうえで重要な意味をもっているため、これらを第1面として以下に簡単に、把握内容についてふれておく。

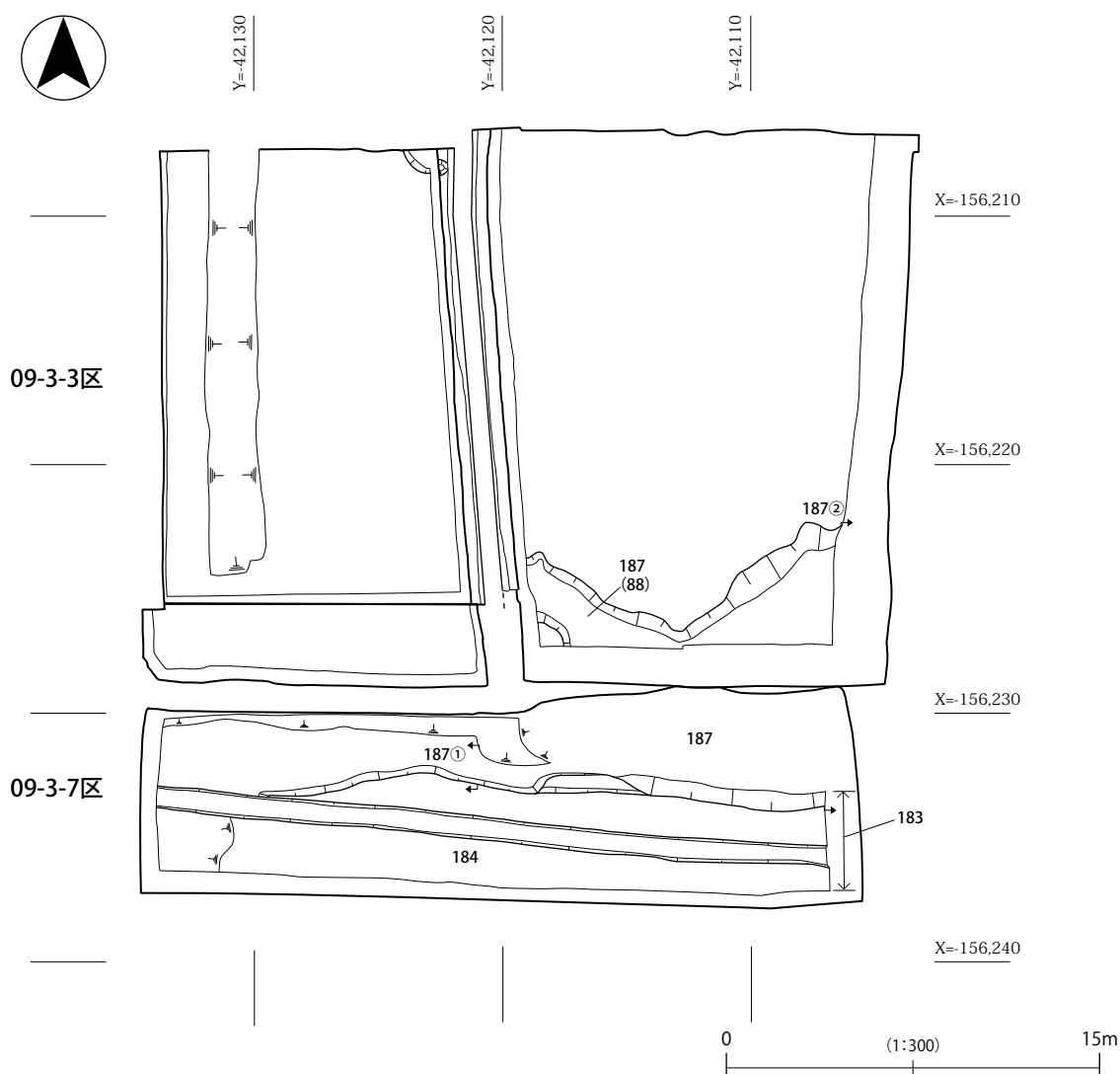
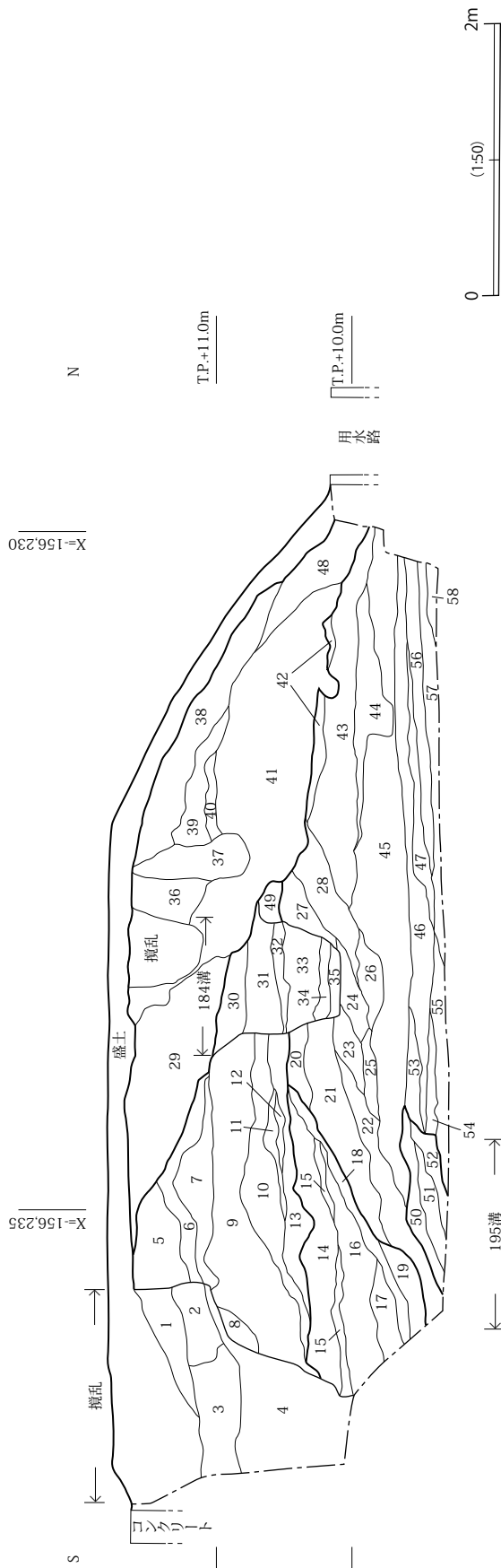


図45 09-3-3・7区 第1面平面図



- |    |   |    |                                      |    |                                 |
|----|---|----|--------------------------------------|----|---------------------------------|
| 1  | 暗灰黄 2.5Y5/2 砂礫土中砂~3cmの礫で構成              | 18 | 黄灰 2.5Y6/1 粘土                        | 37 | 灰黄褐 10YR4/2 粘質土                 |
| 2  | 褐灰 10YR5/1 粘質土                          | 19 | 青灰 5B6/1 粘土と                         | 38 | 暗灰黄 2.5Y4/2 シルト(耕土)(近現代の埋埋土)    |
| 3  | 褐灰 10YR4/1 粘質土 木の根と瓦片含む                 | 20 | 黄灰 2.5Y6/1 粘質土(183堤第一次埋土)            | 39 | にぶい黄褐 10YR5/3 粘質土(近現代の埋埋土)      |
| 4  | 黄灰 2.5Y5/1 粘質土                          | 21 | 明黄褐 10YR6/6 粘質土と 黄灰 2.5Y5/1 シルト質粘質土  | 40 | 黄灰 2.5Y5/1 中砂(近現代の埋埋土)          |
| 5  | 黄灰 2.5Y4/1 粘質土                          | 22 | (183堤第一次埋土)                          | 41 | にぶい黄褐 10YR5/3 粘質土に              |
| 6  | にぶい黄褐 10YR6/4 粘質土(183堤第二次埋土)            | 23 | 灰黄褐 10YR5/2 中砂黄色粘土混ざる(183堤第一次埋土)     | 42 | 褐灰 10YR4/1 シルトブロック(近現代の埋埋土)     |
| 7  | にぶい黄 2.5Y6/4 シルト(183堤第二次埋土)             | 24 | 黄灰 2.5Y6/1 中砂 粘質土 マンガンを含む(183堤第一次埋土) | 43 | 褐灰 10YR5/1 シルト質粘質土              |
| 8  | 灰黄褐 10YR5/2 粘質土(183堤第二次埋土)              | 25 | 褐灰 10YR6/1 シルト マンガン僅かに含む(183堤第一次埋土)  | 44 | 灰黄褐 10YR5/2 粘質土                 |
| 9  | 灰黄褐 10YR6/2 粘質土(183堤第二次埋土)              | 26 | 灰黄褐 10YR6/1 シルト質粘質土 マンガン僅かに含む        | 45 | 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂~粘質土              |
| 10 | にぶい黄褐 10YR5/2 粘質土(183堤第二次埋土)            | 27 | にぶい黄褐 10YR6/4 シルト(183堤第一次埋土)         | 46 | 褐灰 10YR5/1 シルト 質粘質土(2層)         |
| 11 | 明黄褐 10YR6/6 粘土(183堤第二次埋土)               | 28 | 褐灰 10YR6/1 粘土に 褐灰 7.5YR4/1 シルトブロック   | 47 | 黒褐 2.5Y3/1 中砂土                  |
| 12 | 灰白 2.5Y7/1 シルト質粘質土と 明褐 7.5YR5/6 粘土      | 29 | (183堤第一次埋土)                          | 48 | 黄灰 2.5Y4/1 シルト質粘質土(耕土)(近現代の埋埋土) |
| 13 | 灰黄褐 10YR5/2 粘質土                         | 30 | 褐灰 10YR5/1 粘土と 褐灰 7.5YR4/1 粘質土       | 49 | にぶい黄 2.5Y6/3 シルト                |
| 14 | 灰黄褐 10YR5/2 粘質土 炭化物僅かに含む                | 31 | 粗砂層(184溝埋土)                          | 50 | 灰 N6/ 粘土(192溝埋土)                |
| 15 | 黄灰 2.5Y6/1 粘土と 明黄褐 10YR6/6 粘質土 炭化物僅かに含む | 32 | 粗砂層(184溝埋土)                          | 51 | 灰 5Y5/1 中砂~粘土(192溝埋土)           |
| 16 | 灰黄褐 10YR5/2 粘質土 炭化物僅かに含む                | 33 | 粗砂層(184溝埋土)                          | 52 | 灰黄褐 10YR5/1 粘質土                 |
| 17 | 灰 N6/ 粘土と 明黄褐 10YR6/8 粘土                | 34 | 明黄褐 10YR6/6 シルトと 褐灰 7.5YR4/1 粗砂      | 53 | 灰黄褐 10YR4/2 粘質中砂土(畑山)(4層)       |
|    |   | 35 | 黄灰 2.5Y5/1 中砂(184溝埋土)                | 54 | 暗褐 10YR3/3 粘質中砂層(畑山)(4層)        |
|    |   | 36 | 黄灰 2.5Y4/1 粘土(近現代の埋埋土)               | 55 | 灰黄褐 10YR4/2 中砂層(4層)             |

図 46 09-3-7区 西壁断面図

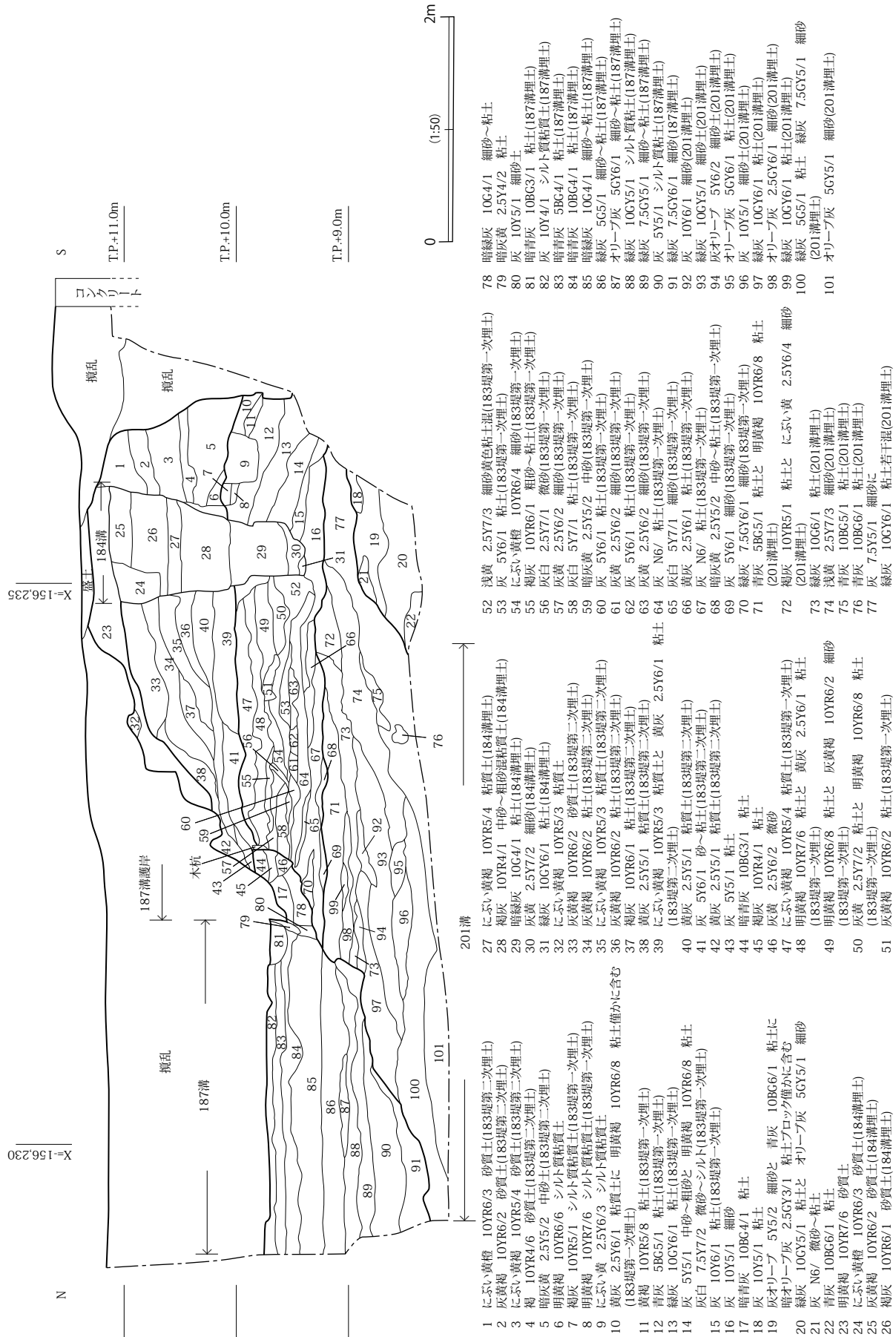


図 47 09-3-7区 東壁断面図

- |    |  |    |  |     |                                    |
|----|--|----|--|-----|------------------------------------|
| 1  | にふい黄褐 10YR6/3 砂質土(183堤第二次理土)                   | 52 | 浅黄 2.5Y7/3 細砂黄色粘土混(183堤第一次理土)          | 78  | 暗緑灰 10G4/1 細砂~粘土                   |
| 2  | 灰黄褐 10YR6/2 砂質土(183堤第二次理土)                     | 53 | 灰 5Y6/1 粘土(183堤第二次理土)                  | 79  | 暗灰黄 2.5Y4/2 粘土                     |
| 3  | にふい黄褐 10YR5/4 砂質土(183堤第二次理土)                   | 54 | にふい黄褐 10YR6/4 細砂(183堤第一次理土)            | 80  | 灰 10Y5/1 細砂土                       |
| 4  | 褐 10YR4/6 砂質土(183堤第二次理土)                       | 55 | にふい黄褐 10YR6/1 粘土(183堤第一次理土)            | 81  | 暗青灰 10BG3/1 粘土(187溝理土)             |
| 5  | 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂(184溝理土)                         | 56 | 灰白 2.5Y7/1 微砂(183堤第一次理土)               | 82  | 灰 10Y4/1 シルト質粘質土(187溝理土)           |
| 6  | 明黄褐 10YR6/6 シルト質粘質土                            | 57 | 灰黄 2.5Y6/2 細砂(183堤第一次理土)               | 83  | 暗青灰 5BG4/1 粘土(187溝理土)              |
| 7  | 褐灰 10YR5/1 シルト質粘質土(183堤第一次理土)                  | 58 | 灰白 5Y7/1 粘土(183堤第一次理土)                 | 84  | 暗青灰 10BG4/1 粘土(187溝理土)             |
| 8  | 明黄褐 10YR7/6 シルト質粘質土(183堤第一次理土)                 | 59 | 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂(183堤第一次理土)              | 85  | 暗緑灰 10G4/1 粘土(187溝理土)              |
| 9  | にふい黄 2.5Y6/3 シルト質粘質土                           | 60 | 灰 5Y6/1 粘土(183堤第一次理土)                  | 86  | 緑灰 5G5/1 細砂~粘土(187溝理土)             |
| 10 | 黄灰 2.5Y6/1 粘質土に 明黄褐 10YR6/8 粘土僅かに含む(183堤第一次理土) | 61 | 灰黄 2.5Y6/2 細砂(183堤第一次理土)               | 87  | オリーブ灰 5GY6/1 細砂~粘土(187溝理土)         |
| 11 | 黄褐 10YR5/8 粘土(183堤第一次理土)                       | 62 | 灰 5Y6/1 粘土(183堤第一次理土)                  | 88  | 緑灰 10GY5/1 シルト質粘土(187溝理土)          |
| 12 | 青灰 5BG5/1 粘土(183堤第一次理土)                        | 63 | 灰黄 2.5Y6/2 細砂(183堤第一次理土)               | 89  | 緑灰 7.5GY5/1 細砂~粘土(187溝理土)          |
| 13 | 緑灰 10GY6/1 粘土(183堤第一次理土)                       | 64 | 灰 N6/ 粘土(183堤第一次理土)                    | 90  | 灰 5Y5/1 シルト質粘土(187溝理土)             |
| 14 | 灰 5Y5/1 中砂~粗砂と 明黄褐 10YR6/8 粘土                  | 65 | 灰白 5Y7/1 細砂(183堤第一次理土)                 | 91  | 緑灰 7.5GY6/1 細砂(187溝理土)             |
| 15 | 灰白 7.5Y7/2 微砂~シルト(183堤第一次理土)                   | 66 | 灰 N6/ 粘土(183堤第一次理土)                    | 92  | 灰 10Y6/1 細砂(201溝理土)                |
| 16 | 灰 10Y5/1 細砂                                    | 67 | 灰 N6/ 粘土(183堤第一次理土)                    | 93  | 緑灰 10GY5/1 細砂土(201溝理土)             |
| 17 | 暗青灰 10BG4/1 粘土                                 | 68 | 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂~粘土(183堤第一次理土)           | 94  | オリーブ灰 5Y6/2 細砂土(201溝理土)            |
| 18 | 灰 10Y5/1 粘土                                    | 69 | 暗灰黄 2.5Y5/2 中砂~粘土(183堤第一次理土)           | 95  | オリーブ灰 5GY6/1 粘土(201溝理土)            |
| 19 | 灰オリーブ 5Y5/2 細砂と 青灰 10BG6/1 粘土に                 | 70 | 緑灰 7.5GY6/1 細砂(183堤第一次理土)              | 96  | 灰 10Y5/1 細砂土(201溝理土)               |
| 20 | 暗灰 10GY5/1 粘土と オリーブ灰 5GY5/1 細砂                 | 71 | 青灰 5BG5/1 粘土と 明黄褐 10YR6/8 粘土(201溝理土)   | 97  | 緑灰 10GY6/1 粘土(201溝理土)              |
| 21 | 灰 N6/ 微砂~粘土                                    | 72 | 褐灰 10YR5/1 粘土と にふい黄 2.5Y6/4 細砂(201溝理土) | 98  | オリーブ灰 2.5GY6/1 細砂(201溝理土)          |
| 22 | 青灰 10BG6/1 粘土                                  | 73 | 緑灰 10G6/1 粘土(201溝理土)                   | 99  | 緑灰 10GY6/1 粘土(201溝理土)              |
| 23 | 明黄褐 10YR7/6 砂質土                                | 74 | 浅黄 2.5Y7/3 細砂(201溝理土)                  | 100 | 緑灰 5G5/1 粘土 緑灰 7.5GY5/1 細砂(201溝理土) |
| 24 | にふい黄 10YR6/2 砂質土(184溝理土)                       | 75 | 青灰 10BG5/1 粘土(201溝理土)                  | 101 | オリーブ灰 5GY5/1 細砂(201溝理土)            |
| 25 | 暗灰黄 10YR6/2 砂質土(184溝理土)                        | 76 | 青灰 10BG6/1 粘土(201溝理土)                  |     |                                    |
| 26 | 褐灰 10YR6/1 砂質土(184溝理土)                         | 77 | 灰 7.5Y5/1 細砂                           |     |                                    |
|    |  | 78 | 緑灰 10GY6/1 粘土と 明黄褐 10YR6/8 粘土          |     |                                    |

### 183 堤 (図 44 ~ 47、図版 18、20)

表土を剥いで確認した堤である。現在の堤より一回り小さく、断面形はかまぼこ形を呈する (図 46)。堤を盛り上げるのに何段階かを経たようで、第 1 段階では 2 層の土を盛り上げて芯とした、幅 5.0 m、高さ 1.0 m 程度の堤と考えられる。堤の南にはこの堤と対になる東西溝、195 溝が存在する。195 溝としたが 195 溝は旧上之池の一部だった可能性もある。盛土の単位は細かく、というか薄く土を積み重ねて、版築のようにかためてあり、土がよく締まっている。

第 2 段階になると、第 1 段階を芯としてさらに土を盛るため堤はより大きくなって、幅 6.0 m、高さ 2.0 m となる。堤の中心が現在より池に近い南に寄っているのが断面から観察できる。X= - 156,235 より北側は丘状ではなく、山裾のようになだらかに広がる。

さらに、この堤のへこんだ部分に耕土を盛ってかためたのが、機械掘削終了後に検出した 183 堤であり、攪乱で遮られているが実際はもっと南まであったと思われる。つまり、古い時期の上之池はもっと南に位置していたのが、西に広がったといえる。東壁断面でみると (図 47)、183 堤と対で 187 溝が作られているのがよく分かる。また、護岸の役目を果たした木杭の位置が 2、3 箇所にずれてみられるのも堤の築造時期が複数になることを物語っている。

183 堤は前段階の小さな堤を芯として、その周りに土を追加して大きく、また南から北へと広がっていったことが判明し、また、これがずっと踏襲されて現代まで至ることが判明した。また、堤築造以前の中世にも、同じ位置に東西方向の溝が複数作られていることは、この位置が土地利用における区画点であることを示す大きな証拠だろう。

さほど多くないが、平瓦や土師器が含まれており、183 堤は第 1 段階の築造から近世の所産と考えられる。上之池の始まりを決める有力な手がかりを示唆する。

また、183 堤の上を東西に走る 184 溝がある。幅 1.0 m、深さ 1.0 ~ 1.5 m 程度の断面形が逆台形の溝である。184 溝は近世後半期以降の所産と考えられる。

### 187 溝 (88 池) (図 45、47・48、図版 17)

09 - 3 - 7 区の北半を占め、183 堤に平行する溝である。東西とも端は調査区外に延びる。

また、南北幅は 09 - 3 - 7 区内では 3.0 ~ 5.0 m であった。隣接する 09 - 3 - 3 区南東部で検出した遺構が、これ単体では不整形であり池とみなしたが、後で 09 - 3 - 7 区を調査すると一連の溝と判明した。東壁で確認できる南北幅は 10.4 m をはかる。09 - 3 - 3 区では平面形で V 字のようにみえ、南北用水路より西側では検出できていないことから、187 溝の平面形は東端で拡がるものの、それ以外は幅 5.0 m 前後でやや南に走る溝ではないかと推測する。

深さは現地表からだと 3.0 m をはかる。ただし、中ほどまでは近現代の廃棄物でほとんど埋め立てられているような状況であり、堆積状況が確認できるのは底から約 1.6 m である。183 堤にあわせるように、187 溝も数時期に分かれてその南肩が次第に南に移動していったと考えられる。中層では溝の南岸に約 0.5 m 間隔で杭が 18 本並ぶのが確認された (図 54・55)。東壁断面中にもみられ、さらに東に伸びていたと予想される。これらの杭は護岸の役割を果たしていたと考えられる。

断面形は深い碗形を呈する。埋土は灰色もしくは緑灰色の粘性が高い粘土であり、須恵器や近世の瓦などを含んでいた。

上之池がありながら堤を挟んですぐ北に大きな溝が存在することは、用水路としては奇異な感じも受けるが 183 堤で述べたように区画溝の機能も果たしていたとするならありうる。また、上之池が埋

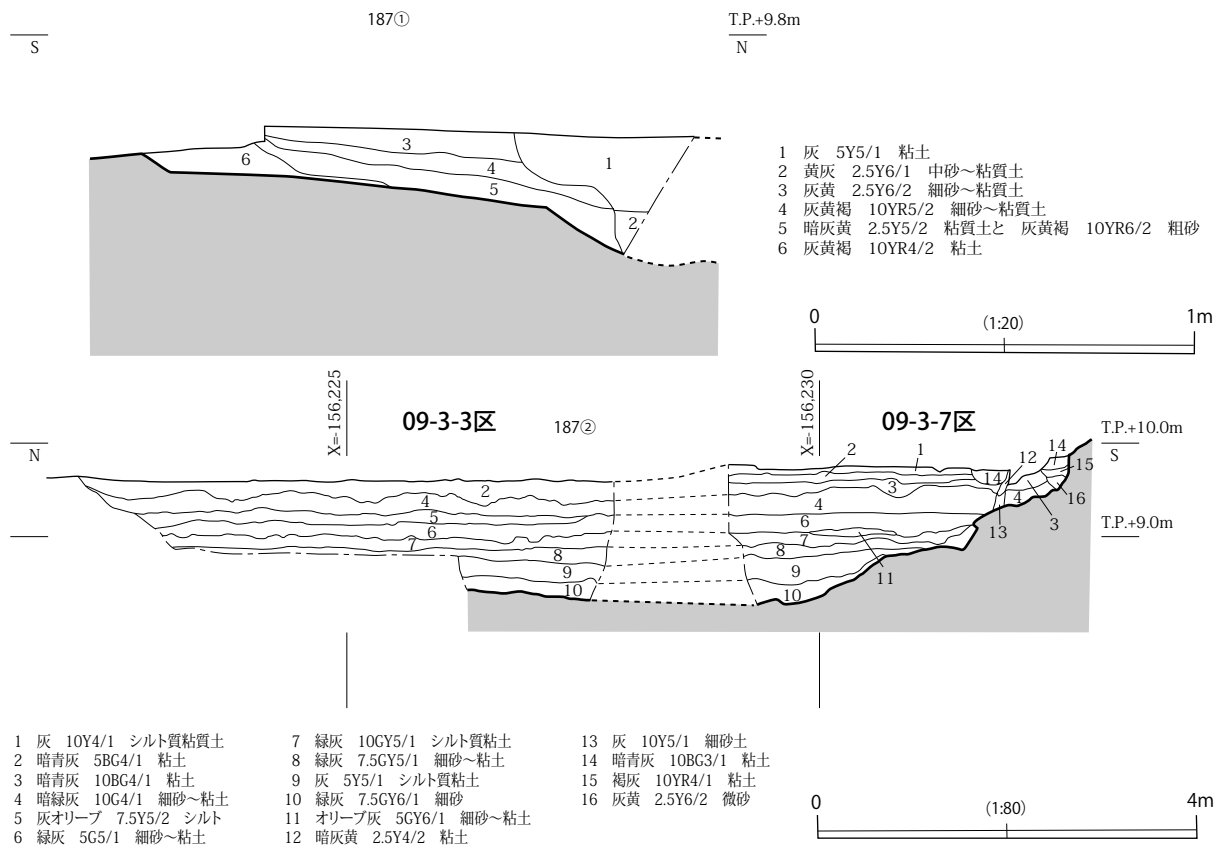


図 48 09-3-3・7区 187 溝断面図 (S = 1/20, 1/80)

めたてられたためや、位置がより南にずれたから 187 溝が作られたのではなく、あくまでも上之池と 183 堤、187 溝は並存して存在したと考える。

#### 第 2・3 面 (図 49～54、図版 14～17)

09-3-1 区の 2 層上面及び 4 層上面で検出した遺構のうち、明らかに近世のものでない遺構の検出面を最終遺構面と考え、第 2 面とした。ただし、09-3-7 区ではこの上層にもう 1 面遺構面が存在するのでこれを第 2 面とし、他の調査区とすりあう面を第 3 面とした。

09-3-2 区でも小形の土坑状のものをいくつか検出したが、ほとんどは自然木の痕と判断した。また、西端の X = -156,190 ～ -156,200 間でみられた畝状のものも形状が不揃いで複数は見られないため、自然地形の隆起と判断した。この周辺では他にも風倒木痕なども確認した。

その他、4 層上面では、09-3-1 区の 2 溝より南から 09-3-3 区までの広い範囲で、人や牛馬のものと思われる足跡を検出した。中央部では上層の 3 層の砂層堆積が厚かったためであろうか、比較的残存状況が良かった。足跡に方向性や規則性は認められず、雑然と広がっている印象を受ける。鋤溝のような耕作溝痕はわずかだが検出した。しかし、畦畔や畝などの耕作遺構は平面でも確認できず、第 2 面を耕作地と断定するには難しい。

また、09-3-8 区の東端、長方形に未調査区として残されていた箇所では、2 層上面で東西方向の溝を 1 条検出した。しかし、深さもほとんどなく、わずかに平面形を追うにとどまった。

第 2 面は、09-3-1 区から 09-3-7 区にかけて T.P.9.2 m ～ 9.3 m と比高差もほとんどなく、北から南に緩やかに上昇する。

09-2-1・2 区の 4 層上面で検出された掘立柱建物柱穴や溝・土坑・井戸などの古代末の遺構は、幅 10 m ほどの市道を間に挟むとはいえ、09-3-1 区から 3 区では皆無である。09-3-1 区で検

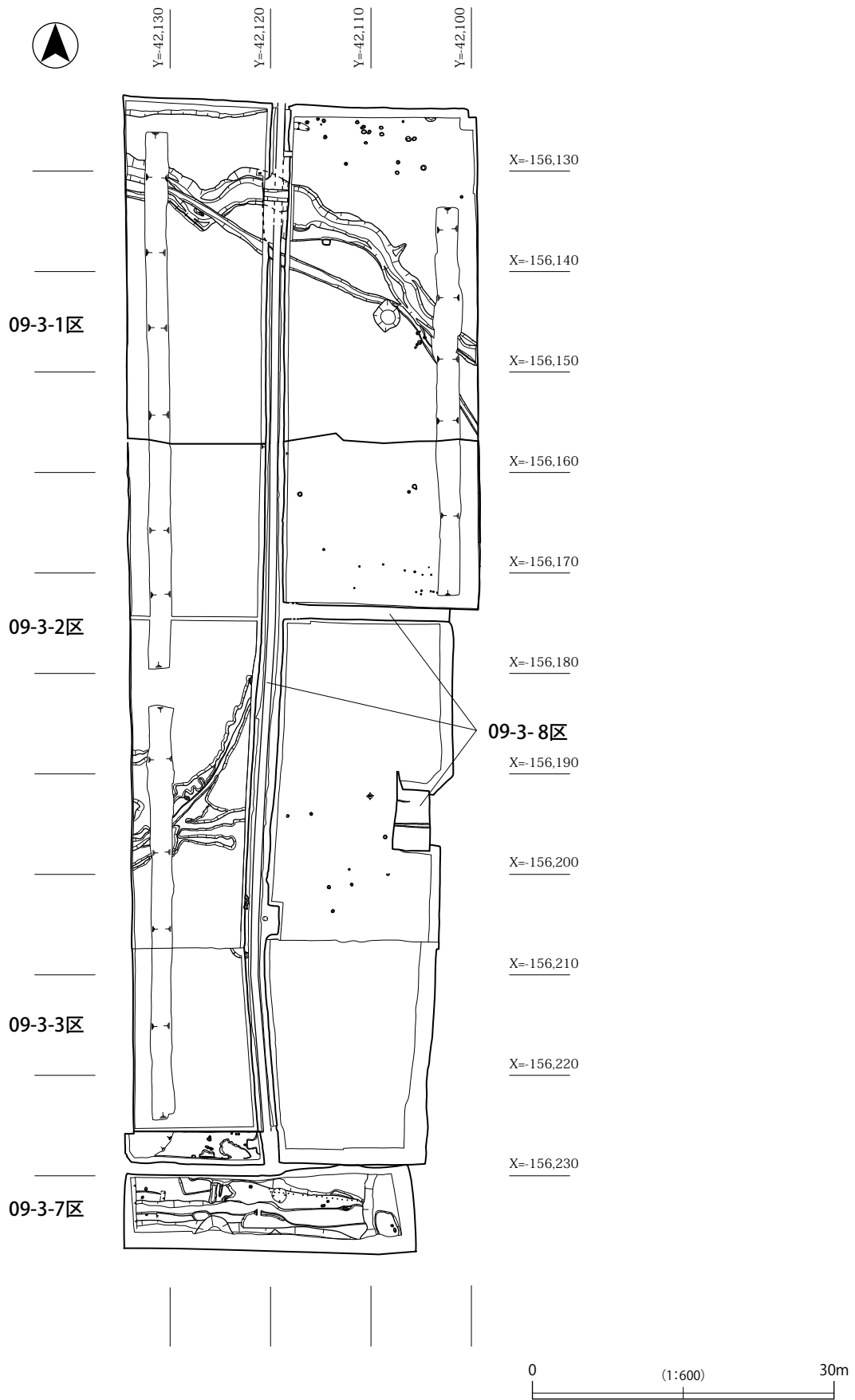


图 49 09-3-1~3·8区 第2面、09-3-7区 第3面平面图



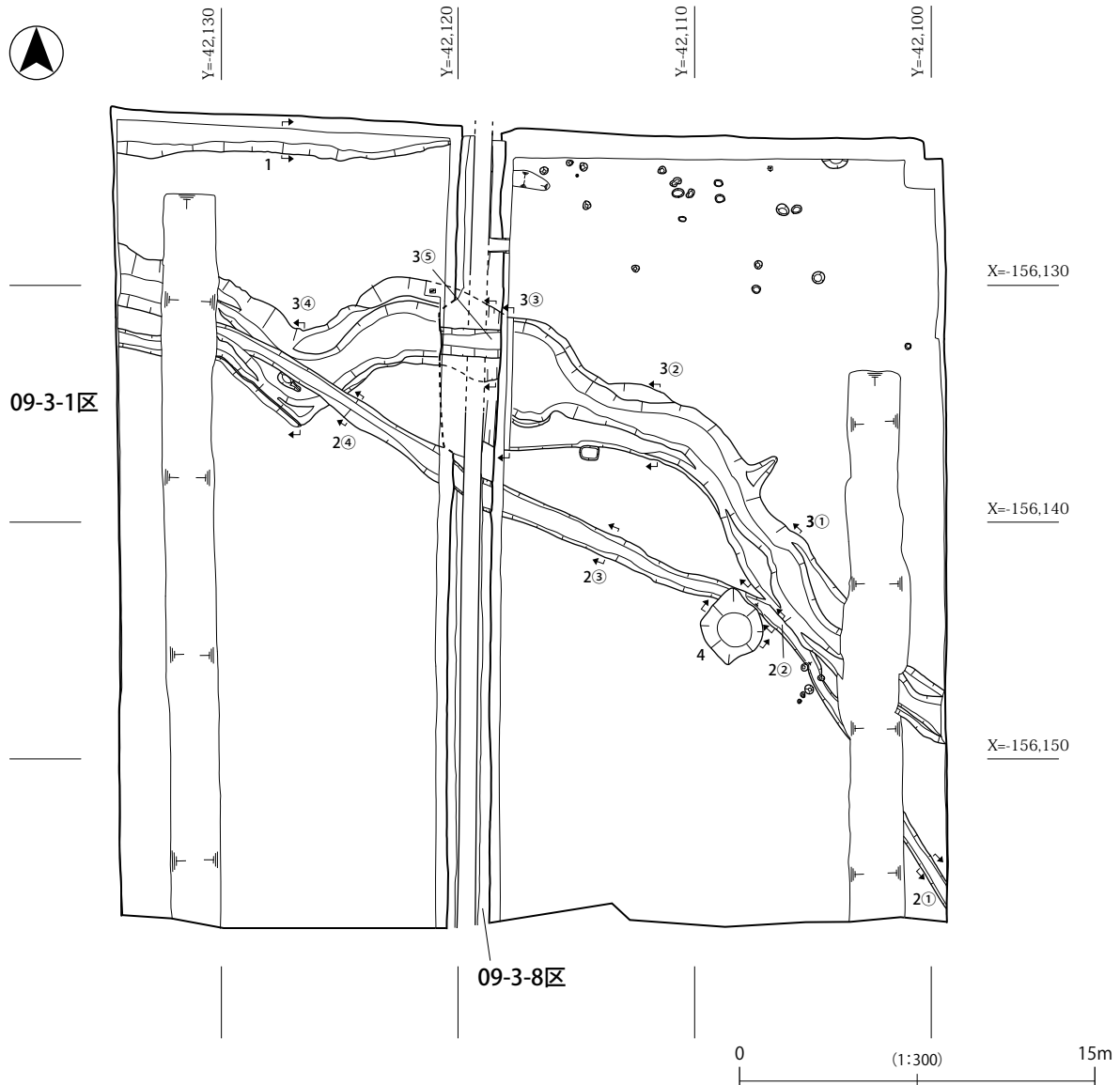


図50 09-3-1・8区 第2面平面図

出した遺構と09-3-7区で検出した遺構とでは時期も性格も異なる。

09-3-1・8区の遺構

09-3-1区では2層上面で2溝と4井戸を検出した。2溝は4井戸に切られる。また、4層上面で1溝・3溝や北東部にかたまってみられる小形の土坑群を検出した。

**1溝** (図49～51、図版14)

09-3-1区の北端、用水路より西側で検出した溝である。西端は調査区外に延びるが、現状において東端は用水路につきあたって途切れる。調査区内での長さは14.0mである。

幅は1.0m、深さ0.15mをはかる。断面形は皿形を呈する。2層の土に4層の土がブロック状に混じり、堆積する。

中世の羽釜片が出土していることや埋土が2層と似ることから、1溝は古代末から中世の遺構と捉える。また、1溝の東にかたまってみられる土坑群は直径0.1～0.2m、深さ0.05～0.1m程度のものである。中心に柱根痕が認められるものもあったが、掘立柱建物は復原できなかった。09-3-1区の北端、これらの遺構までが09-2区から続く遺構群の南限ではないかと考える。

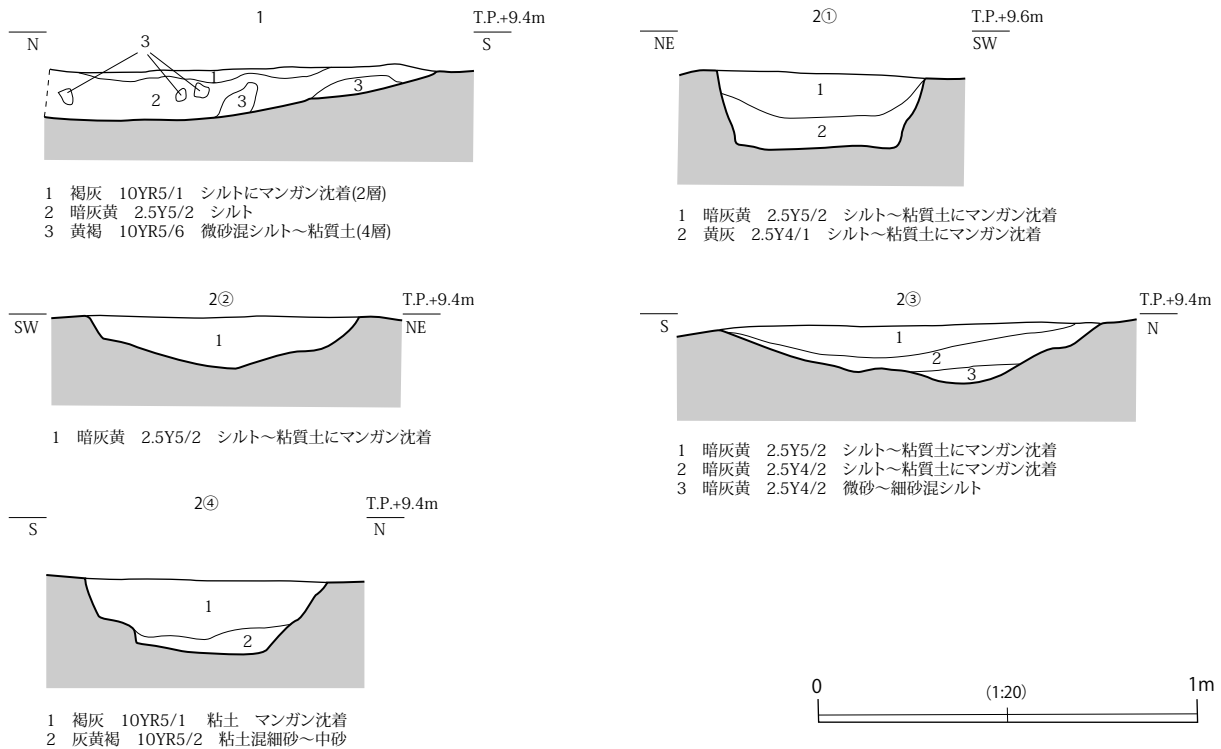


図 51 09 - 3 - 1 区 1 溝・2 溝断面図

### 2 溝 (図 49 ~ 51、図版 14)

09 - 3 - 1 区の 2 層上面で検出した溝である。09 - 3 - 1 区の北西から南東に直線的に斜めに走り、北西角から南東角へとほぼ正方形の調査区の対角線のように位置する溝である。3 溝とほぼ同じ方向を走るが 3 溝を切る。また、東側では 4 井戸に切られる。

直線距離は長さ 40 m を超える。幅 0.5 ~ 0.6 m が平均的であるが、中央に近づくにつれやや潰れたように広がり、幅 1.0 m をはかる。深さは 0.1 ~ 0.2 m をはかる。断面形は逆台形もしくは皿形を呈する。遺物は出土していない。4 井戸が中世後半から近世の所産と考え、3 溝は古代以前、弥生時代まで遡る可能性をもつとなると、2 溝は古代の遺構とするのが妥当かもしれない。

### 3 溝 (図 49・50、52、図版 14 ~ 16)

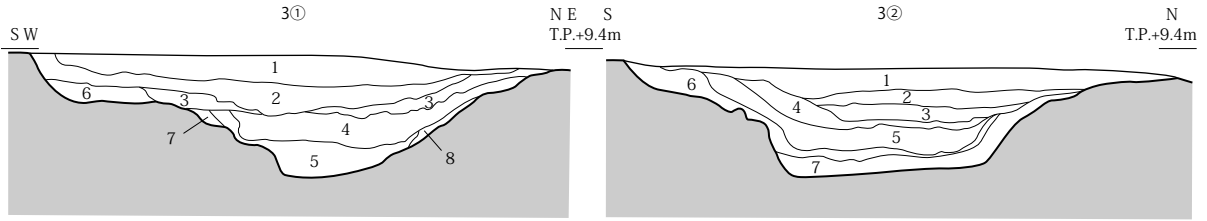
09 - 3 - 1 区の 4 層上面で検出した溝である。09 - 3 - 1 区の北西から南東に蛇行しながら走る大きな溝である。いったん南に直線的に屈曲し、その後は曲線的になり幅を広げたり、すぼめたりしながら東南に延びる。人為的な遺構ではなく、自然流路の可能性も高いが、調査時の呼称のまま溝とした。

2 箇所ですぐに 2 溝に切られる。直線距離で計っても長さ 40 m を超える。幅は 3.0 m が平均的だが、中央付近では広がり 2 段の段をなす溝のようになる部分があり、最大幅 6.0 ~ 7.0 m をはかる。深さは 0.5 ~ 1.0 m をはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土の堆積状況も水平堆積である。

遺物は弥生土器の底部片が出土するのみである。しかし、2 層上面ではあるが、3 溝に近接した場所で磨製石庖丁や打製石剣が出土 (図 60、図版 16) している。これらは弥生時代中期のものと考えられ、3 溝も弥生時代まで遡る可能性をもつ。

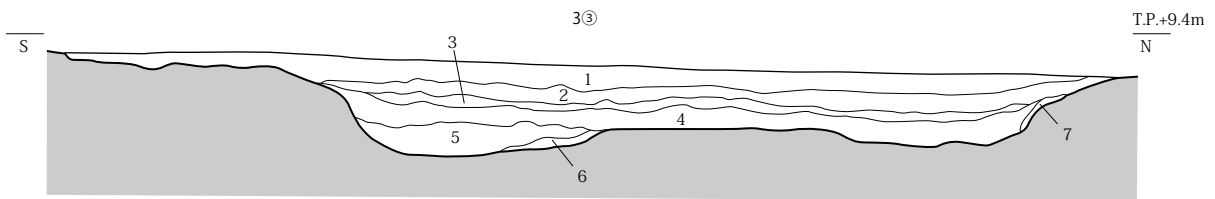
### 4 井戸 (図 49・50、53、図版 14)

09 - 3 - 1 区の 2 層上面で検出した大形の不整形の土坑であるが、深さがあり底部が湧水層に達しているため、井戸とした。2 層上面で検出したものの、実際はもっと上層から掘り込まれた遺構と考



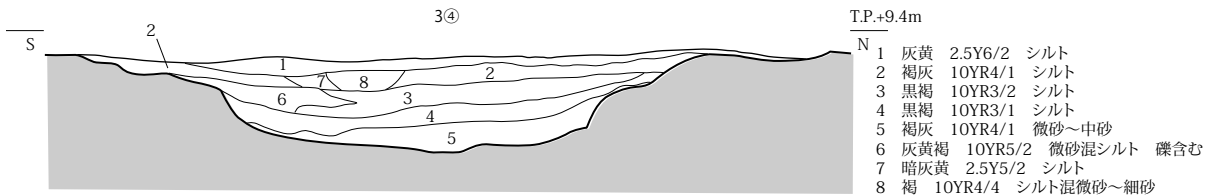
- 1 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質土 マンガン沈着  
 2 黒褐 2.5Y3/2 粘質土  
 3 灰黄褐 10YR4/2 シルト混中砂～粗砂礫含む  
 4 褐灰 10YR4/1 粘質土  
 5 褐灰 10YR4/1 細砂～中砂  
 6 黄灰 2.5Y4/1 中砂～礫  
 7 灰黄 2.5Y6/2 粘質土  
 8 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質土 僅かに砂礫含む

- 1 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質土 マンガン沈着(2層)  
 2 黒褐 2.5Y3/2 粘質土 僅かに砂粒含む  
 3 褐灰 10YR4/1 粘質土  
 4 灰黄褐 10YR4/2 シルト混微砂～中砂  
 5 黒褐 10YR3/1 粘質土  
 6 灰黄褐 10YR4/2 微砂～細砂  
 7 黄灰 2.5Y4/1 微砂～中砂 下方は にぶい黄 2.5Y6/4を呈す

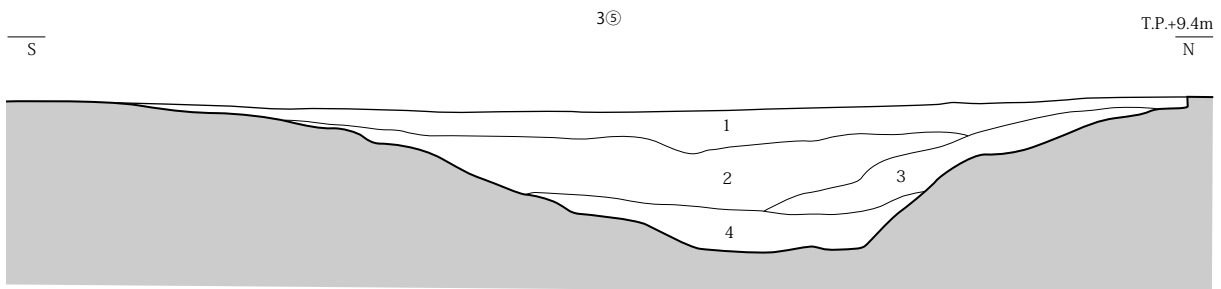
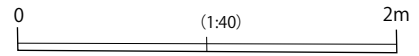


- 1 暗灰黄 2.5Y4/2 粘質土 マンガン沈着(2層)  
 2 黒褐 2.5Y3/2 微細砂混粘質土  
 3 黒 2.5Y2/1 粘質土 僅かに砂粒含む  
 4 黒褐 10YR3/1 粘質土

- 5 暗灰黄 2.5Y4/2 細砂～中砂混粘質土と 明黄褐 10YR6/6 粘質土ブロック含む  
 6 灰黄褐 10YR4/2 細砂～粗砂  
 7 暗オリーブ褐 2.5Y3/3 粘質土



- 1 灰黄 2.5Y6/2 シルト  
 2 褐灰 10YR4/1 シルト  
 3 黒褐 10YR3/2 シルト  
 4 黒褐 10YR3/1 シルト  
 5 褐灰 10YR4/1 微砂～中砂  
 6 灰黄褐 10YR5/2 微砂混シルト 礫含む  
 7 暗灰黄 2.5Y5/2 シルト  
 8 褐 10YR4/4 シルト混微砂～細砂



- 1 にぶい黄褐 10YR4/3 粘土  
 2 黒褐 10YR3/1 粘土  
 3 褐灰 10YR4/1 中砂～粘質土  
 4 黒 10YR2/1 粘土

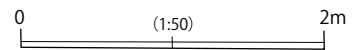


図 52 09-3-1・8区 3溝断面図

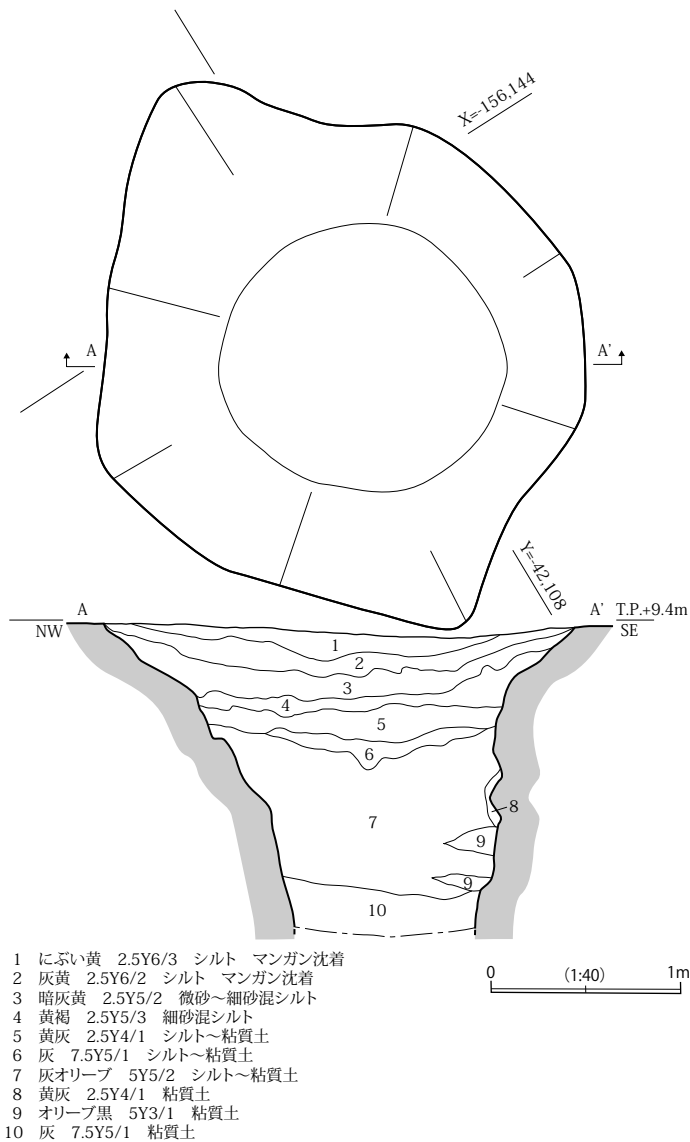


図 53 09-3-1 区 4井戸平・断面図

第 1 面からさらに掘り下げると、2 層上面にあたる T.P.10.6 m 付近で複数の遺構を検出した。また、第 1 面で確認した 187 溝の護岸の杭もこの高さで確認したため、第 2 面で図示した。しかし、杭のほとんどは折れており、途中からの高さで確認したもので、本来的には第 1 面の 187 溝に属すると考える。第 2 面は第 1・3 面との関係から、12 世紀から 14 世紀の遺構面と考える。以下、代表的な遺構を取り上げる。

**192 溝 (図 46・54)**

調査区の西半で検出した東西方向の大きな溝である。幅 2.0 m、長さ 17.0 m 以上をはかる。

187 溝よりはやや南に位置し、187 溝に切られる。第 3 面の 201 溝と重複する箇所位置することから、201 溝と同様坪境の役割を果たす溝と考える。この溝からはサヌカイトの石器や剥片が出土 (図 60) するのみで、正確な時期を決定しがたいが、12 世紀以降 14 世紀代頃までの遺構と考えられる。

**199 溝 (図 54)**

調査区の東半、南壁際で検出した東西方向の溝である。池のコンクリート擁壁を作る際に攪乱されて、ほとんど失われており詳細は不明である。第 3 面の 195 溝の一部、もしくは同溝最上部のくぼみだっ

えられる。2 溝を切る。

平面形は、南北にやや長く先端が尖ったように突き出し、東西は丸みを帯びる。底面は円形である。長径 3.2 m、短径 2.6 m、深さ 1.6 m をはかる。埋土は中層から下層には、灰色やオリーブ灰色の粘性が高い粘土が堆積し、短時間で埋没した印象を受ける。上層は約 0.1 m 厚さで複数の層が堆積する。

4 井戸からは瓦や須恵器が出土した。中世後半から近世の遺構と考える。09-3-7 区で検出した堤や溝などの遺構との相関関係なども不明のため、第 2 面の遺構とした。

09-3-1 区～3 区の第 2 面の遺構の時期は、中世後半から、推定ではあるが弥生時代中期までと多岐にわたっている。包含層中に含まれる遺物は、量はわずかだが中近世から、古代、古墳時代、弥生時代中期のものが含まれている。このことから、0.2～0.3 m という比較的薄い堆積状況の中で、弥生時代から中世までの千年以上の時間経過があったことになる。

09-3-7 区 第 2 面の遺構 (図 54、57)

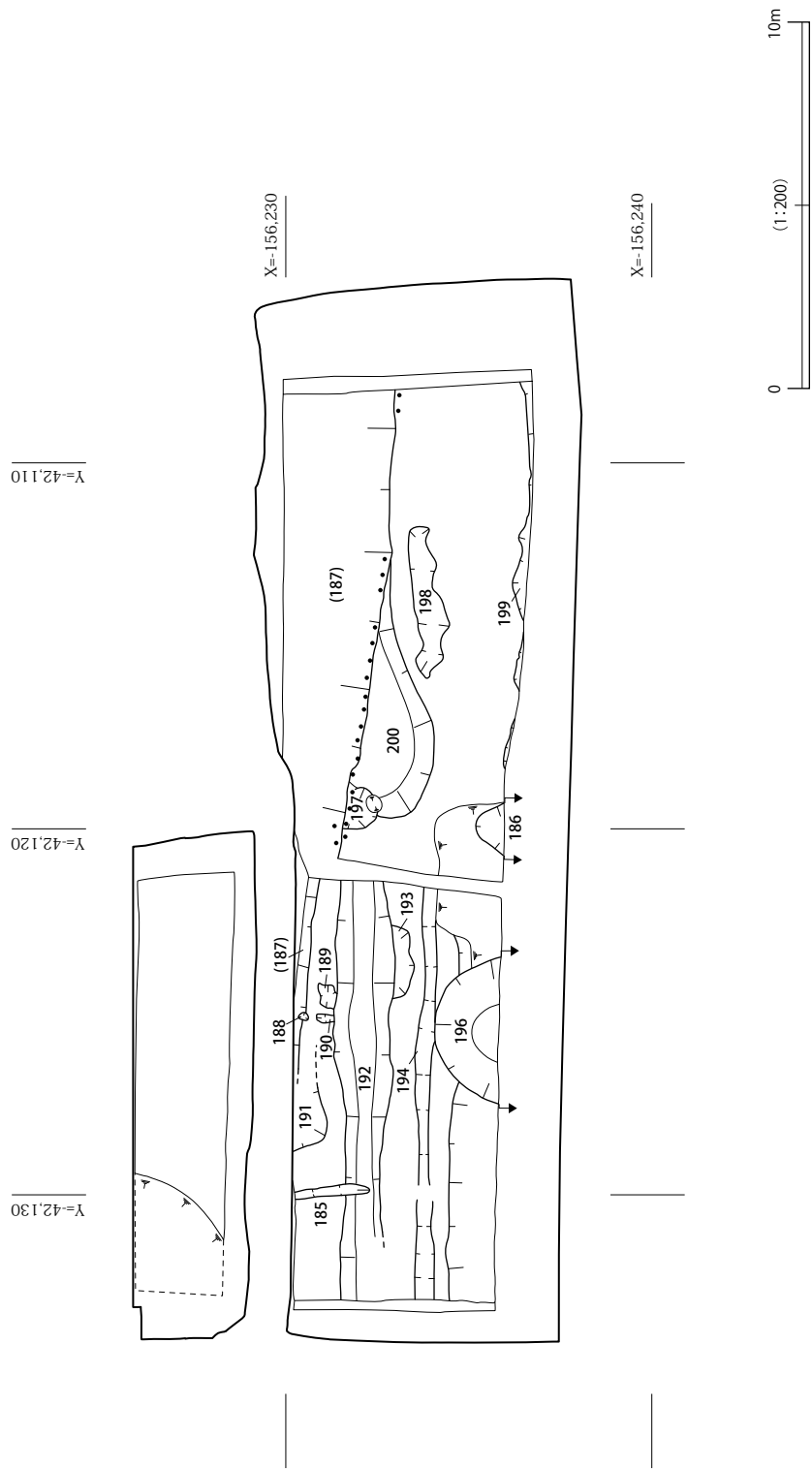


图 54 09-3-7 区 第 2 面平面图



Y=42.130

Y=42.120

Y=42.110

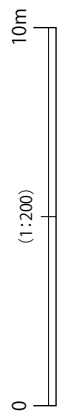
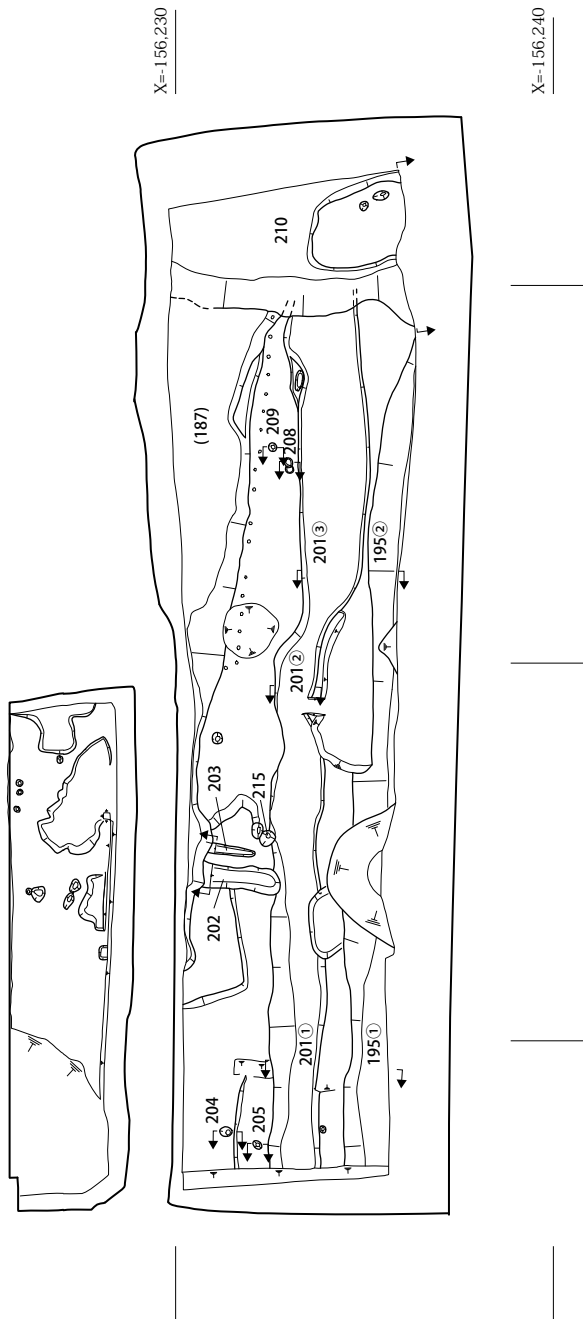


图 55 09-3-7区 第3面平面图

た可能性もある。

#### **186 土坑** (図 54・57、図版 19)

調査区の南壁際中央で検出した不整円形の土坑である。平面は南壁などにさえぎられ、部分的な検出にとどまった。確認できる箇所での直径が 1.4 m、深さ 0.55 mをはかる。断面形は逆台形を呈し、埋土はほぼ水平堆積である。

和泉型最終段階の瓦器碗が出土しており、14 世紀前半代の遺構と考えられる。

#### **193 土坑** (図 54)

調査区の西半で検出した円形もしくは隅丸方形の土坑である。大半を 192 溝によって切られており、詳細は不明である。

#### **196 土坑** (図 54・57、図版 19)

調査区の南壁際、やや西よりで検出した円形の大形土坑である。第 1 面の下層、第 2 面までの途中の高さで検出した。195 溝を切る。

平面は南壁などにさえぎられ、全体の約 2 分の 1 の検出にとどまった。また、底部も掘削深度よりかなり下がり湧水が激しいため、最底部まで掘りきれていない。土坑としたが、形状や、湧水層に達することから素掘りの井戸の可能性をもつ。確認できる限りでは直径が 4.1 m、深さ 1.25 mをはかる。断面形は深い播鉢形を呈し、埋土はほぼ水平に堆積する。

#### 09-3-7 区 第 3 面の遺構 (図 55、図版 19)

4 層上面で検出したのが第 3 面の遺構である。溝、土坑、柱穴、自然流路などを検出した。検出高は T.P.10.3 m 前後である。09-3-7 区以外にも、あわせて調査した 09-3-3 区の未調査箇所でもアメーバ状の土坑などを検出した。

#### **195 溝** (図 55・56、図版 19)

調査区の南壁際で検出した東西溝である。東西端は調査区のさらに外に延長しているため、確認できる長さは 22.0 m である。また、南端も擁壁攪乱などに遮られ、検出し得なかった。2 層上面の遺構、186 土坑や 196 土坑に切られる。残存幅 1.7 m、深さ 0.55 mをはかる。断面形は椀形を呈する。

埋土の堆積状況を見ると、溝の埋没時期に 2 段階あった様子がみとれる。北肩を埋め、溝の幅を 0.8 ~ 1.0 m と南に狭めながら機能を続け、最終的にはこの溝は埋没したようである。

195 溝の北側に 0.5 m ほどあけて 201 溝が位置する。後述するように、201 溝は条里地割の坪境溝と目される。195 溝も 201 溝と時期はずれるものの、同様の機能の区画溝と推測できる。

195 溝からは須恵器壺や杯の一部が出土する。遺物からは古代の遺構ともとれるが、近接する 201 溝が出土遺物から 12 世紀前葉の年代が与えられる。第 2 面の 199 溝のところで記したように、195 溝は 201 溝より層位的に新しくなる可能性がみられるので、195 溝は 12 世紀前半以降、中世期の溝と考える。

#### **201 溝** (図 55・56、図版 19)

09-3-7 区のほぼ中央、X= - 156,233 付近を東西に走る溝である。4 層上面で検出した。検出高は T.P.9.4 ~ 9.5 m である。

西端は調査区外に延長し、東端は 210 流路に交わるが、東壁断面でも遺構を確認できるので、調査区よりさらに東へ続く、長さ 35 m 以上の溝といえる。最大幅 1.7 m、深さ 0.1 ~ 0.4 mをはかる。断面形は浅い皿形、もしくは椀形を呈する。上層の 2 層の褐灰色粘土を埋土とする。

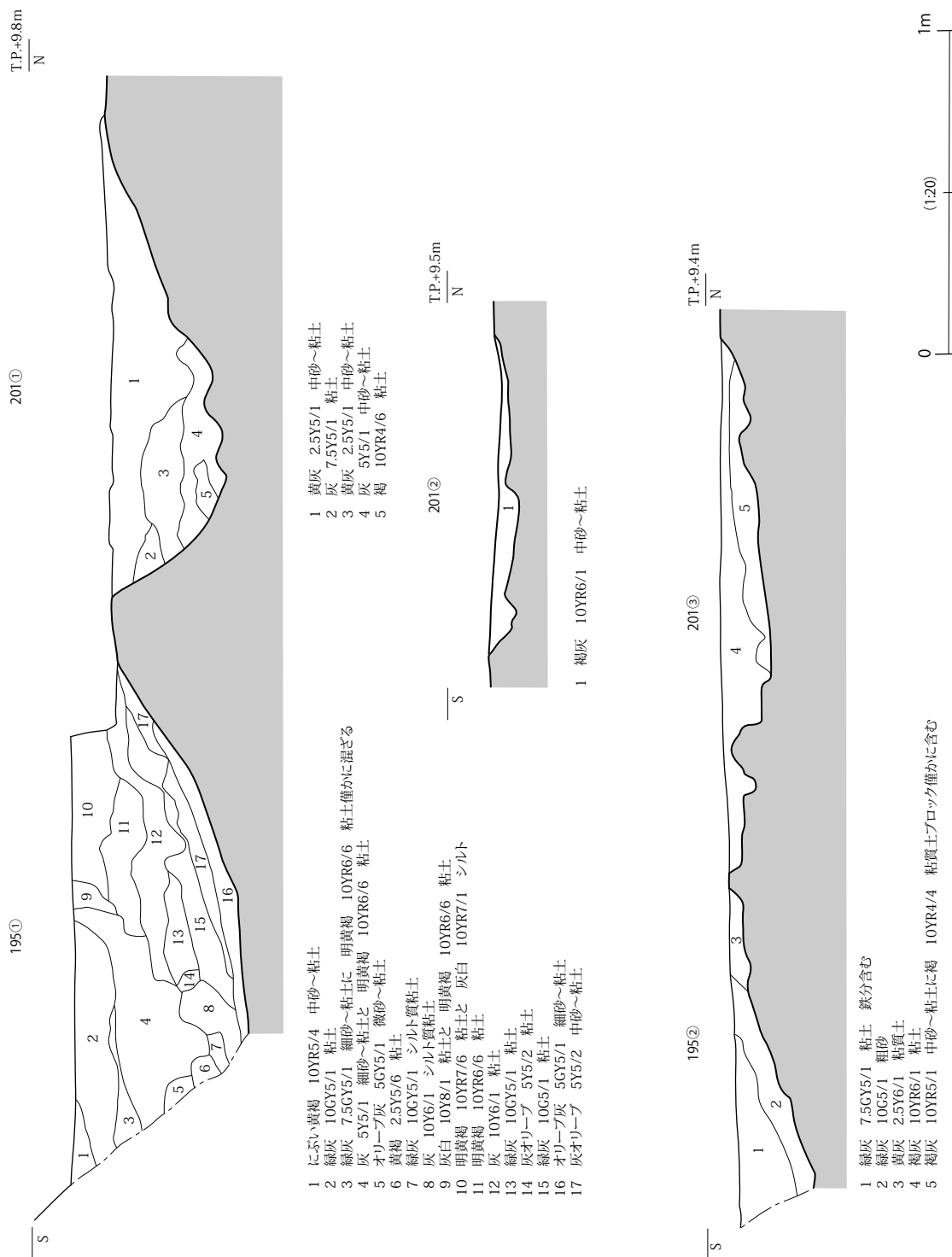


図56 09-3-7区 195溝・201溝断面図

201溝からは和泉型瓦器碗などが出土した。この型式より12世紀前葉～前半の遺構と考えられる。195溝と平行するように位置し、層位から201溝の方が先行する溝と考えられる。187溝、195溝、201溝とやや南北にずれるものの、近い位置に同規模の溝が数時期にわたって存在している。これらの溝が区画溝の役割を果たしていることの証明だろう。

松原市内は条里地割が比較的良好に残っていることが知られ、現存の地名や地割から復原する研究が進められてきた。それによると、201溝の位置は東西坪境の位置に合致する。後述するように、上之池を隔てて2町離れた位置でも同様の122溝を検出した。坪境溝が少なくとも2町分確認できたこと、



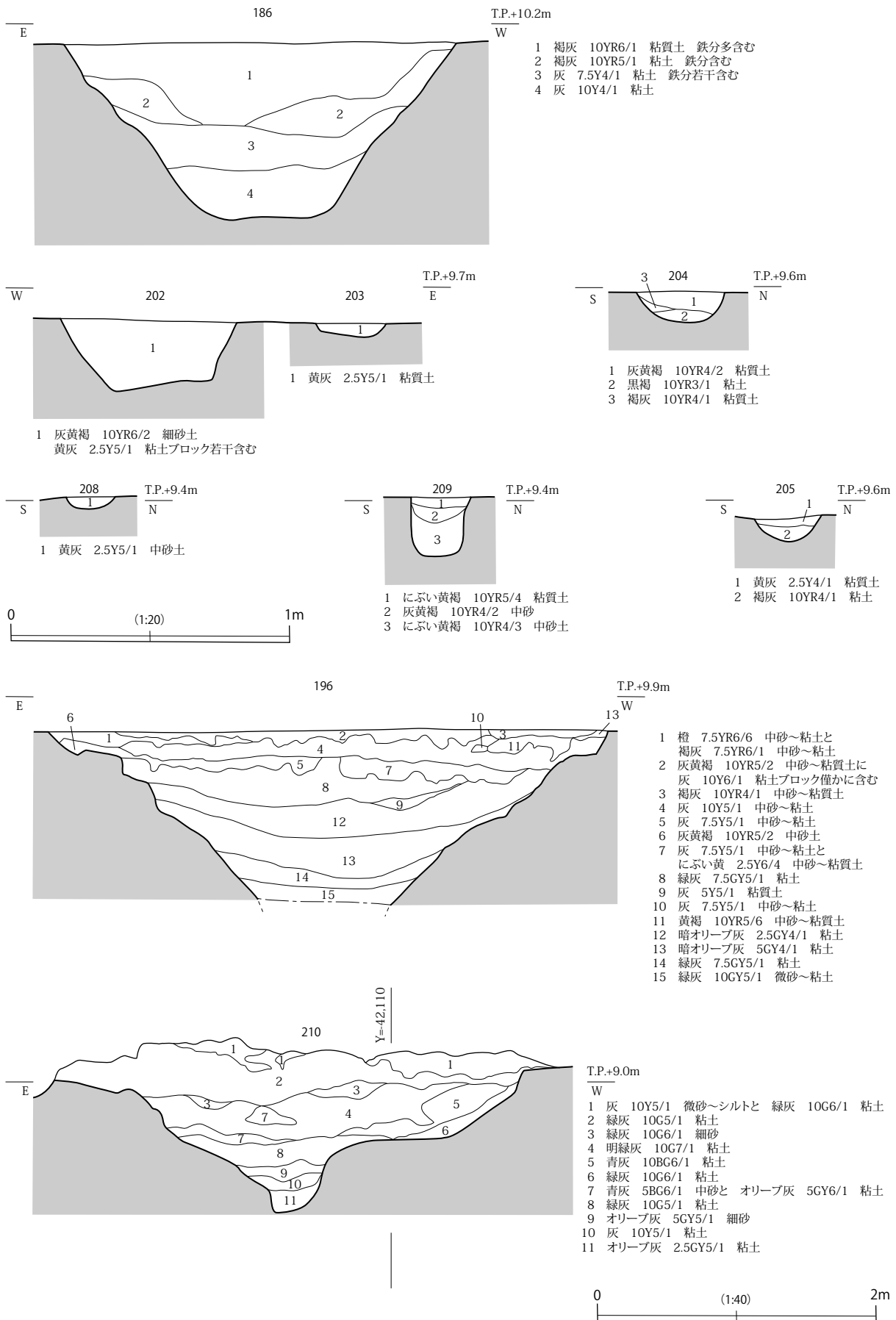


図 57 09-3-7区 第2面・第3面遺構断面図

それが12世紀前葉に遡ることを確認できたのは大きな成果である。

#### **202 溝・203 溝** (図 55、57、図版 19)

調査区の北側で検出した南北方向の短い溝である。202 溝の東に 203 溝が位置し、201 溝を切る。

202 溝は残存長 2.0 m、幅 0.65 m、深さ 0.3 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。203 溝は残存長 1.2 m、幅 0.25 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は皿形を呈する。どちらも遺物は出土していないが、201 溝を切ることから 12 世紀前葉以降、中世の溝と考えられる。

#### **204 土坑・205 土坑** (図 55・57、図版 19)

調査区の北西で検出した円形の小形土坑である。204 土坑は直径 0.3 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形を呈する。205 土坑は直径 0.25 m、深さ 0.1 mをはかる。断面形は皿形を呈する。遺物は出土していない。201 溝に近い時期、12 世紀代の遺構と推測する。

#### **208 土坑・209 土坑** (図 55・57、図版 19)

調査区の北東で検出した円形の小形土坑である。201 溝と 187 溝の間に位置する。

208 土坑は直径 0.15 m、深さ 0.05 mをはかる。断面形は皿形を呈する。209 土坑は直径 0.2 m、深さ 0.2 mをはかる。断面形はU字形を呈する。どちらも遺物は出土していない。201 溝に近い時期、12 世紀代の遺構と推測する。

#### **215 ピット** (図 55、図版 19)

203 溝の南で検出した円形土坑である。直径 0.3 m、深さ 0.3 mをはかる。

底部から 201 溝とほぼ同時期、11 世紀末から 12 世紀前葉～前半の瓦器碗が出土した。が、201 溝を切ることから、中世後半期の遺構と考える。

#### **210 流路** (図 55、57、図版 19)

調査区の東端で検出した南北方向にまっすぐ延びる流路である。最下層に位置し、最低部の深さは T.P.8.0 mに達する。地山の 4 層を突き破って青灰色粘土層まで達しており、埋土の堆積状況も水成層で、流勢が激しいことから自然流路と判断した。09-3-3 区で検出した 88 池 (187 溝の続き) の底部もこの流路に含まれる可能性が高い。

確認できる幅は 3.0～4.0 m、深さ 1.2 mをはかる。深さ 1.0 mあたりまでは断面形が皿形になるように落ちていくが、底から下は急激にすぼまり幅 0.4～1.0 mとなる。埋土はほぼ水平に堆積する。遺物は含まないが、古墳時代から弥生時代に遡る可能性をもつ。

以下のように、09-3-7 区の第 3 面は 201 溝・215 ピットや包含層の遺物から、12 世紀前葉を始まりとする時期の遺構面と考える。ただし、包含層中には古墳時代の土器が含まれ、192 溝からはサヌカイト石器も出土するなど、それ以前の時代の生活痕跡も残る。これは 09-3-1 区の第 2 面と同様である。

従って、09-3-1 区～3 区・7 区の第 3 面はまず、弥生時代から古墳時代にかけて利用されていたと考えられる。その後、古代になると 1 溝周辺に疎らに遺構が認められる以外、生活痕跡は失われる。09-2 区で検出したような古代の建物群は全く見受けられなくなる。

そして、12 世紀初めになると再び坪境に相当する位置に区画溝が形成され、それは中世から近世、近代を通じて現代まで連綿と踏襲されていくといえる。坪境以外の箇所に関しては、耕作地として利用されたと考えるが、水田区画や畑区画を明確には確認できていない。ただ、土壌からも沼地だったとは考えにくく、人が通行する程度の利用のされ方だったかもしれない。

## 第2節 遺物

### 第1項 遺構出土遺物

122から137は09-3-7区から出土した遺物である。

#### 183 堤 (図58-122・123)

第1面の構築物である。122は土師器の用途不明製品で、器形は浅い鉢状を呈する。口径27.6cm、残存高4.5cmをはかる。粘土紐を積み上げ、内外面ともナデにより仕上げる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は平らである。外面一面に煤が付着することから、焙らくや火舎など、火にかけて使用される製品と思われる。

123は丸瓦の一部で約6cmが残る。厚さ1.3cmをはかる。長辺に平行する縦方向のナデでミガキ仕上げられている。上端中心に焼成後の径5mm程度の穿孔をもつ。

#### 187 溝 (図58-124～125)・88 池 (図58-126～127)

187溝は第1面に属する。124は磁器皿である。口径12.6cm、底径5.6cm、器高1.8cmをはかる。見込みが広く、立ち上がりが浅く、口縁端部は端反である。内面は見込みに草文と思われる文様が、内周に幅0.8cmの範囲にコバルト釉で線状の文様が描かれ、その上から内外面に淡緑色の釉薬がかかる。底部外面は鉄釉で赤褐色を呈し、高台部分のみ露胎である。近世のものと思われる。

125は陶器碗底部で底径4.5cm、残存高2.9cmをはかる。器形は白磁碗に似て底部が厚く、高台は長く直線的に立ち上がる。胎土は軟質で、内外面とも淡黄色の釉薬で施釉されるが、高台の接地面は露胎である。唐津系の陶器であろうか。

88池は09-3-3区で検出したものだが、隣接する09-3-7区を調査した際に187溝と同一の遺構と判断したためここに掲載する。126は須恵器杯身で口径11.6cm、残存高3.3cmをはかる。他の遺物より明らかに時期が古く、混入と考えられる。127は平瓦の一部で、残存長5.9cm、残存幅6.9cm、厚さ1.5cmをはかる。内外面ともナデで仕上げられる。

#### 186 土坑 (図53-128)

第2面の遺構である。128は瓦器碗で口径11.7cm、残存高2.3cmをはかる。内外面とも磨滅が著しく、調整は不明である。器形から和泉Ⅳ型式の最終段階に近い時期、14世紀前半～中葉のものであろう。

#### 195 溝 (図53-129・130、図版37)

第2面の遺構である。129は須恵器壺口縁部である。口径17.5cmをはかる。口縁部は外反し、口縁端部は尖る。外面にはロクロナデによるカキメ痕が頸部にみられる。

130は須恵器杯Bの底部で、底径12.0cmをはかる。高台は外に張り出す。

#### 201 溝 (図58-131・132・134～137、図版37)

第3面の遺構である。131・132・134は瓦器碗である。

131の底部から高台部分は失われる。口径15.5cm、残存高4.4cmをはかる。外面口縁端部にもミガキが認められ、内面は口縁部から見込み近くまでミガキが密に入る。法量およびミガキの密に入ることから、和泉Ⅱ-1～2型式段階、12世紀前半と考えられる。132は体部下半から欠損する。口径14.1cm、残存高3.1cmをはかる。磨耗が著しいが、ミガキの幅が細く体部内面の下までミガキが入っていることから、131・134と同時期の瓦器碗であろう。134は底部から高台部分が失われる。口径15.4cm、残存高4.7cmをはかる。外面は磨滅するが、体部下半にユビオサエ痕が残る。内面は口縁部から見込み

近くまでミガキが密に入る。131 とほぼ同時期の和泉Ⅱ型式初めの瓦器碗と考える。

135 は白磁碗である。口径 12.4 cm、残存高 4.1cm をはかる。口縁端部をつまみあげる。内外面とも明緑灰色の釉薬で施釉される。136 は須恵器壺口縁部である。口径 16.2 cmをはかる。内面に一部自然釉が認められる。137 は丸瓦の一部である。外面には縄目痕、内面には布目痕が残る。

201 溝は瓦器碗の型式から 12 世紀前葉～前半の年代が与えられる。

#### 215 ピット (図 53 — 133)

201 溝の付近で検出した、第 3 面の遺構である。133 は瓦器碗である。口径 15.0 cm、器高 3.7 cmをはかる。外面にはユビオサエ痕が残る。高台は断面三角形をなす。内面口縁部から体部上半は磨滅のため調整不明だが、下半は見込みまで平行にみがかれ、見込みには格子ミガキが認められる。131・134 とほぼ同時期の和泉Ⅱ型式瓦器碗と考える。従って、215 ピットも 12 世紀前葉～前半の遺構であろう。

149～152 は 09 — 3 — 1 区の遺構である。

#### 1 溝 (図 59 — 149、図版 37)

149 は土師器羽釜の鏝部である。鏝部径は 30.0 cm強と推測できる。体部と鏝の接点には粘土紐の接合痕が、体部内面にはナデとユビオサエの痕が残る。中世の羽釜片である。

#### 3 溝 (図 59 — 150、図版 37)

150 は弥生土器甕か壺の底部である。底径 7.3 cmをはかる。胎土は粗く石英・長石・チャート粒を含み、赤褐色を呈する。調整は不明である。これのみの出土であり、3 溝の時期は弥生時代以降としかいえない。

#### 4 井戸 (図 59 — 151・152、図版 37)

151 は平瓦である。残存長 12.5 cm、残存幅 9.3 cm、最大厚 2.2 cmをはかる。ナデにより仕上げられる。

152 は須恵器甕口縁部である。口縁部は短くつまみあげる。外面肩部にわずかにタタキの痕跡が認められる。図化しなかったものも含め、中世後半期から近世と考えられる。

### 第 2 項 包含層出土遺物

#### 1 層 (7 区耕土層) (図 58 — 138 ～ 142)

09 — 3 — 7 区で確認した 183 堤盛土から採取したものである。

138～141 はすべて染付磁器碗である。いずれも口径に比して深い碗形をとる。138 は口径 10.2 cm、器高 4.5 cmをはかる。外面に草葉文であろうか、円弧線が描かれる。139 は口径 9.3cm、器高 4.2 cmをはかる。外面に草花文が描かれる。140 は口径 10.1 cm、器高 4.1 cmをはかる。外面に草花文が描かれる。141 は口径 10.6 cm、器高 5.2 cmをはかる。外面に花文が描かれる。

142 も染付磁器であるが、体部と底部が直角に近い筒型の器形をとるので、香炉や蕎麦猪口などの用途が考えられる。口径 7.7 cm、器高 4.0 cmをはかる。外面は口縁部に雷文が描かれ、その下には松葉と笹葉がみられることから松竹梅であろうか。内面は山と波に浮ぶ舟の山水文である。規格的な法量を取り、量産化された 18 世紀後半のものであろう。

#### 2 層 (図 58 — 143 ～ 146、54 — 153 ～ 161)

143 から 146 は 09 — 3 — 7 区から出土した。143・144 は瓦器碗である。143 は口径 14.0 cm、残存高 3.4 cmをはかる。磨滅のため調整不明だが、和泉型Ⅲ型式初め、12 世紀後半の瓦器碗である。144 は口径 14.3 cm、残存高 4.0 cmをはかる。内外面ともミガキが体部下半まで施されていることから、和泉型Ⅱ型式終わりの段階、12 世紀前葉の瓦器碗である。

145 (図版 37) は須恵器杯蓋である。口径 10.2cm、器高 3.8 cmをはかる。天井部に 2 条の線刻のへ

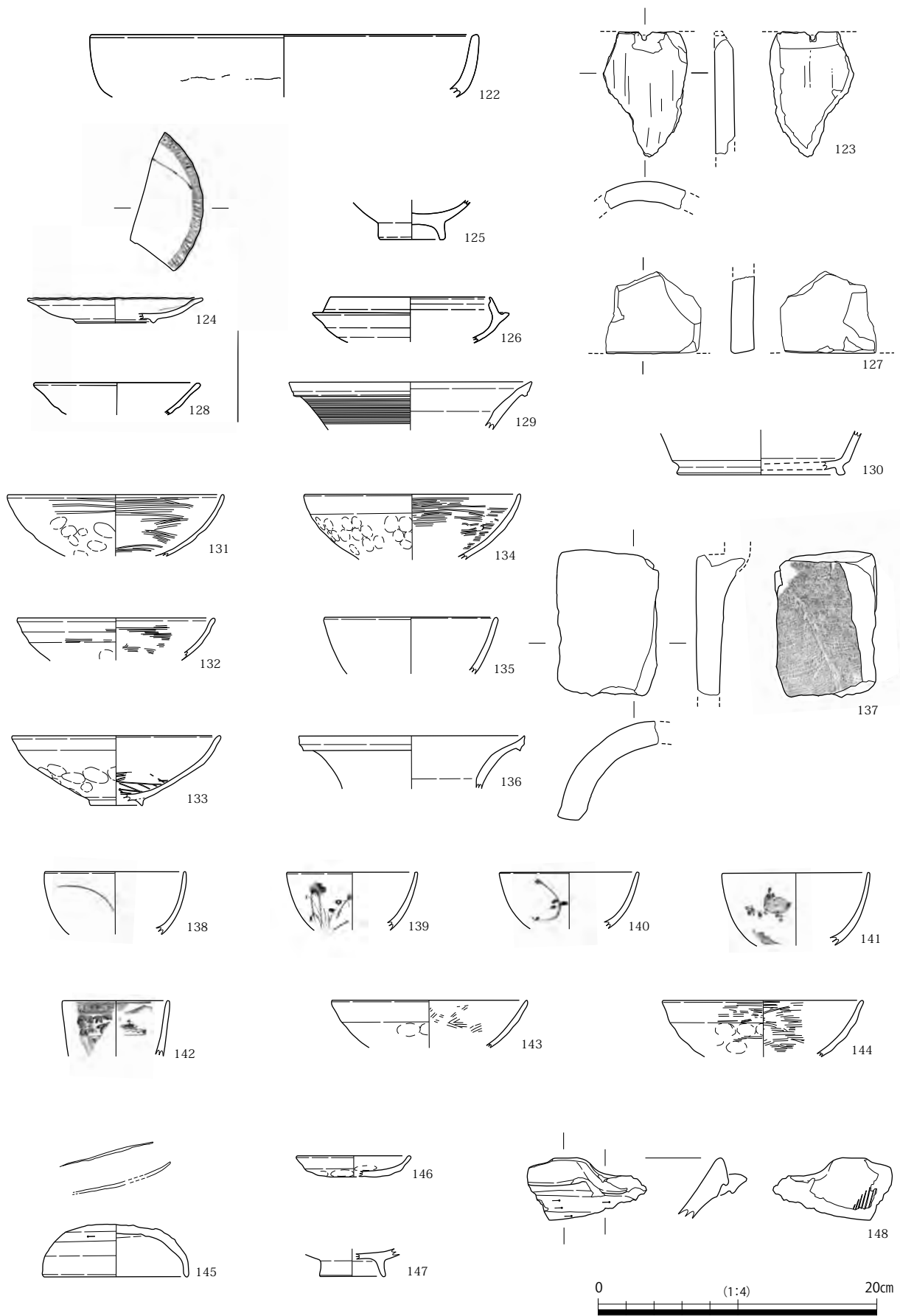


图 58 09-3-7区第1面·第2面遺構・包含層出土遺物実測図

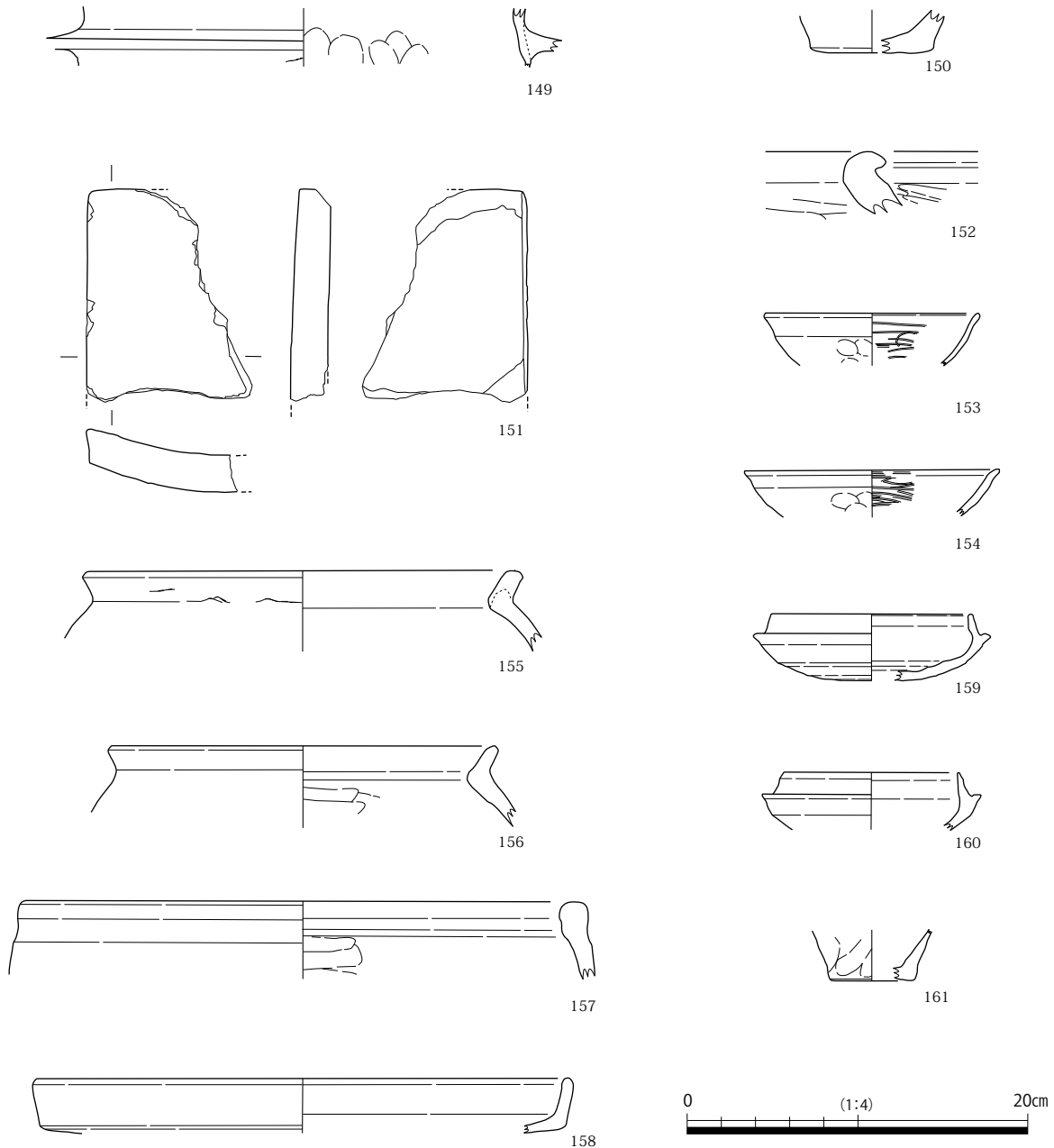


図 59 09-3-1~3・8区 遺構・包含層出土遺物実測図

ラ記号をもつ。146は瓦器皿である。口径8.0cm、器高2.0cmをはかる。炭素の吸着が悪く、内外面とも灰色を呈する。09-3-7区の2層は瓦器椀から12世紀前葉～後半の年代が与えられる。

153～157、159、161は09-3-1区から出土した。153・154は瓦器椀で、153は口径12.5cm、残存高3.1cmを、154は口径15.0cm、残存高2.8cmをはかる。いずれも外面にはミガキがほとんど認められず、内面のミガキも疎らで器壁も薄い。153は和泉型IV型式で14世紀前半、154は和泉型III-3型式で13世紀前半であろう。155は土師器甕もしくは羽釜口縁部である。口径25.4cmをはかる。ナデで仕上げられるが、外面には粘土紐の接合痕が残る。口縁部は頸部から鋭く屈曲する。156も土師器甕口縁部で、口径22.5cmをはかる。口縁端部は丸みをもち口縁部と頸部の境目は厚く肥厚する。

157は09-3-1区から出土した。土師器の羽釜口縁部である。口径33.0cm、残存高4.6cmをはかる。

直立気味に立ち上がり、端部は丸く肥厚する。

158は09-3-8区から出土した。土師器の用途不明品である。浅く、底部が平らな箱状の容器で焙烙のようなものか。口径31.4 cm、底径30.4 cm、器高3.2 cmをはかる。

159は須恵器杯身で、口径11.8 cm、器高4.0 cmをはかる。口縁部はわずかに内傾する。TK 10～TK 43型式である。161は弥生土器甕底部である。底径4.5 cmをはかる。外面にはナメにナデ上げた痕跡が残る。

160は09-3-3区から出土した。須恵器杯身である。口径10.4 cm、残存高3.4 cmをはかる。口縁部は直立気味に短くつまみあげ、端部は鋭く尖る。159と同じく、TK 10型式である。

09-3-1～3区及び8区の2層に含まれる遺物は、後述の石器も含めると弥生時代中期、古墳時代（6世紀半ば）と13世紀前半の3つに大別される。弥生時代、古墳時代にも一定の生活域が存在し、それらを削平しながら13世紀前半にも生活が営まれたと考えられる。

### 3層（図58-147・148）

147・148は09-3-7区から出土した。147は龍泉窯系青磁碗底部である。底径4.6 cmをはかる。高台は露胎である。148は瓦質土器播鉢である。破片での出土だが、片口部分である。外面には横方向のケズリが、内面には7条の播目が確認できる。口縁端部は断面三角形で、肥厚しない。09-3-7区3層は出土遺物が少量であるが、2層とさほど隔たらない時期と考えられる。

### 第3項 石器（図60-162～167、図版38）

162は09-3-1区1溝の南西肩に近い包含層、2層から出土した。結晶片岩製の磨製石庖丁である。約3分の1が欠損し、残存部に紐穴は見受けられない。残存長11.4 cm、最大幅4.6 cm、厚さ0.7 cmをはかり、幅0.5 cmの刃部をもつ。表面はかなり風化し、灰白色を呈する。弥生時代中期と考える。

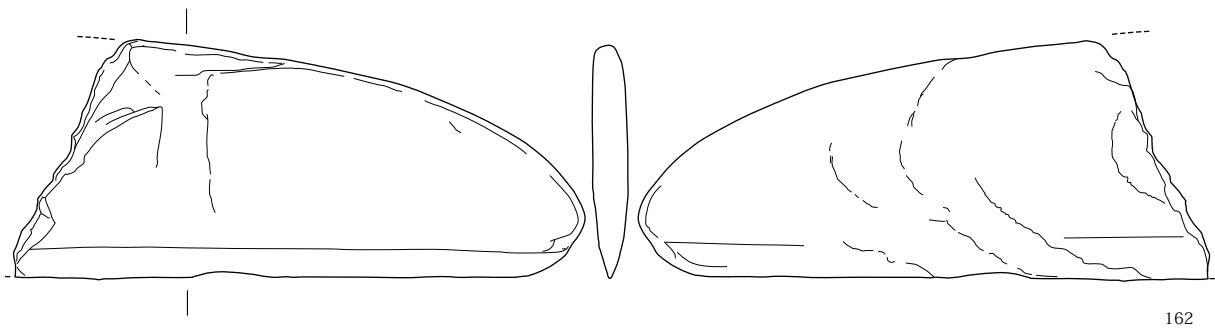
163は09-3-1区の北東端、2層で検出した。サヌカイトの剥片である。最大長6.9 cm、最大幅3.9 cm、最大厚1.9 cmをはかる。石核から打ち搔いたままの状態、細かい打面調整、2次加工はみられない。

164は09-3-2区の2層から出土した。サヌカイトの剥片である。最大長3.8 cm、最大幅5.0 cm、最大厚0.9 cmをはかる。表面・背面の上側縁にわずかだが調整痕が認められる。スクレイパーの未製品か。

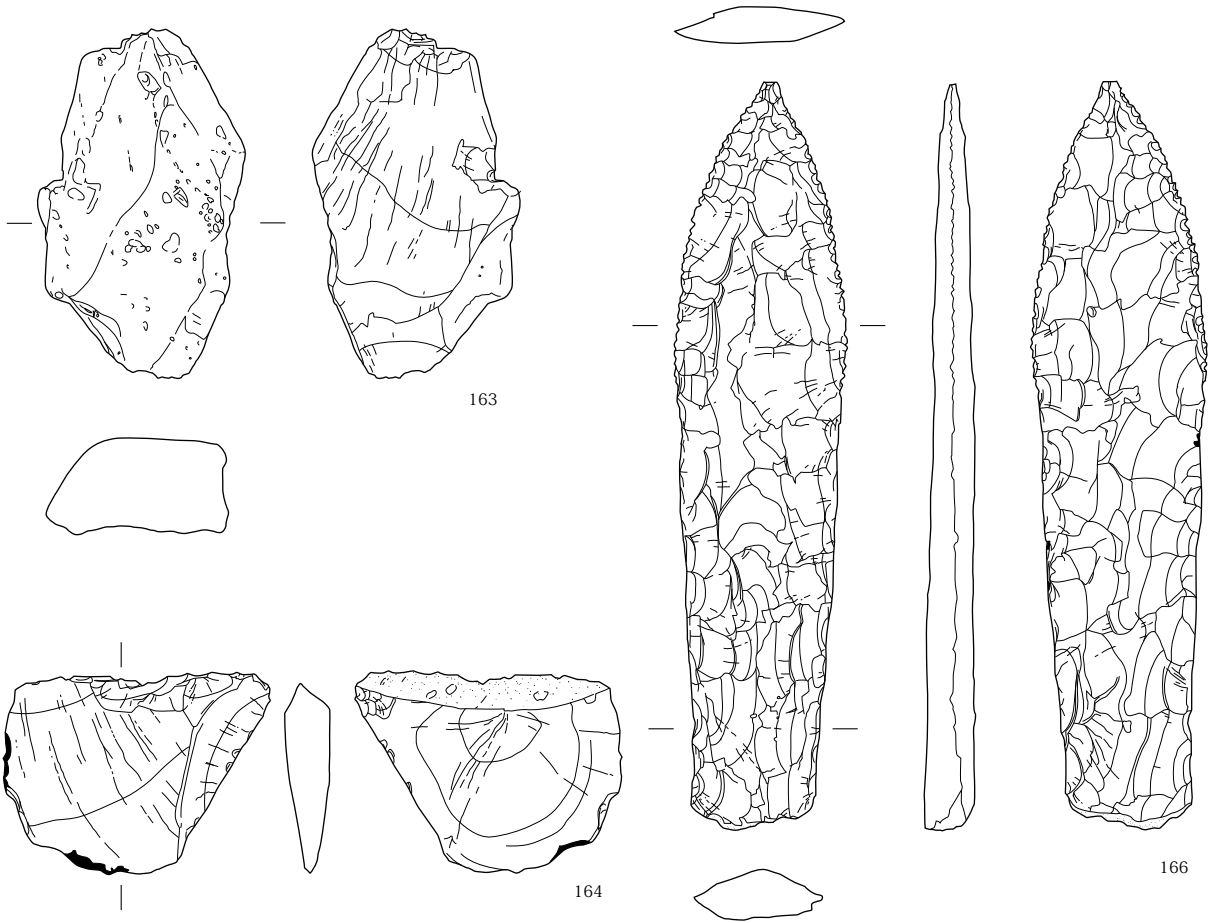
166は09-3-1区の用水路より西側、1溝に近接する地点で検出した、2層からの出土である。サヌカイトの打製石剣である。全長14.8 cm、刃部長6.2 cm、刃部最大幅3.3 cm、茎部幅2.5 cmをはかる。横断面は菱形をなし、最大で1.0 cmの厚みをもつ。茎部の先端は風化した自然面を残し、刃部の先端はごくわずかに欠ける。刃部は幅1 mmの細かい鋸歯状の加工がされたほぼ完成品である。刃部の先端がわずかに欠けることから、実際に使用していたと思われる。弥生時代中期のものであろう。

165・167は09-3-7区の192溝から出土したサヌカイト剥片である。165は最大幅4.5 cm、最大厚1.1 cmをはかる。167は最大長3.7 cm、最大幅1.9 cm、最大厚0.4 cmをはかる。二等辺三角形の形状をなし表面右側縁に微細剥離痕が認められることから、石鏃あるいは石錐の未製品とも考えられる。

09-3-1～3・7・8区では石器を使用していた弥生時代の明確な遺構は検出し得なかった。しかし、一定量の石器が出土し、打製石剣のような風化を受けない優品も含まれる。これは河川の氾濫等でローリングを受けながら運ばれてきたのではなく、附近にかつては弥生時代の生活圏が存在したことを示唆する。



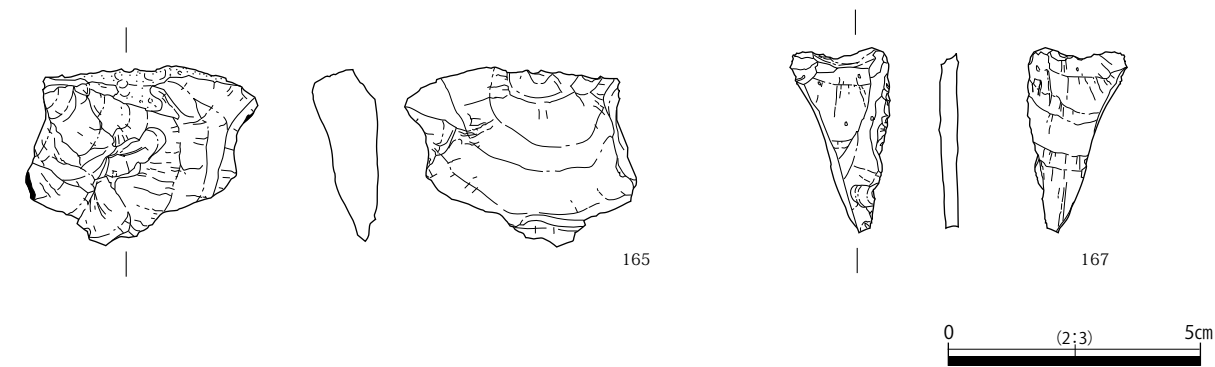
162



163

164

166



165

167

0 (2:3) 5cm

图 60 09-3-1~3·7区 出土石器实测图



# 第5章 府道その2上之池南堤（09－3－15区）・池以南部（09－3－4～6区）の調査成果

## 第1節 遺構

### 第1項 調査の概要

上之池より北側の区域（09－3－1～3区）の調査終了後、上之池より南側の区域（09－3－4区～6区）の調査を、平成22年4月から9月にかけて行った。

現存使用している東西用水路すぐ南からを北の起点として、南は大堀堺線に接する部分までの範囲である。南北長が120m、東西幅が35mで、大堀堺線に取り付く南端は、09－2－1区北端と同様にラッパ状に開口するため幅が約50mと広がる。

この区域を3つの調査区に分け、北から09－3－4区、5区、6区と名づけ、調査も北から南に順次行った。この区域は調査区内には南北用水路は存在しない。ただ、西端と中央よりやや東寄りの2箇所、大阪府教育委員会が行った試掘トレンチの痕跡が幅2mで南北に細長く入って続いている。

現地地表高は北西部でT.P.11.0m、それ以外は若干高くなりT.P.11.3m前後である。北西部分のみ西からの畑地の続きで盛土が他より若干低くなっているために約0.6mの厚さがあり、その他は0.8m程度の厚さであった。この盛土を普通機械掘削した。その後、耕土層・床土層を現状にあわせて0.4～1.0m機械掘削した。人力掘削は北西部で0.3m、それ以外は0.1～0.2mの厚さで掘削した。

最終遺構面の標高は09－3－15区から09－3－4区の途中までは低くT.P.9.3m前後であるが、徐々に上昇していきX＝－156,370付近で急激に上昇してから後は緩やかになり、T.P.10.1～10.3mとなる。これは地山面を構成する層が明黄褐色粘土層（4層）からオリーブ黄色粘土層（2'層）に変質することに関連がある（第2章の基本層序参照）。

機械掘削終了後に断面で後述の近世の水路（89水路）を確認したが、遺構面の調査としては地山面1面のみで行った。この報告書で報告する際に、明らかに地山面より上層から切り込んでいる89水路に関してはプライマリーな面での検出ではないが、第1面として報告し、中世以前の遺構については第2面として報告することとした。

河内長野線・大堀堺線すべての調査の最後に、残っていた上之池と東西用水路間の池南堤部分（09－3－15区）の調査を行った。南北長15m強、東西幅35mの区域である。09－3－4区との間に幅3mほどの東西用水路が現存する。この区域は現況では駐車場として利用されていたため、現地地表はT.P.11.5m前後とやや高くなっていた。また、池の満水時に調査を行うこととなったため、池からの流水を防ぐ必要があり、舗装撤去後、用水路がある南辺を除いた東・西・北の3辺を鋼矢板で囲った。

その後機械掘削したが、ほとんどが近現代になって上之池を埋め立てており、地山面ぎりぎりまで攪乱を受けていることが判明した。わずかに残った高まり部を09－3－7区北堤に対応する堤と捉えた。

しかし、これより下層に09－3－4区で検出した89水路の続きが認められたため、他の調査区との統一をはかるために、堤検出面は09－3－4区から6区より上層で検出した遺構面となるが、これを第1面とせずに遺構面名称はつけずに報告した。そして、89水路を検出した高さでの面を第1面、地山面で検出した遺構面を第2面とした。

## 第2項 遺構（図61～70、図版21～25）

まず、09-3-15区でのみ確認した476堤について簡略に述べる。

### 476堤（図61・62）

09-3-15区は、調査前は駐車場として使用されていたため、アスファルト舗装を除去した地表面はほぼ平坦だった。しかし、機械掘削の結果09-3-15区の北から約5分の4の範囲は、上之池を現代になって埋めたものと判明し、しかもその埋め戻しの深さは掘削深度近くまで達していた。残り5分の1部分も南辺に沿う部分は、現行の用水路を埋設する際に掘ったと思われる攪乱が存在し、その北にも攪乱溝が存在する。盛土を剥いで1層あるいは2層上面に相当する遺構面が残っていたのは、 $X = -156,332 \sim -156,335$ の限られた範囲だった（図61）。

盛土、床土を除去して残ったわずかな地表部分から476堤を確認した（図61）。これは人為的に土を積み上げて固く締めた痕跡が断面観察から認められるので、堤とみなした（図62）。検出高はT.P.11.4m前後である。約1.0mの高さで盛土がなされているが、攪乱によって高まりのほとんどの部分が失われ、残存状況はきわめて悪い。盛土は包含層にあたる2層もしくは地山面にあたる4層を掘り返して、池の埋土や砂層を混ぜたように、ブロック状にこれらの土が含まれていた。

南に続く09-3-4区では先に調査が終了して地山面の4層を検出しているが、これに似た堤状の高まりは確認できなかった。つまり、09-3-4区までは476堤は存在しなかったことになる。現在の用水路のある部分までが476堤の範囲と推測される。

09-3-7区の $X = -156,230 \sim -156,240$ 間で検出した坪境溝や堤から100m強、ちょうど1町離れた位置に存在することから、476堤も坪境を意識して作られたものといえる。

476堤には近世の瓦や古墳時代の須恵器などがわずかに含まれる。この堤の時期は下層で確認した89水路も近世後半の所産であるので、476堤の時期はそれ以降に築造されたと考えられる。

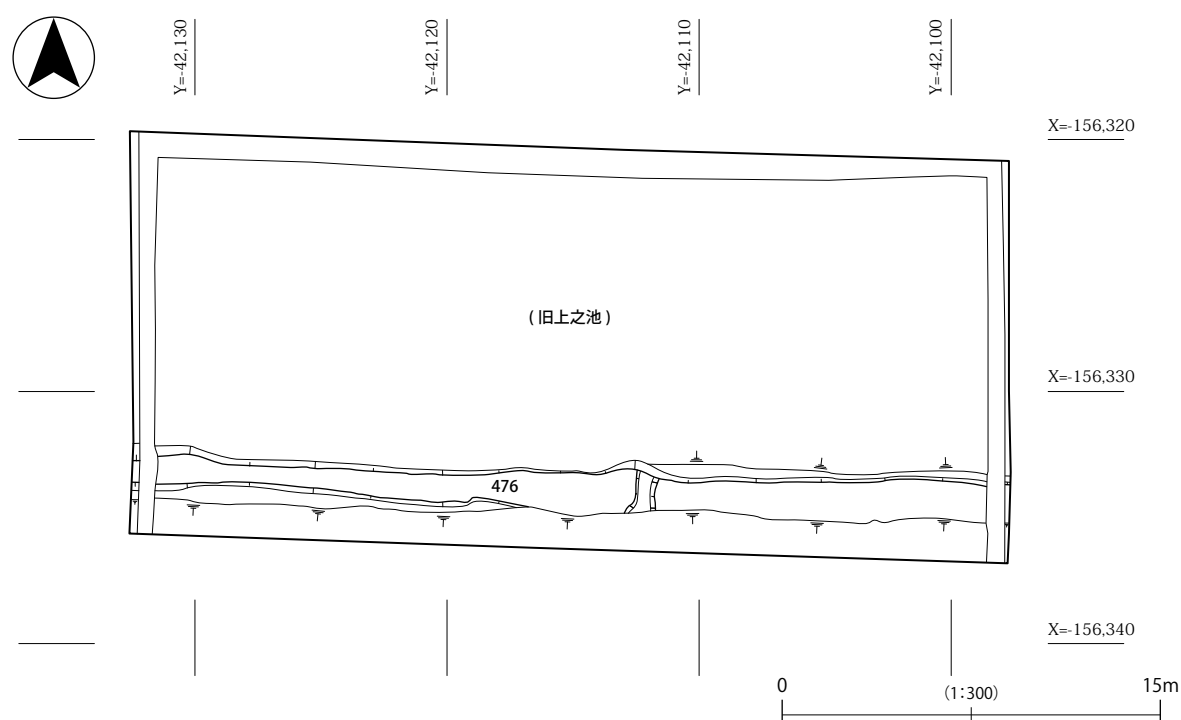


図61 09-3-15区 池・堤平面図

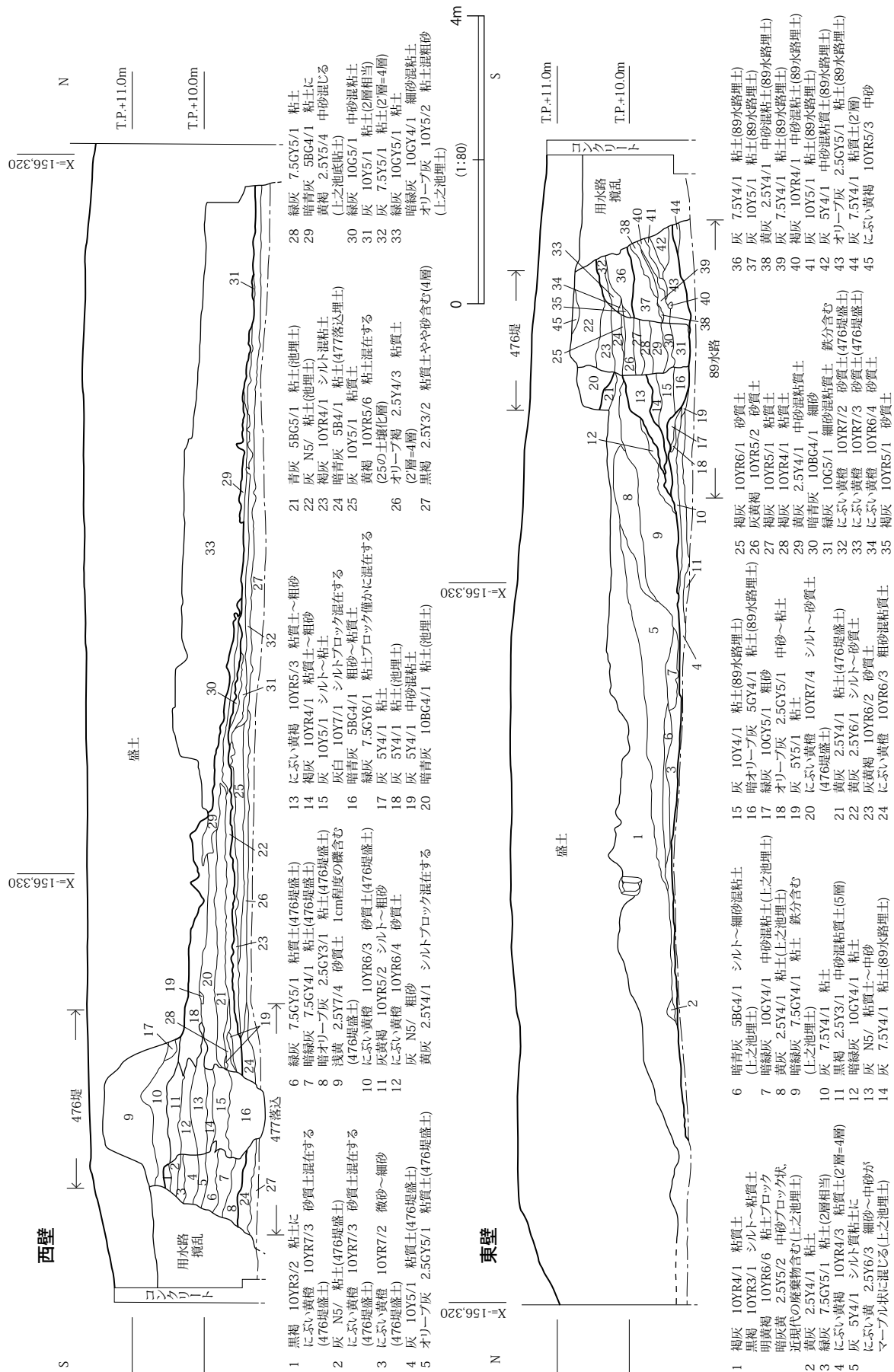


図 62 09-3-15 区 西壁・東壁断面図

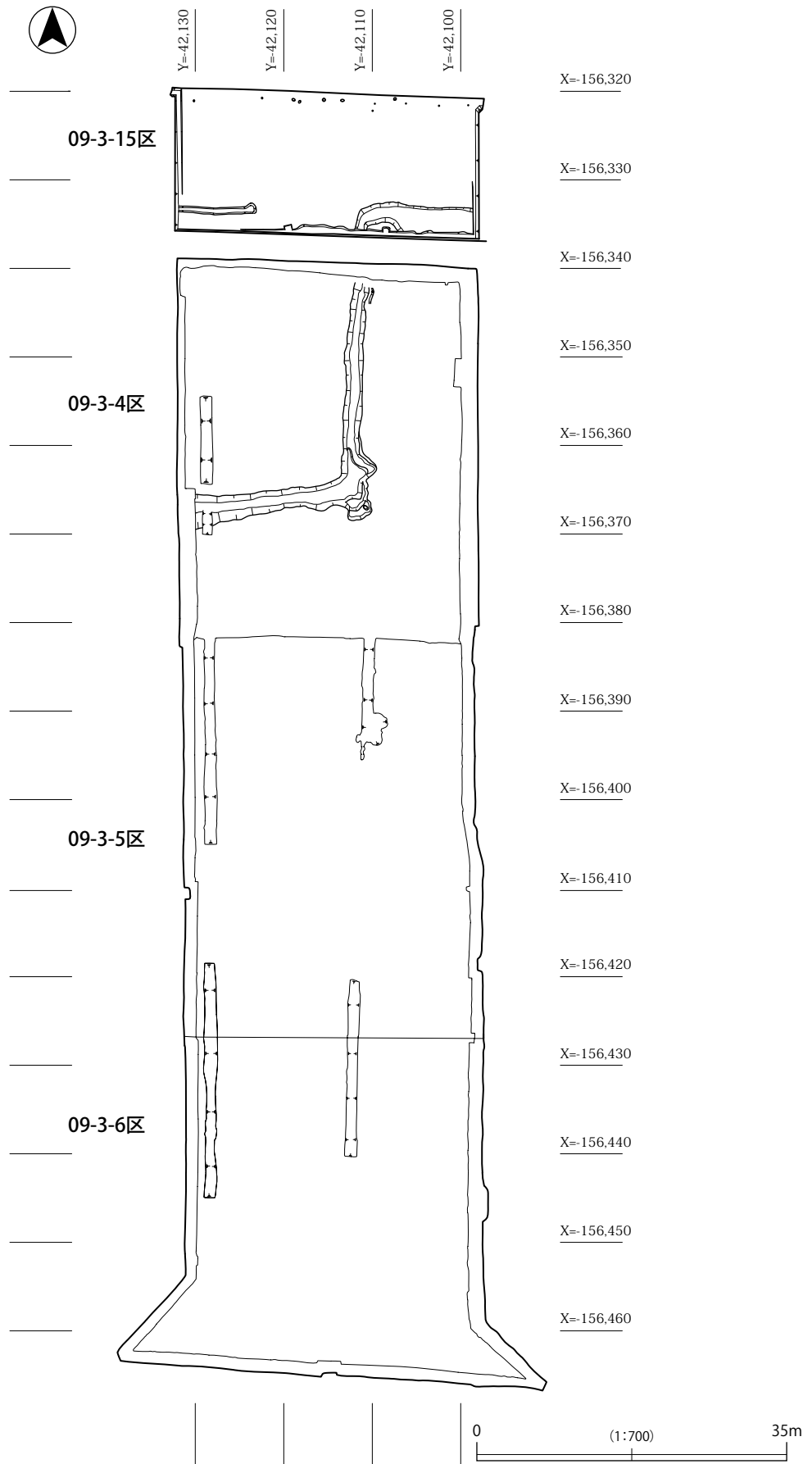


图 63 09-3-4~6·15区 第1面平面图

## 第1面

09-3-15区及び09-3-4区にまたがって、89水路を検出した。これ以外の調査区では、第1面の遺構はない。

### 89水路（図63～65、図版22・23）

この水路は、09-3-4区の西壁断面で観察するとT.P.11.5m（図65）の高さから、09-3-15区の東壁断面で観察するとT.P.10.0mの高さ（図62）から始まる。09-3-15区では前述の476堤の造成によって上部を削平されている可能性が高く、本来の高さは09-3-4区の壁断面で見られるようにT.P.11.5m近いと推測される。T.P.10.5mとは近現代の表土を剥いだ盛土のレベルにあたり、中世より後に造成されたものとして、2層上面（約T.P.10.0m周辺）の高さまでは機械にて掘削した。

また、包蔵品からみても89水路は近世の所産といえる。

第1面としてT.P.9.9～10.0mの高さで捉えた。これは2層上面もしくは4層上面の人力掘削開始面の高さである。従って、89水路はプライマリーな最上面での確認ではなく、89水路の中層から下層をこの面で把握したといえる。

89水路の平面形は09-3-4区の西端、X=-156,365～-156,370辺りから東に15m直線的に延びる。Y=-42,112地点で直角に屈曲し、今度は約35m北に延びて再び、今度は東に直角に屈曲し延びていく溝状施設である。「卍」の一部のような形と表現したらいいだろう。

幅は2～4m、深さは0.1～0.3mをはかる。09-3-15区では東にいくほど溝幅が広がったようにみえるが、これは現存の用水路を造営する際の攪乱によって溝幅が不明であるからで、実際には2、3m幅で均一だったと考える。

しかし、前述のように89水路は中層から下層で平面確認しているので、実際の溝幅や深さは本来はもっと大きなものだったと考えられる。図65の下段の断面図が本来の姿に近くなると考えられ、これによると幅5.5m、深さ1.1mをはかる。

断面形は皿形を呈する。09-3-4区の北端から途中10m程までは底面に砂利、石を敷いて保護した痕跡も認められた。また、埋土は水成層の単一の灰色粘土であることから、ゆるやかな水勢だったと考えられる。溝肩には護岸用か、杭も複数みられた。また、東西から南北へと向きを変える南東隅は水勢により氾濫したものか、袋状にやや膨らむ。深さや地表面の高さから水は西から北、東へと流れていたと考える。

真方位にほぼ一致するように設計されており、形状が直線的、人工的、画一的なつくりであるので機能名称を溝とせず、水路と呼称した。

89水路の南東隅から、赤色漆地に黒色漆で家紋のような文様を描いた漆器椀が得られた（図71-171）。法量や、内外面とも赤色漆を塗布した椀であり、高台の高い器形からも、近世の漆器椀と考える。他にも図化し得なかったが、黒漆塗地の漆器椀が出土している。水成層にパックされた状態であったためか、埋土中の有機遺物の保存状態がよく、他にも曲物の底板や板などの木製品を確認している。

それ以外にも、軒丸瓦や軒平瓦の一部、唐津系や備前の陶器などが一定量含まれていた（図71）。これらは近世後半期の様相を示す品々であるので、89水路もその時期の所産と考えられる。ただ、上層に476堤が存在することや、包蔵品が近世のものに限られることから、89水路の廃絶時期も近世後期と考える。

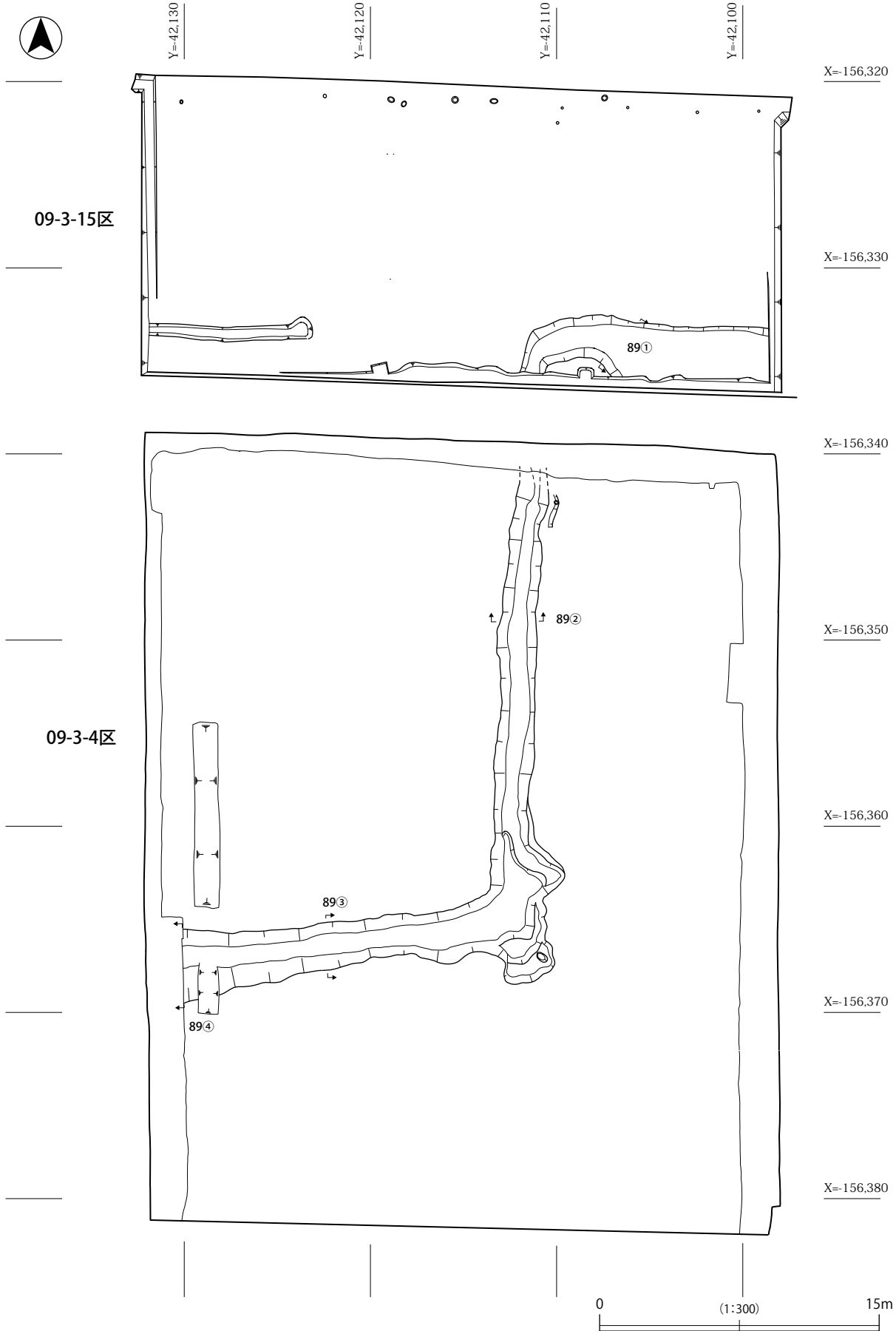


图 64 09-3-15·4区 第1面平面图

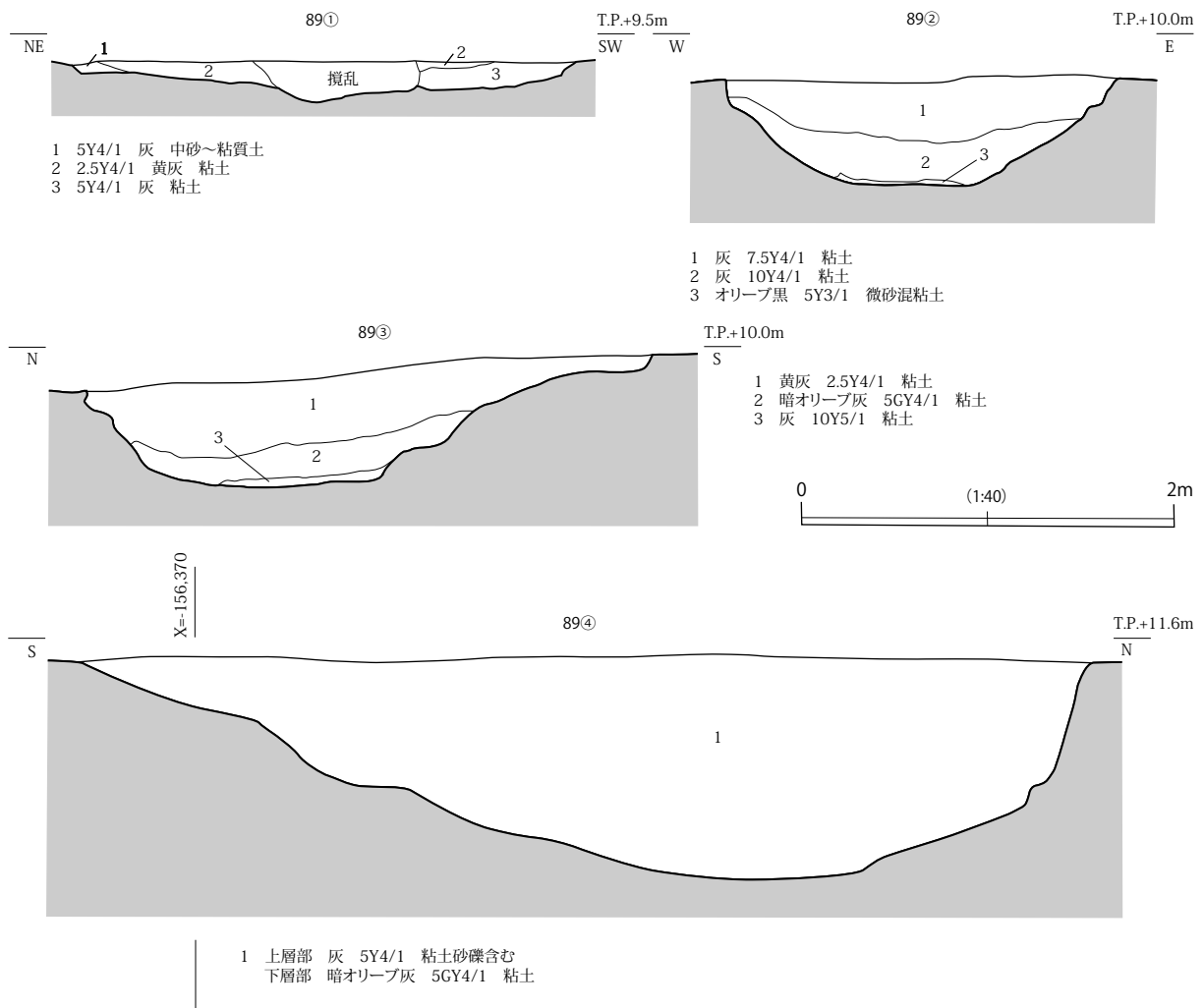


図 65 09-3-4区 89水路断面図

第2面 (図 66 ~ 70、図版 21、24・25)

地山面 (第4層) の遺構面である。全域で遺構を検出した。

標高は 09-3-15区で T.P.9.3m 前後で、地山層は 09-2-1・2区、09-3-1~3・7区でみられたのと同質の、明黄褐色シルトから粘質土層である。

09-3-4区にはいると北端で T.P.9.5m 前後になり、ここからも緩やかに上昇していく。89水路の西辺、X=-156,370 あたりで T.P.9.8m 前後だが、地山層がオリーブ黄色粘質土に変化する。それに従って、標高がやや上昇し、T.P.10.1m 前後となる。それから南に進むに従い上昇傾向だが、09-3-6区の南端でも T.P.10.3m 前後と標高差は 100m ほどの区間で 0.1~0.2m と、北半に比べると緩やかである。ともあれ、北から南へと次第に上がっていく地形をとり、上之池より北側からすると約 1m も上昇している。

09-3-15区では溝など複数の遺構を検出した。09-3-4区では、北西隅で 09-3-15区から続く落込を検出した。また、09-3-6区の南端では東西大溝などを検出した。09-3-4区から 09-3-6区の北半間は、わずかに溝の痕跡などがみられたが、顕著な遺構は検出できなかった。ただ、耕作に伴う鋤溝か、南北方向の溝痕跡や人・牛馬の足跡が全域で検出されており、耕作地としてこの区域全域が利用されていたことは間違いない。

遺物は微量で碎片だが、弥生時代から中世以降までのものが出土する。中心となるのは、12世紀か

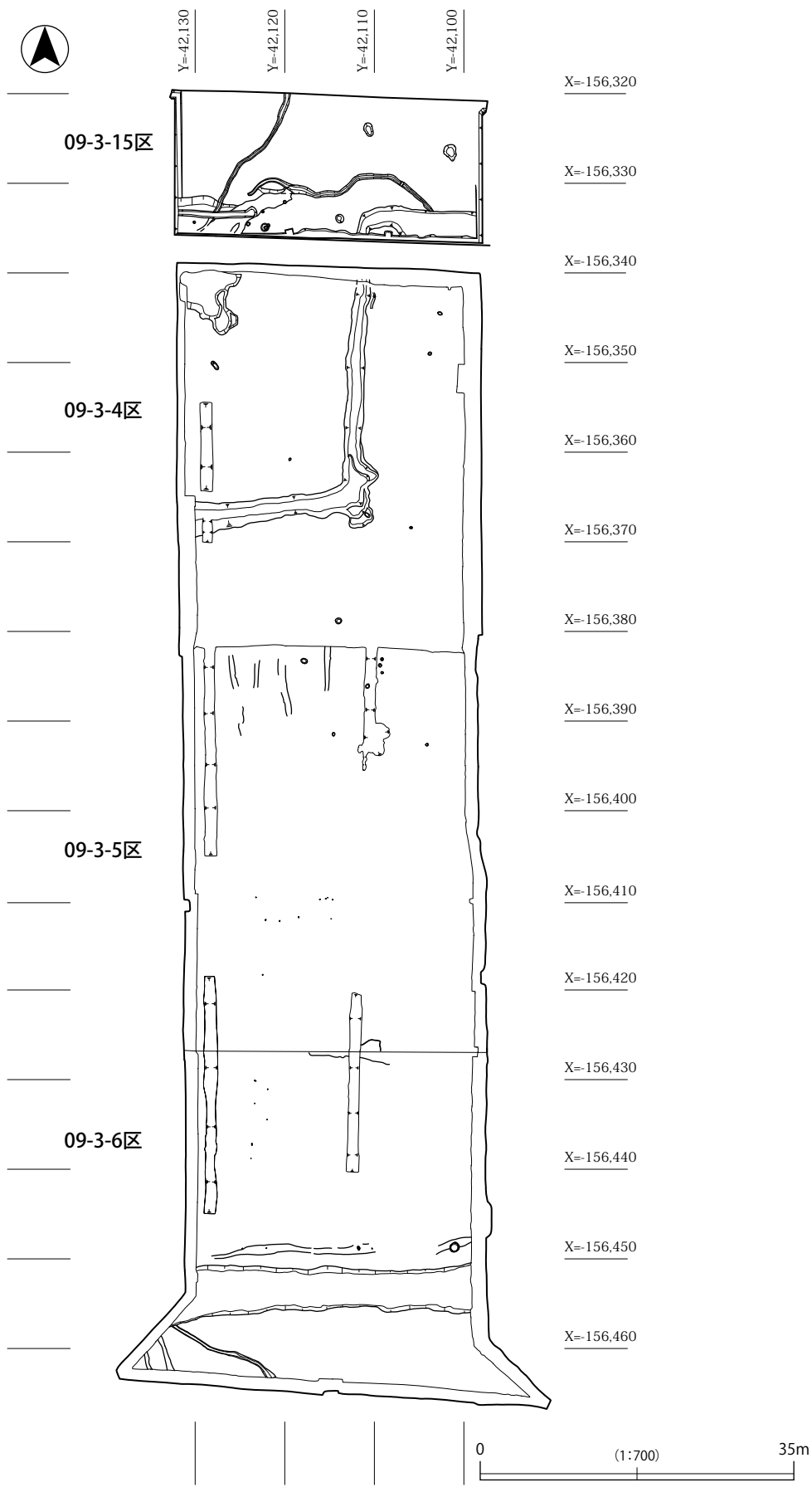


图 66 09-3-4~6·15区 第2面平面图



ら 13 世紀のものであり、この遺構面の年代もそれと捉えた。

#### 09-3-15・4 区の遺構

調査区の北辺、南辺は鋼矢板の打設や用水路の築造時により攪乱されていた。また、東西辺ともに土層観察用のアゼ・側溝を設けており、その分調査区は内側に狭まっている。

調査区は北から南に向かうにつれ、標高は少しずつ高くなっていく。しかし、09-3-15 区の南西部から用水路を挟んで、09-3-4 区の北西部にかけては谷状に地形が落ち込んでいく。この自然地形の落込を 477 落込とした。

09-3-15 区の北東部では、やや大形の土坑、466 土坑、467 土坑を検出した。その他、調査区を蛇行するように走る細い溝、473 溝や 474 溝、あるいは土坑数基を検出した。

#### 466 土坑・467 土坑 (図 66～68、図版 21)

どちらも不整円形の土坑である。

466 土坑は長径 2.0 m、短径 1.4 m、深さ 0.1 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

467 土坑は長径 1.6 m、短径 0.8 m、深さ 0.15 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

どちらもオーバーハングしているかのように、底面は凹凸が著しく、風倒木痕の可能性もある。

#### 473 溝・474 溝 (図 66～68、図版 21)

473 溝の南端は上層の 89 水路によって切られる。東から西に蛇行するように延び、南西にいくと消滅する。長さは直線距離で 20 m 強である。幅は 0.4 m、広がった部分では 0.9 m をはかる。深さは 0.1 m で、断面形は浅い皿形を呈する。

474 溝の北端は調査区のさらに北に延びる。北から南に逆 S 字形に延び、調査区南端まで続くようだが、477 落込に交わってからは不明瞭となる。長さは直線距離で 16 m 強である。幅 0.4 m、深さ 0.05 m をはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

ともに遺物は出土せず、時期は不明である。ただ、09-3-6 区南西隅で検出した 123 溝・124 溝や、大堀堺線調査区 (09-3-10～12 区) の第 3 面で検出した溝と形状は似る。

#### 468 土坑・469 土坑・470 土坑・471 土坑・472 土坑 (図 66～68、図版 21)

477 落込や 473 溝より南でみられた円形の小形土坑である。

470 土坑のみがやや大きく、直径 0.8 m、深さ 0.2 m をはかる。二段土坑になっており、0.05 m 下がったところで直径 0.4 m、深さ 0.15 m の円形土坑が掘られる。

その他の土坑は直径 0.2～0.3 m、深さ 0.1 m 程度である。断面形は浅い皿形もしくは逆台形を呈する。いずれも遺物は出土しない。

#### 477 落込 (図 66～68、図版 23)

09-3-4 区の北西隅でアメーバ状に広がる落込を検出した。この部分だけ地山の明黄褐色粘質土が検出されず、黒褐色のシルト質土から粘質土が広がる。その後、09-3-15 区でも X= -156,332 以南から段状に落ち込んでいく落込が確認され、一連のものとして断定した。

南北幅が 12.5 m、東西幅が 7 m 強で、深さ 0.3 m 以上に及ぶ。黒褐色の微砂混じり粘土もしくはより粘性の高い粘土である。南端が不整なのに対して、北端はほぼ直線的で、西端は調査区外に延長する。東端は谷状に落ち込む地形に収束する。

09-3-15・4 区の第 2 面で検出した遺構は遺物を伴わず、明確な時期決定にかける。上層の包含層でわずかに古墳時代の遺物などを含むので、それ以前の遺構面といえるだろう。

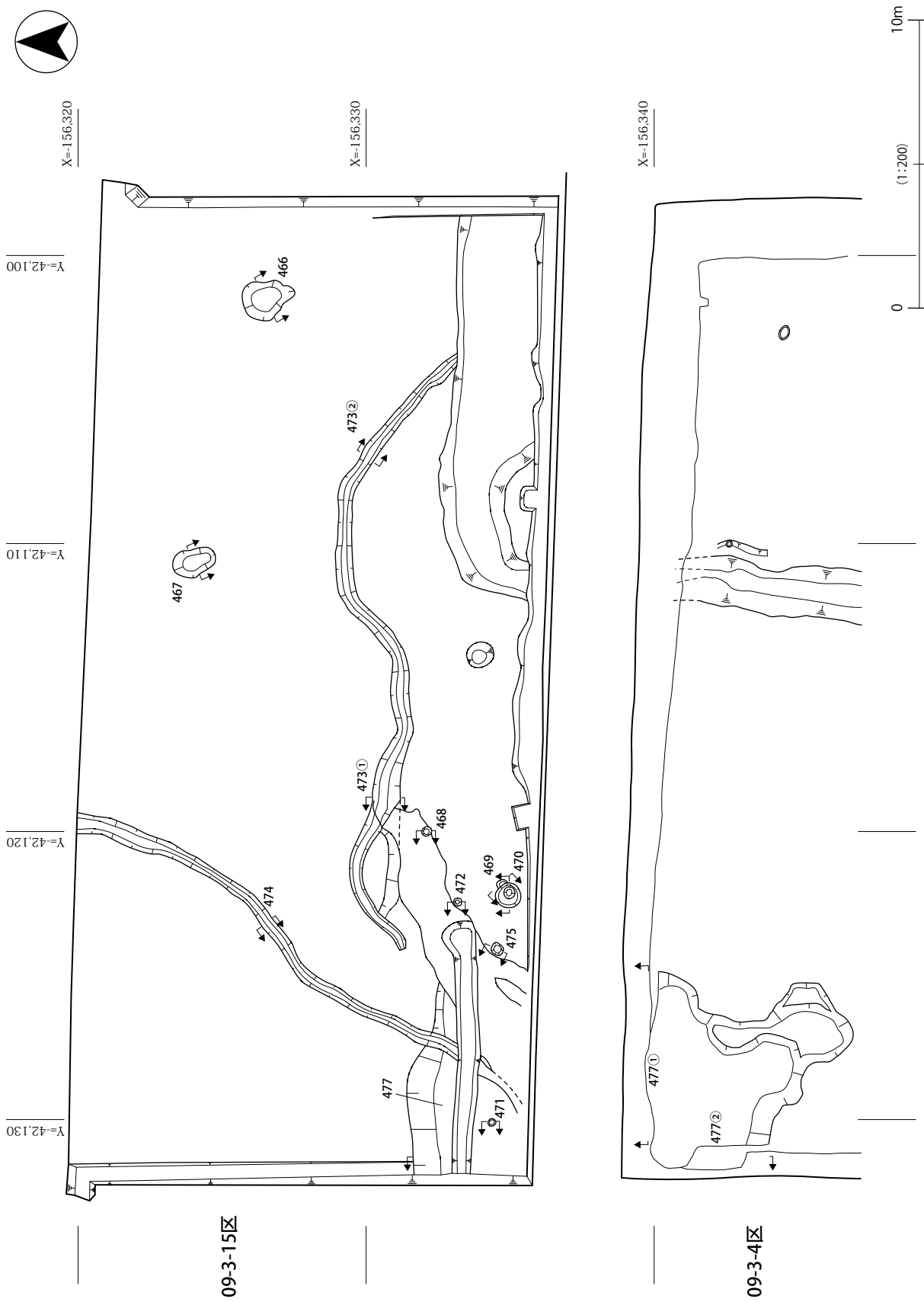


图 67 09-3-15·4区 第2面平面图

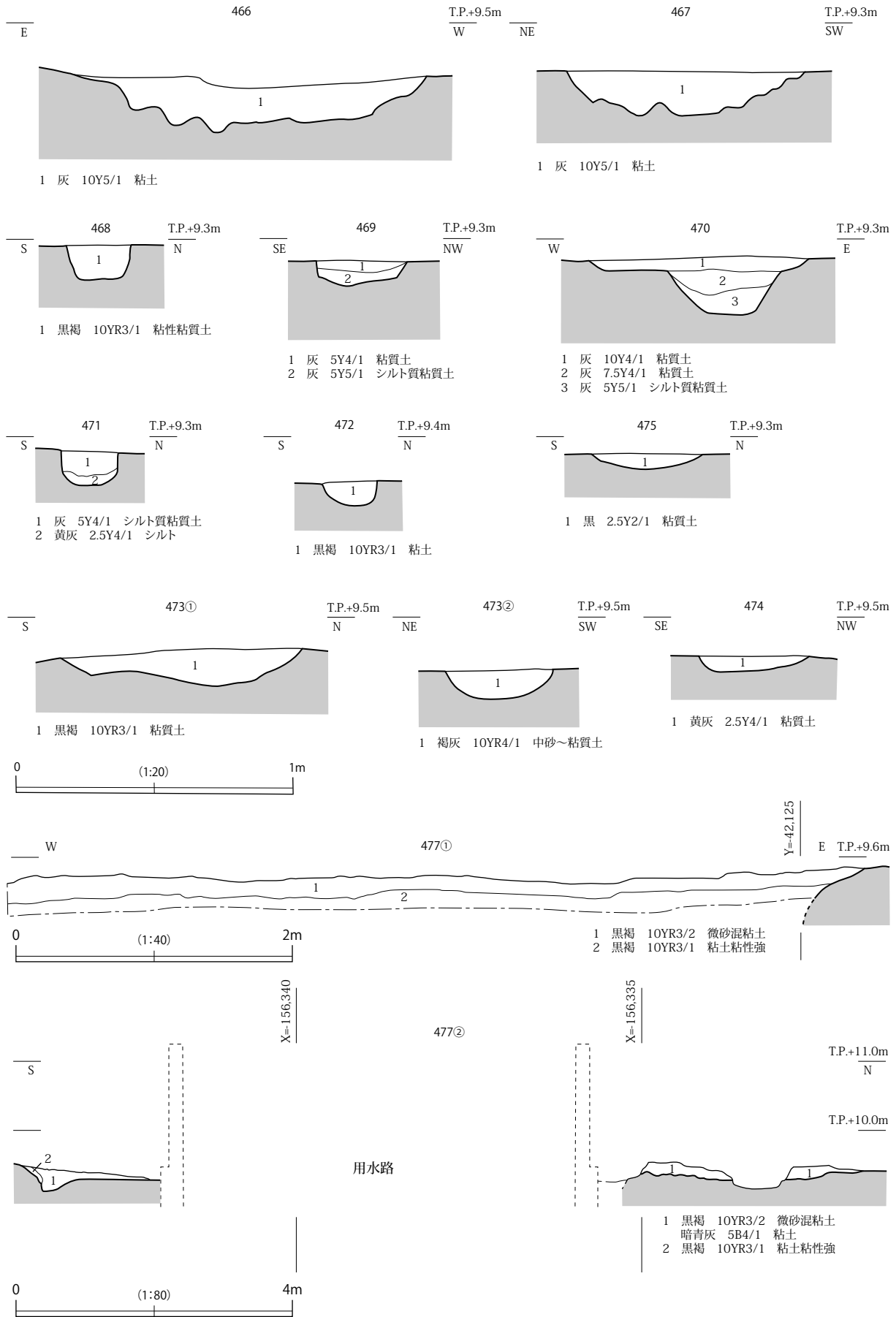


図 68 09-3-4・15区 第2面遺構断面図

### 09-3-6区の遺構

09-3-4区から南下していくと、09-3-5区や09-3-6区の北半では広い範囲で人や牛馬の足跡、土坑、溝などを検出した(図版23)。これに混じって、09-3-5区の北西部では、南北方向の鋤溝とみられる溝の平面痕跡も数条検出した(図66)。しかし、それ以外の畦畔や畝などは検出されておらず、全域が耕作地として利用されたか、あるいは、それが整然と土地区画されたものだったかは不明である。

09-3-6区の南端にあたるX=-156,450付近で、東西方向に走る大溝である122溝を検出した。また、その南では122溝に切られる数条の溝などを検出した。

09-3-15区や09-3-4区の第2面と比べると、09-3-6区の第2面遺構検出高はT.P.10.2~10.3mとやや高くなる。

#### 122溝(図69・70、図版24・25)

X=-156,450~-156,455間をほぼ東西の真方位に走る大溝である。

幅は4.6mから5.6m、深さは0.2mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。東壁断面の観察によると、実際にはもう少し上層からの遺構となる可能性がある。底面は凹凸が著しく、足で踏み込んだような痕が見受けられ、底面は平らでない。埋土は上層の黄灰色粘土もしくは褐灰色粘土である。

埋土中より須恵器や和泉型I型式終末段階の瓦器椀が出土した。瓦器椀の型式により、122溝は12世紀前葉の遺構と考えられる。

特筆すべきは、09-3-7区で検出した201溝との対比である。

201溝は幅1.5~1.7m、深さ0.2~0.4mと122溝より小形だが、出土する瓦器椀の型式が122溝と同時期であるので、12世紀前葉~前半の年代が与えられる。201溝は、多少のずれはあるもののほぼ同位置に東西方向の区画遺構が作られること、それが複数時期に渡っていること(195溝や187溝、183堤など)から、境溝の機能を果たすと考えられる。また、既述の第1章や第7章で述べる条里地割の推定復原によると、201溝は坪境の位置にぴったりと合致する。

この201溝が位置するのが、X=-156,233~-156,235間であり、201溝と122溝との距離は約217~220mである。これはほぼ2町に相当する。つまり、122溝も坪境溝と考えて差し支えないだろう。201溝は、現行も池の堤として機能し、堤の盛土等によって保護されたために複数時期の坪境遺構が残ったと考えられる。それに対して、122溝がある09-3-6区では、現行の道路、大堀境線は東にいくにつれ条里地割からややずれ、南に振れるように作られている。本来は坪境の位置にあった道などがある時点で付け替えられ坪境の位置からずれたために、それ以前の坪境遺構は土地開発などで削平されたのではないだろうか。

付け加えるなら、201溝と122溝の中間にあたり1町に相当する地点は、X=-156,340付近になるが、これは09-3-15区と09-3-4区の間位置する。つまり、476堤以前にも堤や201溝、122溝と同時期の溝が存在していた可能性が高い。現行の東西用水路も堤の高まりを利用して、坪境を意識して溝や堤が作られたと考えられる。が、現在の用水路の築造によって攪乱や削平を受け遺構は検出できなかったため、推測にとどまる。

12世紀前半の段階で少なくとも、2町にわたる坪境区画が存在したことを考古学的に確認できた。これは、1970年代から行われてきた、この地域の条里地割復原の研究成果を裏付ける資料として、非常に大きな成果をもつ。

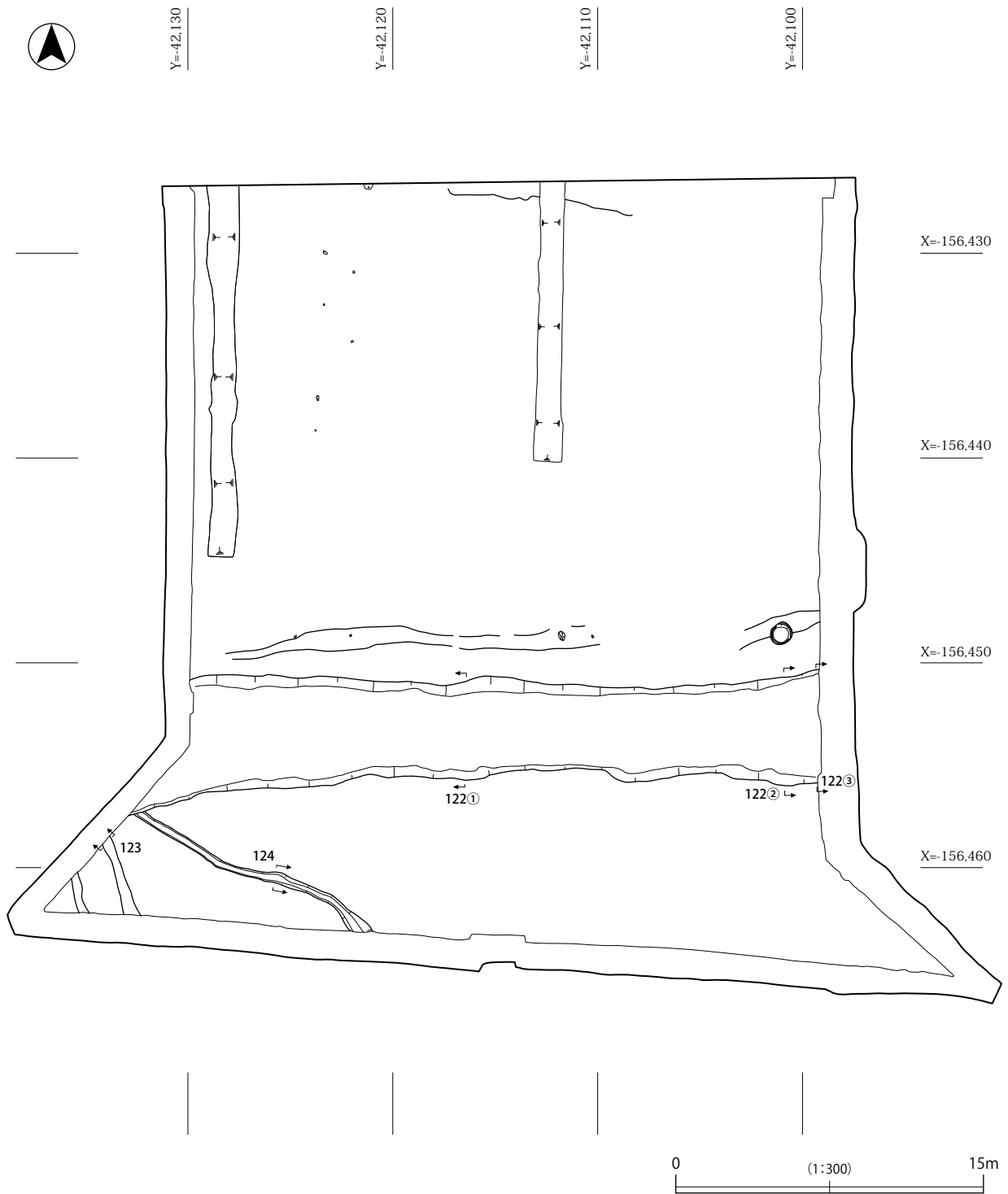


图 69 09-3-6区 第2面平面图

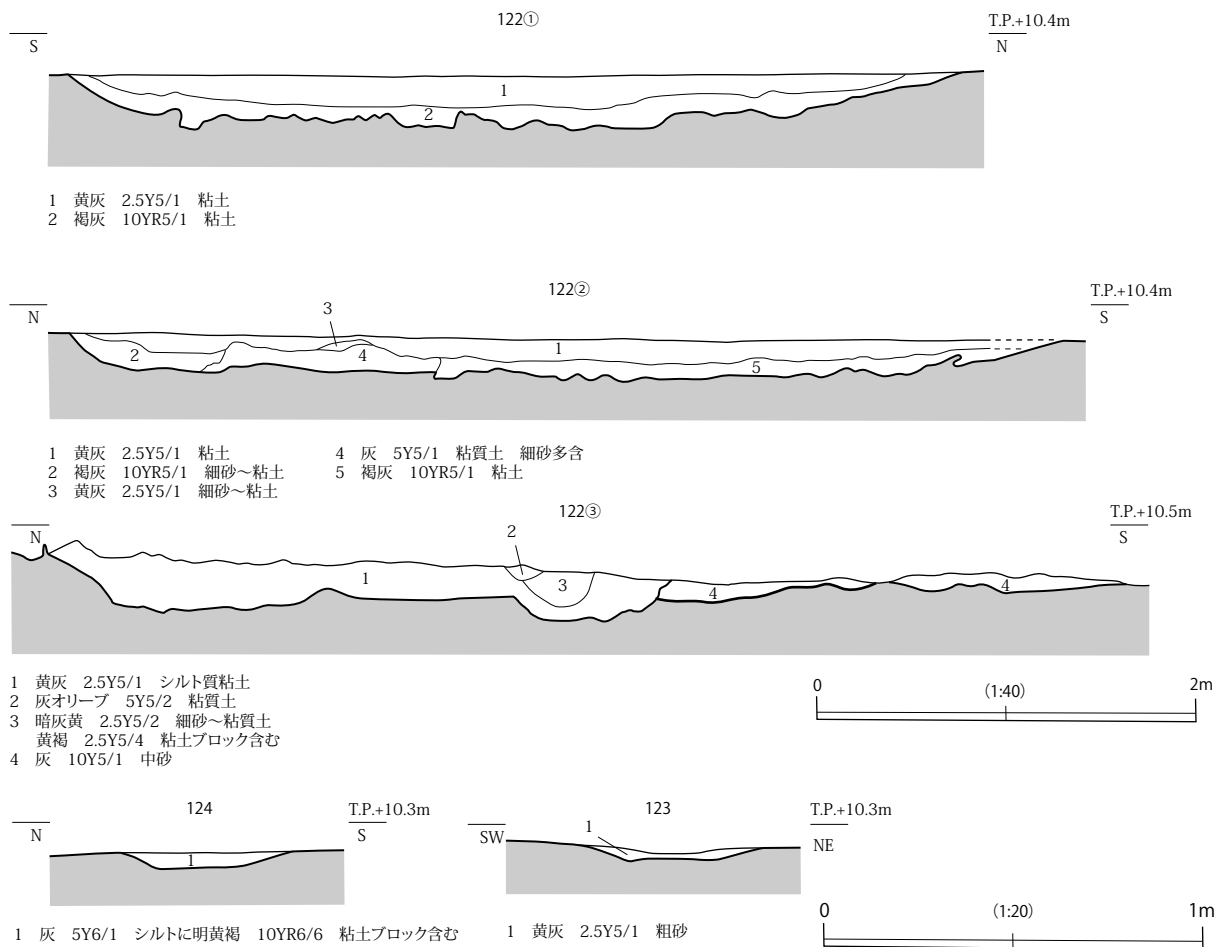


図 70 09-3-6区 第2面遺構断面図

また、この122溝の北側にこれと平行するように東西に延びる、溝とも畝ともとれる痕跡も検出したが、深さをほとんどとどめず詳細は不明である。

### 123溝・124溝 (図69・70、図版24)

いずれも09-3-6区の南西隅で検出した溝である。

123溝は北北西から南南東にやや斜行して走る南北方向の溝である。長さは直線距離で4.0mあり、幅0.45m、深さ0.05mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。遺物は出土しない。

123溝の西にも123溝に平行するような南北方向の溝状痕跡が存在するが、平面でわずかに確認できるのみで不明瞭である。

124溝は122溝の西南隅を起点とし、蛇行しながら南東に延びる溝である。直線距離で13.0mあるが、北西隅で122溝に切られる。幅0.4m、深さ0.05mをはかる。断面形は浅い皿形を呈し、粘土ブロックを含む灰色粘土を埋土とする。

遺物は出土しないが、切り合い関係から122溝より遡る、12世紀前葉以前の遺構といえる。

どちらの溝も上面を削平されていて残存状況は悪く、時期も決定できなかった。ただ、124溝は規模や蛇行するように巡る形状が09-3-15区で検出された473溝・474溝に似るので、これらの溝と時期的に類似した遺構の可能性もある。

09-3-6区の第2面は、上層の包含層からは13世紀後半の遺物が出土している。また、122溝が12世紀前葉に年代が押さえられることから、それ以前の遺構面といえる。

## 第2節 遺物

### 第1項 遺構出土遺物

#### 89 水路 (図 71 - 168 ~ 181、図版 41・42)

89 水路は 09 - 3 - 4 区第 1 面で確認した。

168 は染付磁器碗である。口径 9.6 cm、器高 5.2 cmをはかる。深い椀形を呈し、底部が厚い。高台は露胎し、畳付には離れ砂がわずかに付着する。体部外面には草花文が、高台外面には一重の圈線が描かれる。18 世紀後半のものである。

169 は陶器碗である。口径 10.0 cm、器高 4.0 cmをはかる。口縁部はわずかに外反する。胎土は緻密で、内外面とも淡黄色の釉薬で施釉される。唐津系陶器と思われる。

170 は陶器碗である。口縁部から体部上半は欠損する。底径 5.8 cm、器高 4.6 cmをはかる。高台は削り出し高台で、断面逆台形を呈する。内外面とも灰黄色で灰オリーブ色の釉薬がハケ目で施釉される。内面見込には高台の重ね焼き痕が残る。唐津系陶器である。

171 は漆器椀である。口縁部を欠損する。推定直径 11.0 cm、残存高 4.8 cm、体部器壁の厚さが 0.4 ~ 0.9 cmをはかる。高台は削り出しであるが輪高台になっておらず、底部は平らである。内外面とも木地に赤漆が塗布され、その上から体部外面の 3 箇所に認められ、文様が黒漆で描かれる。文様は円を描き、その圈線内を 6 分割して二重線で V 字状の文様を表現したものである。この文様は家紋とも考えられるが、何の家紋かは不明である。器壁全体に厚みがあり、内外面とも赤色漆で、文様も単純化されているので、近世のものと思われる。

172 は備前焼陶器播鉢である。口径 28.9 cm、残存高 7.4 cmをはかる。口縁端部は水平である。内面には 1 単位 6 条の播目が確認できる。

173 は備前焼陶器播鉢である。口径 27.8 cm、残存高 7.5 cmをはかる。口縁端部は丸みをもち、口縁部は折り返したように屈曲する。内面には 1 単位 12 条の播目が確認できる。

174 は土師器製品である。口縁部のみで下半を欠損する。口径 32.4 cm、残存高 5.1 cmをはかる。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は内側に膨らんでやや内傾する。外面はユビオサエ後ヨコナデを、内面にはハケ目を施す。全形は浅い鉢形あるいは円柱形の容器になると推測できる。火鉢・火舎のような暖をとったり、火にかける製品かと推測する。ただし、残存部には内外面とも、煤などの付着や炭化した痕跡はみられない。

175 も土師器製品である。長方形もしくは正方形の箱形容器の四隅に脚をつけた形状と推測できるが、四隅のうちの一隅部分しか残存しない。脚部は粘土を外面に後から貼り付け、なでつけて成形する。上面からみると木製品も槽のような形状で、内隅・外隅ともに角部分は丸みをもたせる。上面と外側面の境は面取りされる。胎土は精良でにぶい橙色を呈し、全体がヨコナデで仕上げられている。高さ 13.0 cm、箱部高さ 11.5 cm、脚を含めた高さ 13.0 cm、厚さ 1.1 ~ 2.2 cmをはかる。瓦質土器の奈良火鉢などに似た形状のものがあり、これも 174 と同じく火鉢のような用途の製品と推測できるが、使用痕や煤の付着は認められない。

176 は巴文軒丸瓦である。推定径 16.0 cm、外縁幅 4.0 cm、瓦当の厚さ 1.7 cmをはかる。瓦当部のみ、それも約 4 分の 1 が残る。瓦当部は中心に左巻きの巴文を、その外周に計 2 cm の珠文を 4 個確認できる。径から復原すると全部で 16 個の珠文となる。巴文や珠文の径が小さく尾が長い。珠文帯の内外圈線は

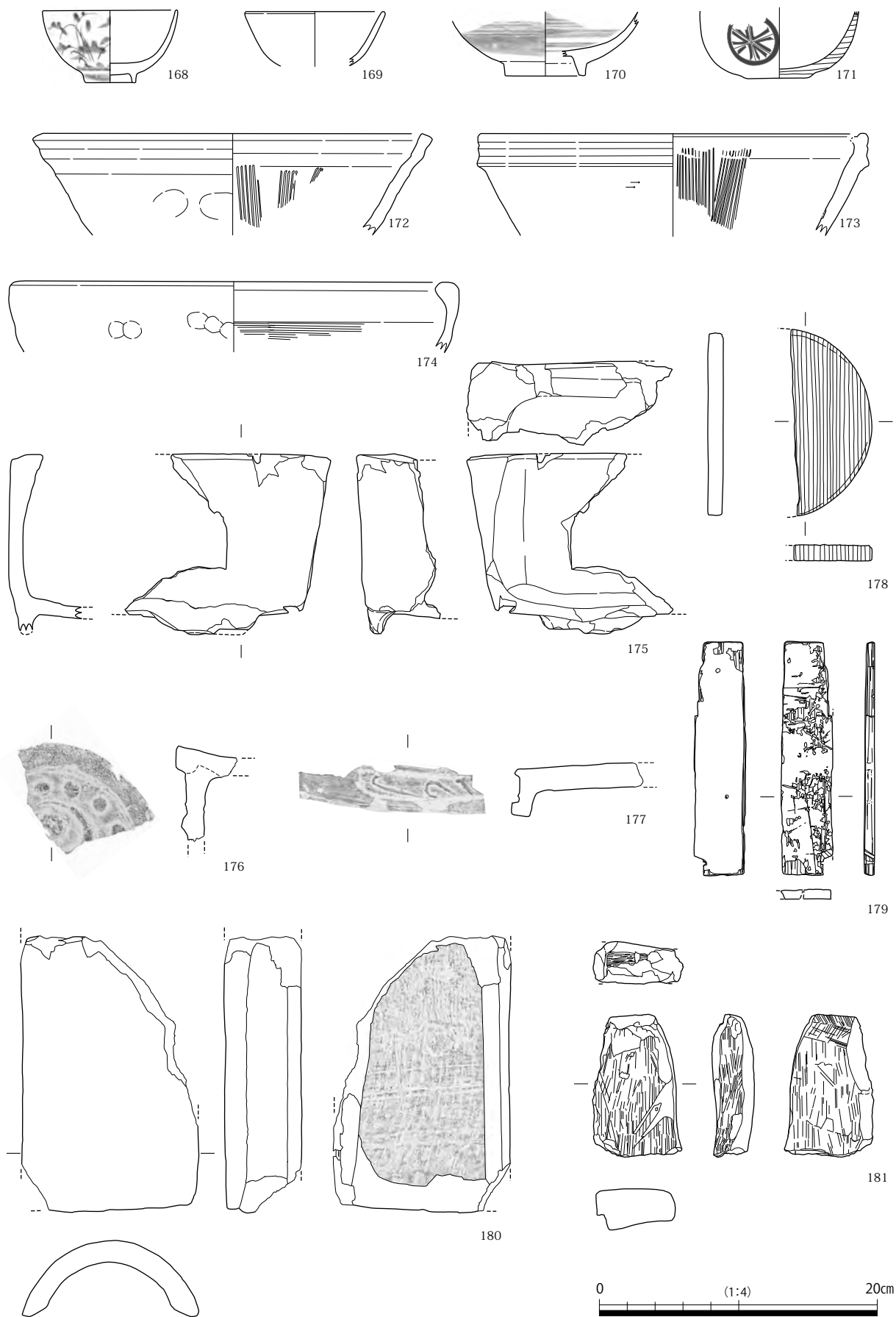


图 71 09 - 3 - 4 区 89 水路出土遺物実測図



みられない。近世のものと思われる。

177は唐草文軒平瓦である。顎部は長さ3.1cm、幅13.6cm、平瓦部の残存長は8.9cmをはかる。瓦当は幅2.0cm、長さ8.4cmの範囲に3本の唐草文が描かれる。

180は丸瓦である。残存長19.9cm、残存幅12.3cm、厚さ1.8cmをはかる。外面はケズリ、側面はナデで仕上げられ、内面には布目痕が残る。

178・179は木製品である。178は曲物底板である。約3分の2が欠損する。推定直径13.4cm、厚さ1.1cmをはかる。底面や側面に木釘穴はみられない。

179は板である。長さ11.8cm、残存幅3.7cm、厚さ0.7cmをはかる。表裏面ともに黒漆が塗布される。側面には木釘孔が残ることから、周囲に側板を木釘で装着した、折敷などの箱形容器底板の一部と思われる。底面の対称でない位置に2箇所穿孔が認められる。また、表面に数条の刃物傷がみられることから、容器としての役割を終えてから、まな板など他の用途に転用された可能性が高い。

181(図版42)は砥石である。縦横辺とも欠損する。残存長10.1cm、残存幅6.4cm、最大厚3.0cmをはかる。表裏面および側面に無数の擦痕がみられる。目が細かく、仕上砥と思われる。

染付磁器、漆器椀、唐津焼や備前焼といった陶器など出土遺物の器種構成や瓦の形態から勘案しても、89水路は近世の所産と判断できる。

#### 122溝(図72-182~184、図版39)

122溝は09-3-6区で検出した東西方向の大きな溝である。多くはないが、瓦器椀などの遺物が出土した。

182は瓦器椀である。口径14.9cm、残存高3.0cmをはかる。体部下半から下を欠損する。体部内外面ともにミガキが全体に密に入り、内面見込にも平行線状のミガキが認められる。和泉型I-3型式、12世紀前葉の瓦器椀であろう。

183は瓦器椀である。口径15.0cm、残存高4.5cmをはかる。深い椀形を呈し、高台を欠損する。口縁部は強いヨコナデにより薄くなり、やや外反する。体部内外面ともにミガキが密に入り、内面見込には格子状のミガキが認められる。法量やミガキの密さから、182と同じく和泉型I-3型式、12世紀前葉の瓦器椀である。

184は須恵器高杯の脚部である。底径10.0cm、残存高2.8cmをはかる。3方向に長方形もしくは三角形のスカシが入る。5世紀末~6世紀初頭と思われる。

須恵器を混入と考えると、122溝は瓦器椀の年代からみて12世紀前葉の遺構となる。

### 第2項 包含層出土遺物

#### 1層(15区盛土)(図73-210、246、247)

210、246は09-3-15区の第1面で確認した堤の盛土中層から、247は旧上之池の埋土からの出土である。

210は染付磁器碗である。口径9.5cm、器高5.4cmをはかる。器形は丸みを帯び、底部が厚い。高台畳付は露胎である。体部外面に草花文を、高台に圏線を描く。コバルトの発色が不良のため、文様は藍色でなく灰褐色を呈する。

246は丸瓦の一部である。残存長7.8cm、残存厚1.7cmをはかる。表裏面にはタテ方向に工具によるケズリ痕、ヨコにもそれに交差するハケメ状痕跡がみられる。

247は用途不明木製品である。残存長20.6cm、最大幅7.9cm、最大厚0.6cmをはかる。一端が狭く、

もう一端が広がる瓜状の形をなし、狭いほうの端中心に幅 0.4 cm、長さ 6.1 cmの切れ込みが入る。足の大きさに近いので靴の底板のようなものかとも推測するが、用途は不明である。

1 層の遺物はすべて近世のものであろう。

**2 層** (図 72 - 185 ~ 209、図 73 - 211 ~ 232、234 ~ 236、239、245、図版 39・40)

185 ~ 209 は 09 - 3 - 6 区の 2 層から出土した。

185 は青磁碗口縁部である。口径 16.2 cm、残存高 2.0 cmをはかる。口縁端部は細くつまみあげる。外面に鎬蓮弁文の模様がかすかに残るので、龍泉窯系 1 - 5 型式、13 世紀以降のものか。

186 は白磁碗口縁部である。口径 16.0 cm、残存高 4.1 cmをはかる。口縁端部は丸みをもち玉縁である。白磁碗Ⅳ類である。

187 は白磁碗底部である。底径 7.4 cmをはかる。内面見込と底部の間には凹線が入る。高台は削り出しでわずかにくぼむのみである。底部は 1.0 cmと厚い。白磁碗Ⅳ類である。

188 ~ 190 は瓦器碗である。188 は口径 13.5 cm、残存高 2.9 cmをはかる。外面にはミガキは認められず、内面のミガキも疎らである。浅く、つくりが粗雑であることから和泉型Ⅳ型式である。

189 は口径 12.2 cm、残存高 2.6 cmをはかる。口径、器高に比して器壁が厚く、ミガキも密に入ることから和泉型Ⅱ型式の小碗か。

190 は口径 14.0 cm、残存高 2.4 cmをはかる。外面には認められないが、内面にミガキが密に入る。器高が浅くなることから和泉型Ⅲ型式である。

191 は陶器碗底部である。底径 4.6 cmをはかる。底部は厚さ 1.4 cmと厚く、高台は削り出しで断面三角形を呈する。高台部分は露胎で、体部外面には緑色釉、内面には白色釉が施される。

192 は土師器碗である。口径 15.0 cm、残存高 3.1 cmをはかる。内外面ともナデ調整である。外面にユビオサエが残る。

193 は黒色土器Ⅱ類碗底部である。底径 7.4 cmをはかる。高台は形骸化したように平坦で、端部も丸みを帯びる。

194 は陶器碗である。口径 14.6 cm、残存高 3.0 cmをはかる。器壁は薄く、口縁端部は端反である。灰黄色から灰白色で施釉される。

195 は陶器碗底部である。底径 4.2 cmをはかる。高台は削り出しで露胎してやや外面に張り出し、断面形が平行四辺形を呈する。体部内面は灰オリーブ色の釉薬で施釉される。唐津系の陶器と考える。

196 は瓦器皿である。口径 9.0 cm、器高 1.6 cmをはかる。焼成がやや不良で磨滅し、表裏とも調整不明である。

197 は土師器皿である。口径 7.8 cm、器高 1.4 cmをはかる。口縁部は丸く上につまみあげる。器壁が厚く、雑なつくりである。

198 は須恵器壺口縁部である。口径 18.0 cmをはかる。口縁部は折り返し、凹状をなす。

199 は瓦質土器羽釜の口縁部から鏝部である。口縁部は内傾し、体部内面にわずかにハケ目が残る。

200 は須恵器鉢である。口径 28.6 cmをはかる。口縁部は上方に張り出し、断面三角形をなす。神出窯などいわゆる東播系のこね鉢である。森田編年のⅡ - 2 段階、13 世紀初頭のものか。

201 は東播系の須恵器こね鉢である。口径 28.2 cmをはかる。口縁部は外方に突出し、200 より新しい様相を呈する。Ⅲ - 1 段階、13 世紀前葉~後葉に相当する。

202 は瓦質土器片口鉢である。口径 21.3 cmをはかる。器壁は薄く、口縁端部は丸くおさめる。外面

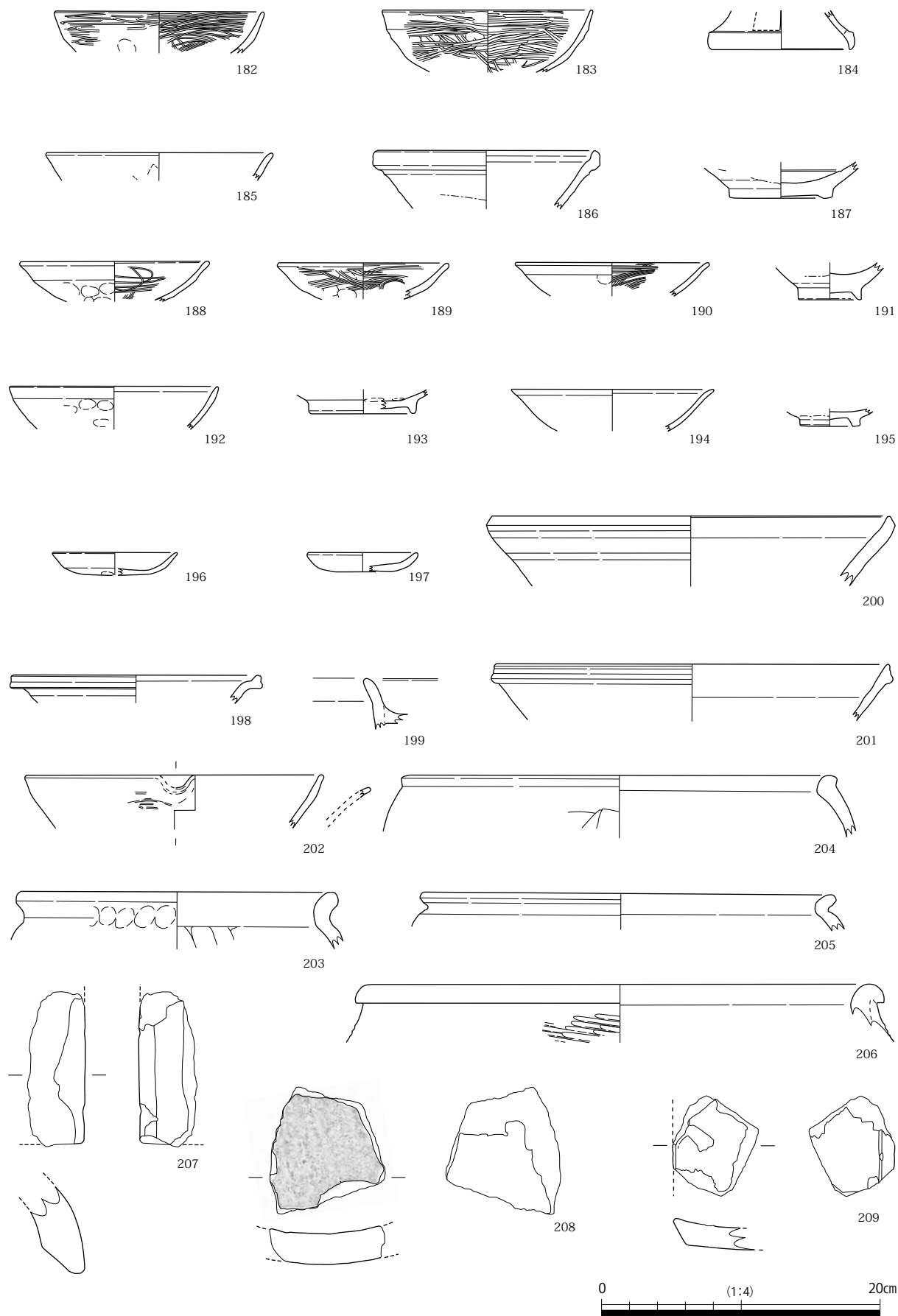


图 72 09-3-6区 遺構・包含層出土遺物実測図

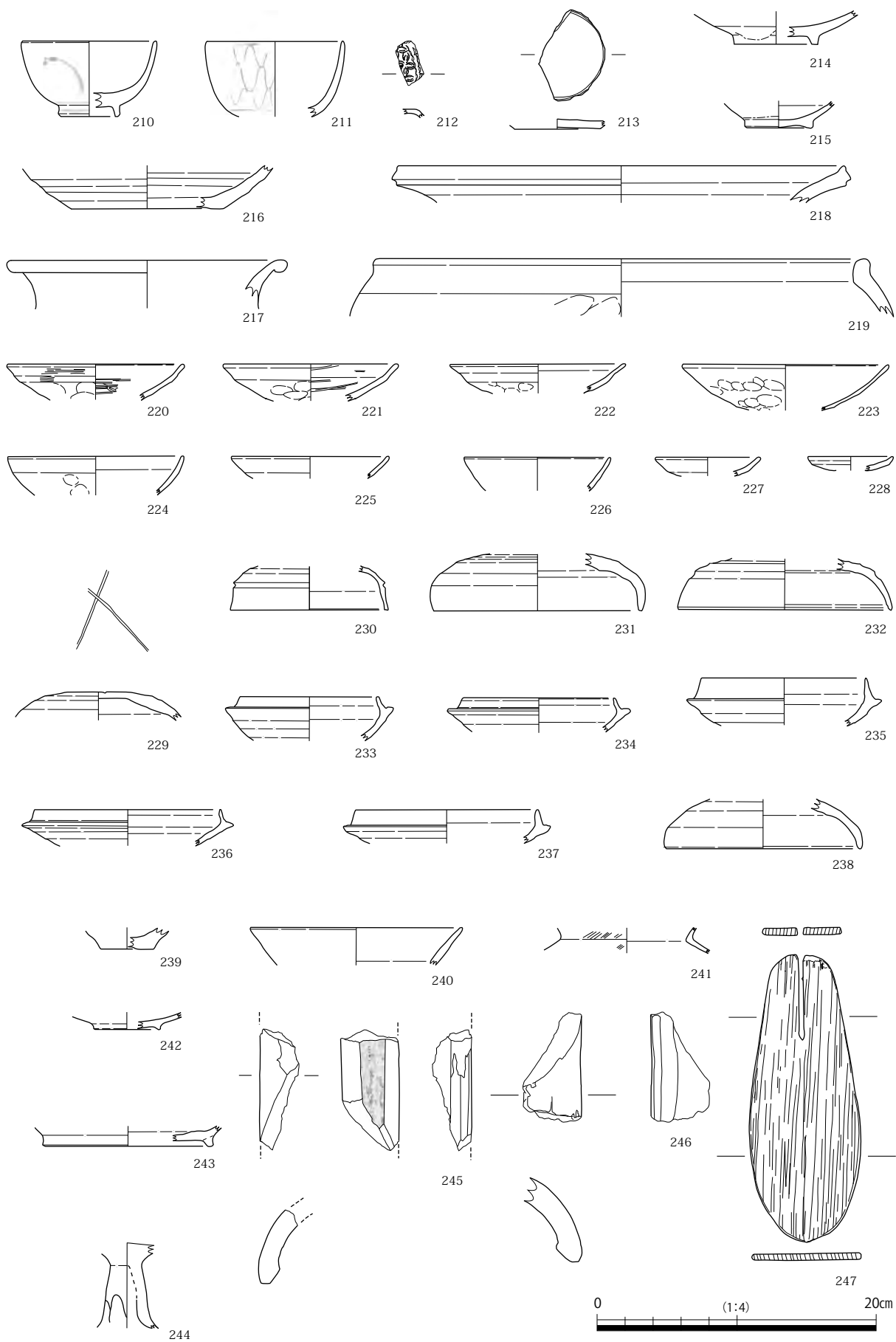


图 73 09-3-4·5区 包含层出土遗物实测图

にヘラミガキ痕が残る。

203 は土師器甕口縁部である。口縁部は短く、やや外反する。口径 22.4 cmをはかる。内外面ともナデ調整である。

204 は土師器甕である。口径 30.2 cmをはかる。口縁部は短く、肥厚しておさまる。外面にヘラ状の工具痕が残る。

205 は土師器甕もしくは羽釜の口縁部である。口径 29.0 cmをはかる。口縁部は短く、外反する。

206 は瓦質土器甕の焼成不良品と思われる。口径 36.8 cmをはかる。口縁部は短く折り返す。体部外面にはタタキがみられる。

207 は丸瓦である。残存長 11.0 cm、残存幅 4.1 cm、厚さ 2.8 cmをはかる。磨滅しており、細かな調整は不明である。

208 は平瓦の一部である。厚さ約 2.0 cmをはかる。外面には縄目、内面には布目が認められる。

209 は平瓦の一部である。残存長 7.2 cm、残存幅 6.2 cmをはかる。側面は面取りされ、やや反り気味に持ち上がる。

09－3－6 区の 2 層は瓦器や須恵器、磁器等の遺物から判断すると、13 世紀後半～14 世紀の年代が与えられる。

211～231、233、235～237、239、240 は 09－3－5 区の灰色粘土層から出土した。

211 は染付磁器碗である。口径 9.8 cm、器高 5.4 cmをはかり、口径に比して器高が深い。口縁端部と体部と底部の境に界線を持ち、体部には網手文が施される。近世のものである。

212 は青白磁合子蓋である。細片であるが、表面は外周に直径 4.6 cm程度の二重波文線も施し、その中に 4 枚 1 組の二重花文が並ぶ。文様はいずれも陽刻である。

213 は白磁皿底部である。底部の内面凹線より上はすべて失われる。底部外面には回転糸切痕が残る。底径 6.0 cmである。

214 は白磁碗底部である。底径 6.0 cmをはかる。輪高台で底面は水平である。内面は施釉部分に貫入がみられる。

215 は白磁碗底部である。底径 4.6 cmをはかる。高台は断面三角形で外に張り出す。内面体部と見込の間に段がつく。212 から 215 は中世のものと思われるが、詳細な時期は不明である。

216 は須恵器鉢底部である。底径 11.0 cmをはかる。東播系のこね鉢であるが、時期は 11 世紀後半以降で、詳細は不明である。

217 は須恵器壺口縁部である。口径 20.0 cmをはかる。口縁部外に折り返し、端部は丸く肥厚する。

218 は須恵器壺口縁部である。口径 32.0 cmをはかる。口縁部は断面三角形を呈し、端部は平らである。

219 は土師器甕の口縁部である。口径 35.4 cmをはかる。口縁部は直立気味に立ち上がり、体部内面にハケ目がわずかに残る。

220～224 は瓦器碗である。220 は口径 12.6cm、残存高 2.6 cmをはかる。内外面ともミガキは疎らである。和泉型Ⅳ－2 型式、13 世紀後半のものである。

221 は口径 12.5cm、残存高 2.7 cmをはかる。220 に近く、和泉型Ⅳ－2 型式である。

222 は口径 12.6cm、残存高 2.1 cmをはかる。内外面ともミガキはほとんどみられない。和泉型Ⅳ－2～3 型式、終末期にあたる 14 世紀前半の瓦器碗である。

223 は口径 14.8cm、残存高 3.3 cmをはかる。内外面ともミガキは不明であるが、法量から和泉型Ⅳ

— 1 型式と推定する。

224 は口径 12.6 cm、残存高 2.8 cmをはかる。法量が小さく、内外面にミガキがほとんど認められない。和泉型IV型式である。220～224 の瓦器椀は 13 世紀半ばから 14 世紀前葉の時期を示す。

225 は土師器杯もしくは椀である。口径 11.3 cm、残存高 1.6 cmをはかる。口縁端部は丸くつまみあげる。

226 は土師器杯もしくは椀である。口径 10.5 cm、残存高 2.4 cmをはかる。口縁端部は丸くつまみあげる。225・226 は 13 世紀頃のものか。

227 は土師器皿である。口径 7.4 cm、器高 1.4 cmをはかる。体部と底部の境で段をなす。

228 は土師器皿である。口径 6.1 cm、器高 0.8 cmの小形品で、口縁部と体部の境が鋭く屈曲する。浅黄色を呈する。227・228 とも 13 世紀頃のものだろう。

229 は須恵器杯蓋である。天井部から下を欠損する。天井部に「×」のヘラ記号をもつ。

230 は須恵器杯蓋である。口径 11.4 cm、器高 3.2 cmをはかる。口縁部はほぼ垂直で、体部との間に凹線が入る。T K 23・47 型式、5 世紀末～6 世紀初めのものか。

231 は須恵器杯蓋である。口径 15.0 cm、器高 4.1 cmをはかる。口縁部から天井部は一体となって厚みをもつ。231 は法量が大形化し、稜線が明確でなくなるので、M T 85 型式、6 世紀中葉～後半頃のものかと考える。

235 は須恵器杯身である。口径 11.9 cm、残存高 3.5 cmをはかる。焼成不良のため橙色を呈する。立ち上がりが直立気味である。T K 43 型式、6 世紀後半か。

236 は須恵器杯身である。口径 13.4 cm、器高 2.6 cmをはかる。立ち上がりが短く、内傾する。T K 209 型式、6 世紀後半末以降か。

237 は須恵器杯身である。口径 13.2 cm、残存高 2.4 cmをはかる。時期は決めがたい。

2 層の須恵器の時期は、多くは M T 85 型式から T K 209 型式、6 世紀半から 7 世紀初頭に主体があると考えられる。

245 は丸瓦である。残存長 8.3 cm、残存幅 2.8 cm、厚さ 1.4 cmをはかる。側面は面取りされ、内面は粘土を削った加工痕と布目痕が残る。

232、234、241～243 は 09－3－5 区の精査により出土した。

232 は須恵器杯蓋である。口径 15.3 cm、器高 3.7 cmをはかる。口縁部は緩やかに外に開き、天井部との間に凹線が入る。M T 85 型式、6 世紀中葉～後半のものかと考える。

234 は須恵器杯身である。口径 11.0 cm、残存高 2.5 cmをはかる。立ち上がりは短い。234 は T K 209～T K 217 型式、6 世紀末から 7 世紀前葉に相当するか。

241 は土師器甕頸部である。古墳時代のものか。外面にハケメがわずかに残るが、それ以外の調整は不明である。

242 は瓦器椀底部である。底径 4.6 cmをはかる。高台が形骸化しており、和泉型IV－1～2 型式である。

243 は須恵器杯 B 底部である。底径 12.3 cmをはかる。

239 は 09－3－4 区の 2 層に相当する灰色粘土層から出土した。239 は弥生土器壺底部である。底径 3.8 cmをはかる。磨滅し、細かな調整は不明である。

09－3－4・5 区の 2 層は 6 世紀後半から 7 世紀と 13 世紀後半のものが主要を占める。

### 3 層 (図 73－238、図版 39)

238 は 09－3－4 区の 3 層、砂層中から出土した。須恵器杯蓋である。天井部を欠損する。口径

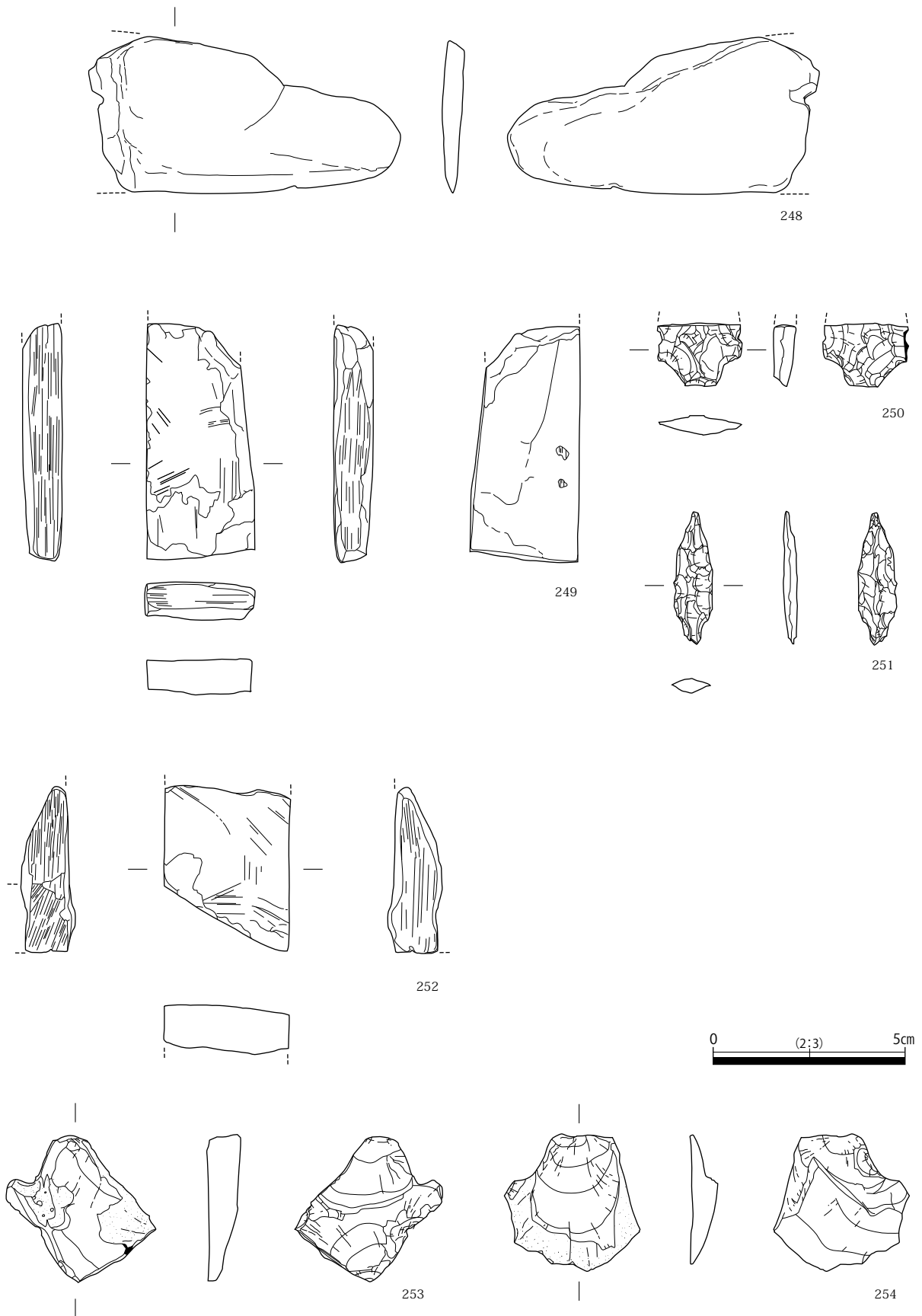


图 74 09-3-4~6区 出土石器实测图

14.2 cm、器高 3.6 cmをはかり、体部の器壁は厚い。TK 209 型式、6 世紀末から 7 世紀初めのものか。

#### 4 層 (図 73 - 233・240・244)

233・240・244 は 09 - 3 - 5 区の地山直上で出土した。

233 は須恵器杯身である。口径 10.0 cm、残存高 3.2 cmをはかる。立ち上がりは短く内傾する。TK 209 ~ TK217 型式、6 世紀末から 7 世紀初めに相当するか。

240 は土師器壺の口縁部である。口径 15.2 cmをはかる。磨滅のため調整不明である。古墳時代の布留式土器壺口縁部かと考えられる。

244 は土師器高杯脚部と思われる。脚部は粘土を筒状に絞込んでナデ、杯部とナデ接合してある。杯部、脚端部とも失われ、磨耗のため細かい調整は不明である。胎土の精良さから古墳時代の土器と推測する。

#### 第 3 項 石器 (図 74 - 248 ~ 254、図版 42)

254 は表採である。それ以外はすべて 09 - 3 - 5 区の 2 層から出土しているので、プライマリーな面からの出土ではないといえる。また、いずれもかなり風化する。

248 は 09 - 3 - 5 区から出土した。結晶片岩製の磨製石庖丁と思われるが、石庖丁以外の可能性も考えられる。ローリングを受けて表裏面とも風化が著しく、石の目に沿って上部や先端の細い部分は剥離したように薄くなる。残存長 8.0 cm、最大幅 4.0 cm、最大厚 0.6 cmをはかる。弥生時代中期のものと思われる。

249・252 は砥石である。どちらも長方形の薄い板状小形製品であるが、途中から欠損する。

249 は残存長 6.1 cm、最大幅 2.8 cm、厚さ 0.9 cmをはかる。252 は残存長 4.1 cm、最大幅 3.2 cm、厚さ 1.3 cmをはかる。249 は表面及び 3 側面に、252 は表面と両側面に刃物傷のような多数の擦痕がみられりことから、よく使用されたものと考えられる。どちらも砂岩製で目が細かく、仕上げ砥として使用されたものであろう。

250 は凸基式有茎石鎌である。サヌカイト製である。上半約 2 分の 1 を欠損する。残存長 1.6 cm、茎部長 0.8 cm、最大幅 2.2 cm、厚さ 0.5 cmをはかる。断面は菱形をなす。

251 は細い凸基式有茎石鎌である。サヌカイト製で、完存品である。残存長 3.4 cm、茎部長 0.5 cm、最大幅 1.0 cm、厚さ 0.4 cmをはかる。断面は菱形をなす。未製品の可能性もあろうか。250・251 とも弥生時代中期のものであろう。

253 はサヌカイトの剥片である。最大長 3.8 cm、最大幅 3.2 cm、厚さ 0.8 cmをはかる。凸部をもち、スパード状の形態をなすことなどから、石鎌などを作成する途中段階のものかもしれない。刃部などの 2 次調整はみられない。

254 はサヌカイトの剥片である。09 - 3 - 6 区の表採品である。最大長 4.6 cm、最大幅 3.2 cm、厚さ 0.7 cmをはかる。余り風化を受けておらず、表面もプライマリーな状態で黒灰色を呈する。表裏面ともに 2 次調整はみられない。



# 第6章 大堀堺線拡幅部（09－3－10～14区）の調査成果

## 第1節 遺構

### 第1項 調査の概要

池内遺跡は、元来は大和川南岸に東西に広がる遺跡として、西の大和川今池遺跡、東の三宅西遺跡などとともに認知されていた（第1章図6参照）。東西長約900m、南北幅200mの長方形に近い形の遺跡と捉えられていた。

今回、第3章から第5章で報告した府道河内長野線建設に伴って調査を実施した結果、道路建設箇所もすべて池内遺跡に含まれることとなった。大和川の南岸に東西に広がる部分の中心よりやや東から南下し、南北に300m超、東西幅35mで大堀堺線に交わるまでの細長い範囲が追加され、南に延びた。さらに、河内長野線に交差する東西の府道、大堀堺線も拡幅工事を行うため確認調査を実施した結果、池内遺跡の範疇に含まれることとなり、この東西約200m部分も範囲追加され、上横線が極端に大きい「エ」の字状をなすこととなった（第1章図2参照）。当章で報告するのはこの大堀堺線拡幅工事に伴う箇所であり、「エ」の字の下横線部にあたる。

文化財調査としては、南北方向3つの市道や用水路に挟まれた東西200m、南北幅10mの範囲が調査対象だった。しかし、住宅等の密集地でもあり、撤去した建物の基礎梁によって攪乱され調査できない部分が存在したため、調査範囲が縮小した。また、09－3－11区の東端、09－3－12区と13区の境界付近、09－3－14区の中央でみられる長方形ブロックの範囲は、大阪府教育委員会が実施した確認調査のトレンチ位置である。

また、調査は南に隣接する住宅・工場等が現存の道路に出入りすることなども考慮して、5つの調査区に分割して行った。調査区名は西から東に09－3－10区から14区と与えた（第1章図7参照）。調査は09－3－10区、11区、12区、14区、13区の順で行った。10区と11区、12区と13区で本来は2つでひとまとまりの区域であるが、場内に残土をおく必要上分割して調査を行った。10区は360㎡、11区は156㎡、12区は183㎡、13区は145㎡、14区は22㎡を調査し、総面積は866㎡となった。

調査は、フェンスを撤去して住宅に隣接する南辺を万能堀で、それ以外はバリケードや一部万能堀で囲った。その後、用地買収後に整地、保護のため敷かれていた碎石等を約0.4m普通機械掘削し、出来高測量を実施した。次に、近現代の盛土や耕土・床土を約0.6～0.8m機械で掘削し、出来高測量、人力掘削、出来高測量の順で行った。現地表はT.P.11.8～12.1mである。

基本層序の項でも述べたが09－3－10・11区では2面、09－3－12・13・14区では3面の遺構面を検出した。機械掘削終了直後に精査した灰黄色粘土層上面が第1面である。灰黄色粘土層を除去して検出する紫灰色シルトから粘質土上面を09－3－12区から14区では第2面としたが、09－3－10・11区では遺構を未検出であり遺構面としなかった。全調査区を通じて遺構を検出した4層上面（地山面）が09－3－10・11区では第2面、09－3－12区から14区では第3面である。

09－3－10・11区で調査時に第2面とした遺構面は4層（地山面）で検出した遺構面であり、他



图 75 09-3-10·11区 第1面·第3面平面图

の区と層序をあわせると第3面となる。従って、この報告書では大堀堺線に関しては遺構面を3面検出したと捉える。つまり、09-3-12区から14区において2層上面で検出した遺構面を第2面とした。そして、4層（地山面）で検出した遺構面をすべて第3面として呼称し、整理・報告することとした。

## 第2項 遺構

### 第1面（図75～78、79、図版26～28・30）

機械で盛土を0.6～0.9 m、床土（1層）を0.2～0.3 m掘削した後、精査して検出した灰黄色シルトから粘質土をベース土とする遺構面である。

第3章から第5章で報告した河内長野線の調査では、この遺構面を構成する層が存在しないか、存在しても希薄なためこまを機械掘削した。そして、その下層からを遺物包含層として、この下層に存在する2層上面を第1面としている。従って、河内長野線の第1面とは1層のずれがある。ただ、大阪府教育委員会の確認調査ではこの層の上面で遺構が確認され遺物も包含することから、この層以下を調査対象とした。それに従い、大堀堺線の調査ではこの層からを人力掘削の対象とした。

本報告での基本層序で当層を2層とし、河内長野線で与えた2層を3層、以下3層を4層とずらして整理すべきだったかもしれないが、調査時の名称を踏襲しこの層については灰黄色粘土層の呼称のまま使用する。

標高は西側の09-3-10・11区ではT.P.10.7～10.8 mで、中央部の09-3-12・13区でT.P.10.5～10.6 mと最も低くなり、東側の09-3-14区では再び上昇してT.P.10.6～10.7 mである。

09-3-11区と09-3-12区の間は、市道を挟む他調査区内にも一部、建物の基礎が地山面に達する深さまで残っていたため、調査不要となった。よって、東西方向で約40 m間隔が空いている。また、09-3-13区と09-3-14区の間にも、同様の理由で東西に10 m強の調査不要区がある。

全調査区で多数の南北あるいは東西方向の溝を検出した。ただ、遺存状況は調査区によって異なる。09-3-10・11区では上層の耕土の堆積が厚く、攪乱を余り受けていないために遺構が保護されており、平面形・断面形とも明瞭であった（図75）。しかし、09-3-12区から東になると上層の耕土層が薄いことと、最近まで住宅や店舗、工場として使用されていたため、それらを造成する際に灰黄色粘土層がかなり削平を受けたと思われる、この層自体も薄くなる。よって、第1面の溝は平面痕跡でわずかに底部形状が確認できるのみであった（図77・78）。

溝は幅0.1～0.3 m、深さ0.1～0.2 m程度のもものがほとんどである（図76）。以下、特徴的な溝のみをとりあげて説明を加える。

#### 217溝（図75・76）

09-3-10区の西端で検出した南北溝群の一つである。南北溝群は10条未満が、Y=-42,250より西にかたまってみられた。Y=-42,250より東にいくと南北から東西に溝の方向が変わる。南北溝は東西溝と比較すると、検出高が高いせいか、溝の幅がやや大きく、深くなる。

217溝は幅0.45 m、深さ0.05 mをはかる。断面形は逆台形を呈する。埋土は上層の1層が堆積する。国産の陶器天目茶碗が破片であるが出土している。

#### 229溝（図75・76）

09-3-10・11区の北側で検出した東西溝である。調査区内で、最も長く続くのが確認できた溝で、長さが09-3-10区及び09-3-11区をまたがって50 m以上もあり、09-3-11調査区のさらに東に続いているので、実際にはそれ以上の長さになると予測できる。西端は南北溝を切る。

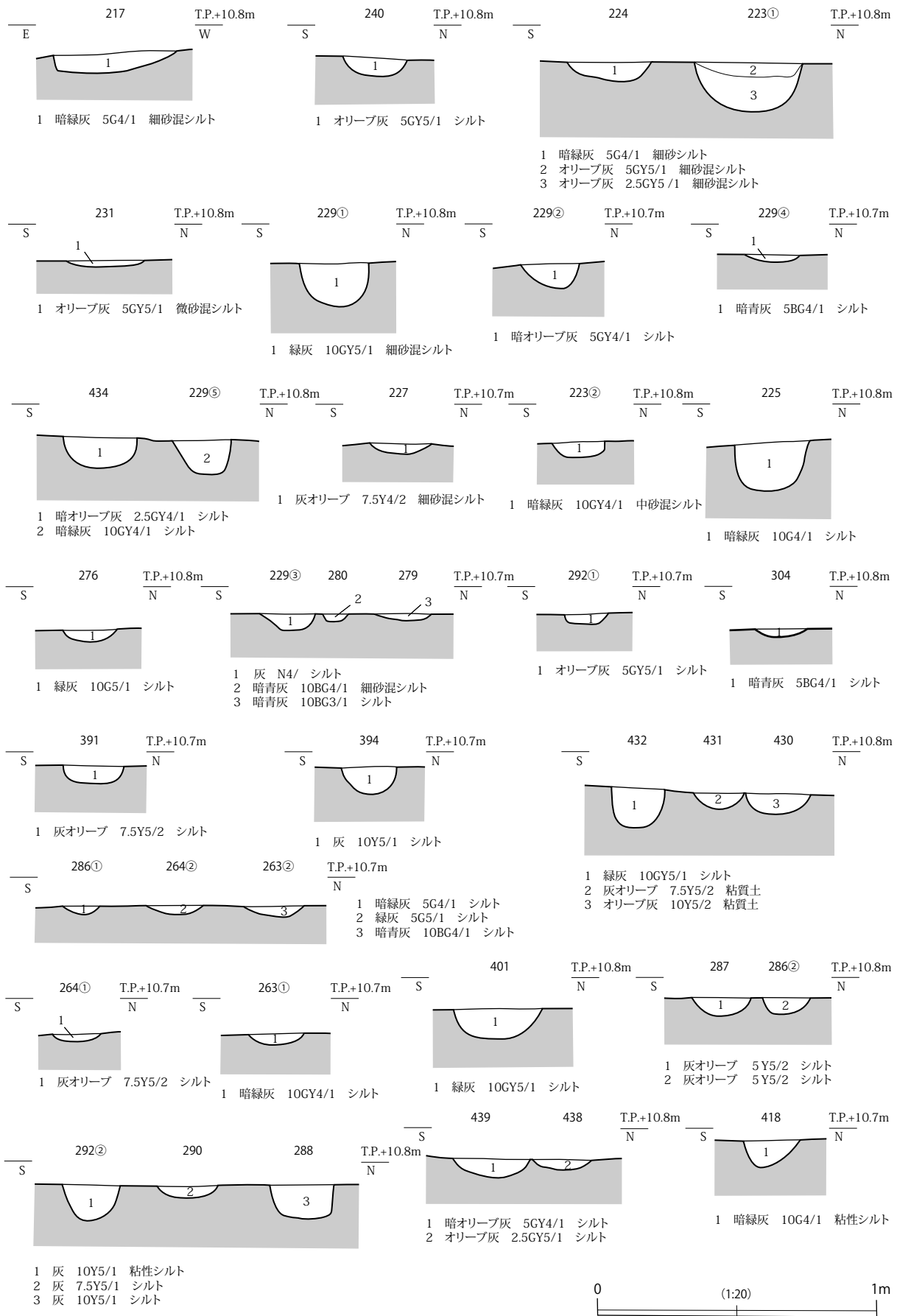


図 76 09 - 3 - 10・11 区 第 1 面遺構断面図

断面形は浅いU字形を呈する。幅 0.25 ～ 0.3 m、深さ 0.05 ～ 0.15 mをはかる。他の溝と比較すると深さがあり、掘方がしっかりしている。黒色土器B類碗の底部が出土している。

#### 240 溝 (図 75・76)

09-3-10・11 区の南側で検出した東西溝である。長さが 20.0 m以上ある。断面形は浅い皿形で幅 0.2 m、深さ 0.05 mをはかる。オリーブ灰色シルトを埋土とする。東播系須恵器こね鉢の口縁部片(図 82-256)が出土している。

#### 231 溝 (図 75・76)

09-3-10 区の中央で検出した東西溝である。長さは 5.0 m以上で東端は途切れる。断面形は浅い皿形で幅 0.3 m、深さ 0.05 mをはかり、オリーブ灰色微砂混シルトを埋土とする。古墳時代の須恵器の杯蓋(図 82-255)が出土している。

09-3-10・11 区のそれ以外の東西溝も検出途中で途切れるものの、229 溝に併行して走るのでもとは同等の長さであったと考えられる。溝の埋土は1層のベース土である、灰色～灰オリーブ色の砂質土からシルトが単層で堆積する。断面形は浅い皿形もしくはU字形を呈する。溝内からは須恵器や中世から一部近世の土器などが出土しているが、少量かつ、ほとんどが破片である。

溝同士で切り合いが認められる箇所もあるが正方位の溝がほとんどであり、大きな時期差はないと考える。形状や規則性、遺物の量からもこの溝の性格は、耕作に伴う鋤溝と考えられる。

溝は南北もしくは東西の正方位に沿って等間隔に並ぶ。溝の方向が南北から東西、東西からまた、南北と変わるの規則性がある(図 79)。

まず、09-3-10 区の西端、 $Y = -42,250$  で南北から東西へと変化する。それが東に進むと、09-3-12 区の  $Y = -42,150$  で再び南北方向の溝となり、09-3-14 区の東端、 $Y = -42,070$  までそれは続く。ただし、 $Y = -42,150$  から  $-42,120$  間では南北の鋤溝の上に東西の鋤溝が重なってみられる部分がある。 $Y = -42,150$  や  $-42,250$  付近で大きな畝や畔、道などは検出できていない。しかし、この約 100 m間隔で溝の方向が変わっていることは、この地点が耕作地としても1町単位の区割りを意識して土地利用されていたことを証明している。

第1章でも触れた、松原市内の条里地割復原(松原市 1985)によると、現在の大堀堺線も条里地割を踏襲してほぼ坪境線上に作られていることが分かり、東西はぴったり合致する。しかし、上記の南北の変化地点が里界線に合致するかというと、現市道の存在する  $Y = -42,180$  付近が里境に相当するようで、これとはずれがある。ただ、大和川線工事に伴う調査(池内 05-1)の西半で検出した平安時代の屋敷地の区画溝は  $Y = -42,490 \sim -42,500$  地点で検出されており、担当者も条里地割と関連があることを示唆している(センター 2010)。

今回の調査で、時期はやや新しくなるもののこの地点から1、2町離れた位置に南北の地割が確認されたことは、やはり平安時代から中世のある段階までは  $Y = -42,490 \sim -42,500$  を界線として認識する区割りが浸透していたのではないだろうか。

主に 09-3-10 区の溝からは古墳時代の須恵器、瓦器、土師器、陶器、中世の須恵器、瓦などが出土した。遺物の時期にばらつきがあるが、おおむね 13 世紀以降、中世前半期の遺構群と捉える。

また、2層包含層中からは須恵器、土師器、瓦器、瓦質土器、磁器などが出土している。09-3-10 区の2層からは 11 世紀後半(1068 年)を初鑄とする宋銭「熙寧元宝」(図 82-292)が出土しており、2層の堆積がこれ以降の時期であることを示す。ただし、同区西側は他と比べると堆積が厚く、

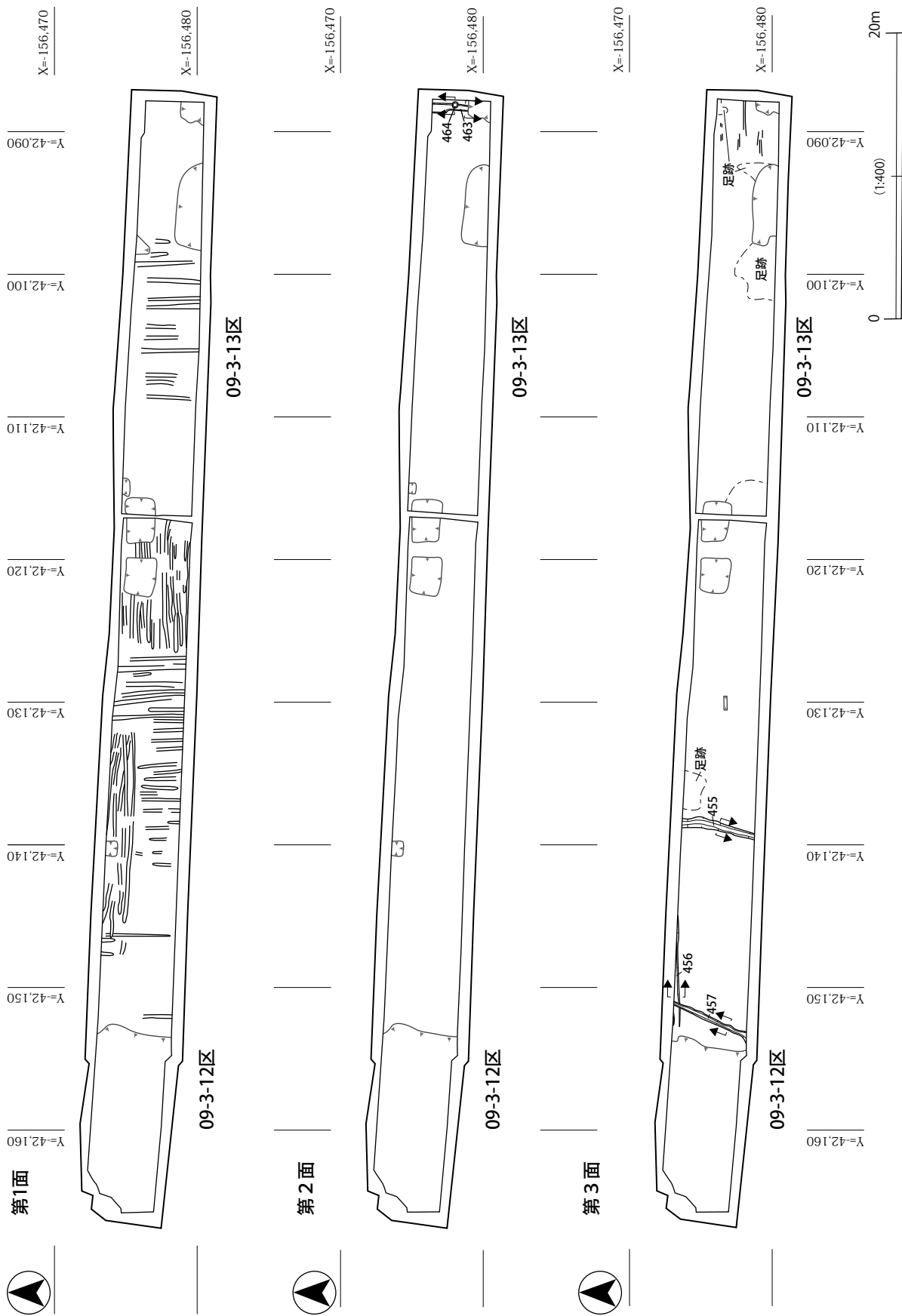


图 77 09-3-12·13区 第1面~3面平面图

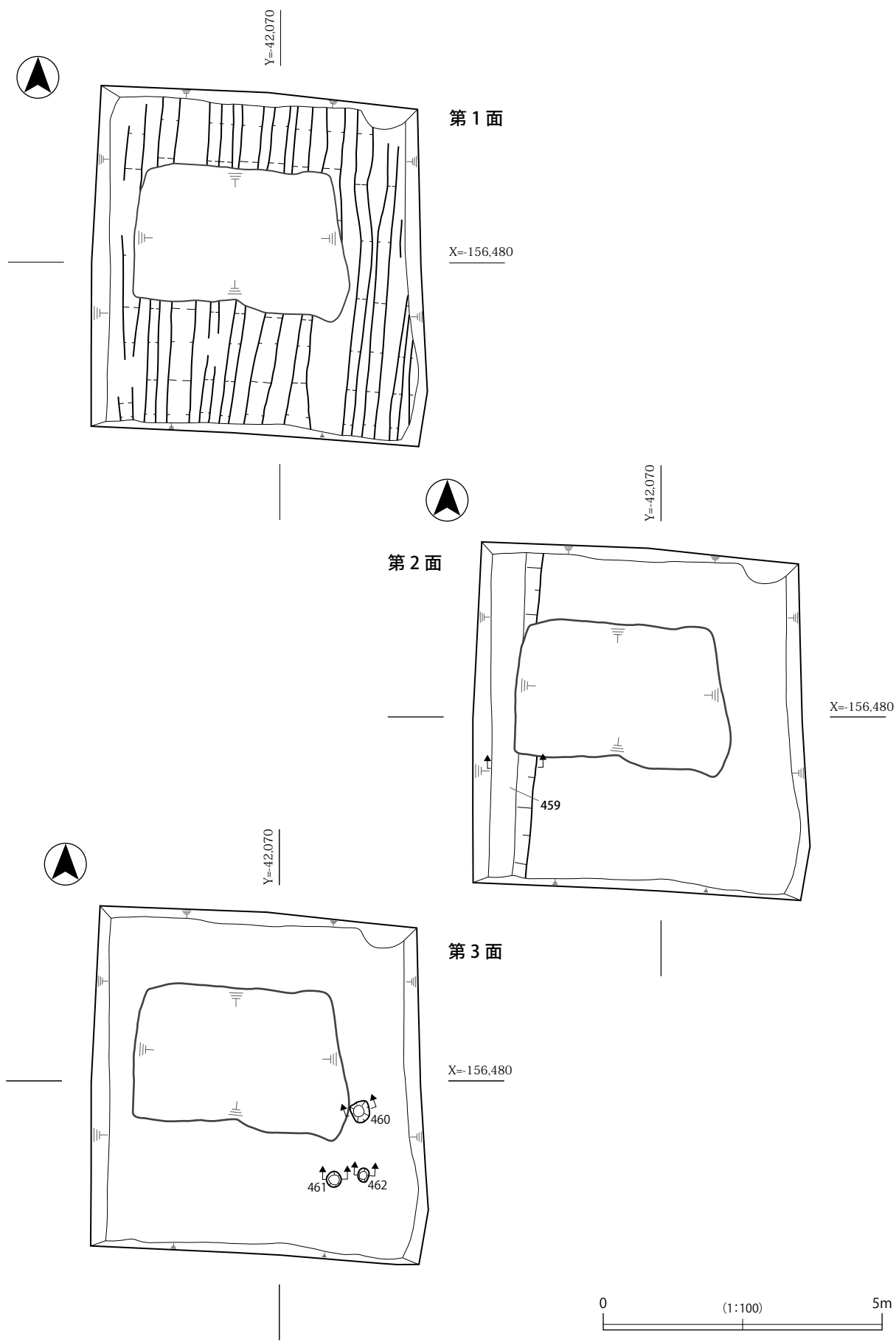


图 78 09-3-14 区 第 1 面~第 3 面平面图

そのためもあってか磁器など近世後半を示す遺物が含まれる。それ以外の区では中世前半以前の遺物にほぼ限定され、瓦器碗の時期などを指標にすると、第1面は12世紀後半から13世紀の年代が与えられる。

#### 第2面（図77・78、81）

基本層序の2層上面に相当する面を第2面とする。ただ、この2層は河内長野線で検出したマンガンを含む灰褐色や暗灰黄色シルト～粘質土とはやや土色・土質が異なる。やや薄紫色がかってみえる灰色のシルトから粘質土層である。中央部の09-3-11区から13区で堆積が厚く、両端の09-3-10・14区では堆積が薄い。

第2面の標高は西側の09-3-10・11区ではT.P.10.5～10.6mで、中央部の09-3-12・13区にいくとT.P.10.4～10.5mと若干下降して、東側の09-3-14区にいくと再び上昇してT.P.10.5～10.6mである。

09-3-12・13区のあたりでは近現代の構造物によって大きく攪乱を受け、層自体の識別が難しい箇所も多く存在する。遺構・遺物ともにきわめて希薄であり、生活痕跡がほとんど認められない。09-3-10区から09-3-11区では遺構・遺物ともに検出しなかった。09-3-13区の東端で、463溝と464ピットを、09-3-14区の西端で459溝を検出したのみである。

#### 463溝（図77・81）

09-3-13区の東端で検出した南北溝である。464ピットに切られる。

北端は調査区外に延び、南端は攪乱によって切られるため、長さは3m以上としかいえない。幅0.4m、深さ0.05mをはかり、断面は逆台形をなす。

#### 464ピット（図77・81）

09-3-13区の東端で検出した円形のピットである。463溝を切る。直径0.4m、深さ0.05mをはかる。断面形は底部の凹凸が著しい。

#### 459溝（図78・81）

09-3-14区の西端で検出したほぼ正方位の南北溝である。南北とも端は調査区外に延びる。東端は検出できたが、西端は調査区外にあり未検出である。

残存幅0.85m、深さ0.05mをはかり、断面形は浅い皿形をなす。暗緑灰色のシルトから粘質土を埋土とする。

第2面は遺構から遺物が出土せず、包含層中の遺物もごくわずかであった。そのため、時期決定するのが難しいが、包含層中の遺物や下層との対比から判断して、12世紀後半から13世紀初めに1点を置く遺構面と捉える。

#### 第3面（図75、77～81、図版26、28～30）

地山面で検出した遺構面である。地山面を構成する層を基本層序では4層とするが、河内長野線北半でみられる4層とは土色・土質とも大きく変質している。09-3-4区からみられる地山構成層の、オリーブ褐色から黄褐色粘質土（2'層）をベースとする遺構面である。

09-3-10区の西端、Y=-42,250から西にいくと、このオリーブ褐色から黄褐色粘質土が灰色中砂から粗砂に変化し、地山の2'層はみられなくなる。調査区のさらに西には現在も弁天池という大きな池が存在している。調査区東端から西に下がる谷状地形をとるため、砂層の堆積が厚くなると考えられる。



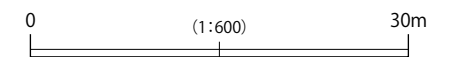
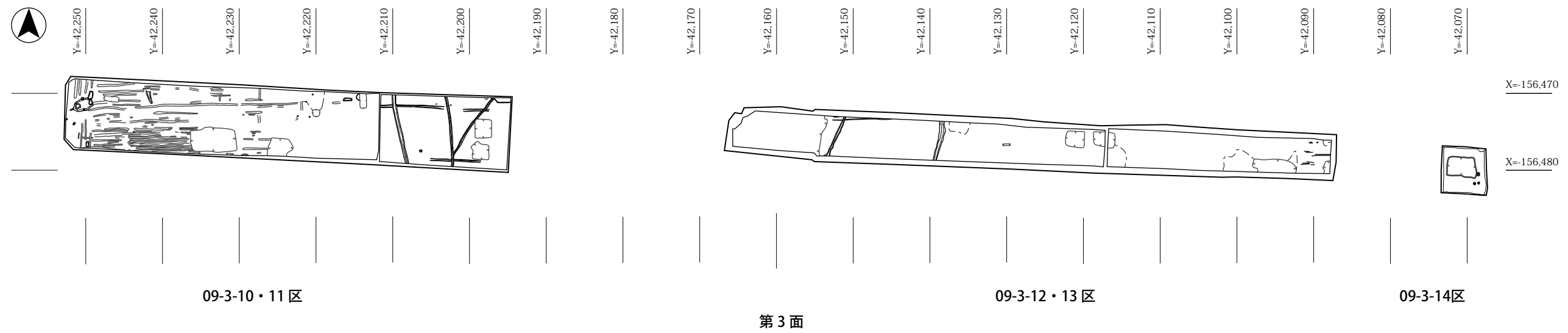
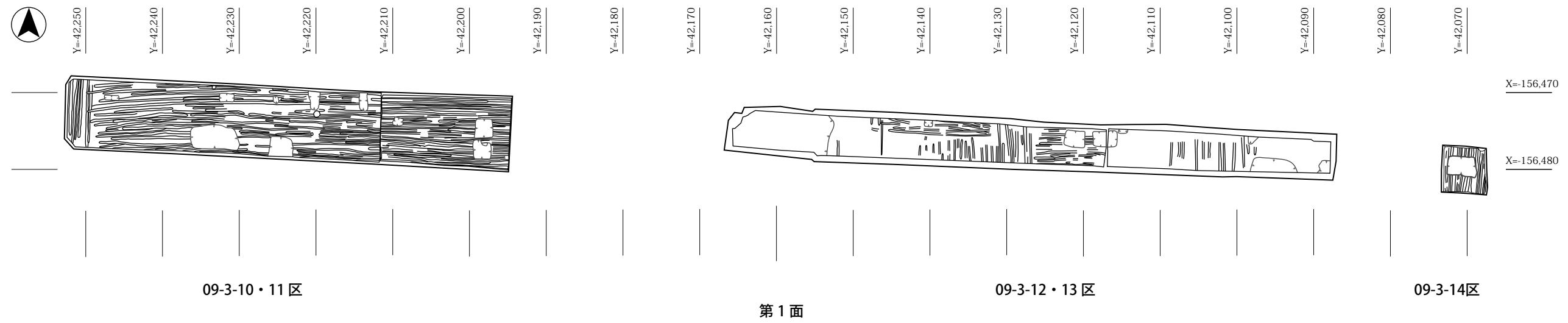


图 79 09-3-10~14区 第1面·第3面平面图

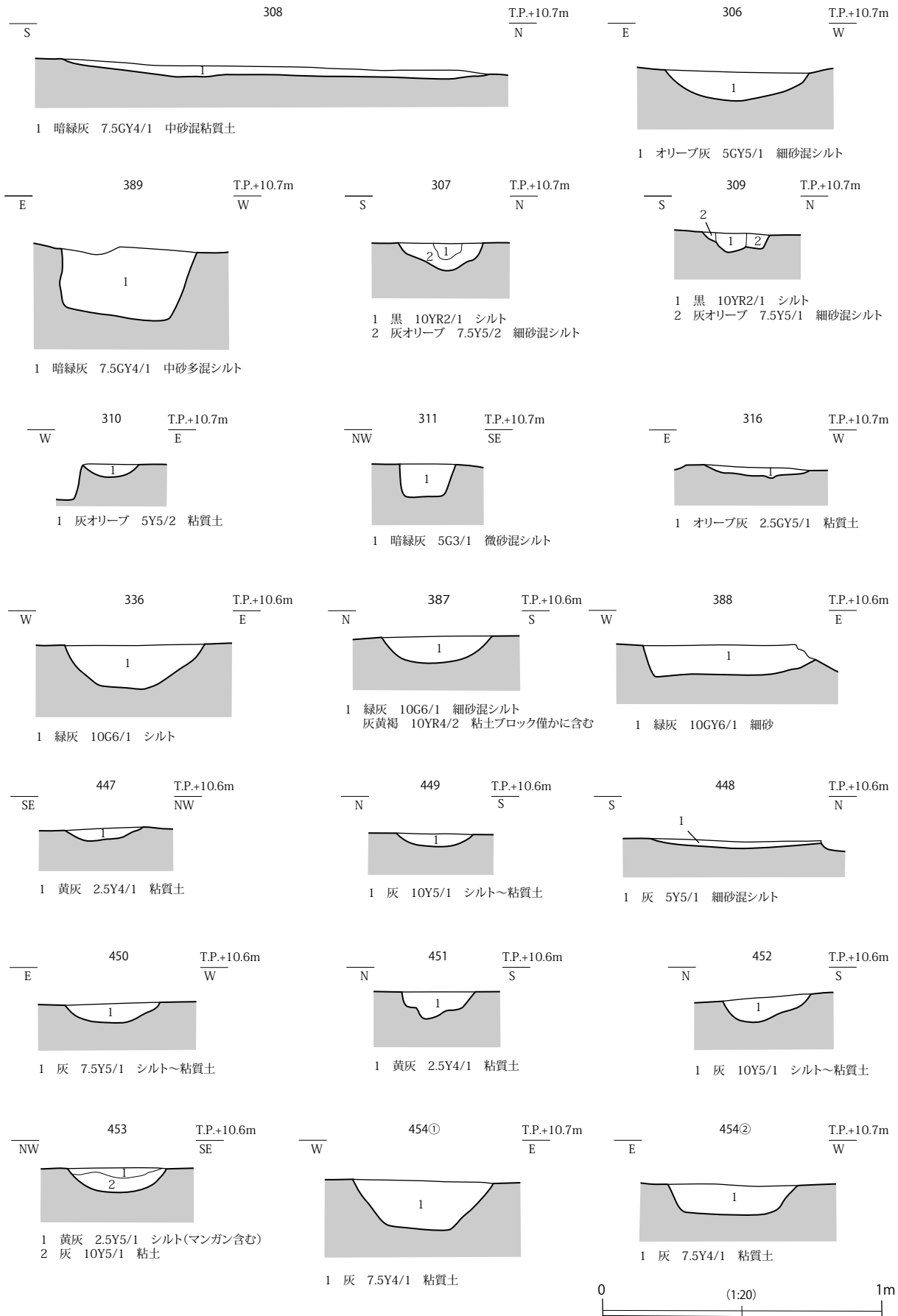


図 80 09-3-10・11 区 第 3 面遺構断面図

地形は第2面と同様に西が最も高く、中央に向うにつれ下降し、東で再び少し上昇する。標高は西側の09-3-10・11区ではT.P.10.4～10.5 mで、中央部の09-3-12・13区でT.P.10.3～10.4 mと最も低くなり、東側の09-3-14区では再び上昇してT.P.10.5～10.6 mである。

第3面は、各調査区で数条の溝や土坑を検出した。また、図示していないが広い範囲で牛や人と思われる足跡も検出した。

#### **306～311・389 土坑** (図 75・80)

09-3-10区の西端で検出した土坑群である。

306土坑は隅丸方形で幅0.5 m、深さ0.1 mをはかり、断面形は皿形を呈する。306土坑は308土坑に南で接する。

大形の308土坑の短辺の南北対称な位置に、外周を接する形で306土坑と同規模の307・309土坑が存在する。東西には389土坑が存在する。

308土坑は楕円形で、短径1.5 m、長径2.5 m、深さ0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形である。

307・309土坑は直径0.25～0.3 m、深さ0.05～0.1 mである。中心には柱根痕が残り、大形の308土坑に覆いなどをかぶせる柱穴だったとも考えられる。

310・311土坑も307・309土坑と同規模の小形の穴である。

389土坑は長円形の土坑で、直径0.5 m、深さ0.25 mをはかる。断面逆台形を呈する。

#### **316 土坑** (図 75・80)

09-3-10区の南西端で検出した長円形の土坑である。幅0.35 m、深さ0.05 mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

#### **336 溝** (図 75・80)

09-3-10区の北西で検出した。不定形の土坑もしくは溝である。幅0.5 m、深さ0.15 mをはかり、断面は腕形を呈する。

#### **387・388 土坑** (図 75・80)

09-3-10区の東端で検出した。387土坑は長円形で直径0.4 m、深さ0.1 mをはかり、断面形は皿形を呈する。388土坑は円形だが攪乱によって切られる。直径0.6 m、深さ0.1 mをはかる。

#### **447～452・454 溝** (図 75・80)

09-3-11区で検出した。448溝は調査区北東隅で検出した溝、もしくは土坑である。幅0.6 m、深さ0.05 mをはかる。447溝は北東から南西に斜めに走る溝、449・451・452溝は併行して走る東西溝である。450・454溝も併行して走る南北溝であるが、正南北よりやや東にふる。南北の450・454溝が東西の451・452溝を切る。447・449溝は幅0.25 m、深さ0.05 mをはかる。450～452溝はいずれも幅0.3 m、深さ0.1 mをはかる。454溝は幅0.45 m、深さ0.1～0.2 mをはかる。

#### **453 土坑** (図 75・80)

09-3-11区の南西部で検出した円形の土坑である。直径0.35 m、深さ0.1 mをはかり、断面形は皿形である。

#### **455～457 溝** (図 77・81)

09-3-12区の西側約3分の1で検出した溝である。456は調査区北端を東西に走る溝、455・457は北東から南西もしくは北北東から南南西にやや斜行して走る溝である。

456溝はやや西から東へ進むと北にふるため、途中で途切れる。残存幅0.45 m、深さ0.05 mをはかり、

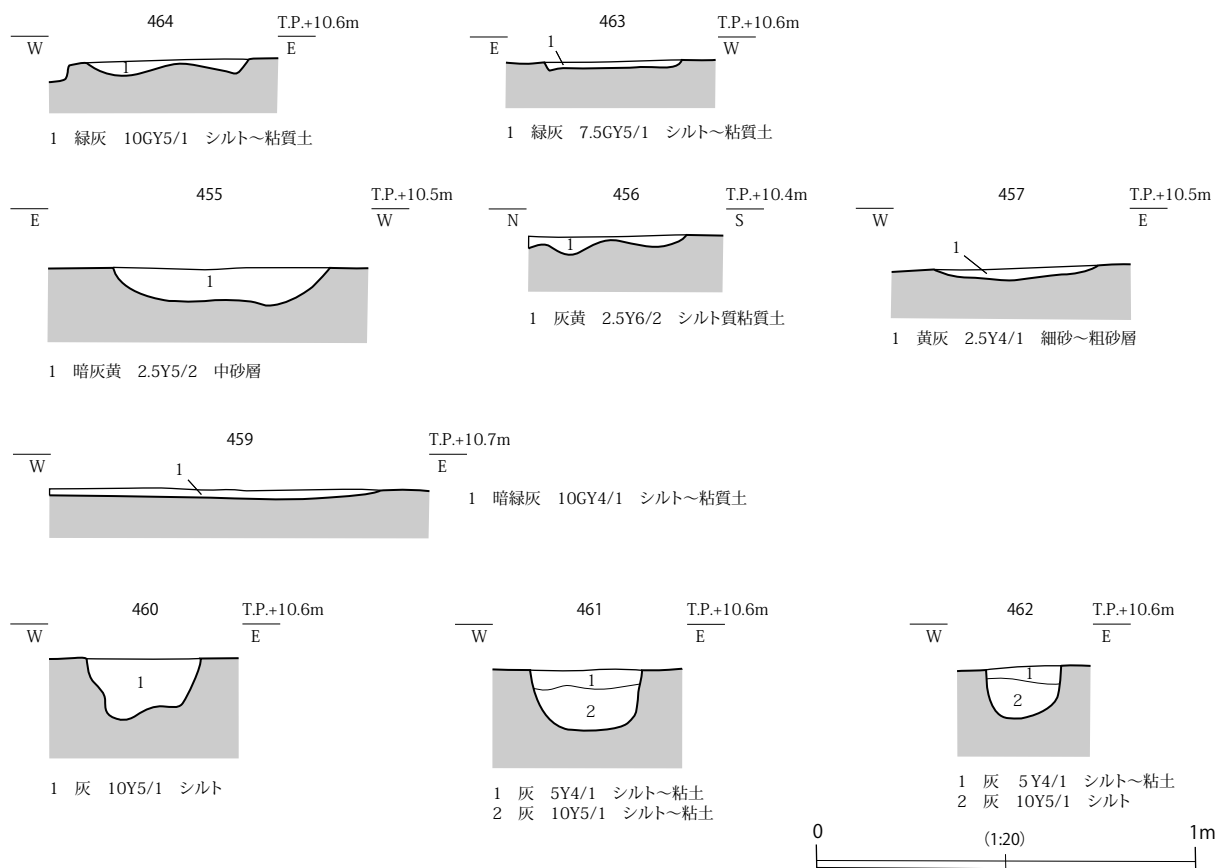


図 81 09-3-12～14区 第2面・第3面遺構断面図

断面形は逆台形を呈する。457溝に切られる。

455・457溝はほぼ併行に並ぶ南北の溝である。455溝は幅0.6m、深さ0.1mをはかる。断面形は皿形を呈する。

457溝は幅0.45m、深さ0.05mをはかる。断面形は浅い皿形を呈する。

#### 460～462土坑 (図78・81)

09-3-14区の南東で検出した円形の土坑群である。460土坑は直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は逆台形を呈し、底部は凹凸が著しい。

461土坑は直径0.3m、深さ0.15mをはかる。断面形は逆台形を呈する。

462土坑は直径0.2m、深さ0.15mをはかる。断面形はU字形を呈する。

第3面で検出した遺構はいずれも用途・性格が不明である。ただし、450・454溝と455・457溝は大きさや2つの溝が併行して走る形状が良く似ている。また、両者は09-3-6区第2面で検出した123溝・124溝や09-3-15区で検出した473・474溝とも似ており、共通の性格をもった溝とも考えられる。これらの溝の時期は弥生時代以降、12世紀前葉以前という大きな時間幅の中でしか捉えられていない。

以上の通り、第3面の時期は上層の包含層に含まれる土器の時期などから勘案すると、弥生時代から古代にわたると考える。

## 第2節 遺物

### 第1項 遺構出土遺物

#### 231 溝 (図 82 - 255、図版 43)

255 は須恵器杯蓋である。口径 14.6 cm、残存高 3.5 cmをはかる。口径が大きく、口縁部と天井部の境の稜線も消滅している。TK 43 型式、6 世紀後半から末のものか。

#### 240 溝 (図 82 - 256)

須恵器東播系こね鉢の口縁部である。口縁部は断面三角形を呈する。細片だが、12 世紀後半から 13 世紀初めのものと思われる。

#### 223 溝 (図 82 - 257)

土師器杯口縁部である。器壁は薄く、明黄橙色を呈する。口縁端部は細くつまみあげる。

#### 217 溝 (図 82 - 259)

陶器天目茶碗の体部から底部片である。残存部での体部残存径 10.4 cmをはかる。回転ロクロ形成で、ヘラ削りにより段をなす。灰白色の胎土ににぶい赤褐色の釉薬をかける。瀬戸系窯の国産品であろう。14 世紀頃のものか。

#### 229 溝 (図 82 - 260)

黒色土器 B 類椀底部である。底径 4.7 cmをはかる。高台は外に張り出し、断面三角形を呈する。11 世紀後半代のものである。

#### 418 溝 (図 82 - 261)

土師器椀口縁部である。口径 13.9 cm、残存高 1.8 cmをはかる。口縁部がやや外反する。

#### 438 溝 (図 82 - 262)

土師器皿の口縁部から体部と考える。底部は欠損する。口径 8.5 cm、残存高 2.1 cmをはかる。器壁が 0.4 ~ 0.5 cm と厚く、口縁部と体部の境が明瞭でない。

#### 401 溝 (図 82 - 263)

平瓦片である。厚さ 2.3 cmをはかる。ナデで仕上げられている。時期は不明である。

以上の鋤溝群からの遺物は須恵器などを除いては、概ね 13 世紀以降の時期を示しており、中世前半期の遺構といえる。

#### 308 土坑 (図 82 - 258)

308 土坑は 09 - 3 - 10 区第 2 面の遺構である。

258 は瓦器椀の口縁部片である。磨滅が著しいが、外面は体部にもミガキがみられる。和泉型 II 型式相当であるとすると、第 1 面よりやや遡る 12 世紀代に相当する。

### 第2項 包含層出土遺物

#### 2 層 (図 82 - 264 ~ 289、292 ~ 294)

264 ~ 270・292 ~ 294 は 09 - 3 - 10 区で、2 層に相当する灰黄色粘土層から出土した。

264 (図版 43) は磁器碗である。口径 11.3 cm、残存高 2.9 cmをはかる。内外面に灰オリーブ色の釉薬がかかるが、体部下半は無釉でにぶい赤褐色を呈する。

267 は磁器碗底部である。底径 6.3 cm、残存高 2.2 cmをはかる。白磁碗に似た器形で削り出し高台で高台外面は露胎する。内面見込は蛇の目釉剥ぎである。体部内外面に灰黄色の釉薬がかかる。

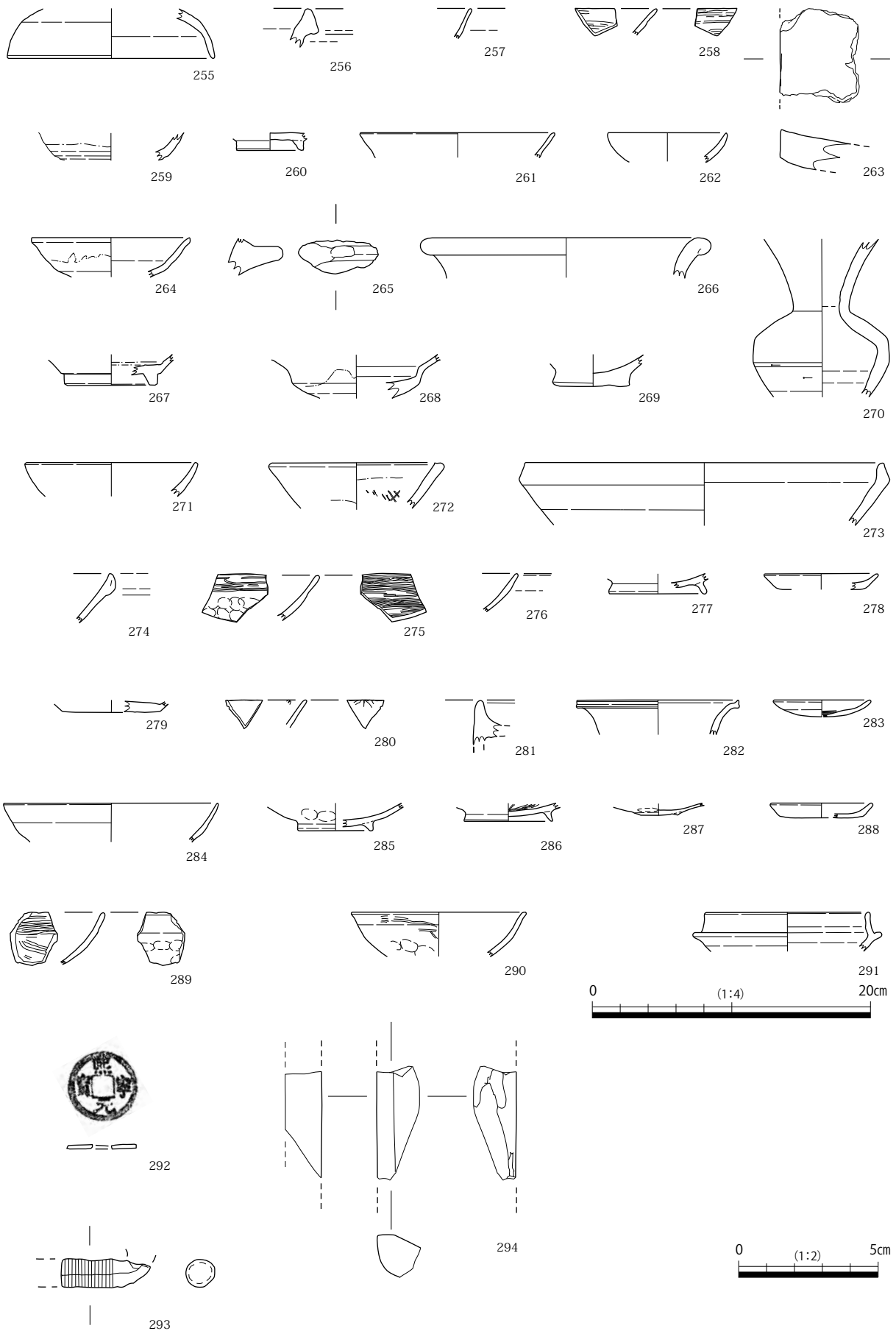


图 82 09-3-10~14 区 遺構・包含層出土遺物実測図

268 は磁器皿である。体部はやや外傾し、口縁部が朝顔のようにさらに大きく外に開く。内外面にオリーブ灰色の釉薬がかかるが、体部下半は無釉で灰黄色の素地である。264・267・268 の磁器はいずれも唐津焼と考えられる。唐津焼Ⅳ期、17 世紀末から 18 世紀後半の時期を示す。

265 は土師器羽釜の鏝部である。水平よりやや上向きにとりつく。明黄褐色を呈する。

266 は須恵器甕口縁部である。口径 19.0 cmをはかる。口縁端部は丸く折り曲げられ、玉縁状となる。

269 は土師器または弥生土器甕底部である。底径 5.5 cmをはかる。

270 は須恵器長頸壺である。口縁部と底部等を欠損する。残存長 10.8 cm、体部径 9.8 cmをはかる。頸部は大きく外に開く。焼成不良のため、内外面は褐灰色、断面は橙色を呈する。体部有孔部が遺存しないが、竅の可能性が高い。

292 (図版 44) は 2 枚重ねになっていた銅銭の上から 1 枚目である。直径 2.4 cm、厚さ 0.1 cm で中心に 0.8 cm 四方の方形の孔をもつ。文字は上から時計回りに「熙寧元宝」と判読できた。「熙寧元宝」は 1068 年初鑄の宋銭であるので、日本ではそれ以降に流通したものである。この下に重なっていた 2 枚目の銅銭は、大きさはほぼ同じだが鏝で 1 枚目に強固に貼り付いているため、判読不明である。

293 は 2 層上面から出土した。金属製品で、煙管の雁首の一部分と考えられる。残存長 3.2 cm、残存径 1.0 cmをはかる。

294 (図版 44) は石製品である。残存長 4.1 cm、残存幅 1.5 cm、残存厚 1.5 cmをはかる。表面から側面が面取り加工され、軟質な粘板岩でできている。硯の陸部を取り囲む、縁の一部であろうか。

09 - 3 - 10 区 2 層中として検出した遺物は、調査区西端に上面遺構として近世の溝などがあったためか、近世後半期のものも含んでしまっている。が、全体としては 13 世紀頃に年代を求められる。

271 ~ 278 は 09 - 3 - 11 区から出土した。

27 だけは 2 層上面 (第 1 面精査) から出土した。陶器碗の口縁部から体部である。口径 12.2 cm、残存高 2.5 cmをはかる。ロクロナデの後、内外面ににぶい橙色釉薬で施釉する。備前焼陶器と考えられる。近世のものと思われる。

272 (図版 43) は陶器鉢である。口径 12.1 cm、残存高 3.3 cmをはかる。口縁端部は垂直で、内外面に浅黄色の釉薬で施釉する。唐津系の陶器である。内面に播目と思われる斜め方向の線刻がみられるので播鉢と考えられるが、播鉢にしては法量がやや小さい。

273 (図版 43) は須恵器鉢である。口径 25.6 cm、残存高 4.6 cmをはかる。口縁部は内湾気味である。東播系須恵器のこね鉢である。口縁部の外への折り返しがさほどなく、断面は三角形を呈する。12 世紀後半代のものか。

274 (図版 43) は白磁碗口縁部である。折り返しが厚みをもち、玉縁をなす白磁碗Ⅳ類に分類される。

275 は瓦器碗である。細片であるが、外面は口縁部にのみ、内面は体部下半までミガキが入ることから、和泉型Ⅱ - 3 型式、12 世紀後半とする。

276 は土師器杯口縁部である。277 は土師器杯底部である。底径 6.8 cmをはかる。276・277 は同時期のものと考えられる。

278 は土師皿である。口径 8.1 cm、器高 1.1 cmをはかる。口縁部は短くつまみあげ、口縁部は底部から直線的に立ち上がる。

09 - 3 - 11 区の 2 層は遺物からみて主体は 12 世紀後半から 13 世紀の時期を示す。

279 ~ 288 は 09 - 3 - 12 区から出土した。

279 (図版 43) は白磁皿の底部である。底径 7.0 cmをはかる。底部外面には回転糸切痕が残る。

280 は青磁碗口縁部片である。細片だが外面にわずかに円弧を描く陽刻がみられるので、龍泉窯系鎬蓮弁文碗と思われる。

281 (図版 43) も細片だが、瓦質土器羽釜の鏝部である。口縁部が鏝に対し垂直に立ち上がる。

282 は須恵器壺口縁部である。口径 11.5 cmをはかる。口縁部は緩やかに外反する。

283 (図版 43) は土師器皿である。口径 6.9 cm、器高 1.2 cmをはかる。器壁は薄く、体部内面底部にハケメが残る。

284 は瓦器碗口縁部から体部である。口径 15.3 cm、残存高 2.8 cmをはかる。磨滅のため調整不明だが、法量から古い型式の瓦器碗と考える。

285 は瓦器碗底部である。底径 5.2 cmをはかる。高台は外に張り出し、接地面は丸みを帯びる。

286 (図版 43) は瓦器碗底部である。底径 6.3 cmをはかる。高台は断面三角形を呈する。体部内面見込にもミガキが入り、和泉型Ⅱ型式の瓦器碗である。

287 (図版 43) は瓦器碗底部である。底径 2.2 cmをはかる。高台はほとんど形骸化し、粘土紐を貼り付けただけの和泉型Ⅳ型式の瓦器碗である。

288 (図版 43) は瓦器皿である。口径 7.2 cm、器高 1.1 cmをはかる。磨滅しており、ミガキは不明である。器形から 12 世紀後半から 13 世紀初めのものか。

09 - 3 - 12 区の 2 層は、09 - 3 - 11 区と同様 12 世紀後半から 13 世紀と考えられる。

## 第 2 面精査 (図 82 - 289)

09 - 3 - 10 区の第 2 面精査で検出した。第 2 面は遺構を検出しておらず、遺物も皆無であるので第 1 面包含層 (2 層) の遺物の可能性が高い。

289 は瓦器碗口縁部片である。外部にはミガキが認められず、内面は体部下半までミガキを施す。深い碗器形をとることや内面のミガキが下まで入ることから、和泉型Ⅱ～Ⅲ型式、12 世紀後半から 13 世紀初めと考えられる。

## 2' 層 (地山面) 直上 (図 82 - 290・291)

290・291 は 09 - 3 - 13 区第 3 面から出土した。

290 (図版 43) は瓦器碗である。口径 12.5 cm、残存高 3.2 cmをはかる。口縁部外面にミガキが施されるが体部下半には認められない。内面のミガキは磨滅のため、不明である。法量からは和泉型Ⅲ型式、13 世紀後半以降のものと考えられる。

291 は須恵器杯身である。口径 11.6 cm、残存高 2.8 cmをはかる。立ち上がりは直立気味で、口縁端部が凹状をなすことから、6 世紀初めなどやや古い時期のものである。

2' 層上面から出土した土器はわずかであり、時期的にもばらつきがある。また、検出品には 2 層より新しい瓦器を含むことから、それは混入と考えたほうがよいかもしれない。

## 第 3 項 石器 (図 83、図版 44)

295 はサヌカイトの剥片である。09 - 3 - 13 区の地山にあたる 2' 層 (4 層に相当するオリーブ黄色粘土層) 上面から出土した。最大長 2.6 cm、最大幅 2.0 cm、最大厚 0.2 cmをはかる。石核を敲いた際のチップと考えられる。

296 はサヌカイトの剥片である。09 - 3 - 10 区の 2 層 (灰黄色粘土層) から出土した。最大長 2.7 cm、最大幅 2.0 cm、最大厚 0.5 cmをはかる。上端に打点をもつが、細かな調整痕は認められず、粗いつくり



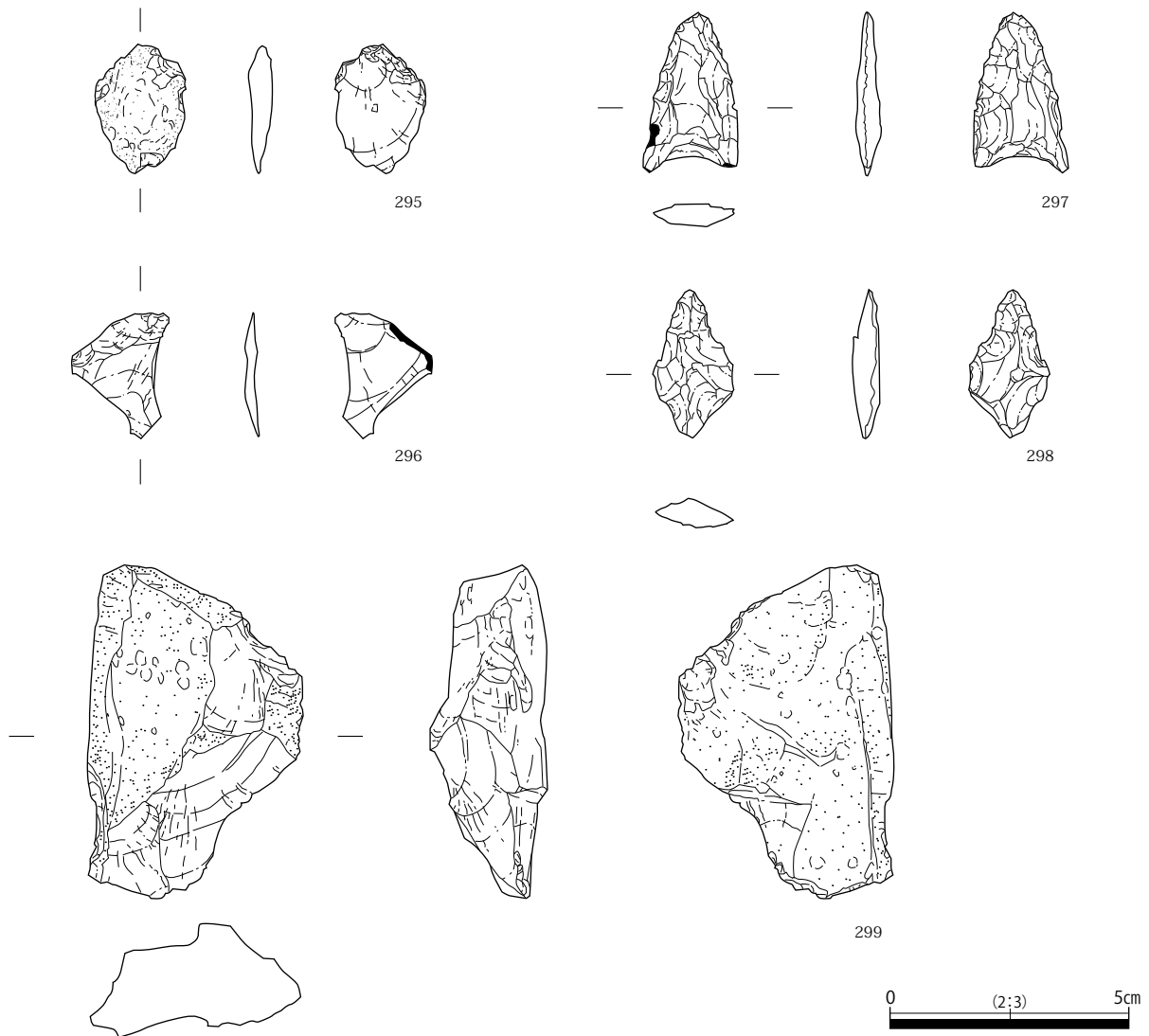


図 83 09-3-10～14区 出土石器実測図

である。

297 はサヌカイトの凹基式無茎石鏃である。09-3-11 区の 2 層（灰黄色粘土層）から出土した。最大長 3.1 cm、最大幅 1.7 cm、最大厚 0.6 cm をはかる。鏃部分の微細な剥離調整が認められず、未製品である可能性が高い。

298 はサヌカイトの凸基式有茎石鏃である。09-3-13 区の 2 層（灰黄色粘土層）から出土した。最大長 3.3 cm、最大幅 1.9 cm、最大厚 0.5 cm をはかる。風化しているが、細かな 2 次調整はほとんど認められない。未製品か。

299 はサヌカイト石核である。09-3-13 区の 2 層（灰黄色粘土層）から出土した。最大長 7.0 cm、最大幅 2.7 cm、最大厚 2.0 cm をはかる。余り風化を受けておらず、打欠き面は暗青灰色を呈する。

296～298 はすべて弥生時代の石器類である。09-3-10 区から 13 区では弥生時代の遺構を検出し得ていない。しかし、調査区両端にあたる 09-3-10 区と 09-3-13 区で上記の石器類が見つかったことは、当該地域での弥生時代からの活動を裏付ける大きな根拠となる。

# 第7章 総括

## 第1節 池内遺跡の時期別変遷

第2章から第6章において、弥生時代から近世に至るまでの池内遺跡の変遷を広範囲に追ってきた。この節では、池内遺跡の変遷を時代ごとに簡単にまとめ、既往の調査成果も加味しながら簡単に総括を行いたい。

さらに、その中でも遺構密度が高く、まとまって古代の遺構を検出した09-2区の建物群について整理する。そして、その北側に広がる、平成21年度以前に行った05-1・08-1調査で検出した建物群との関係について、検討・考察を加えて第2節で述べる。

また、歴史的環境や各章の遺構説明で触れた条里地割に関連すると思われる遺構の関係について、第3節で整理する。

### 〔縄文時代〕

池内05-1・2調査では第8面から第10面で調査し、自然流路や土坑などを検出したが、顕著な遺構や遺物はみつかっていない。砂層の堆積状況等から自然流路が氾濫、堆積を繰り返していた景観が明らかになった。

池内09-2・3調査では掘削深度が05調査まで到達せず、土層壁面や落込などで当時期に該当すると思われる黒色帯を確認するにとどまった。

### 〔弥生時代〕

池内05-1・2、08-1調査では、調査区の西半で弥生時代前期の居住域・生産域を検出した。第5面から第7面が弥生時代前期に相当する。

まず、第6・7面の05-2-5・08-1-2区で、弥生時代前期中葉の小区画水田や流路・土坑・溝などを検出した。次いで、第5面の05-2-3～5区で、弥生時代前期中葉の居住域とその外周を巡る2条1対の溝を検出している。この溝は環濠集落と呼べる規模のものであり、水田形成の後、居住域が形成され、放棄された過程が読み取れる。

また、弥生時代後期末～古墳時代前期では方形周溝墓が確認されている。

池内09-2・3調査では明確に弥生時代といえる遺構は検出できなかった。しかし、主に09-3調査の最終遺構面（地山面）で、弥生時代中期に相当する打製石剣や石庖丁、サヌカイトの打製石器などが一定量出土したことは注目に値する。特に打製石剣は風化も余りなく、氾濫堆積等で当地に運ばれたのではなく、当地周辺で使用されていた可能性が高い。

09-3-1区で検出した3溝は規模も大きく、近接した地点でほぼ完成品の弥生時代中期石器が出土していることから、当該期の遺構となる可能性をもつ。ただし、この溝の他に人為的な遺構を検出していない。時期的にも弥生時代中期と新しくなることから、この3溝を05-1・2区などの弥生時代前期の居住域と関連した遺構（環濠の溝）と考えるには難しいだろう。

05-1・08-1既往調査区とはやや時期的な隔りがあるが、弥生時代中期から当地で人間が生活

していたことが今回の調査で判明した。これは、調査区付近における当遺跡の開始時期を考える上で興味深い。

#### 〔古墳時代～奈良時代〕

池内 05－1・2、08－1 調査では、顕著な遺構・遺物はみあたらない。

池内 09－2・3 調査でも明確にこの時期といえる遺構は検出できなかった。しかし、遺物包含層の 2 層、3 層から古墳時代中期の須恵器杯身・蓋などが出土している。ただ、いずれも細片であり、磨耗しているものが多いことから、この調査区に当該期に人間が生活していたのではなく、周辺の地域から河川の氾濫等によって運ばれてきたものと推測される。

#### 〔平安時代〕

池内 05－1・2、08－1 調査では第 4・5 面に相当する。平安時代中期から後期の遺構・遺物が極めて密に分布していた。遺構の内容は 60 棟を超える掘立柱建物や区画溝、土坑墓、溝、井戸、土坑等である。

詳細は第 2 項で述べるが、建物群は大きくは西側・中央・東側の 3 つの居住域に分けられる。西側居住域が建物棟数や建物規模、区画溝などをもつ点で他の居住域より優勢で、屋敷地と呼ぶにふさわしい。いずれの居住域でも、掘立柱建物は建物同士に重複や切り合いが認められ、建て替えや居住域の構成が複数時期にわたることを示している。これらの建物群は、9 世紀後葉から 11 世紀中葉に帰属すると報告されている。

池内 09－2・3 調査では該当するのは第 1 面から第 3 面に相当し、主要な遺構・遺物はほぼこの時期に集中する。なかでも、最北の 09－2－1・2 区では復原できた掘立柱建物 3 棟を含む多数の柱穴や土坑、溝、井戸などの遺構で構成される居住域を検出した。掘立柱建物 2 棟は南面に庇をもつものが 1 棟あり、東西を長軸とし周辺に井戸や溝などが付随する。また、調査区のさらに西に建物が広がっていたと推測できる。9 世紀末から 10 世紀初頭の建物群である。

それより東で検出した掘立柱建物は南北を長軸とし、10 世紀半ばから 10 世紀後半のものである。この掘立柱建物の付近には、緑釉陶器が出土する土坑があり、これは土坑墓の可能性もある。10 世紀後半のものである。他の土坑や溝などを含めると、この近辺の遺構は 10 世紀後半から 11 世紀初めを主体とするといえる。

つまり、09－2 区の居住域の時期は 9 世紀末から 11 世紀初めまでの複数時期が重複して形成されていたといえる。

池内 05－1・08－1 区の居住域との関連性はなお検討を要するが、若干希薄だった中央居住域に近い建物群として注目に値する。

09－2 区より南下した 09－3－7 区や 09－3－6 区の最下層で、東西方向の大溝を検出した。どちらも遺物から 12 世紀前葉の遺構と判断できた。09－3－7 区と 09－3－6 区の 2 つの溝の間隔が 210～220 m であり、ちょうど 2 町分離れていることになる。また、その位置も研究者によって松原市域に残る地名や区割から推定復原されている東西坪境にぴったり合致する。よって、これらを坪境遺構と判断した（この検討は第 3 項に述べる）。

09－3－7 区では、この上層にも重複する位置に溝や堤が検出され、坪境を意識した区画割がなされ、

それが踏襲されていたことがうかがえる。遅くとも 12 世紀前葉には条里制がこの地で施行されていたことが判明したのは、今回の大きな調査成果であろう。09-3-7 区は現代でも上之池の北堤として機能していたところである。12 世紀から現代に至るまで条里地割による土地区画が連綿と続いていたといえる。

また、09-3-7 区と 09-3-6 区の間地点、上之池の南堤にあたる 09-3-15 区でも残存状況は良くないが、堤の痕跡を確認した。溝や堤が近現代以前からあったと推定できる。南北 2 町を区画する坪境遺構を今回の調査で検出したといえるだろう。

#### 〔中世〕

池内 05-1・2、08-1 調査では、耕作溝などを検出したことから、耕地化が進んだと考えられる。ただ、畦畔などの明確な生産遺構は検出できていない。また、包含層中からは 13 世紀代を中心とする土器などが出土した。

09-3-1 区から 6 区では、2 層もしくは 4 層の上面で鋤溝や人や牛と思われる無数の足跡などを検出した。主に 13 世紀以降の遺物が出土する。05・08 調査区と同様、畦畔や畝は検出できず、水田や畑の区画単位を確認できたわけでない。

また、南側の 09-3-10～14 区でも東西や南北の鋤溝が多数検出された。これも地割を意識して溝の方向が変化するが、09-3-1 区から 6 区とはやや地割の単位が異なり、時期的にも新しくなる。ともあれ、中世期には池内遺跡全域で耕作地としての利用が進んでいたと考えられる。

#### 〔近世〕

文献史料からも、16 世紀末には式内社阿麻美許曾神社を産土神として、池内村があったことは確認できている。

池内 09-2・3 調査の広い範囲で、散在的にはあるが溝、堤、井戸、水路などを確認した。特に、上之池の水利に関する堤、溝や水路などが顕著で、いずれも近世後半のものと考えられる。上之池を用水池として農業を基盤とする村落が形成されていたことは、今回の調査による考古学的資料からも明白となった。

## 第2節 古代の池内遺跡

今回の池内遺跡の調査において、古代の集落といえるような建物群を確認できる状態で検出したのは、09-2-1・2区のみである。09-3-7区でも古代末～中世初め（12世紀前葉）の溝や大形土坑などを検出したが、建物は検出し得なかった。

既往の05-1・05-2・08-1調査では居住域は大きくは3つに分けられる。東側居住域と西側居住域、中央居住域で、それぞれまとまった建物群を検出している。09-2区に最も近いのは中央居住域である。それらと今回の09-2調査区との位置関係を図示した(図84)。西側と中央で300m強、中央と東側で100m強、西側と東側には約400mの隔たりがある。

西側居住域は05-2-5区と08-1-2区に分布する。Y=-42,440～-42,520の間に位置し、10～11世紀代の建物38棟以上で構成される。

西側の建物群は、東西両端は南北溝で、南側は南北溝からL字状に折れる東西溝で区画される。北側に溝は確認できていない。一方、南北溝はほぼ坪境に位置する。東側溝は坪のほぼ中央、1町の半分辺りに位置することから、この居住域は条里地割を意識して構築されていると調査担当者は報告している。

この居住域は建物数の多さに加え、建物の構成が南北方向、東西方向を主軸とする庇付きの母屋の建物とそれに従属する副屋となる3棟前後の建物の存在など、建物の主従関係が明確であるのが特徴である。1面、2面、3面庇付の側柱建物が多く存在する。また、建物規模は3間×2間程度のものが多い。建物の面積は20㎡、30㎡程度のものから、庇が付かない最も大形の建物は4間×3間、面積78㎡をはかる。建物の規模・構成からみて屋敷地としての条件を備える。

他にも、区画溝や中央に柵があり、配置に規則性があることなどからも屋敷地と呼ぶにふさわしい。それ以外にも、建物の周辺には井戸や土坑墓を伴い、複数時期にわたって一大居住域が形成されていたことが明白になった。

遺物は包含層中から銅製の巡方や石製の丸軋が出土する。また、越州窯青磁や白色土器、緑釉陶器、灰釉陶器が出土しており、出土遺物の特異性からもこの建物群が単なる一般住居ではなく在地領主層に関わるものであったとも考えられている。

東側居住域は05-1-3区に分布する。Y=-41,090～-42,070の間に位置し、9世紀後半～11世紀初めの建物22棟以上で構成される。建物規模は2間×2間程度のものから2間×7間の細長いものなどがあり、形も正方形、長方形と様々である。建物の種類も側柱建物と総柱建物が混在する。建物の建立時期は西側居住域よりやや古くから始まり、建物の棟数・規模とも西側に比較すると小規模といえる。

東側居住域はさらに4つのグループに分けられる。グループによって大きな建物がかたまるどころ、数回の建て直しがみられるところなどがあり、グループによってその性格が異なるようである。西側居住域と比較すると建物が散在するのが特徴である。また、建物の長軸を南北とするものが多い。

中央居住域は05-1-5-2区に分布する。Y=-41,160～-42,170の間に位置し、11世紀後半～12世紀の建物6棟で構成される。溝と塀や柵で区画された三面庇付総柱建物を中心に建物が配される。母屋となる建物は5間×2間の東西を主軸とする建物である。この建物を取り囲むように、2間×2間、1間×1間程度の小規模の建物が並ぶ。建物の数や規模も西側や東側の建物群と比べると最も小規模で、時期的にもやや新しいものとなるのが特徴である。

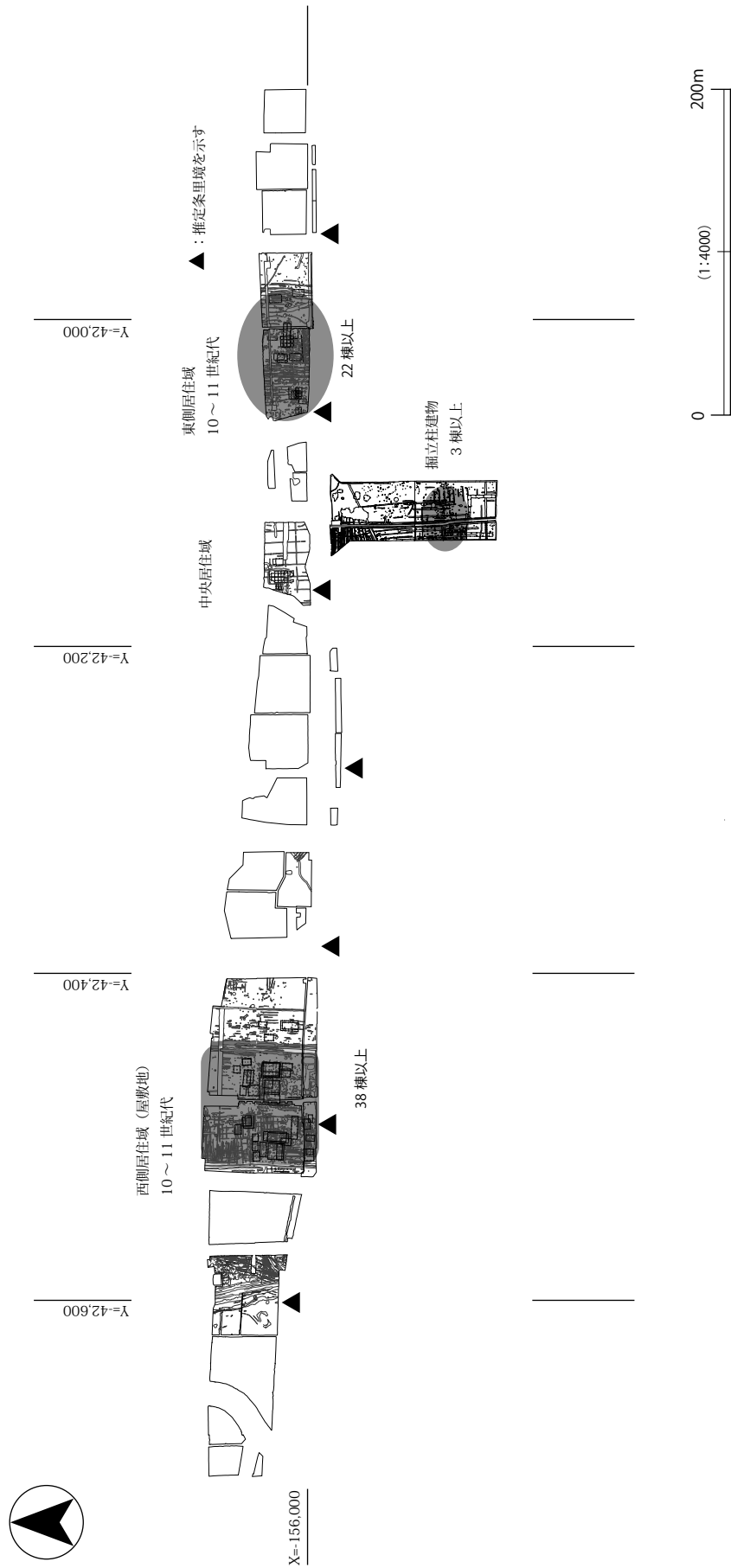


図 84 平安時代の池内遺跡 (『池内遺跡』図 570 をもとに改変)

今回調査した、09－2区の建物群は位置的には東側建物群と中央建物群の間、 $Y = -42,100 \sim 42,140$ の間に存在する。ただ、調査区の北端ぎりぎりから建物が存在するかは不明である。現状で、建物柱穴の確認できる北限が $X = -156,040$  辺りになっており、それ以南に柱穴は広がっている。05－1・2区東側居住域、中央居住域から約40 m離れており、明確に復原できた建物からとすると約70 mの隔たりがある。

柱穴は多数あったが、明確に復原できた掘立柱建物は3棟で、西側の2棟とそれよりやや東、中央に位置する1棟に分かれる。

先行する2棟は2間×3間、面積約50.4 m<sup>2</sup>の南面庇付側柱建物（掘立柱建物1）と庇が付かない2間×3間、面積約26.4 m<sup>2</sup>の側柱建物（掘立柱建物2）である。いずれの建物も東西を長軸とする。柱穴が1辺0.6～0.7 mと規模が大きく、掘方が隅丸方形であることなどから、古代的な様相を示す建物である。9世紀後葉から10世紀初頭の建物と考えられる。

この2棟の掘立柱建物付近からは素掘りの井戸や区画溝にもなり得る大きな溝なども検出された（図15～17参照）。また、掘立建物に復原できたのは2棟のみであるが、周辺には一定間隔で並ぶ柱列や建物に併行する柱穴なども存在し、実際にはこれ以上の建物が存在したと考えられる。ただし、用水路から東にいくと同時期の柱穴は少なくなるため、この建物群の中心は今回の調査区より西にあったと考えられる。

建物群域を明確に区画する溝としては南辺の460溝はそれにあたると考えられる。南の掘立柱建物2から約15 m南に位置し、建物に併行して真東西に調査区を横切る溝である。幅・深さとも他の溝を卓越しており、区画溝とするに申し分ない。

それ以外の溝については、45溝や916溝、940溝、南側の458溝などが考えられるが、45溝は真方位ではなく斜めに走り、掘立柱建物に対しても併行でない。また、45溝以外の溝は規模が小さく、形状もL字状やコの字形など建物群を取り囲む形にはならないなど、顕著な区画溝になるかは460溝ほど明確ではない。しかしながら、各遺構の報告中でも記したように、916溝、940溝、458溝については、それぞれ一定の境界を示す東西溝であったと想定できよう。

南辺の460溝以外は建物群の明確な区画溝は検出できなかった。従って、09－2区では05－1区の西側居住域のような、整然とした屋敷地は形成していなかったと考えられる。図84で示した推定の里境にも上記の南北方向の溝はどれも合致しておらず、西側居住域の区画溝との距離にも法則性がみられない。

庇が付くやや大形の建物の存在は、この建物群が単なる居住集落でなく官衙施設などになる可能性とまでは言わないにしても、非一般的な様相を示すグループであることを示唆する。ただし、出土遺物は日常雑器の域を出ない。

この2棟から用水路を挟み、東に約10 m離れて検出した掘立柱建物1棟（掘立柱建物3）は、西の2棟に比べると柱穴の大きさ、建物規模ともやや小形である。2間×3間、面積約20 m<sup>2</sup>の側柱建物であるが、南北方向を長軸とし庇をもたない。柱穴も円形で深さも0.3 m程度と浅い。中世に近い様相の建物といえる。

また、遺構の時期も10世紀後半から11世紀前葉とやや新しくなるので、09－2区には複数時期の建物が混在しているといえるだろう。西側に古い時期の遺構がかたまり、それより東側に比較的新しい遺構がかたまっていることになる。掘立柱建物3の周辺にも多数の柱穴や柱列がみられ、実際にはもっ

と多くの建物が存在していたと思われる。

掘立柱建物3には590土坑、591土坑や1009土器といった土坑墓や土器棺墓の可能性を示唆する土坑を伴う。590土坑からは近江産の緑釉陶器皿が1点出土している。その他、南側で井戸や溝なども検出したが、溝は建物を取り囲むような状況ではないので、明確な区画溝とは断定できない。すなわち、この建物群は整備された屋敷地といえるほどの構成単位はなしていない。出土遺物も緑釉陶器を除いては、希少遺物は出土していない。

以上、各建物群の特徴とその構成時期をみてきた。これらを総括すると、09-2区で検出した建物群は小規模で、不明な点も多いが二群に分けられるだろう。

09-2調査区の中央西に位置する掘立柱建物1・2を中心とする一群は、池内遺跡全体の居住域の中で最も古く、9世紀後葉から10世紀初頭を示すものである。9世紀後半から11世紀初めとされる05-1・2区の東側建物群に時期的には近い。最も先行する建物群として、また位置的にも東側居住域と中央居住域の間に位置する一群として、小規模ながら注目に値する。今回調査地のさらに西側にも居住域が広がると推測され、大形建物が相当数増えて、より大規模な居住域となる可能性もある。今後の調査成果に期待したい。

09-2調査区中央より東側の、10世紀半ばから後半の掘立柱建物3を中心とする一群は、05-1・2区の西側居住域に時期的に近いといえる。ただ、屋敷地といえる西側居住域に対して建物が余りにも小規模であり、居住域同士に関連性はないと考える。

各居住域の相関性だが、西側と東側に関しては別個のグループと05・08調査でも考えられていた。それに09-2調査の居住域を加えても、現時点では09-2区で居住域を形成していたグループが東側居住域に移ったとか、西側居住域のグループが09-2区に移ったとは考えにくい。各々が独立したグループを形成していたと考えるのが妥当だろう。

主に東西での居住域の広がりを検討したが、最後に南北限についても簡単に言及したい。

09-2区の南端で人為的な遺構が途切れ、砂層が堆積する。09-3区にいくと古代の居住域が全くみられなくなるので、居住域の南限は09-2区460溝までが1つの単位と考えて差し支えないだろう。これは09-2区の南端から現れる、緩やかに落ち込む谷状地形によって居住域が規制されるためと考えられる。

北限は現状では前述のように、X=-156,040辺が建物柱穴の確認できる地点である。09-2区の真北、05-1-3区より北を、当センターで現在調査中である(調査名:池内11-1)。10~11世紀代の溝や柱穴などの遺構、一定量の遺物を検出したようで、詳細な検討は調査成果の報告を待つことになるが、古代の居住域の北限がさらに北に延びることを期待したい。



### 第3節 池内遺跡の条里地割復原

第1章や第3章以下でも述べたとおり、12世紀前葉以降の池内09－3区周辺は条里制がすでに施行され、それに基づいた土地利用がなされていることが、今回の調査成果で明らかになった。

これは区画溝といえる大形の溝がちょうど1町、2町という単位で割り切れる位置に存在すること、そのほぼ同じ位置に初現以降も繰り返し、重層的に区画遺構が形成されること、主に文献史学の研究者が、近世や近代の古図や字名等をもとに復原した坪界と合致することなどをもとに、判断したものである。ただ、各遺構の説明でばらばらに述べているので、総合的な区割が分かりにくいのは否めない。

そこでこの項では、先人の研究成果と考古学的調査成果を今一度整理し、総括したい。

松原市域の条里制の研究は、足利健亮氏の撰河泉の古道研究に伴う松原市内の条里研究が有名である。また、服部昌之氏は大津道以南の丹南郡では丹比道を境として、その北と南では坪並が異なると指摘している。池内遺跡の近隣の大和川今池遺跡の調査報告書では、出水睦巳氏が大字や小字に基づく検討を加えている。

足利氏の『松原市史』における研究要旨は以下の通りである。

条里制とは計画的な土地区割り、六町四方を、南北の列は「里」、東西の列は「条」と呼び、その中を東西南北一町ずつの区画、坪に分割する区画法である。つまり、里内は36の坪が一つの単位をなす。坪は「一ノ坪」から「三六ノ坪」と呼ばれる。

その配列方法（坪並）には千鳥式と並行式があるが、河内国では千鳥式で共通である。ただ、一の坪がどの隅にあたり、どういう方向に進むかは郡によって違いがある。池内遺跡が所在する郡は初め丹比郡であったが、延久4（1072）年の岩清水文書によって、丹北、丹南、八上の3つの郡に分かれていることが明らかにされている。長尾街道より北の丹北郡では、西南隅を一の坪として、東に進んで折り返す、坪名の付け方であり、三六の坪は西北隅にあたる。

昭和50年代に残っていた条里の一町方格遺構と昭和43年の1万分の1地図を重ねあわせ、一部は大和川付替以前の古図を補遺して条里地割を復原した（図5）。池内遺跡の今回調査区は丹北郡北三条三里におさまる。延久四（1072）年「太政官牒岩清水八幡宮護国寺所所庄園参拾肆箇処事」文書によれば、北三条楯原中里、もしくは北三条楯原中里外となる。

坪並みの呼称からすると、丹北、丹南、八上の3つの郡で呼称が異なり、丹北郡の中でも長尾街道の北と南では坪並が異なることが判明した。つまり、これらの呼称は三郡分立以後の11世紀後半以降のものといえる。

長尾街道の北と南では坪の大きさも異なる。以北は東西一辺が109m強、南北一辺が110mとほぼ同じ正方形である。以南では南北が長い坪並だが、これは古くは106m四方の区画を再編成したものと考えられる。

一町の区画が106mであったのは奈良時代前半以降、少しずつ長くなったことが知られている。八尾街道、長尾街道、竹ノ内街道といった古道の間は106mの倍数距離をもつことから、これらの古道が律令制初期かそれ以前に制定され、その後、この間をうめるように109m区画での土地整備がなされたと足利氏は結論付ける。

足利氏等の論拠に基づいて、史料や字名、現在も残る方格によって推定復原された条里区画に、池内遺跡の今回調査区を重ね合わせてみた（図85）。1町方格は109m四方としている。

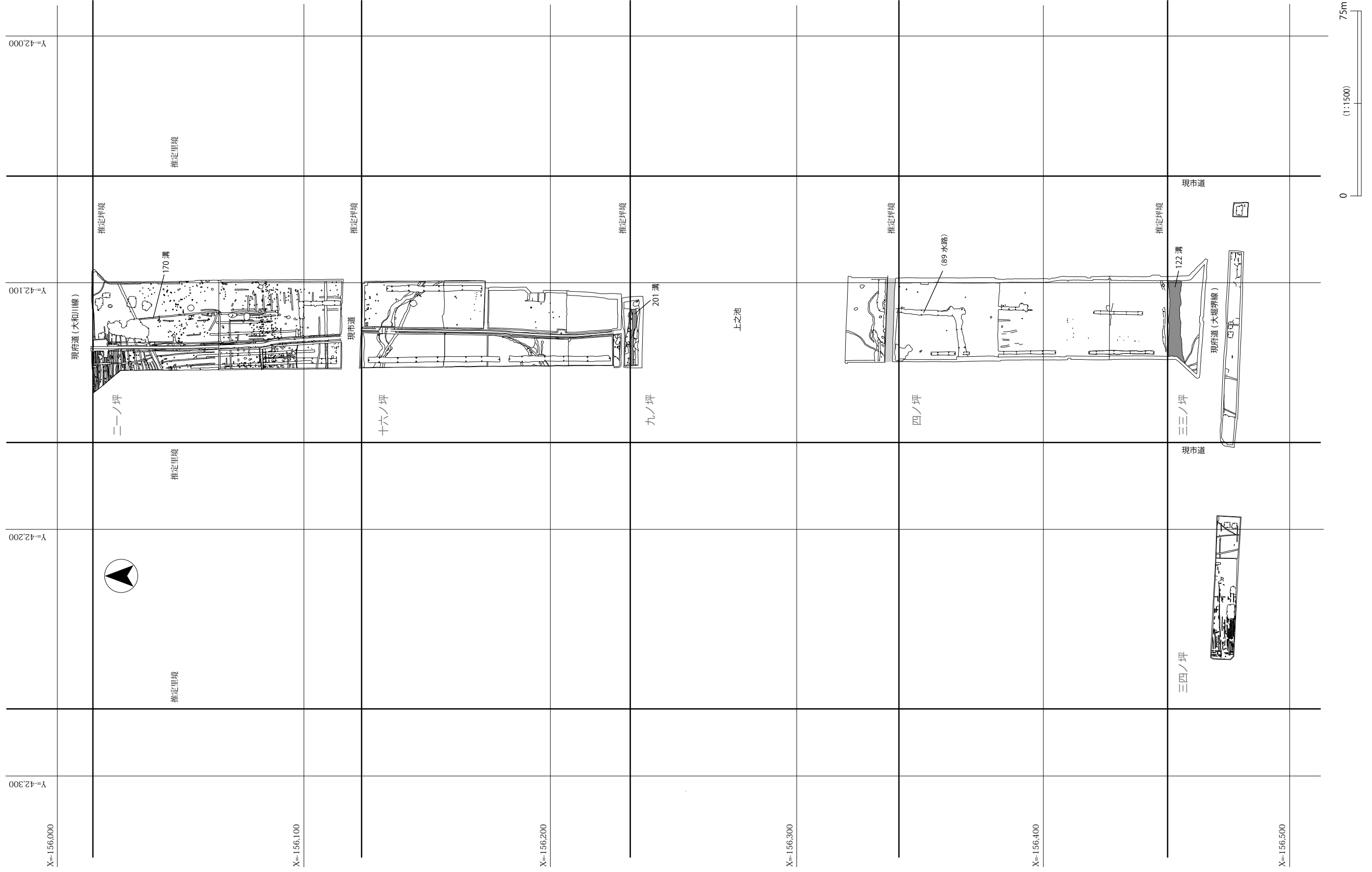


图85 09-2区·09-3区 坪境遺構復原图



図 86 松原市条里復原図 (『大和川・今池遺跡II』第 208 図を抜粋)

すると、坪境溝と捉えている 201 溝、122 溝がびたりとその位置に合致した。両溝の時期が 12 世紀前葉～前半と目されるので、この地域で 11 世紀後半以降に 1 町 109 m 前後の条里地割が施行されたとする説にも合致し、その比較的古い段階の遺構を検出したといえる。

坪境溝以外で坪境と推定される場所は現在の道路（府道大和川線、市道）や上之池南堤の用水路に相当する。

里境については、南北の調査区はちょうど坪内におさまっており、境が調査区内には現れない。東西方向の調査区については、調査区と調査区の間、現市道の位置に相当する。やはり、里境に相当する箇所がそのままずっと踏襲され現代にまで至っていることが分かる。

この図 85 によって、おもしろいことに気づく。09－2 区を南北に長く走る特徴的な溝、170 溝が里境からちょうど半町はなれた場所付近に位置する。また、掘立柱建物 1・2・3 といった建物群が位置するのが、この坪の南側の半町になる。また、上之池より南に下って検出した 89 水路の南北の通りも、坪境の半町周辺に位置するのである。これらが地割を意識して形成されたことは疑う余地がない。

89 水路は近世の所産であるが、170 溝は 9 世紀後葉から 10 世紀初頭の遺構、掘立柱建物 1・2 も 170 溝と同時期、掘立柱建物 3 は 10 世紀後半の遺構と出土遺物から決定した。これらの遺構は、11 世紀後半以降より古いことになる。つまり、170 溝等のあり方は、丹北郡に分かれる以前の古い地割に基づいた条里に関連する遺構と呼べるのではないだろうか。

最南部の大堀堺線調査区では、上層で南北から東西に変わる鋤溝群を検出したが、その変化箇所は一町の半分や何分の 1 という位置には相当しない。よって、より新しい時期の遺構と考えられる。09－2 区のさらに北、170 溝の延長線上は、大和川線調査区と調査区の間にあたり、それ以上の確認はできなかった。

また、出水睦巳氏が昭和 40 年代前半の小字名をあてはめた。今回調査区には「八反田」「下之池」などが残るが、直接坪名を類推できるものはない。ただ、小字の範囲から長地型の地割と思われる。関連する名称として、大堀堺線を挟んでもう一つ南の坪に「天ノ坪」が存在する。この一町南の区画は西南隅に「一ノ坪」が存在する。そのさらに一町南の区画では、南から二列目の東から二、三番目に「八ノ坪」「九ノ坪」の地名が残る。これらの事実に基づき、西南隅から千鳥式に進む呼称と類推すると、今回の調査対象地の坪名は図 85 に示した通りになる。つまり、東西の大堀堺線の調査区は東から西に「三三ノ坪」「三四ノ坪」となり、南北の河内長野線の調査区は南から北に「四ノ坪」「九ノ坪」「十六ノ坪」「二一ノ坪」に相当しよう。

#### <注>

『池内遺跡』（センター 2010）第 7 章総括では、西側居住域（屋敷地）、東側居住域のみ表記され、中央の建物群は図 570 で図示されるが名称は記されていない。しかし、この節では記述の便宜上、中央にある建物群を中央居住域と呼ぶ。

#### <参考文献>

- 足利健亮 1985 「第 2 章 3 条里制」『松原市史』 第 1 巻 松原市教育委員会
- 服部昌之 1975 「古代の直線国境について」
- 服部文章 2010 「河内丹比郡の条里」『古代西除川沿いの集落景観』 大阪府立狭山池博物館
- 出水睦巳 1980 「2. 松原市域における条里」『大和川・今池遺跡Ⅱ』 大和川・今池遺跡調査会

# 写真図版





1. 全景（南から）



2. 北西部溝群（北東から）



1. 溝群（北から）



2. 170溝 遺物出土状況（南から）





1. 170溝 遺物出土状況1 (南東から)



2. 170溝 遺物出土状況2 (南から)

図版4 09-2-1・2区



1. 09-2-1区 60 溝断面 (南から)



5. 36 溝断面 (南から)



2. 09-2-2区 60 溝断面 (南から)



6. 5 溝断面 (東から)



3. 64 溝断面 (南から)



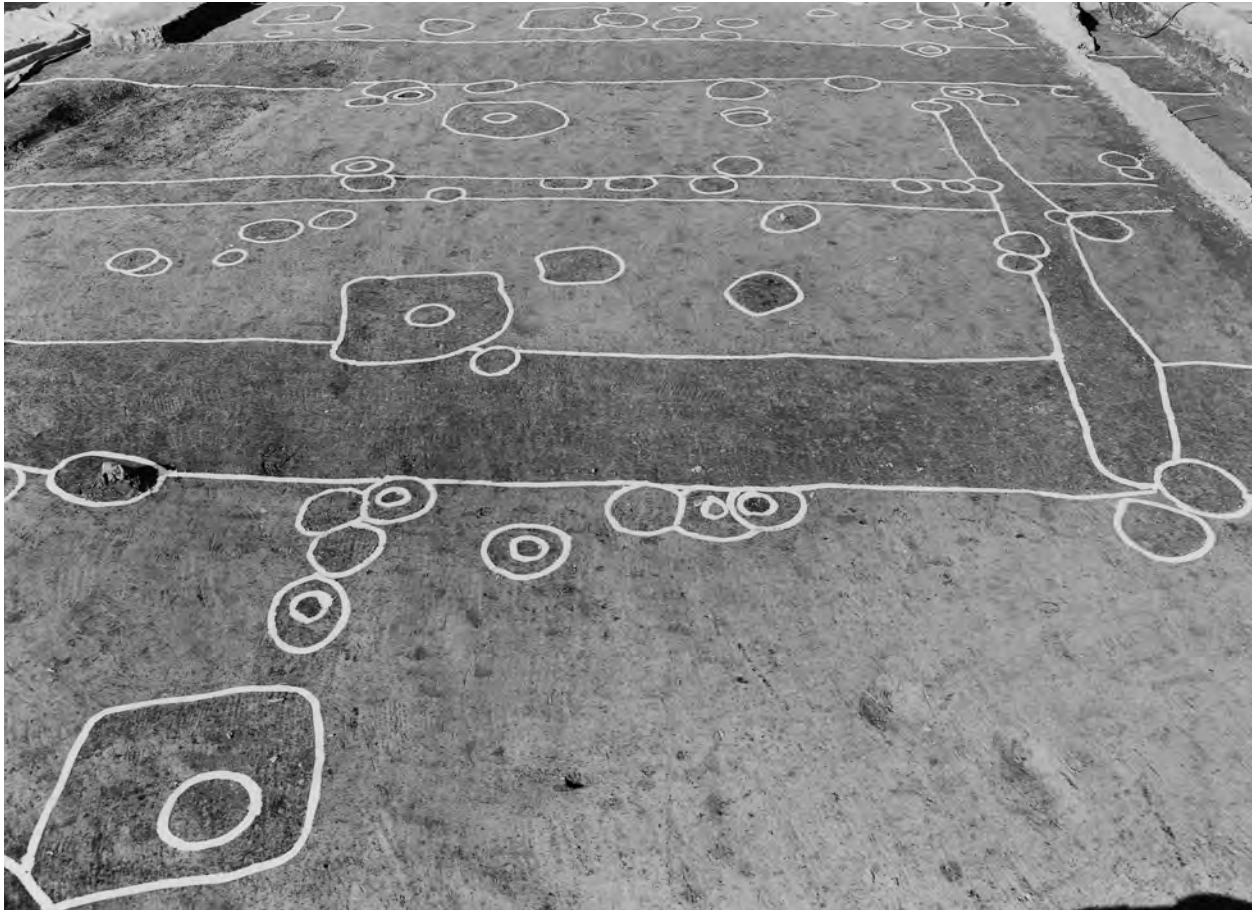
7. 45 溝断面 (東から)



4. 67 溝断面 (南から)



8. 66 溝断面 (南から)



1. 掘立柱建物1検出状況（東から）



2. 掘立柱建物3検出状況（南東から）



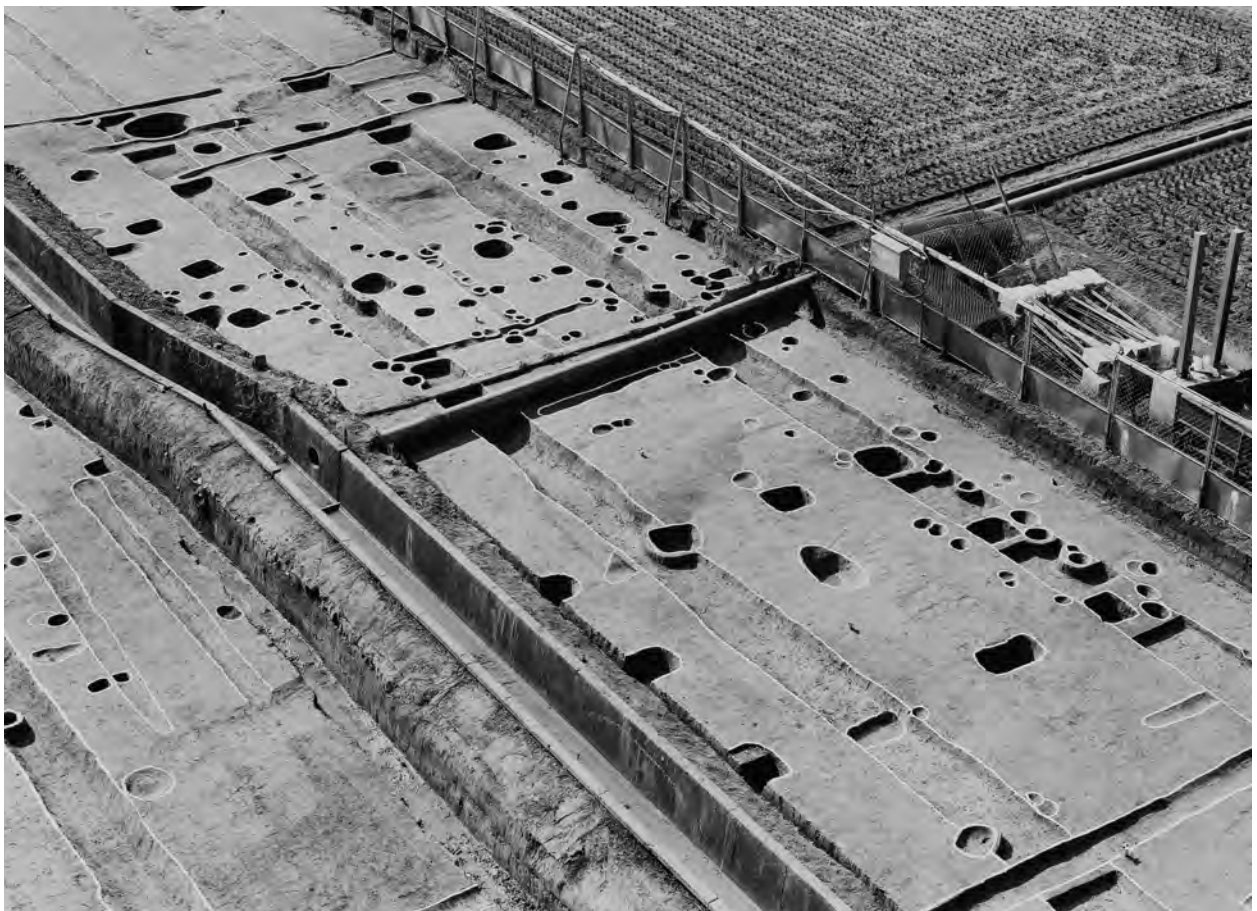
1. 全景（北から）



2. 掘立柱建物1・2・3全景（北東から）



1. 590・591 土坑（北から）



2. 掘立柱建物1・2（北東から）



1. 掘立柱建物1近景（北東から）



2. 掘立柱建物1近景（南東から）



1. 掘立柱建物2近景（南東から）



2. 掘立柱建物3近景（南東から）



1. 590 土坑 遺物出土状況（北西から）



2. 800 土坑 瓦出土状況（南東から）





1. 掘立柱建物 1 742 柱穴断面 (南から)



5. 掘立柱建物 2 871 柱穴断面 (南から)



2. 掘立柱建物 1 743 柱穴断面 (南から)



6. 掘立柱建物 2 872 柱穴断面 (南から)



3. 掘立柱建物 1 749 柱穴断面 (西から)



7. 掘立柱建物 3 602 柱穴断面 (東から)



4. 掘立柱建物 2 944 柱穴断面 (西から)



8. 掘立柱建物 3 603 柱穴断面 (東から)

図版 12 09 - 2 - 2 区



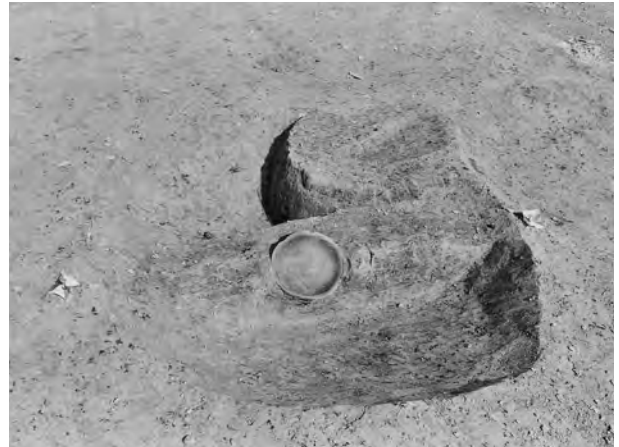
1. 460 溝断面 1 (西から)



5. 591 土坑断面 (東から)



2. 460 溝断面 2 (東から)



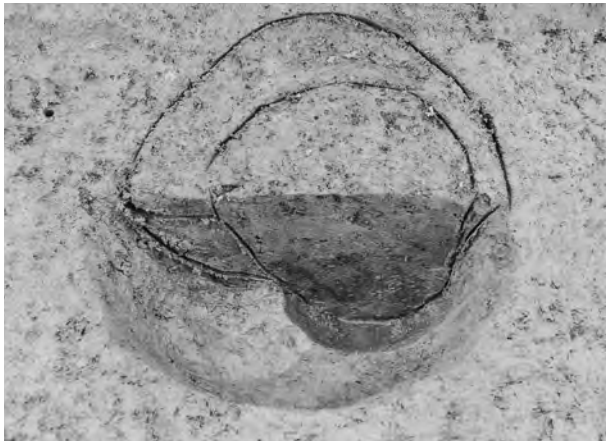
6. 405 土坑 遺物出土状況 (南西から)



3. 589 土坑断面 (南から)



7. 1009 土器出土状況 (南東から)



4. 955 土坑断面 (東から)



8. 1009 土器出土状況 (東から)



1. 全景 (南から)



2. 23 溝遺物出土状況 (西から)



4. 1039 溝 (北から)



3. 1045 柱穴 断面 (北西から)



5. 1044 落込 (東から)



1. 全景（南から）



2. 2・3溝、4井戸（南から）



1. 3 溝 (東南から)



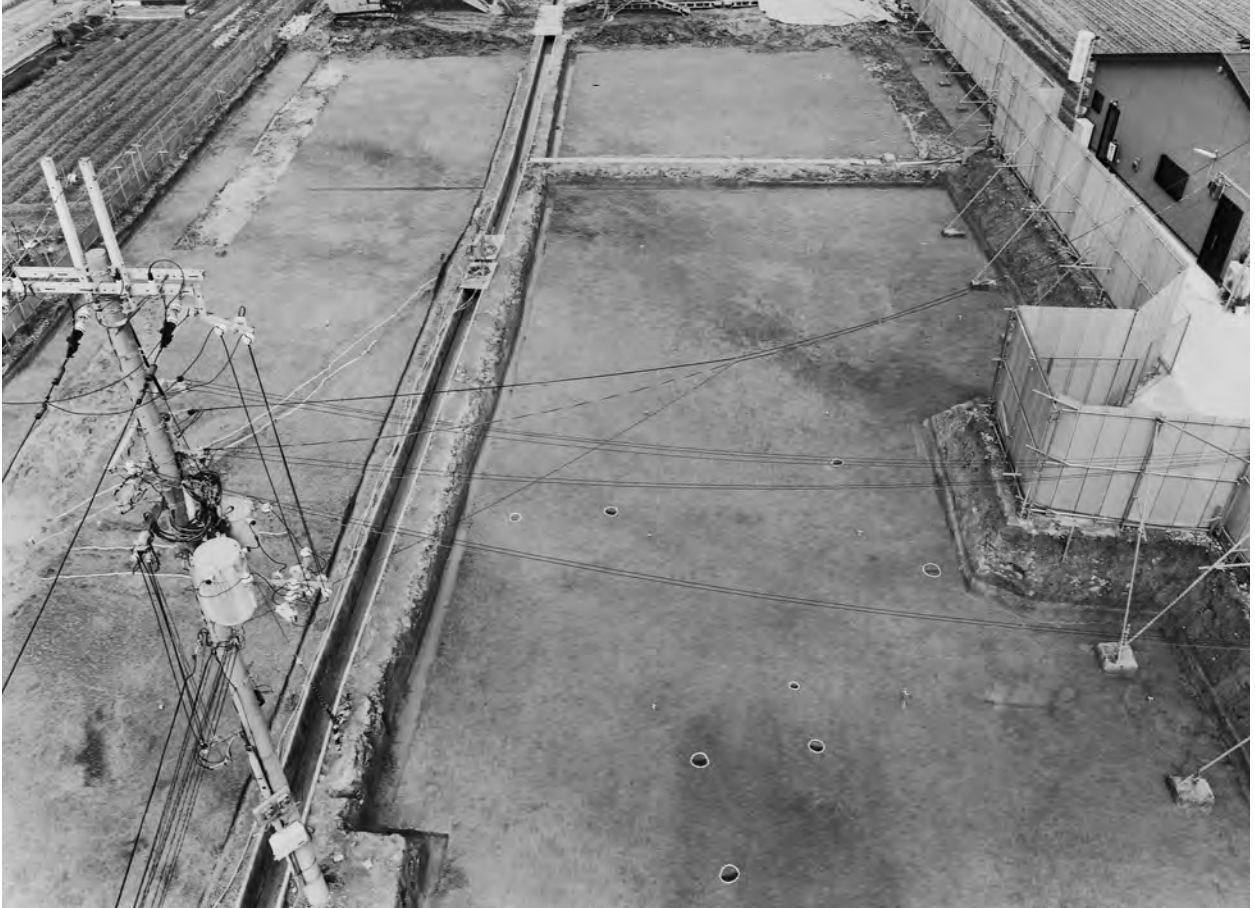
2. 3 溝 (南東から)



1. 3溝断面（東から）



2. 打製石剣出土状況（北から）



1. 09 - 3 - 2 区全景 (南から)



2. 09 - 3 - 3 区 187 溝 (東から)



1. 第1面全景（東から）



2. 第1面全景（北東から）





1. 第3面全景（西から）



2. 第3面全景（東から）



1. 09 - 3 - 7 区西壁 (東から)



2. 09 - 3 - 8 区3溝検出状況 (北東から)



1. 第2面全景（西から）



2. 第2面全景（東から）

図版 22 09 - 3 - 4 ・ 5 区



1. 09 - 3 - 4 区全景 (南から)



2. 09 - 3 - 5 区全景 (南から)



1. 477 落込検出状況 (南東から)



2. 89 水路 漆器出土状況 (南から)



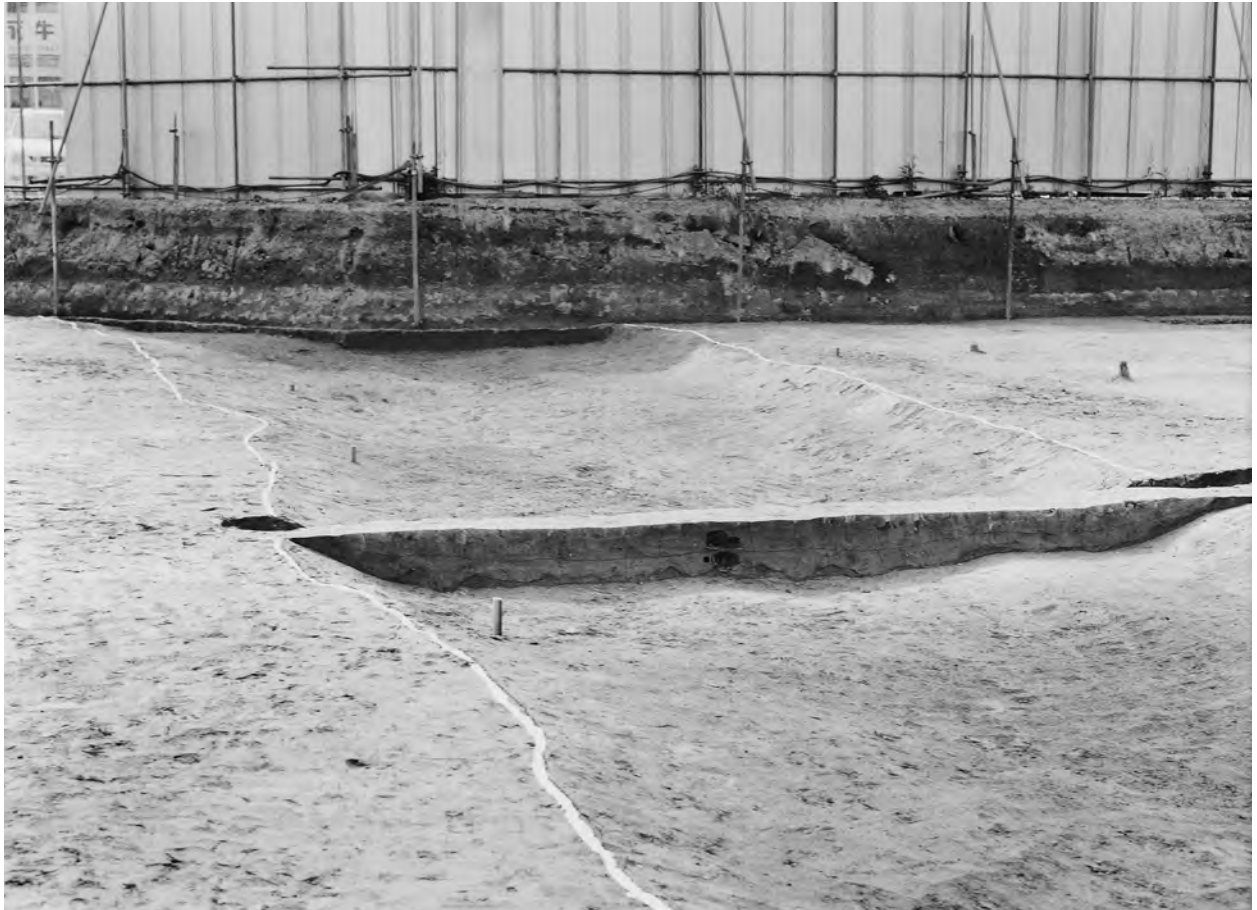
3. 89 水路 断面 (北から)



1. 全景（北から）



2. 全景（北から）



1. 122 溝 (東から)



2. 122 溝 (西から)

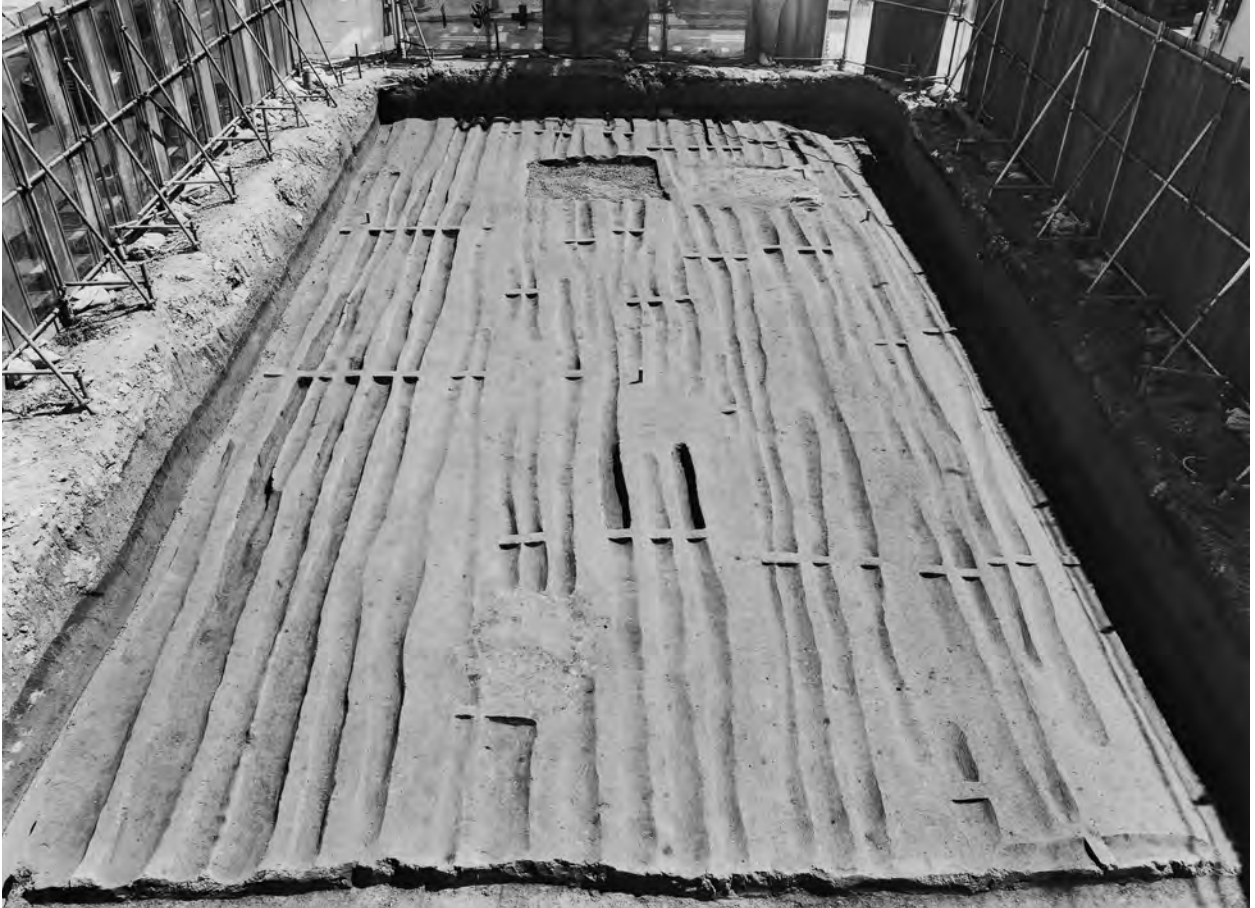


1. 第1面全景（西から）



2. 第3面全景（西から）

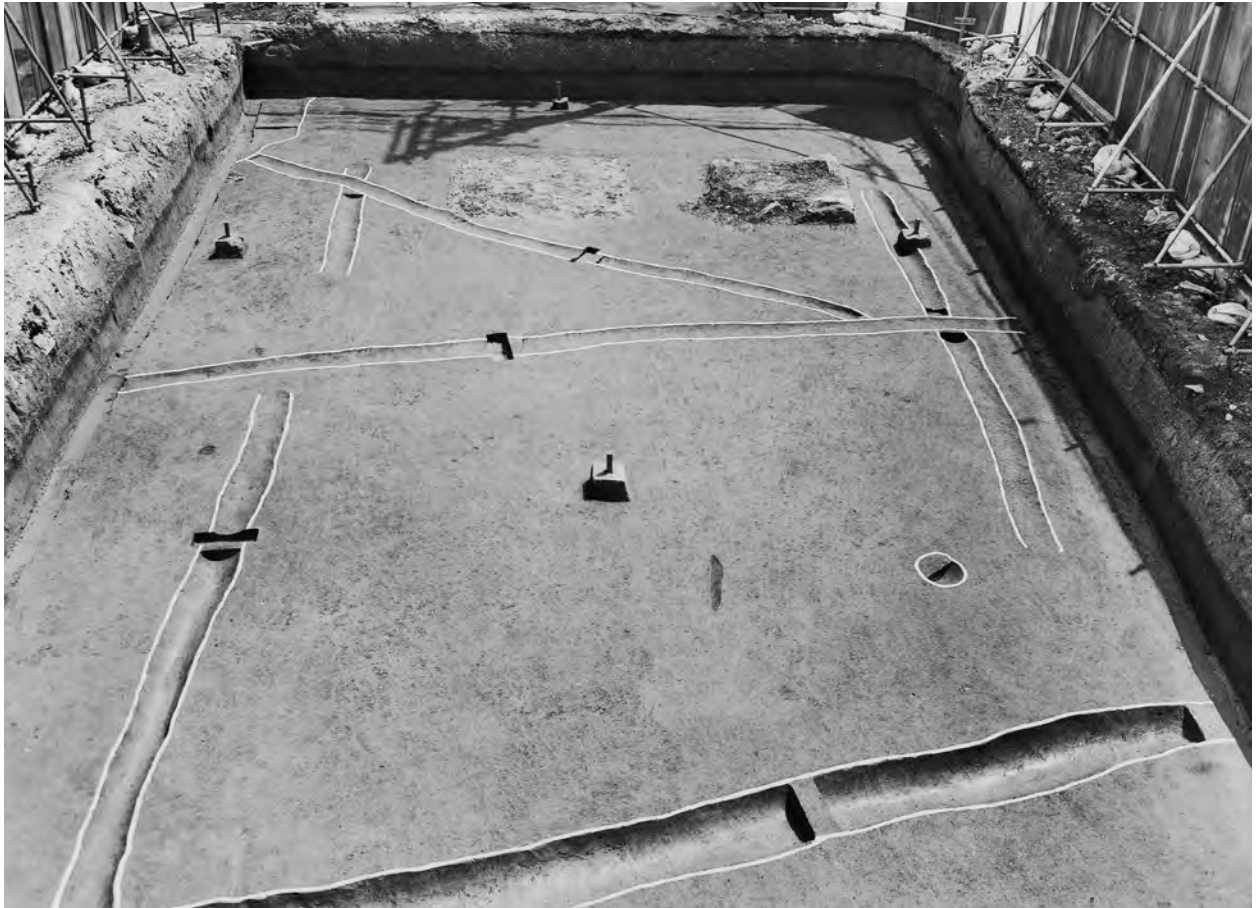




1. 第1面全景（西から）



2. 第1面全景（東から）



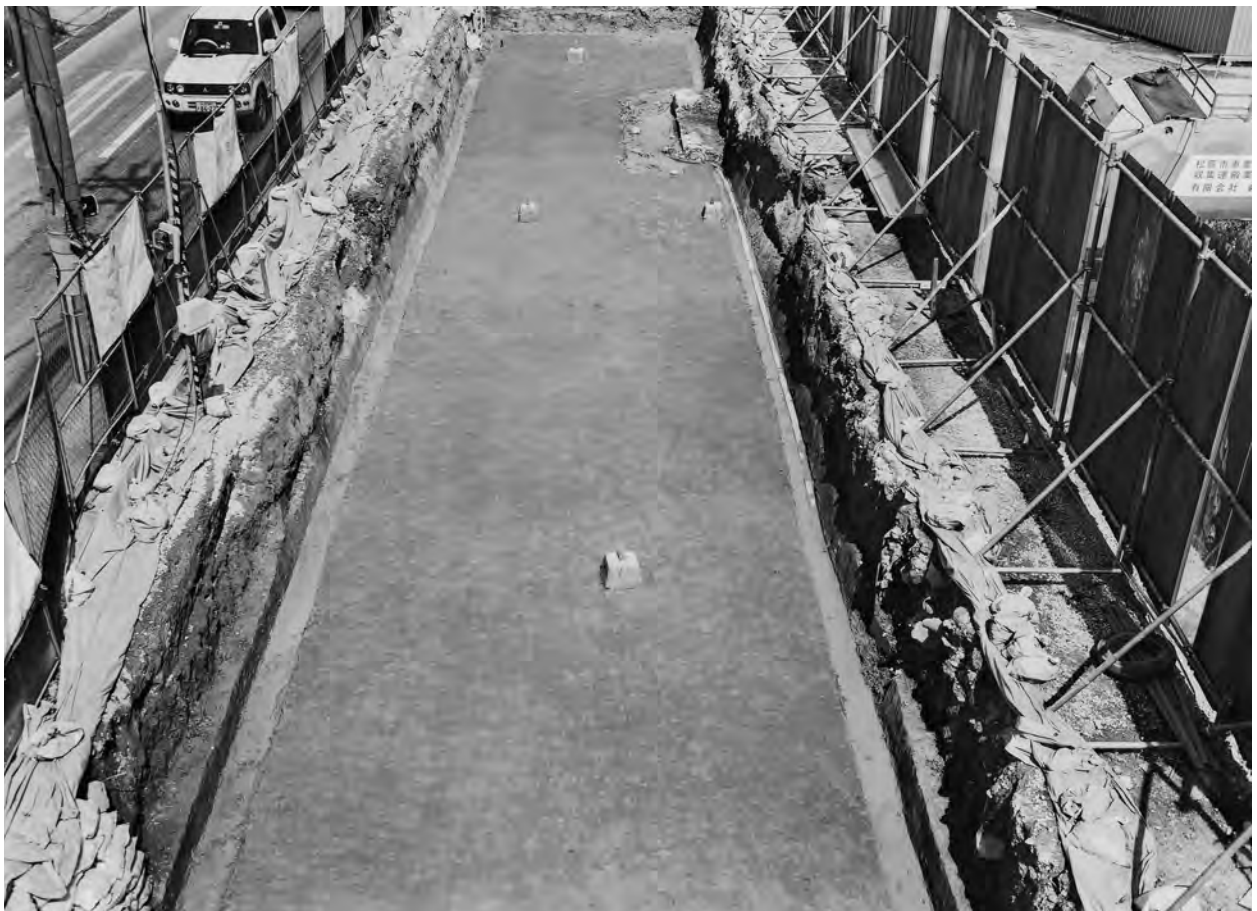
1. 09 - 3 - 11 区第 3 面全景 (西から)



2. 09 - 3 - 12 区第 1 面検出状況 (東から)



1. 09 - 3 - 12 区第 3 面全景 (西から)



2. 09 - 3 - 13 区第 3 面全景 (西から)



1. 第1面全景（南東から）



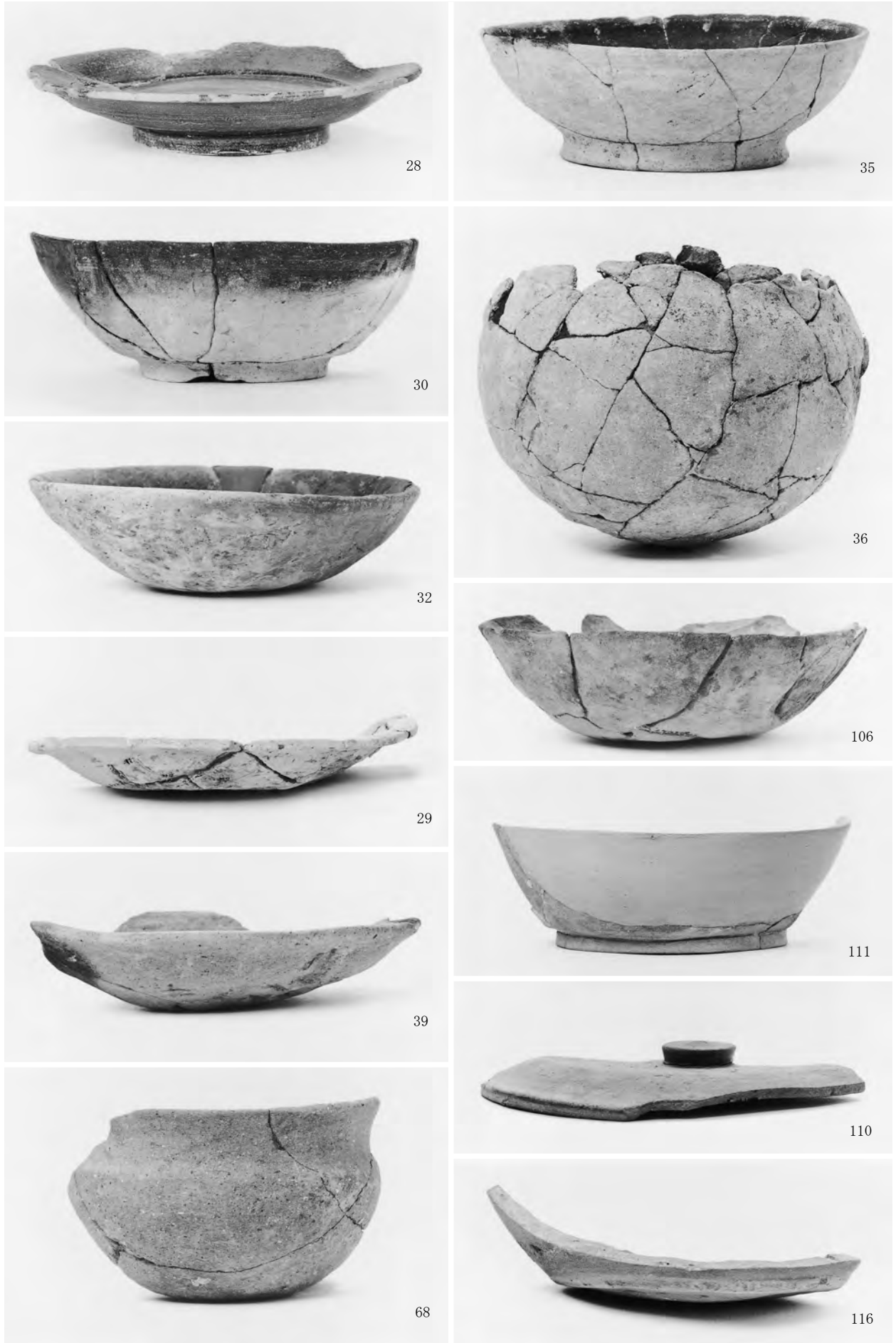
2. 第3面全景（南東から）

图版 31 09 - 2 · 09 - 3 - 9 区出土遺物 ( 1 )



遺構出土

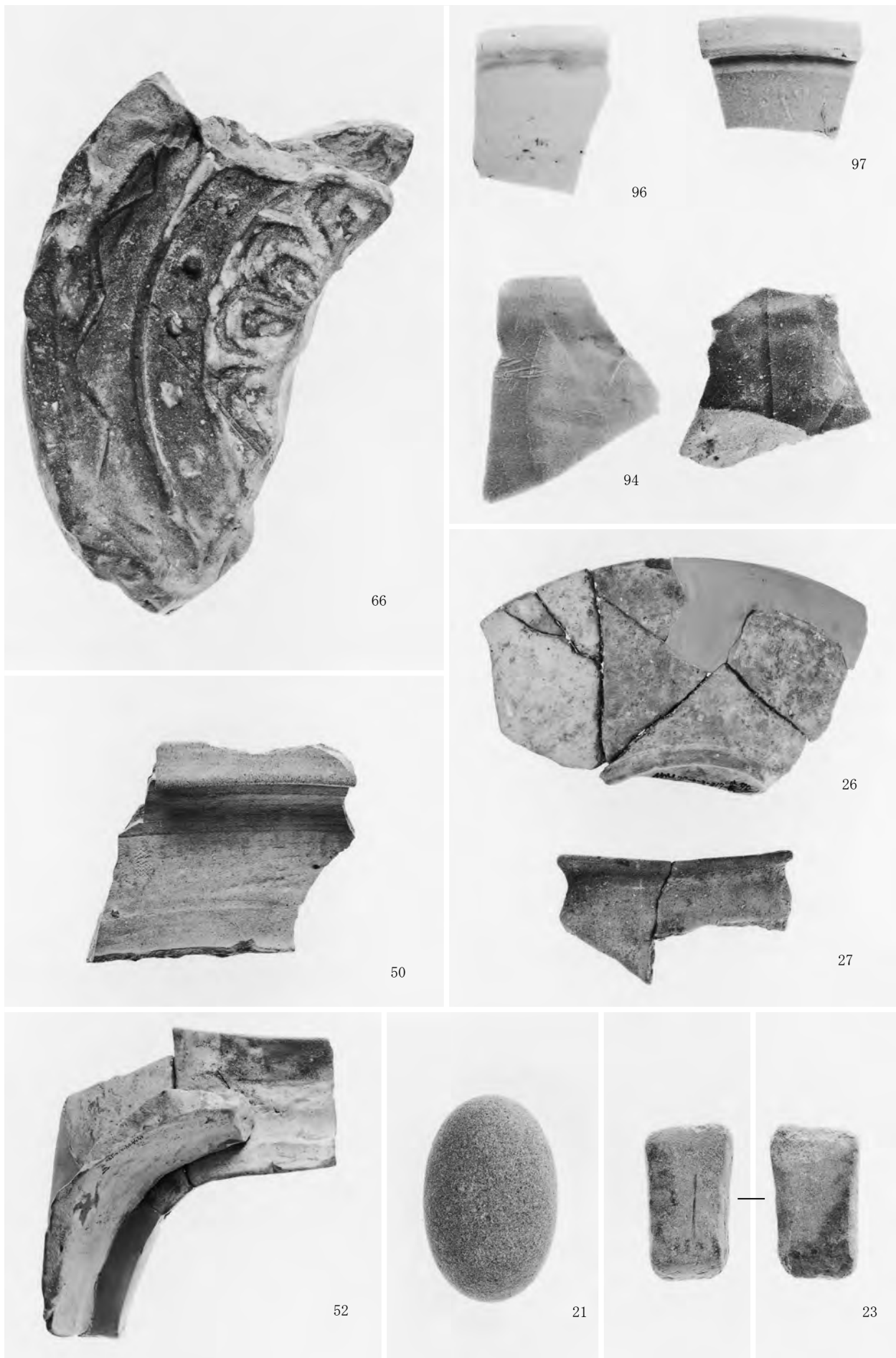
图版 32 09-2·09-3-9区出土遗物(2)



遺構・包含層出土

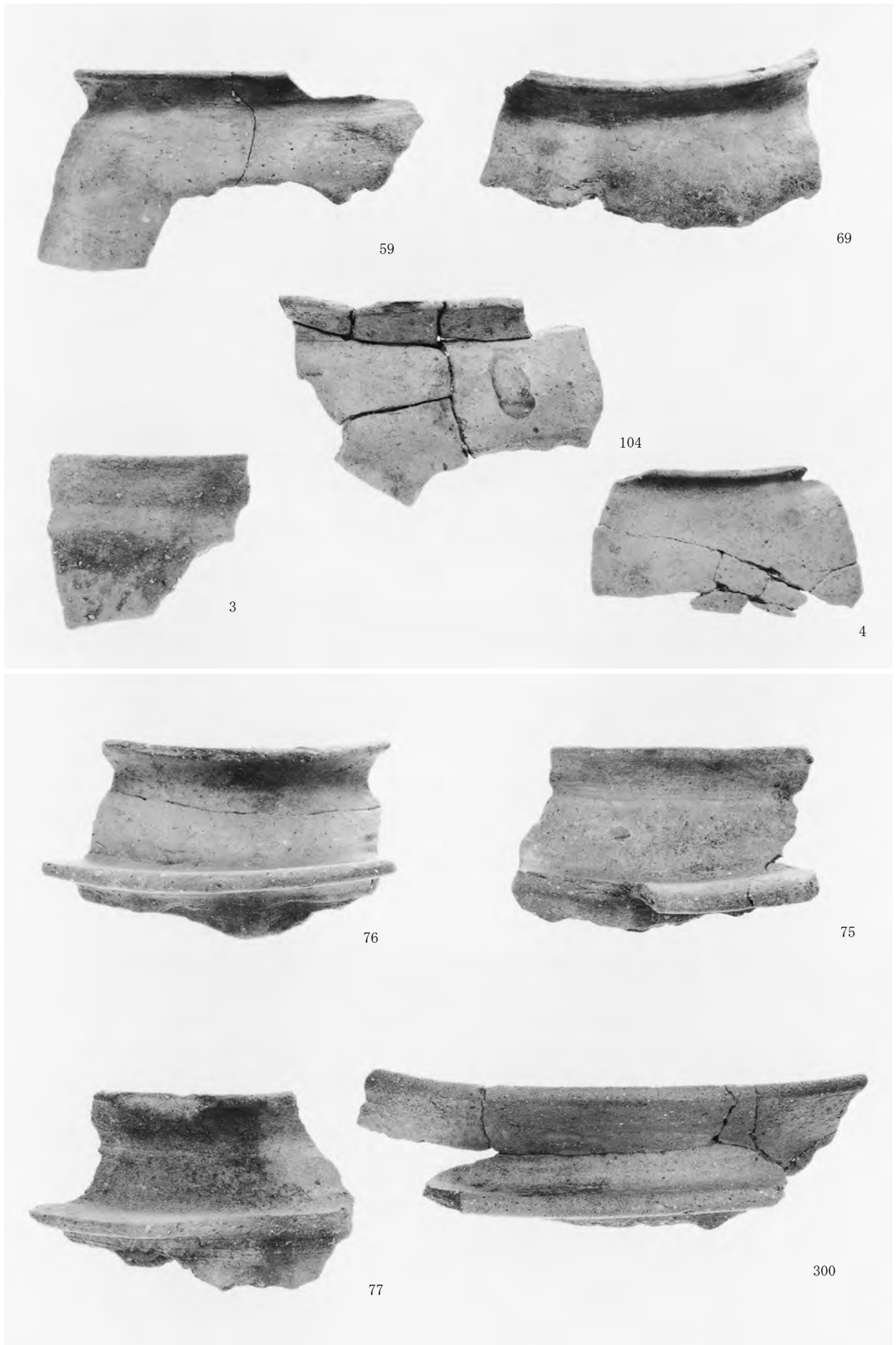


图版 34 09 - 2 · 09 - 3 - 9 区出土遺物 ( 4 )



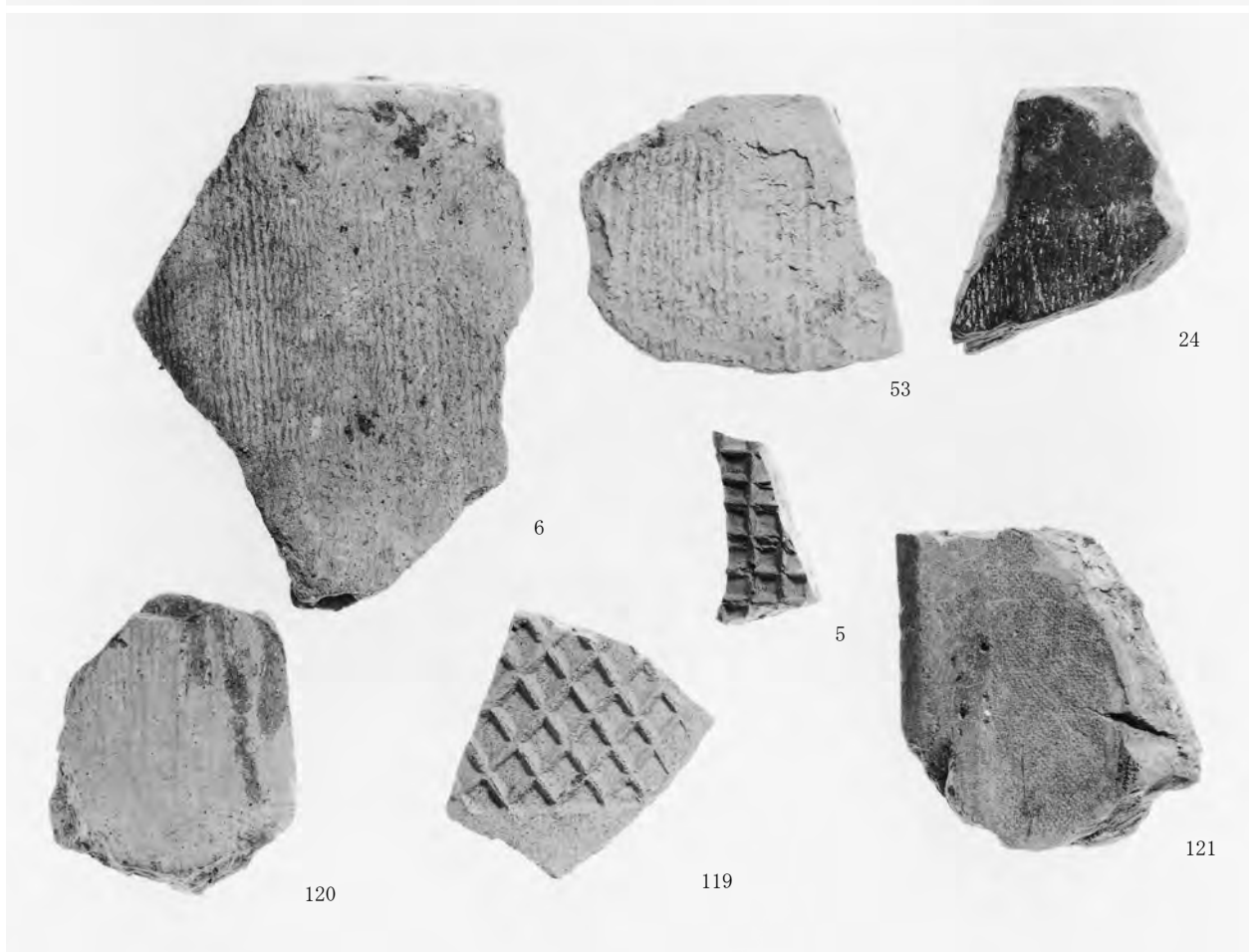
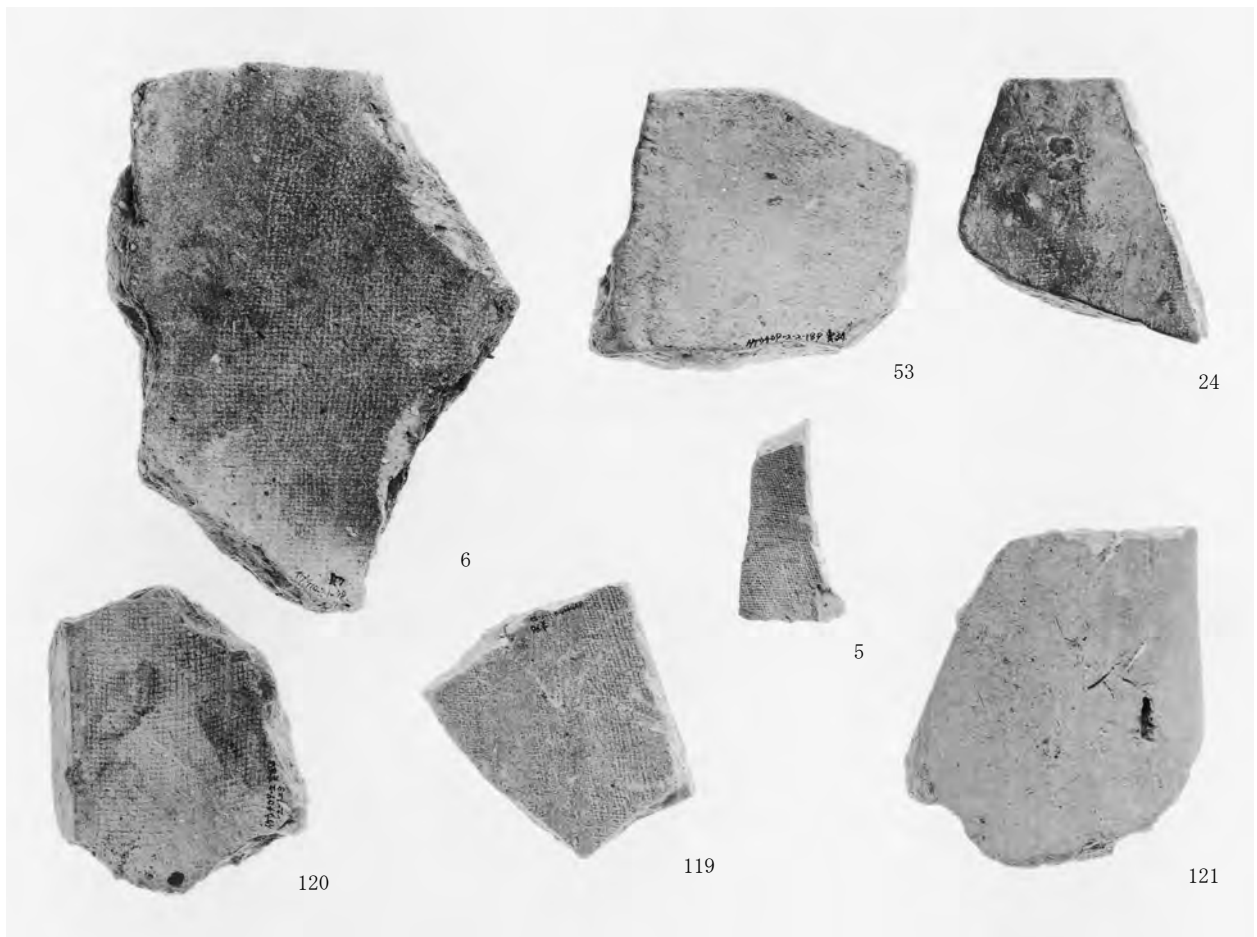
遺構・包含層出土



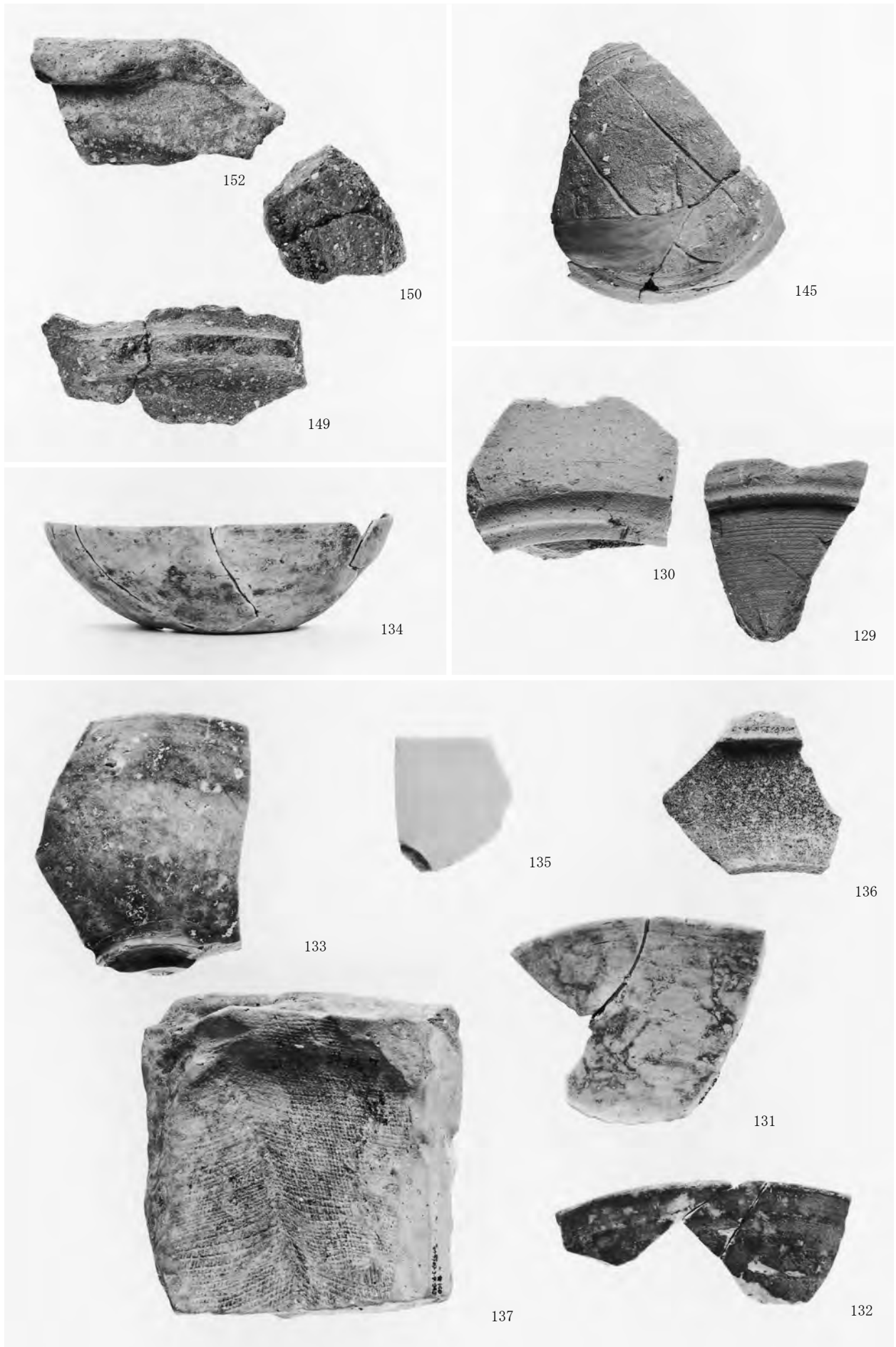


遺構・包含層出土

图版 36 09-2·09-3-9区出土遺物(6)

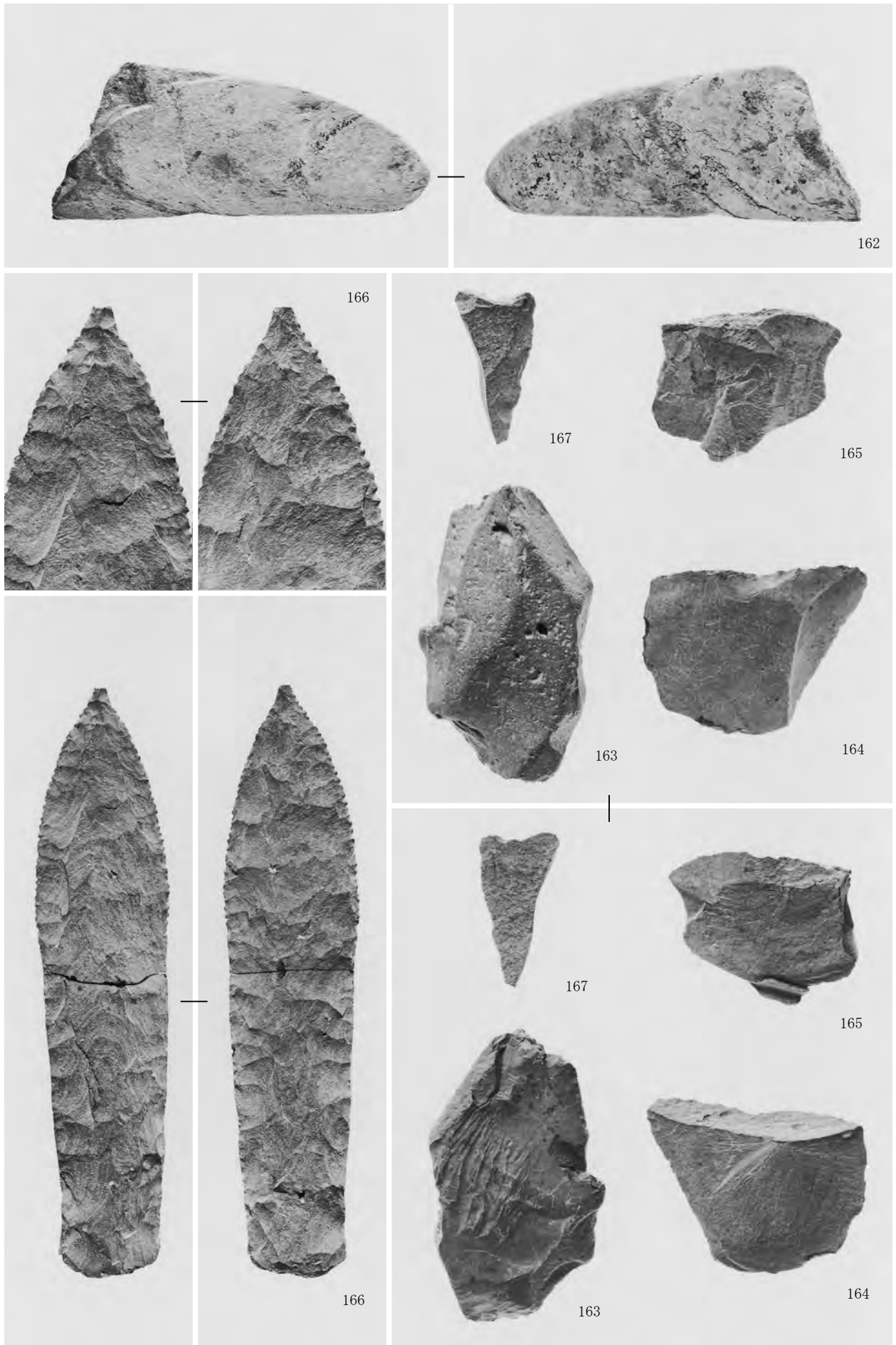


遺構・包含層出土

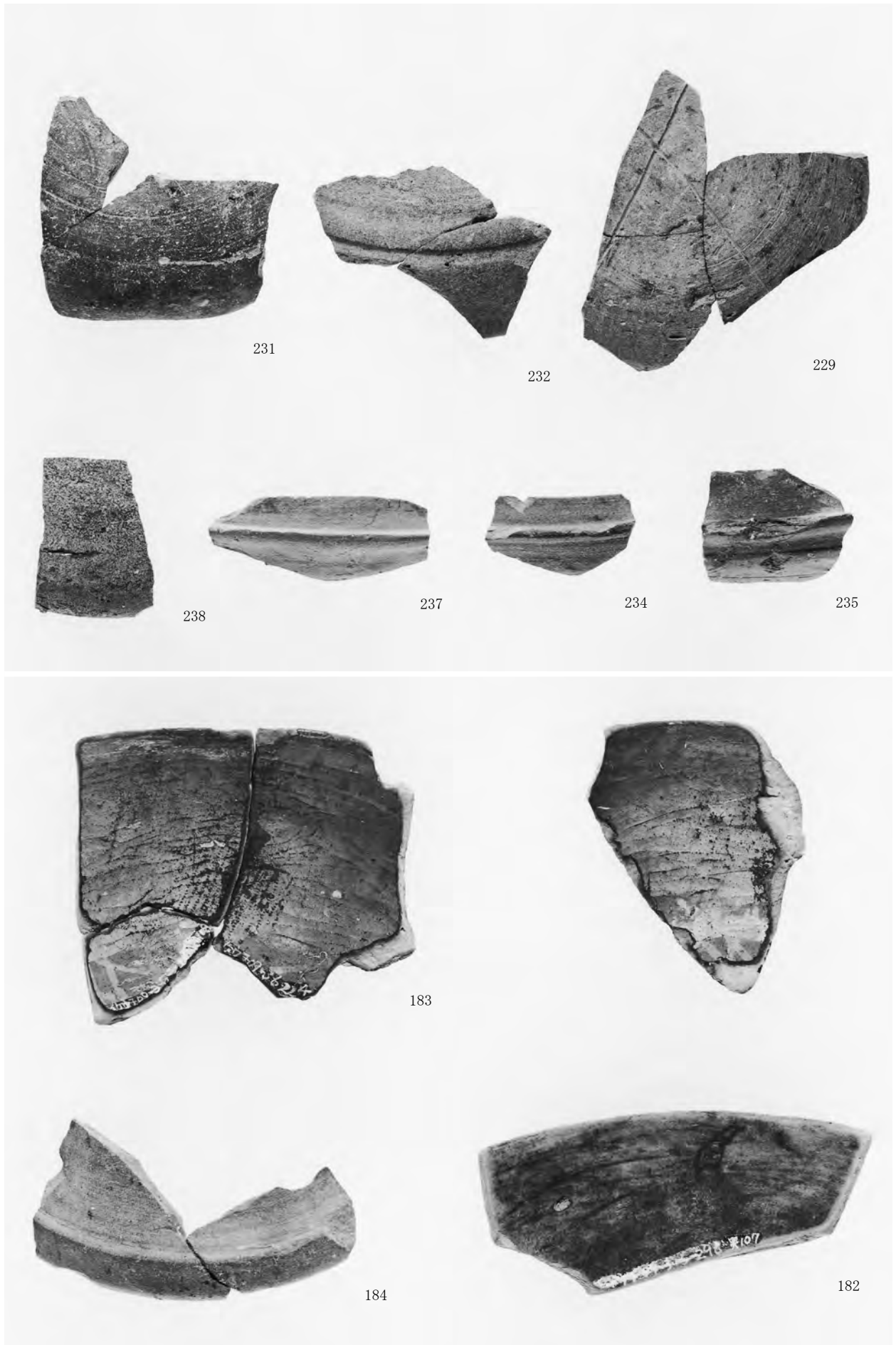


遺構・包含層出土

图版 38 09-3-1~3·7·8区出土石器

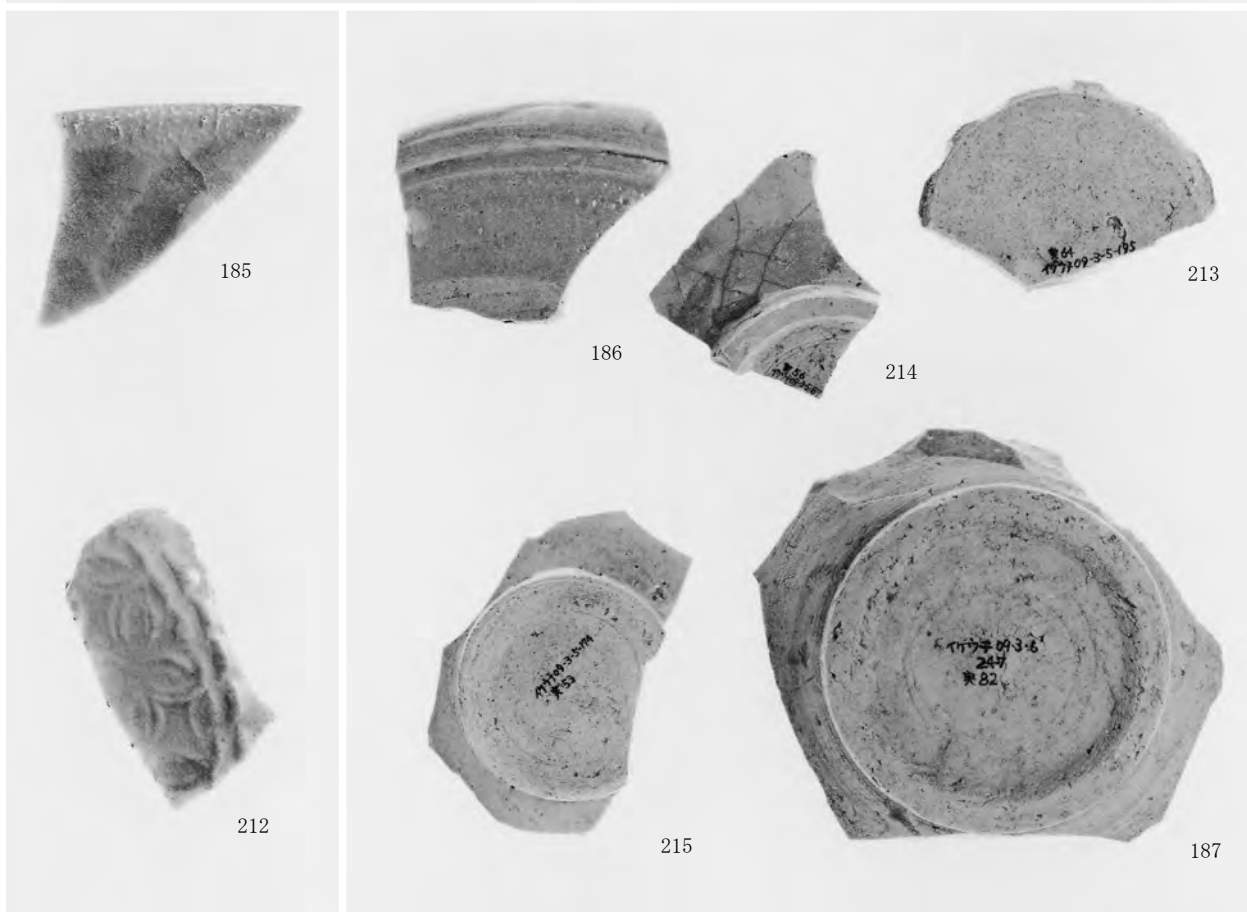
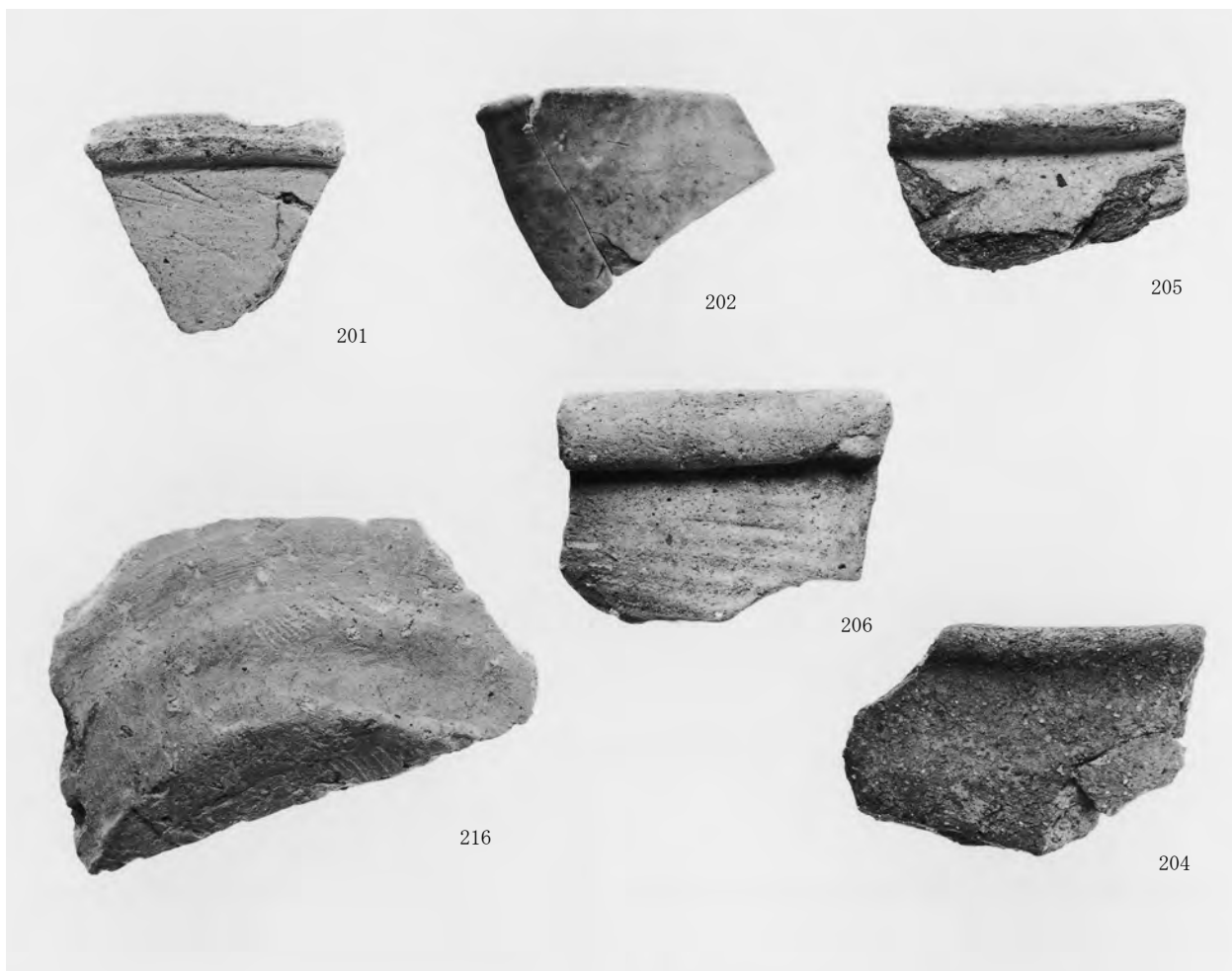


遺構・包含層出土



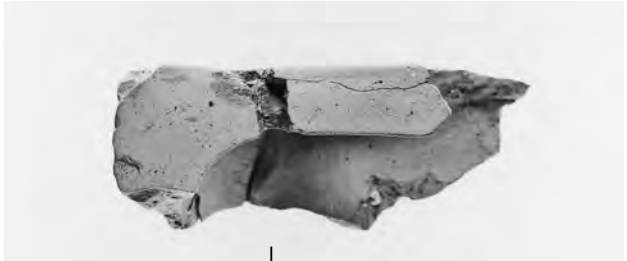
遺構・包含層出土

图版 40 09-3-4~6区出土遗物(2)

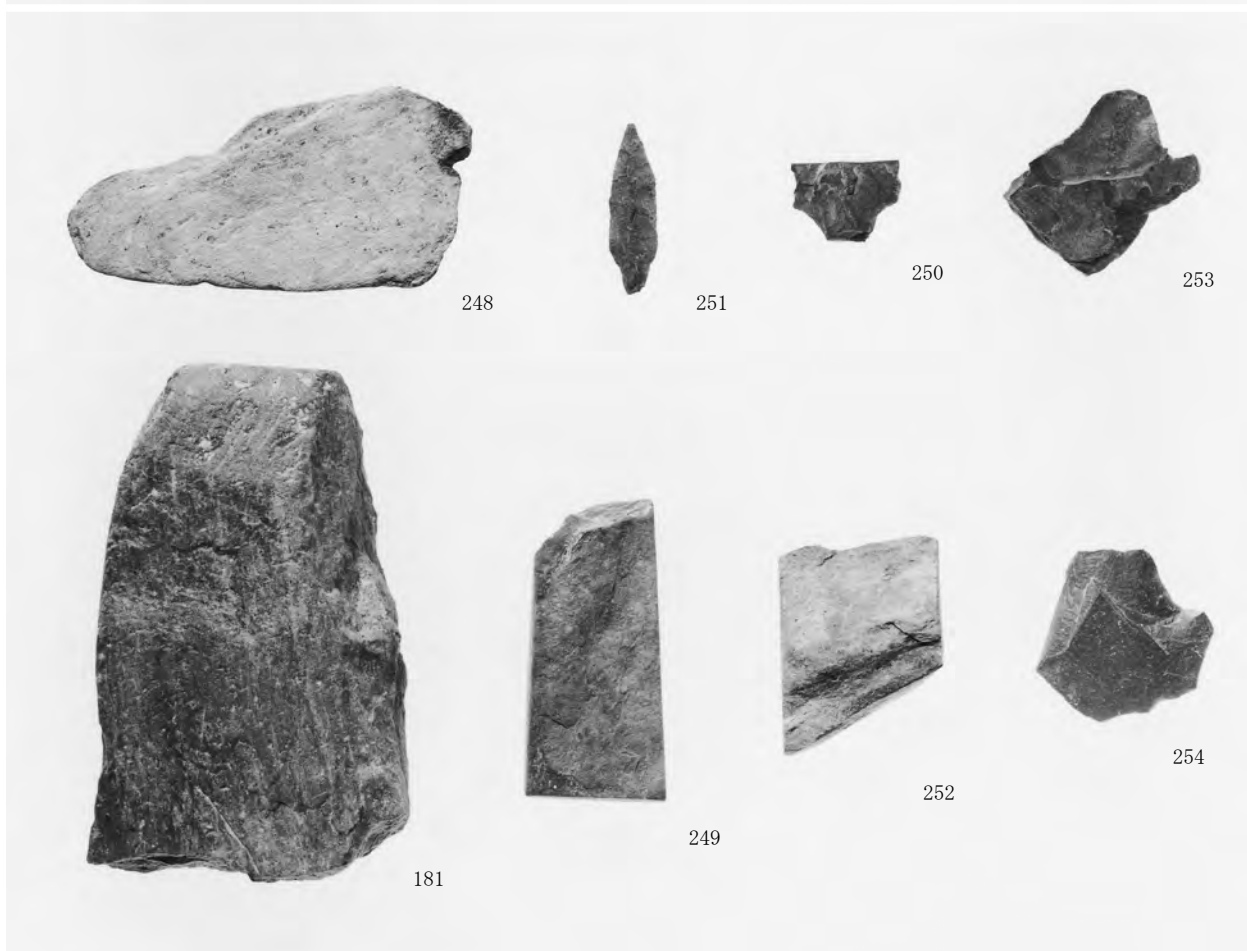


包含層出土

图版 41 09-3-4~6区出土遺物(3)

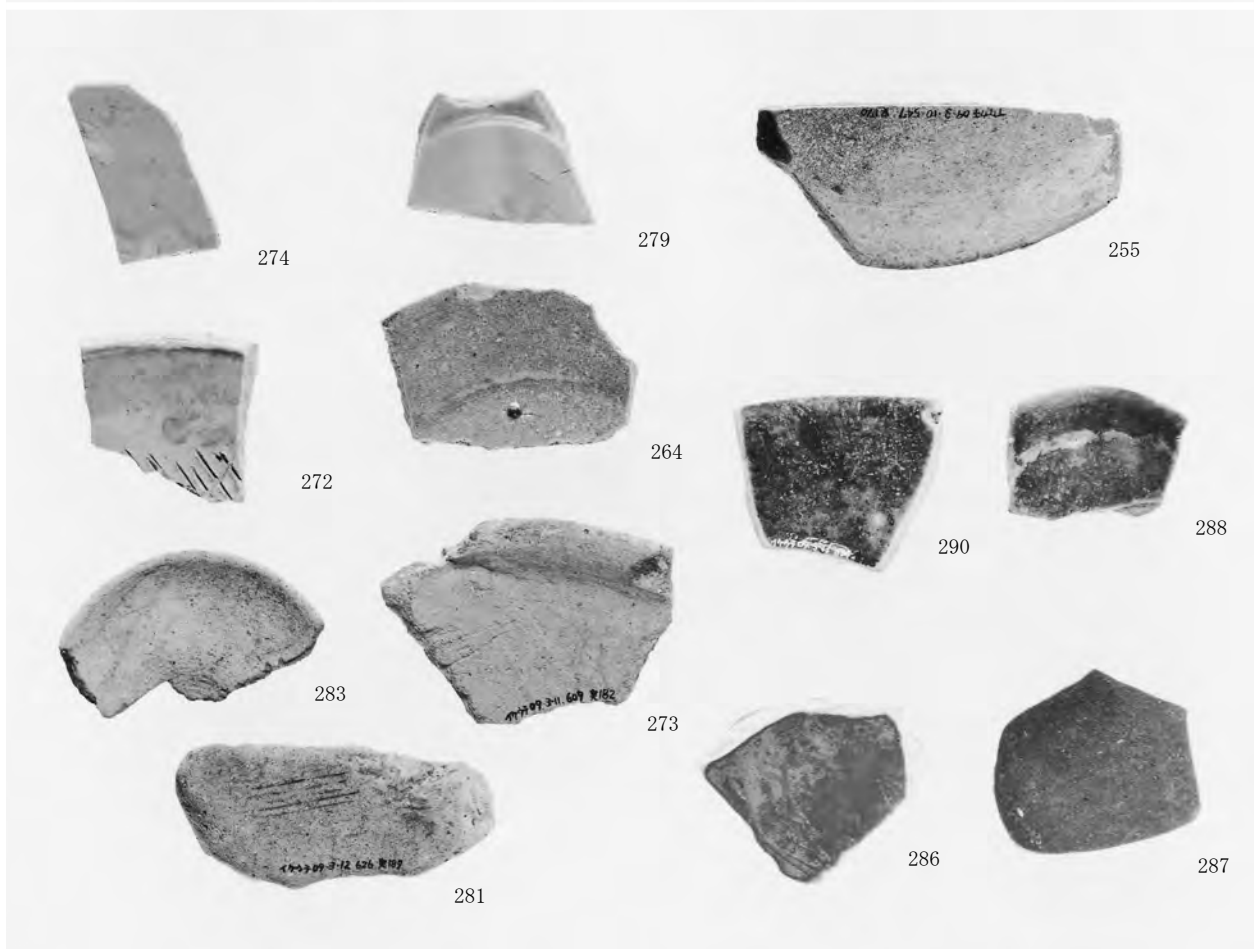
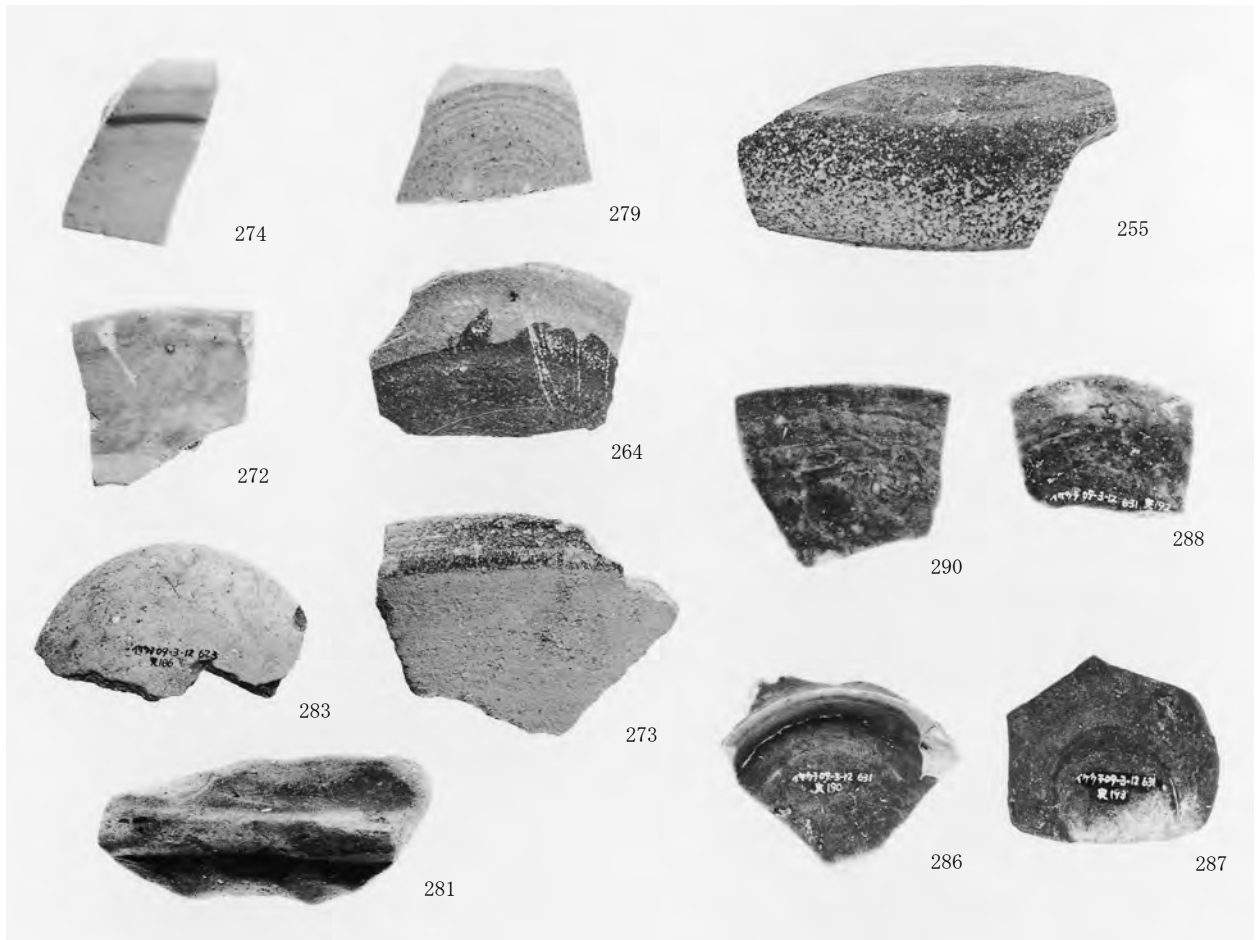


图版 42 09 - 3 - 4 ~ 6 区出土石器 · 石製品



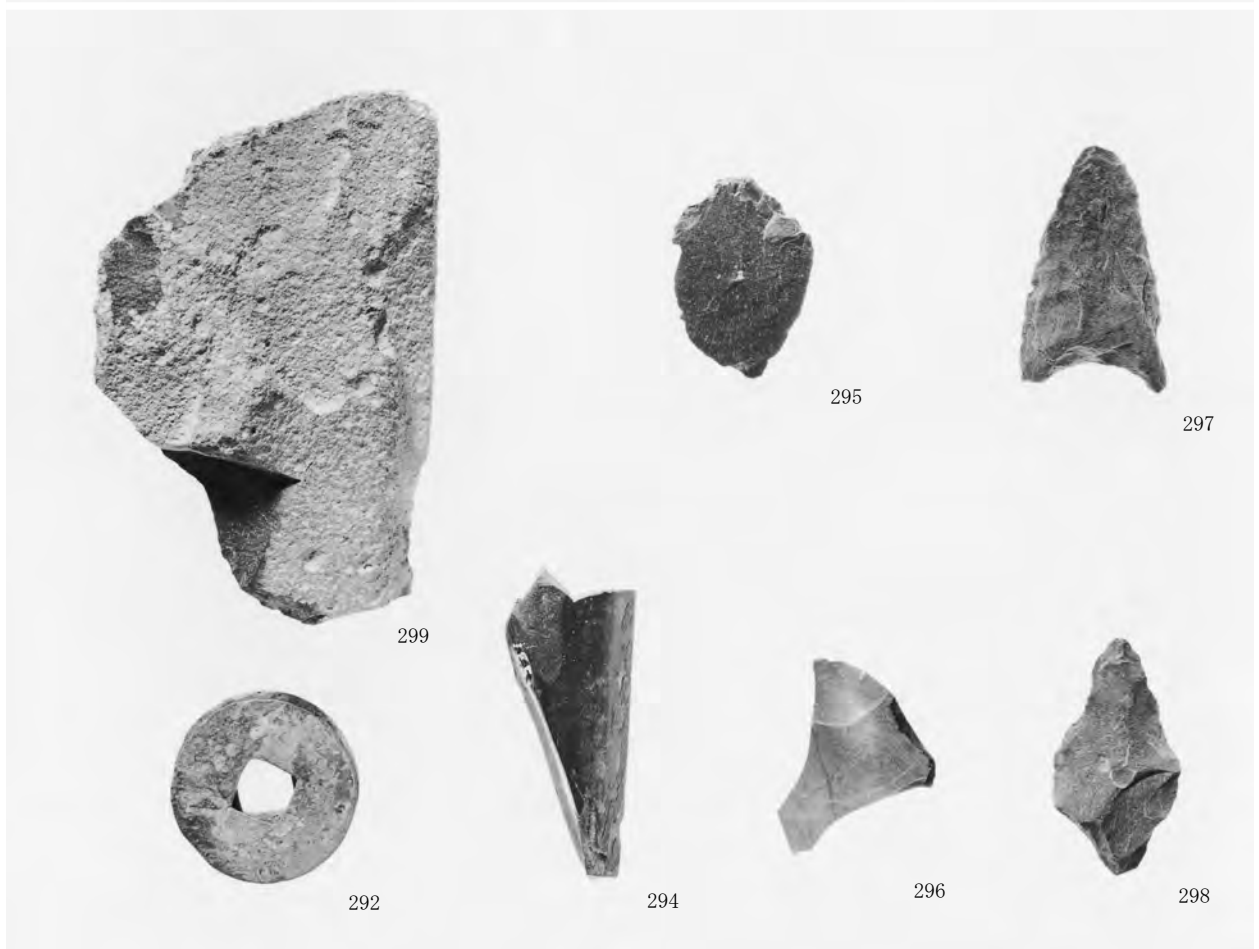
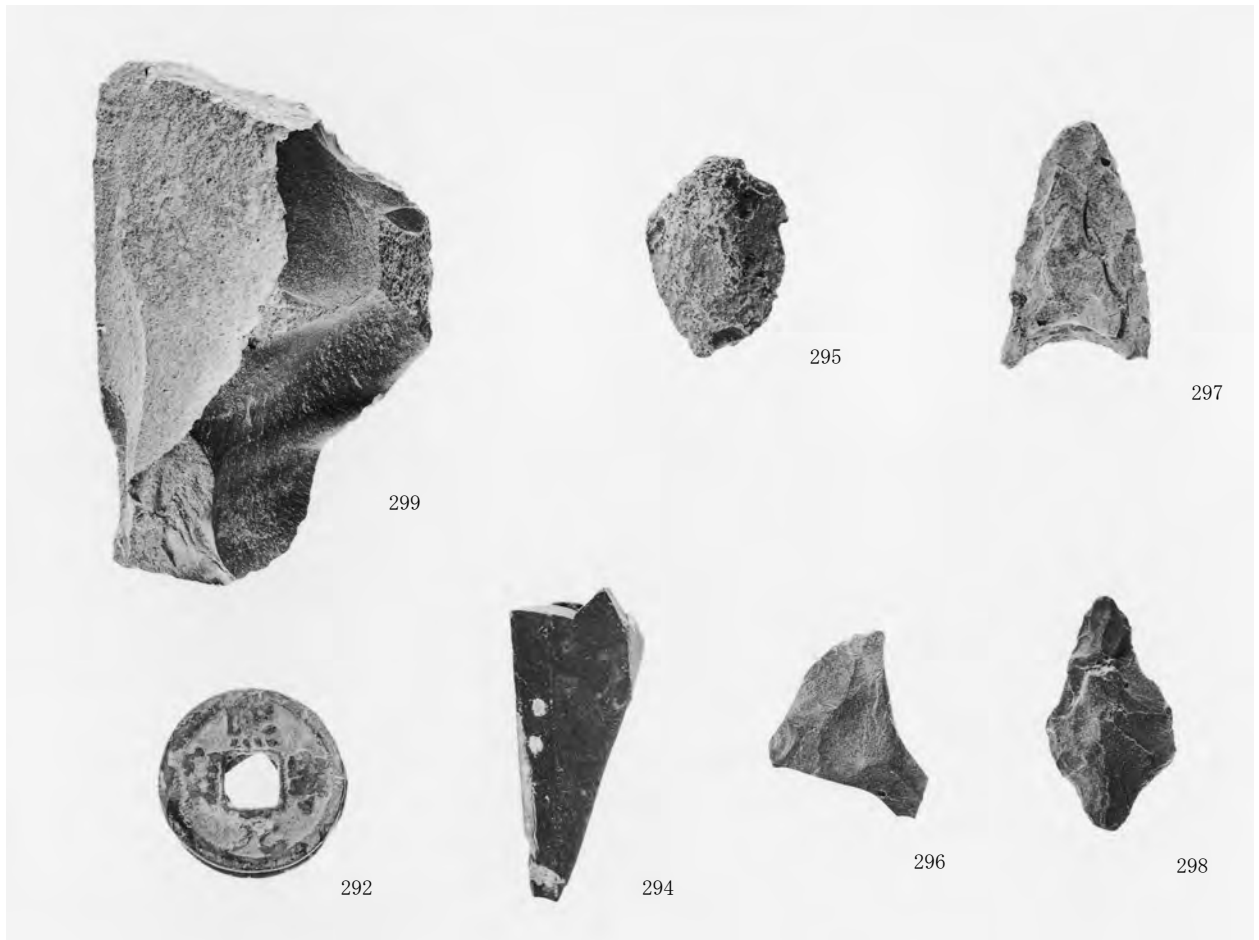
包含層出土





遺構・包含層出土

图版 44 09 - 3 - 10 ~ 14 区出土石器 · 石製品 · 金属製品



包含層出土

# 報告書抄録

ふりがな	いけうち いせき 2						
書名	池内遺跡 2						
副書名	都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ名	公益財団法人 大阪府文化財センター調査報告書						
シリーズ番号	第227集						
編著者名	川瀬貴子 林日佐子						
編集機関	公益財団法人 大阪府文化財センター						
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号 TEL072(299)8791						
発行年月日	2012年6月29日						
ふりがな	ふりがな	コード		緯度・経度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
いけうちいせき 池内遺跡	おおさかふ 大阪府 まつばらし 松原市 あまみひがし 天美東一・二・ 四丁目	27217	18	北緯 34° 35' 77"  東経 135° 32' 39"	(09-2調査) 2009.06.01～ 2009.11.28	3,112㎡	都市計画道路 大阪河内長野 線建設 大堀堺線拡幅
					(09-3-1～6調査) 2009.10.29～ 2010.09.30	6,482㎡	
					(09-3-7調査) 2010.10.18～ 2010.11.19	194㎡	
					(09-3-8・9調査) 2010.11.29～ 2011.05.11	374㎡	
					(09-3-10～14調査) 2011.03.02～ 2011.06.03	866㎡	
					(09-3-15調査) 2011.07.06～ 2011.08.30	530㎡	
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物	特記事項		
池内遺跡	集落・ 生産	中世～中世以降	水路、堤、溝、 耕作溝、土坑、 井戸、足跡	瓦器、瓦質土器、 陶磁器、須恵器、 瓦、木製品、石製品	上之池の北・南堤やそれに付随 する溝・流路を検出。条里の坪 境に相当する溝を検出。地割に 沿った耕作溝や足跡を広範囲で 検出。		
		平安時代	掘立柱建物、 柱列、溝、土坑、 井戸、落込	瓦器、黒色土器、 陶磁器(緑釉陶器他)、 土師器、須恵器、瓦、 石製品	庇が付くやや大形掘立柱建物 を含め掘立柱建物3棟を検出。 緑釉陶器を含む大形土坑検出。 区画溝など検出。		
		弥生時代中期 ～古墳時代	溝、流路、小穴	弥生土器、須恵器、 土師器、 石器(石庖丁、打製 石剣他)	自然流路や溝などを検出。		
要約	<p>09-2区においては和川線同様、平安時代の集落跡を検出した。最北部では、南面に庇がつく2間×3間の掘立柱建物など、掘立柱建物3棟やそれに付随する柱列、井戸、溝などからなる9世紀から10世紀にかけての居住域を検出した。また、近江系緑釉陶器皿をもつ大形土坑や、黒色土器碗で蓋をした、土師器甕を納置した遺構を検出した。その南の区域(09-3-1～3区)においては、弥生時代中期に遡る流路や石庖丁、打製石器等の石器類がみつき、当地区での人間の活動がこの時期まで遡ることを示唆した。</p> <p>上之池の南北堤部(09-3-7・15区)では現在の堤の下層に、近世期の堤が築造されていることが判明した。この下層には中世の坪境溝がみつき、さらに1町離れた09-3-6区でも坪境溝が検出され、条里区割に基づいた土地区画が形成されていたことを証明した。</p> <p>南部(09-3-4～6区、09-3-10～14区)では中世の耕作溝や人、牛の足跡などが広範囲にみられ、耕作地として利用されていたことが判明した。</p>						

公益財団法人 大阪府文化財センター発掘調査報告書 第227集

## 池 内 遺 跡 2

都市計画道路大阪河内長野線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2012年6月29日発行

編集・発行／公益財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市南区竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号